

（勘）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第214集
関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

神保植松遺跡

《本文編Ⅱ》

1 9 9 7

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第214集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

神保植松遺跡

《本文編Ⅱ》

1 9 9 7

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

本遺跡で検出された弥生時代終末から古墳時代初頭、古墳時代の遺構は、住居跡16軒と方形周溝墓9基、古墳3基からなる。これらの遺構は、調査区の東側にみられ、特に弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡は東側台地全体に分布し、方形周溝墓は東側台地の先端部に1基検出された他は中央台地上に集中している。これと同時期の遺構は、本遺跡の西側に隣接する神保富士塚遺跡では検出されていない。その西側の長根羽田倉遺跡では住居跡が数軒検出され、本遺跡の北側に位置する南高原遺跡（矢島 1994）で方形周溝墓が3基検出されている。また、北西約500mに位置する折茂遺跡（茂木 1987）では住居跡と方形周溝墓が検出されている。さらに古墳時代の遺構としては、東側台地に住居跡と古墳が1基、中央台地に古墳が2基検出され、周辺の各遺跡からも多くの遺構が検出されている。

検出された各遺構は、中世城郭の築造、さらには近年までの耕作等により、その遺存状態は良好とは言えない。本来は、もっと多くの遺構・遺物が存在していたものと推察できる。

1. 弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡

検出された住居跡は、14軒である。完掘できた住居跡は少ないが、中世城郭の濠平をうけた割には、検出された住居の遺存状況は比較的に良好なものが多くみられる。

1号住居跡（第496～500図 表71）

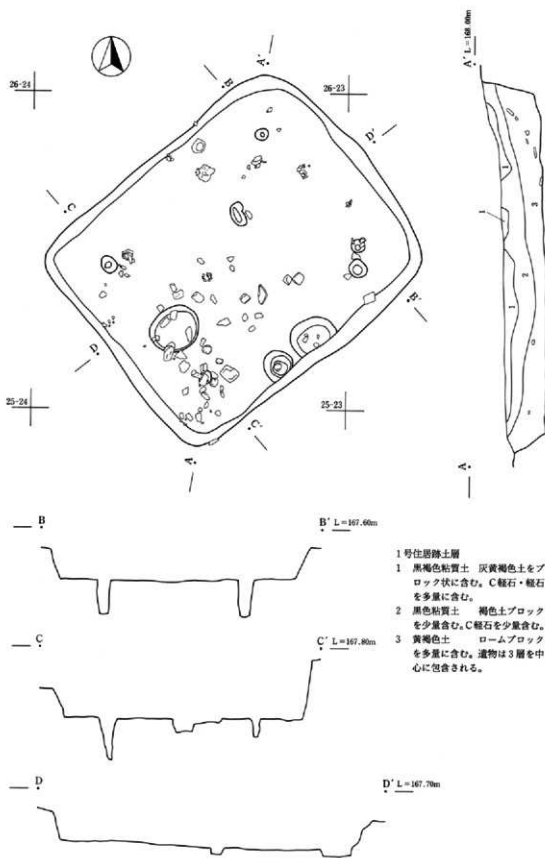
本住居跡は、東側台地の北端部の平坦面にあり、25・22・23グリッドに位置し、7号住居跡の南側、2号住居跡の南西にある。中世城郭の北端部に位置するが、残存状況は良好である。

平面形は、長軸5.0m、短軸4.2mを測り、隅丸長方形を呈している。長軸方向は、北東を示す。壁高は最大で50cm以上を測り、南側の壁の残りが良好である。床面は、硬くしまった平坦な面を確認することができた。特に中央部は、土間状によく踏みしめられているが、壁際付近はやや弱い。炉跡は、長軸方向の東寄りに位置し、楕円状に若干掘り窪められており、炉の底面は焼土化している。ピットは6基検出されているが、住居の主柱穴と考えられる柱穴は、対角線上にある4基と考えられる。主柱穴の深さは、60cm前後と比較的に深い。南壁の中央部には、やや大きめの掘り込みが2基あり、径50cmと径70cm程の円形を呈している。入口施設に伴うものとも、考えられる。

遺物の分布状況は、全体に分布しているが、南隅から中央部にかけて石が多く出土し、土器はその外側の壁際近くにみられる。完形品は少ないが、比較的その量は多い。

出土遺物

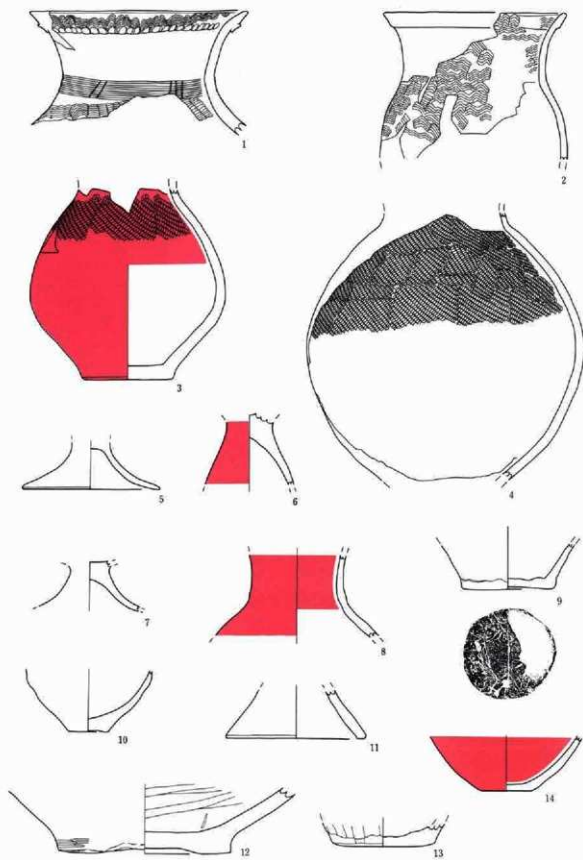
1・3・4・8・10は壺形土器で、2は壺形土器、5～7・11は高環、14は鉢形土器であり、9・12・13は壺の底部である。1は折り返し口縁の口縁部に櫛描波状文を施し、口縁部下に刻み状の押圧文をもつ。頸部は研磨され、頸部下に時計廻りの櫛描扇状文を巡らせ、胴部上半に櫛描波状文を施す。3は胴部上半にRLの縄文を施し、胴部下半を研磨するとともに朱を塗布する。4は球胴状となる胴部上半にRLの縄文を施し、胴部下半は丁寧に研磨されている。8は頸部および胴部の内外面に、朱を塗布するもの。10は球胴状の小形壺となる土器の胴部下半。2は折り返し口縁となる口縁部から胴部上半にかけて、櫛描波状文を施すもの。5～7・11は高環の脚部で、6の器面には朱が塗布されている。14は、内外面に朱を塗布する浅鉢の器形を呈する土器。55・56は折り返し口縁となる口縁部および頸部に、櫛描波状文を施すもの。57～59・63～71は、



第496図 1号住居跡平面図

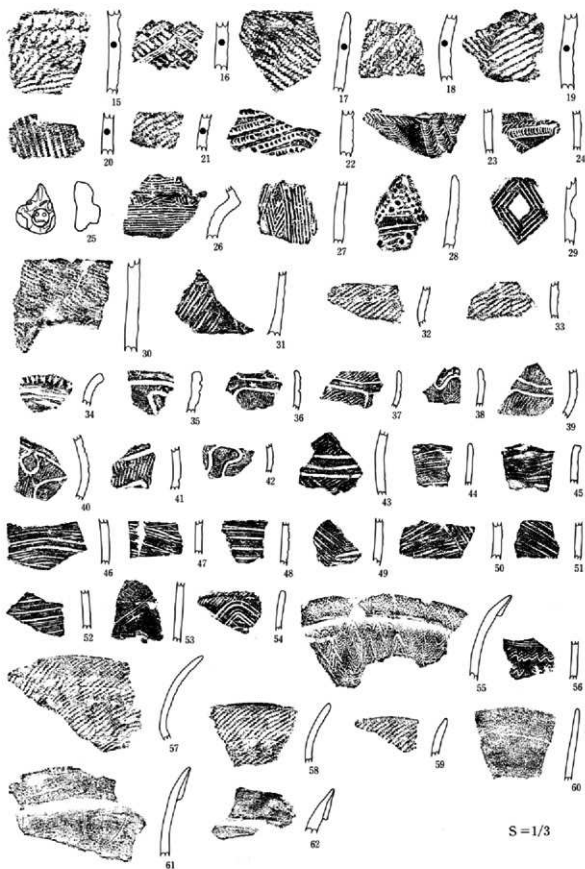
S=1/60

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



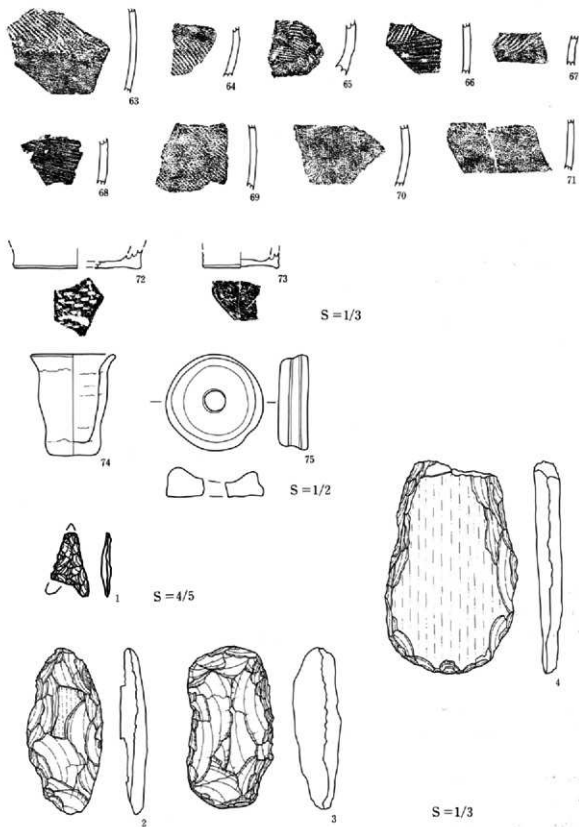
第497図 1号住居跡出土遺物(1)

S=1/3



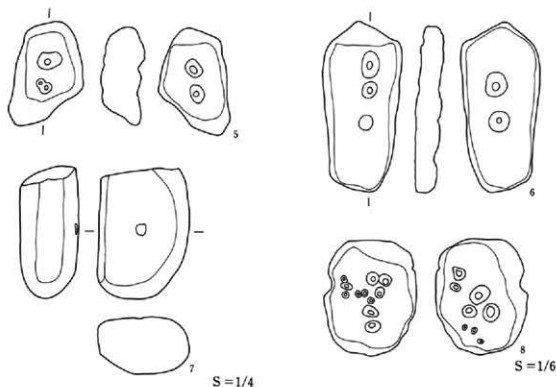
第498図 1号住居跡出土遺物(2)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第499図 1号住居跡出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第500図 1号住居跡出土遺物(4)

表71 1号住居跡出土土器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 罫	黒曜石	2.0	1.2	3.5	0.5
2	打製石斧	緑色片岩	13.0	6.0	2.1	167.4
3	打製石斧	硬質泥岩	12.6	6.7	3.7	381.8
4	打製石斧	霞石石英片岩	16.7	10.3	2.0	594.8

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
5	凹石	緑色片岩	11.2	7.8	4.5	575.0
6	凹石	緑色片岩	18.2	8.4	2.9	620.0
7	凹石	ゲイサイト	9.7	13.9	6.1	1,280.0
8	多孔石	牛伏砂岩	18.4	14.7		2,700.0

口縁部および胴部上半に縄文を施すもの。61・62は、折り返し口縁となる無文の口縁部である。

15～33は縄文時代前期の土器で、15～21は胎土に繊維を含む。25は、獣面突起である。34～54は弥生時代中期の土器で、沈線による様々なモチーフの文様を描き、区画内に縄文を施し、胴部下半に条痕を施すものである。

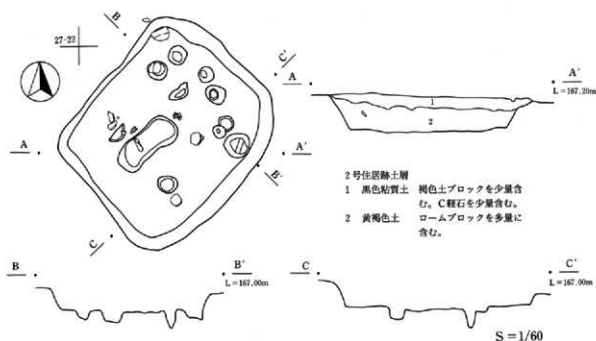
74は手捏のミニチュア土器であり、75は側面に溝を有する土製の紡錘車である。

石器には、黒曜石製の石鎌が1点、打製石斧が2点および大形打製石斧が1点、両面に凹孔を有する凹石が2点、両面と側面を研磨した磨石が1点、多孔石が1点出土している。

2号住居跡 (第501～504図 表72)

本住居跡は、東側台地の北端部の平坦面にあり、26-21グリッドに位置し、7号住居跡の東側、3・4号住居跡の西にある。中世城郭の北端部に位置するが、残存状況は比較的良好である。

平面形は、長軸3.1m、短軸2.7mを測り、他住居跡より小形でやや不整な隅丸方形を呈している。長軸方向は、1号住と同様に北東を示す。壁高は最大で34cmを測り、南側の壁の残りが良好である。床面は、全体



第501図 2号住居跡平面図

に硬くしまった（踏みしめられた）平坦な面を確認することができた。炉跡は、長軸方向のやや西寄りに位置し、長楕円状に若干掘り窪められており、炉の底面は焼土化している。また炉跡内には、細長い石が置かれている。ピットは9基検出されているが、住居の主柱穴と考えられる柱穴は、対角線上にある4基と考えられる。主柱穴の深さは、20cmから30cm前後とややばらつきがある。東壁の北寄りには、やや大きめの掘り込みが1基あり、径40cmの円形を呈している。入口施設に伴うものとも考えられるが、不明である。

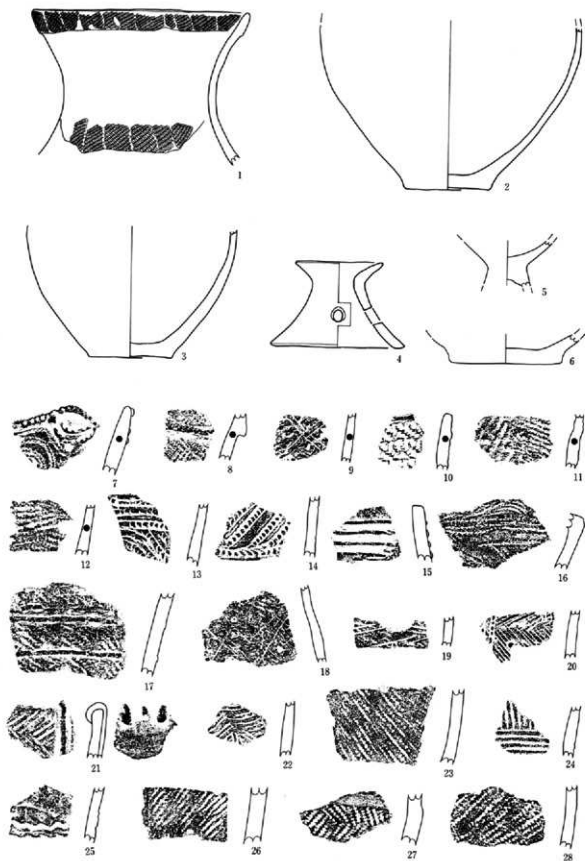
遺物の分布状況は、全体に散漫に分布し、出土量は少ない。壺ないし甕の胴部下半部、および器台については床面直上から出土し、石器等もみられる。

出土遺物

1は壺形土器であり、2・3は甕の胴部下半部、4は器台で、5は高環、6は甕頸の底部である。1は折り返し口縁となる口縁部と胴部上半にLRの縄文を施し、頸部は丁寧に研磨される。2・3も丁寧に研磨されている。4は、脚部に4個の孔をもつ器台である。33は頸部に櫛歯波状文をもつものであり、35は胴部上半に縄文を施すものである。

7～28は縄文時代の土器であり、7～12は胎土に繊維を含む。7～22は前期で、24・25は中期前葉のもの。

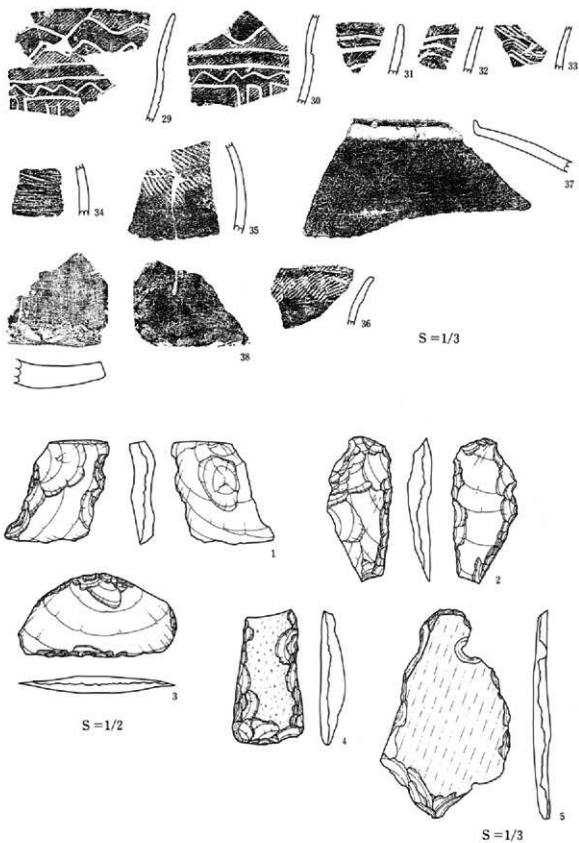
第3章 検出された遺構と遺物



第502図 2号住居跡出土遺物(1)

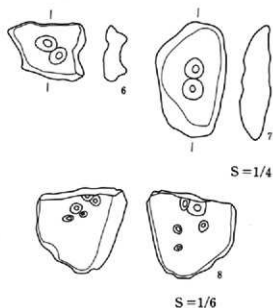
S=1/3

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第503図 2号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第504図 2号住居跡出土遺物(3)

表72 2号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	スクレイパー	硬質泥岩	5.4	4.0	1.2	32.9
2	スクレイパー	硬質泥岩	7.7	3.4	1.3	28.6
3	スクレイパー	硬質泥岩	4.5	8.4	0.9	33.6
4	打製石斧	粗輝安山岩	10.5	5.7	2.0	150.2
5	打製石斧	緑色片岩	16.4	9.7	1.5	255.0
6	凹石	黒色片岩	6.1	8.3	2.6	140.0
7	凹石	緑色片岩	12.3	7.5	3.3	430.0
8	多孔石	牛伏砂岩	13.8	14.5		1,175.0

29～32・34・36は弥生時代中期の土器であり、29・30は同一個体となるもの。37は大形の無頸壺となる土器で、器面はかなり丁寧に研磨されている。38は、内面に布目をもつ瓦片である。

石器は、スクレイパーが3点と、打製石斧が1点および大形打製石斧1点、凹石が2点、多孔石が1点出土している。

3号住居跡(第505～507図)

本住居跡は、東側台地の北端部の平坦面にあり、25・26-19・20グリッドに位置し、4号住居跡の南側、3号住居跡の東側、5号住居跡の北にある。中世城郭の北端部に位置するが、残存状況は比較的良好である。

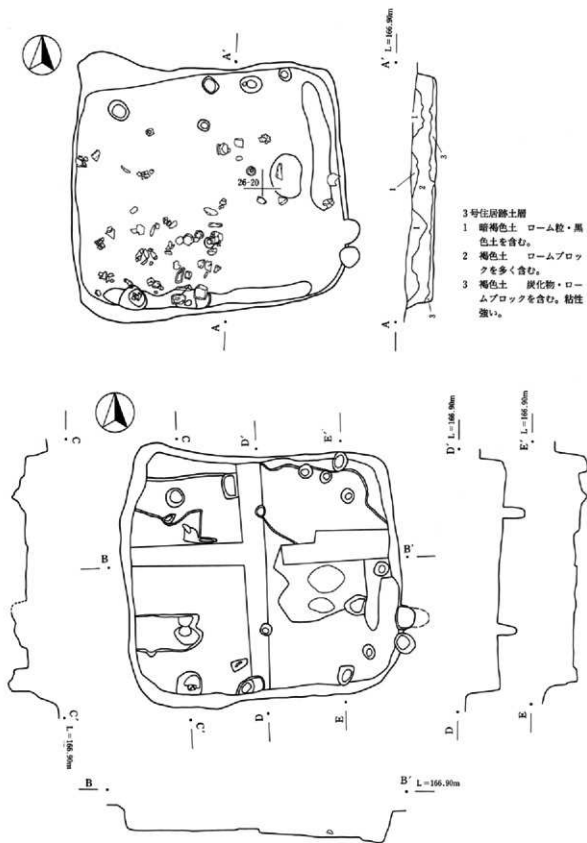
平面形は、長軸4.4m、短軸3.8mを測り、北西隅が若干出張るやや不整な隅丸長方形を呈している。長軸方向は、東を示す。壁高は最大で55cmを測り、南側の壁の残りが良好である。床面は、全体に硬くしまった(踏みしめられた)平坦な面を確認することができたが、壁際はやや弱い。なお、上面での住居形状はやや不整な隅丸長方形であったが、床面での形状は隅丸長方形を呈する。炉跡は、長軸方向の東寄りに位置し、円形に若干掘り窪められており、炉の底面は焼土化し、炉跡内には細長い石が置かれている。ピットは床面下から12基検出されているが、住居の主柱穴と考えられる柱穴は、対角線上にある4基のピットが考えられるが、ややずれている。主柱穴の深さは、20cm前後とやや浅い。南壁の西寄りには、やや大きめのピット状の掘り込みが2基あり、径40cm前後の円形を呈している。入口施設に伴うものと、考えられる。床面下の一部、特に北側については若干掘り下げることができ、不整な掘り方を有する。

遺物の分布状況は、住居の南西側に土器・石器が集中するように全体に分布し、出土量は比較的多い。また壺・甕、および高坏等の完形品についても、床面直上から出土している。

出土遺物

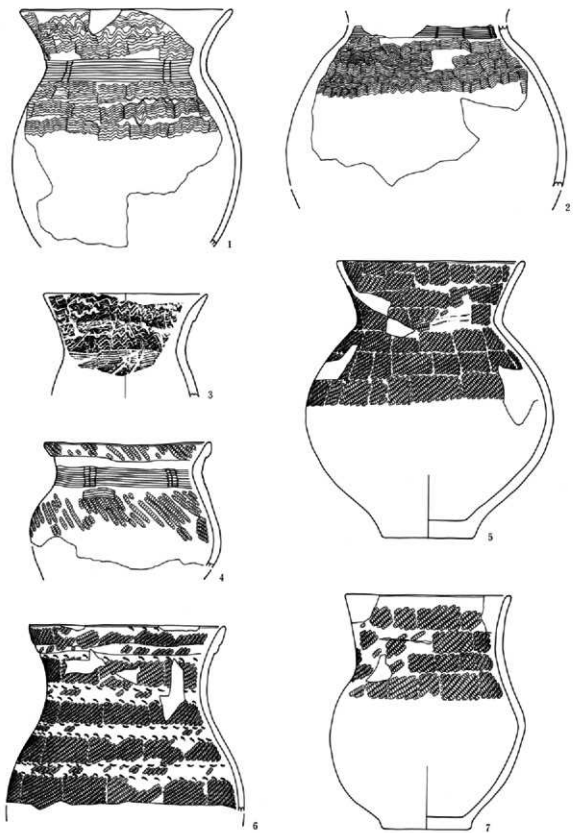
1～7・9・16は甕形土器で、8は壺形土器、10・11・15は高坏、12～14は甕の底部である。1～3は口縁部から胴部上半にかけて櫛描波状文を施し、頸部に時計廻りの櫛描扇状文を巡らせるもので、胴部下半は

第4節 弥生時代終末から古墳時代初期および古墳時代の遺構と遺物



S=1/60

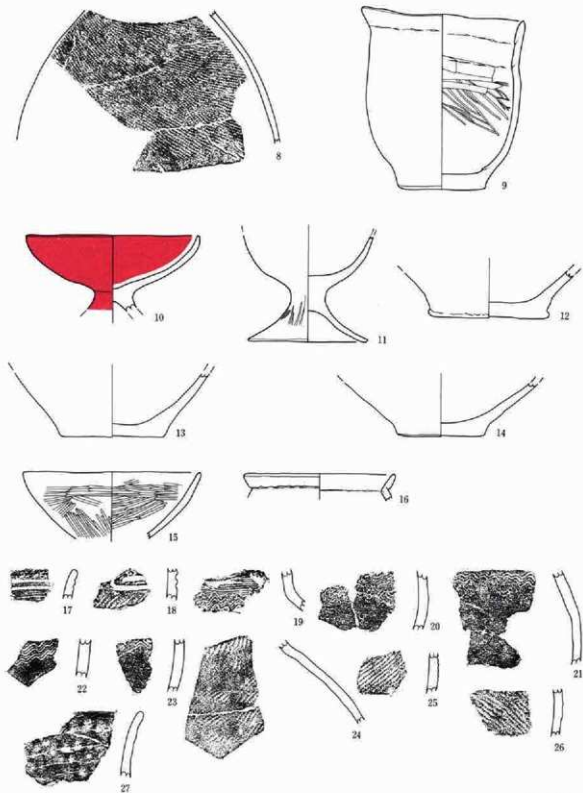
第505図 3号住居跡平面図



第506図 3号住居跡出土遺物(1)

S=1/3

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



S = 1/3

第507図 3号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

丁寧に研磨が施されている。3は、折り返し口縁となる。4は折り返し口縁となる口縁部および胴部上半に、RLの縄文を施し、頸部に時計廻りに櫛描簾状文を巡らせるもので、胴部下半には研磨が施されている。5～7は口縁部から胴部上半にかけてLRの縄文を施すもので、6には縄文原体の端部痕がみられる。9は小形の甕で、やや歪んでおり、全体に撫で調整が施され、内面には整形痕が残る。16は折り返し口縁となる短口縁の甕。10は内外面に朱を塗布するもので、脚部を欠損する。11は体部が余り開かない器形を呈し、脚部に沈線状の調整痕を残す。15は内外面ともに丁寧に研磨された高坏の体部。19～23は胴部上半に櫛描波状文、櫛描簾状文を施すもので、24～26は縄文を施すものであり、27は、口縁部に数段の輪積み痕を残す折り返し口縁となるもの。

17・18は弥生時代中期の土器である。

石器は、出土していない。

4号住居跡（第508～510図 表73）

本住居跡は、東側台地の北端部の平坦面にあり、27・28—19・20グリッドに位置し、2号住居跡の東側、3号住居跡の北側、31号住居跡・1号方形周溝墓の西北にある。また住居の北側に、291号土坑が隣接している。中世城郭の北端部に位置するが、残存状況は良好である。

平面形は、長軸6.3m、短軸5.5mを測る隅丸長方形を呈している。長軸方向は、北北西を示す。壁高は最大で70cmを測り、南側の壁の残りが良好である。床面は、全体に硬くしまった（踏みしめられた）平坦な面を確認することができたが、壁際はやや弱い。炉跡は、長軸方向の北寄りに位置し、円形に若干掘り窪められており、炉の底面は焼土化し、炉跡内には細長い石が置かれている。支柱穴と考えられる柱穴は、対角線上にある4基と考えられるが、やや小さく浅い。南壁の中央には、やや大きめの掘り込みがあり、径40cm前後の円形を呈している。なおこの掘り込みの周囲には、土手状に若干の高まりをもつ。入口施設に伴うものと、考えられる。床面下の一部については、若干掘り下げることができ、不整な掘り方を有する。またこの床面下からは、ピットが数基検出されている。

遺物の分布状況は、全体に散漫に分布し、出土量は少ない。なお、朱彩の高坏は、破損しながらも床面直上から出土している。

出土遺物

1～23は縄文時代の土器で、1～10の胎土には繊維が含まれる。1は表裏面に条痕をもつ早期の土器で、2～19は前期、20～23は中期初頭の土器である。

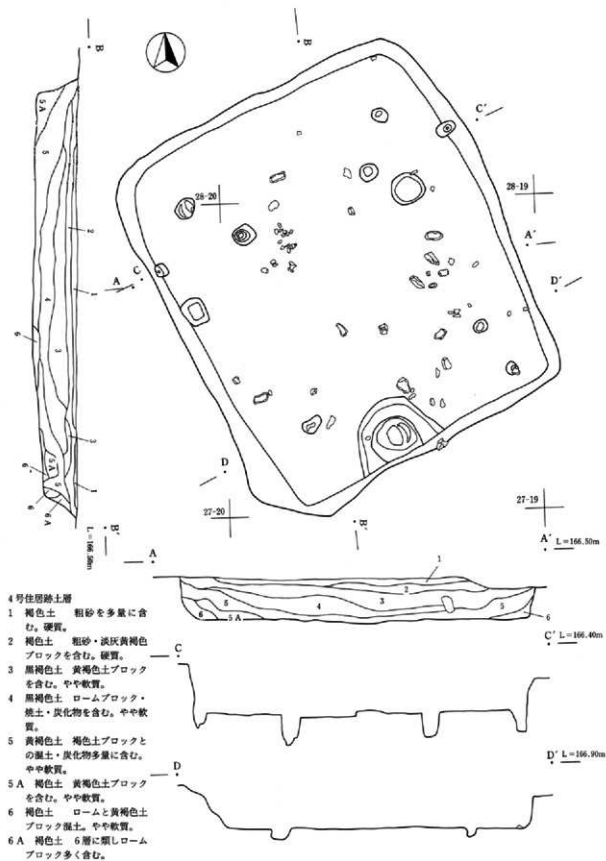
24～33が本住居に伴うもので、24は内外面に朱を塗布した高坏である。口縁は折り返し口縁で、大きく朝顔形に開く体部に、円錐形の脚をもつ。25は甕の底部であり、26～33は甕の口縁部および胴部片で、RLの縄文をもつものである。

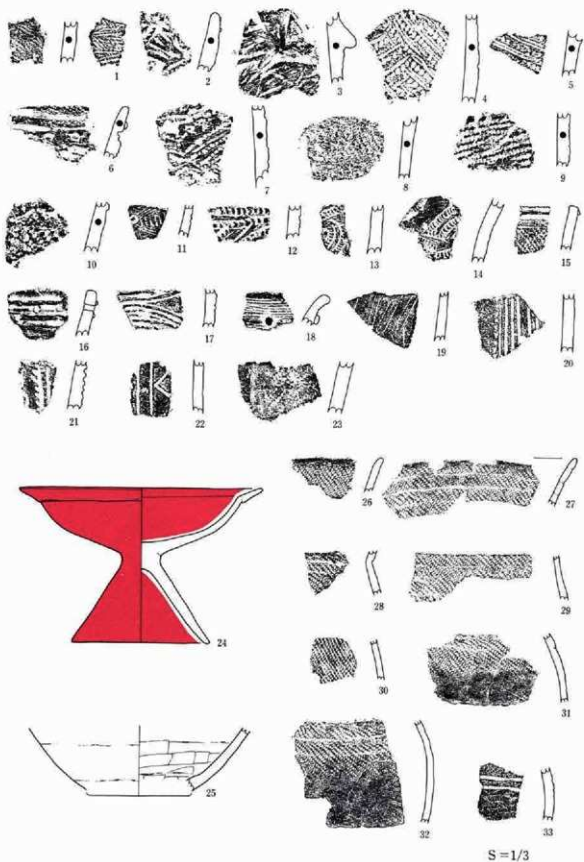
34は、土製の紡錘車である。

石器は、黒曜石製の石錐が1点と、大形の打製石斧が1点出土している。

5号住居跡（第511図）

本住居跡は、東側台地の北端部の平坦面にあり、24・25—20グリッドに位置し、3号住居跡の南側にある。中世城郭の北端部に位置するが、住居の本体は調査区外にあるものと推測される。このため調査できたのは、住居の北側の一部だけである。





第509図 4号住居跡出土遺物(1)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

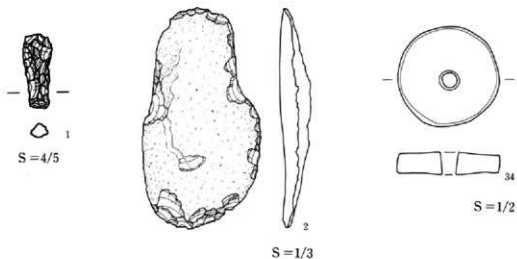
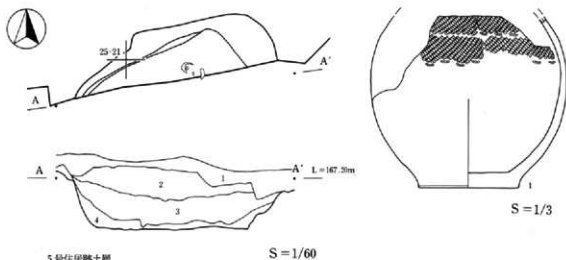


表73 4号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石鏃	チャート	2.4	0.9	0.6	1.5
2	打製石斧	変質安山岩	17.3	9.5	2.5	386.2

第510図 4号住居跡出土遺物(2)

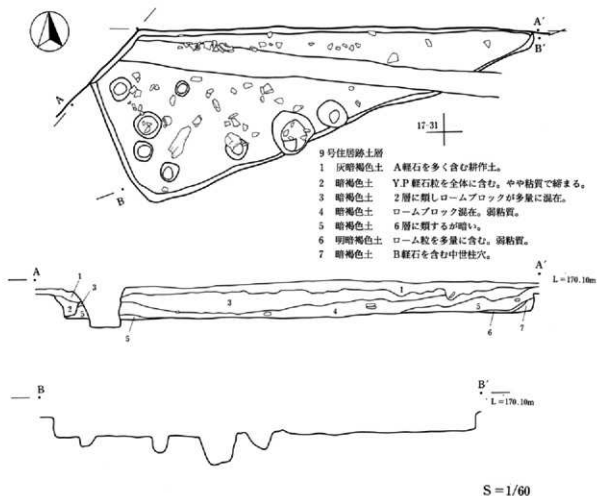


5号住居跡土層

- 1 くすんだ灰褐色土 A軽石を多量に含む。
- 2 黒色土 軽石と淡い灰褐色土小ブロックを多量に含む。硬質・硬粘性。
- 3 くすんだ褐色土 軽石・ローム粒を含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

S=1/60

第511図 5号住居跡平面図・出土遺物



第512図 9号住居跡平面図

平面形は、おそらく隅丸長方形を呈しているものと推測される。長軸方向は、不明。壁高は最大で55cmを測り、残存状況は良好と思われる。床面は、硬くしまった（踏みしめられた）平坦な面を確認することができた。炉跡は、検出されていない。ピット等についても検出できなかった。

遺物はわずかであるが、壺の半完形品が床面直上から出土している。

出土遺物

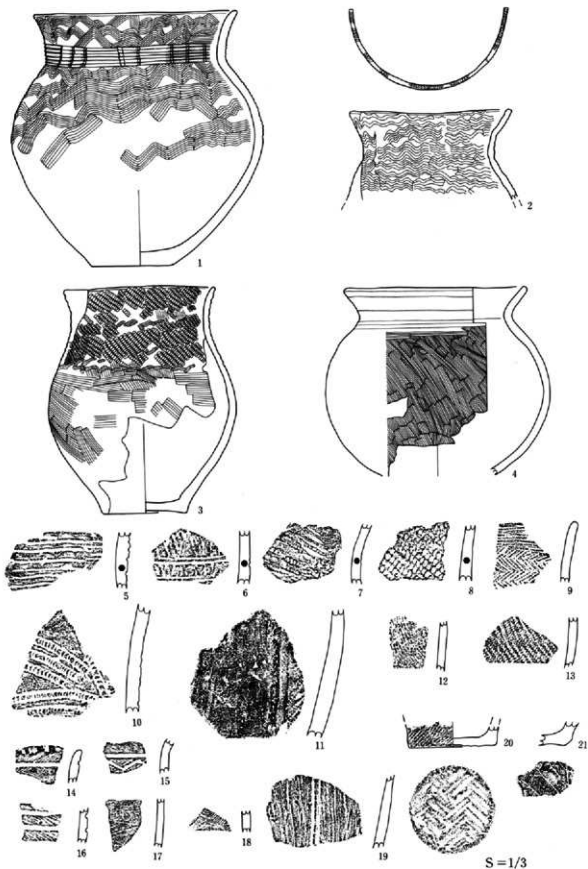
壺形土器の1点である。胴部上半には、末端に結節をもつLRの縄文が施され、胴部下半は研磨されている。石器の出土はない。

9号住居跡（第512～515図 表74）

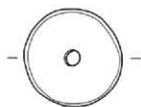
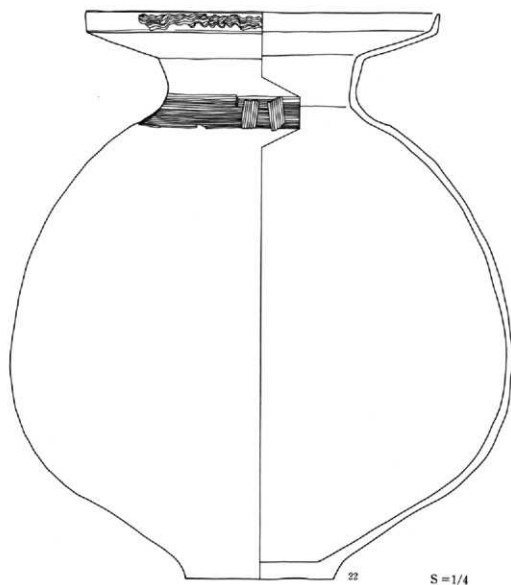
本住居跡は、東側台地のほぼ中央部の平坦面にあり、16・17-30・31グリッドに位置し、8号住居跡の東隣にある。本住居跡は調査区の北側にあるため、本住居の3分の2程が調査区外にあり、南側の3分の1を調査できただけである。中世城郭造成時の削平をうけてはいるが、比較的残存状態は良好である。また調査できた住居内を、東西に延びる耕作溝があり、一部壊されている。

平面形は、長軸6.8mを測る隅丸長方形を呈しているものと推測される。長軸方向は、東北東を示すと思われる。壁高は最大で32cmを測り、南側の壁の残りが良い。床面は、踏みしめられた硬い平坦な面を確認する

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第513図 9号住居跡出土遺物(1)



S=1/2

第514図 9号住居跡出土遺物(2)

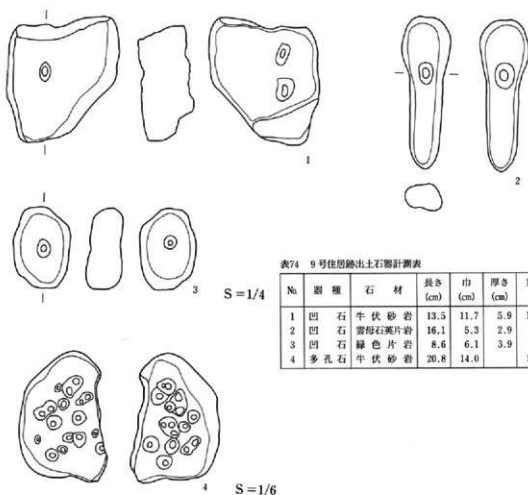


表74 9号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	牛伏砂岩	13.5	11.7	5.9	1,003.0
2	凹石	雲母石英片岩	16.1	5.3	2.9	305.0
3	凹石	緑色片岩	8.6	6.1	3.9	280.5
4	多孔石	牛伏砂岩	20.8	14.0		1,800.0

第515図 9号住居跡出土遺物(3)

ことができた。炉跡は、検出できなかったが、調査区外に存在するものと考えられる。ピットは数基検出されたが、主柱穴と考えられる柱穴は明確ではない。各柱穴の深さは、20～25cmと比較的一定している。これらの柱穴の中には、中世獨立建物遺構に伴うものもある可能性がある。南壁のほぼ中央には、若干の高まりとやや大きめの掘り込みがあり、径70cm程の円形を呈している。入口施設に伴うものとも、考えられる。

遺物の分布状況は、土器・石器等が全体に分布しており、その量は比較的多く、甕・壺等の完形品が床面直上から出土している。

出土遺物

1～4は変形土器で、22は大形の変形土器である。1は口縁部から胴部上半にかけて櫛描波状文を施し、頸部に時計廻りに櫛描粟状文を巡らせる。胴部下半は磨き調整となる。2は口唇部に櫛状工具による刻みをもち、口縁部以下に櫛描波状文を施している。3は口縁部から胴部上半にかけて縦目の刷毛目調整を行った後、口縁部から頸部にかけて末端に結節をもつRLの縄文を施す。胴部下半には横位ないし斜位の刷毛目調整が施される。4は口縁部から頸部にかけて撫で調整が施され、胴部には斜位の刷毛目調整が施される。内面についても同様の調整がみられ、色調は橙色。22は有段口縁の球胴状となるもので、口縁部に櫛描波状文を施し、頸部は無文で、頸部下に櫛描粟状文をもち、胴部は丁寧に研磨されている。23は、土製の紡錘車であ

る。

5～13は縄文時代の土器で、5～8の胎土には繊維を含む。14～21は弥生時代中期の土器で、網代痕や木葉痕をもつ底部も出土している。

石器には、両面に凹孔をもつ凹石が3点と、多孔石が1点出土している。

24号住居跡 (第516～520図 表75)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央部の平坦面にあり、14・15—39・40グリッドに位置し、39号住居跡の東側、12・13号住居跡の南側にある。中世城郭造成時の削平をうけてはいるが、比較的残存状態は良好である。また中世遺構との重複もあるが、余り壊されてはいなかった。

平面形は、長軸6.9m、短軸6.2mを測り、隅丸となる正方形的な形状を呈している。長軸方向は、東北東を示すが、炉跡位置の関係から主軸方向は北北西を示す。壁高は最大で25cmを測り、南側の壁の残りが比較的良い。床面は、踏みしめられた硬い平坦な面を確認することができた。炉跡は、住居中央より北側へ寄った位置にあり、楕円状に若干掘り窪められ、炉の底面は焼土化している。本住居の主柱穴と考えられる柱穴は、対角線状に4基検出された。各柱穴の深さは、30～40cmと比較的一定している。他の柱穴は、中世竪立建物遺構に伴うものでもある。南壁のやや東寄りには、やや大きめの掘り込みがあり、径60cm程の円形を呈している。入口施設に伴うものとも、考えられる。

遺物の分布状況は、土器・石器等が全体に散漫に分布しており、その量は比較的少ない。南東隅付近には、壺の完形品が出土している。

出土遺物

1は、脚部に4個の孔を有する器台である。2は球脚状に近い胴部で、壺形土器となるもの。胴部上半に櫛描波状文を施し、その下に櫛描文を巡らせる。胴部下半は丁寧に研磨されている。43～45は同一個体となるもので、2段の折り返し口縁を有し、口縁部以下にRLの縄文を施す。54・55は胴部上半にRLの縄文を施すもので、55には刺突を有する円形の貼付文をもつ。56は胴部下半にまでRLの縄文が施されるもの。57は、胴部に櫛描波状文が施される。

6～37は縄文時代の土器で、6～14の胎土には繊維を含む。6～19は前期の土器であり、20～37は胴部に逆U字状等の文様を描く中期後葉の土器である。38～42・46～53は弥生時代中期の土器で、口縁部および胴部に沈線で文様が描かれ、胴部下半には条痕が施されるものである。

3～5は紡錘車で、3は断面三角状の土製のものであり、4・5は石製のものである。

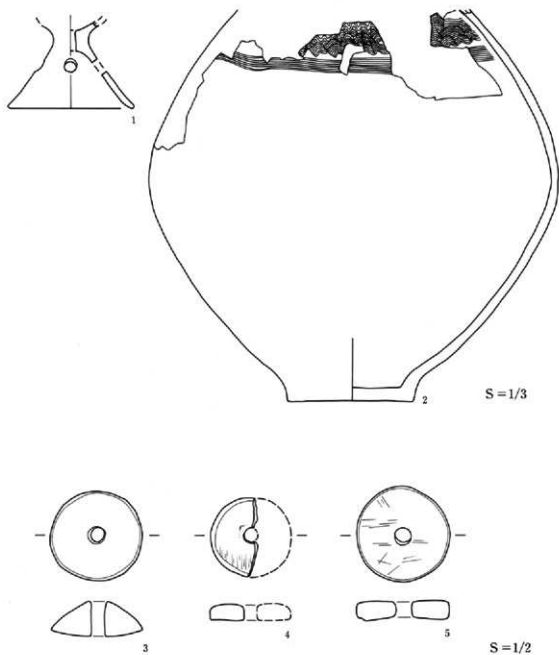
石器には、黒曜石製の石鏃が2点、チャート製の小形のスクレイパーが2点、磨製石斧1点、両面に凹孔を有する凹石が1点、多孔石が1点出土している。

29号住居跡 (第521図)

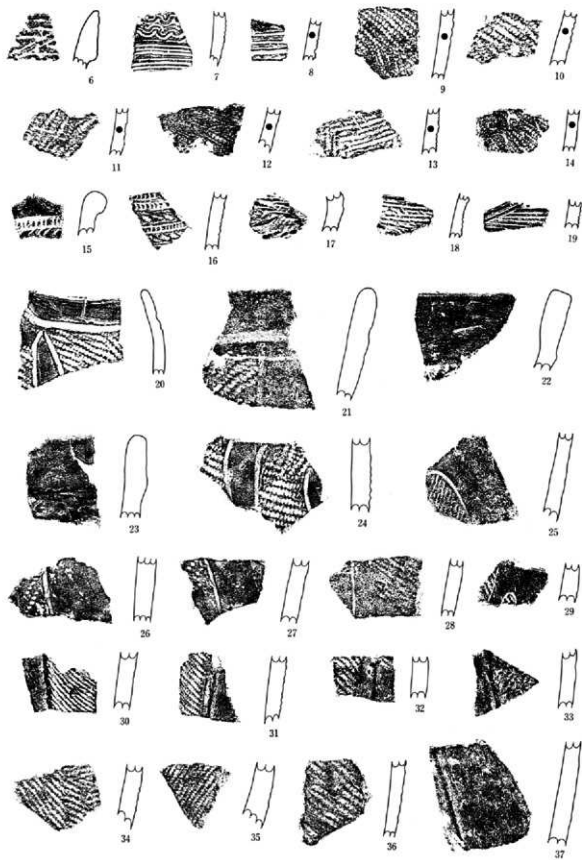
本住居跡は、東側台地の西縁辺寄りの平坦面にあり、16—39・40グリッドに位置し、重複する26～28号住居跡の上面にあり、24号住居跡の北西側にある。重複する26～28号住居跡との新旧関係は、26号住居跡の覆土上面に本住居の炉跡が検出されていることから、本住居の方が新しい。ちなみに26号住居跡は、縄文時代の住居である。中世城郭造成時の削平をうけ、さらには竊状に耕作溝による破壊をうけているため、残存状態は極めて悪い。

壁や床面等の検出ができなかったことから、平面形は不明である。検出された炉跡周辺の精査を試みたが、

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



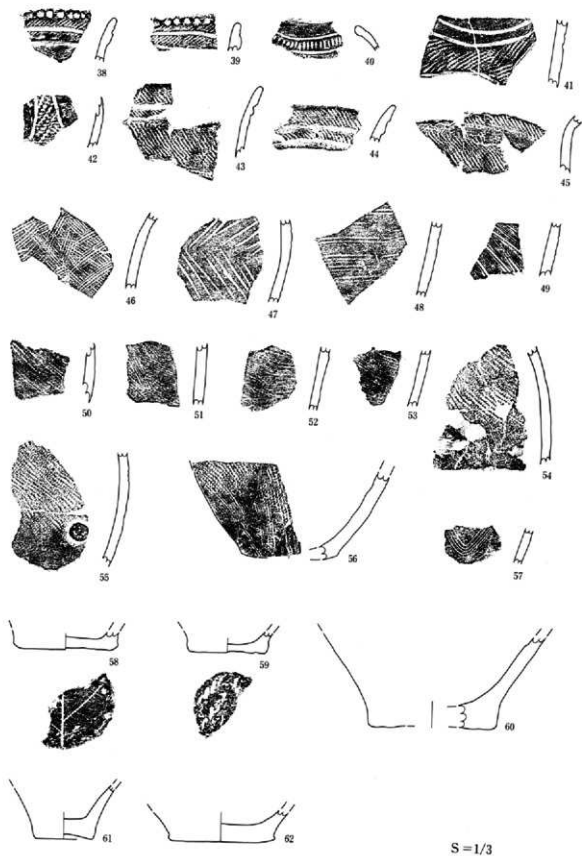
第517図 24号住居跡出土遺物(1)



第518図 24号住居跡出土遺物(2)

S=1/3

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第519図 24号住居跡出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物

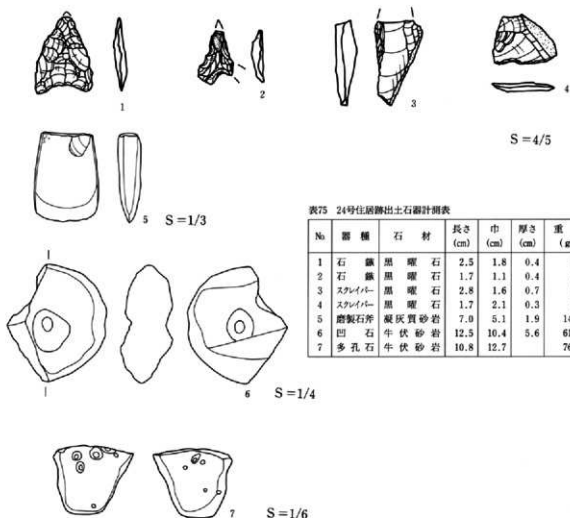


表75 24号住居跡出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石 鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.5
2	石 鏃	黒曜石	1.7	1.1	0.4	0.6
3	スタンパー	黒曜石	2.8	1.6	0.7	2.2
4	スタンパー	黒曜石	1.7	2.1	0.3	1.0
5	磨製石斧	凝灰質砂岩	7.0	5.1	1.9	149.2
6	凹石	牛伏砂岩	12.5	10.4	5.6	610.0
7	多孔石	牛伏砂岩	10.8	12.7		760.0

第520図 24号住居跡出土遺物(4)

明確な床面の検出にはいたらなかった。炉跡は住居の中央付近に位置するものと考えられ、円形で焼土を伴う。柱穴等の検出もできなかった。

遺物の分布状況は、炉跡内からミニチュア土器が出土しているほか、その周辺で土器および滑石の破片が散在して出土している。

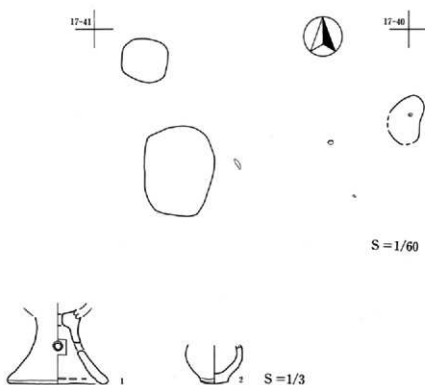
出土遺物

1は胎土に多量の砂粒を含み、脚部に3個の孔を有する器台である。2は、球駒状となる壺形土器のミニチュアである。

滑石片が数点出土しているが、研磨等の加工はなされていない。

31号住居跡(第522・523図)

本住居跡は、東側台地の北端部の平坦面にあり、28・29-17・18グリッドに位置し、北隅に300号土坑、南隅が1号方形周溝墓、4号住居跡の北東にある。重複する300号土坑、1号方形周溝墓との新旧関係は、覆土の堆積状況等から、両遺構よりも本住居の方が新しい。



第521図 29号住居跡平面図・出土遺物

平面形は、長軸4.8m、短軸3.4mを測り、隅丸長方形を呈している。長軸方向は、東南を示す。壁高は最大で37cmを測り、南側の壁の残りが良好である。床面は、硬くしまった平坦な面を確認することができた。特に中央部は、土間状によく踏みしめられているが、壁際付近はやや弱い。炉跡は、長軸方向の東寄りに位置し、楕円状に若干掘り窪められており、炉の底面は焼土化している。ピットは10基検出されているが、住居の支柱穴と考えられる柱穴ではない。各柱穴の深さは、15～40cmとばらつきがある。南壁の中央部には、やや大きめの掘り込みがあり、径50cm程の円形を呈している。入口施設に伴うものとも、考えられる。

遺物の分布状況は、土器・石器等が全体に散漫に分布しており、その量は少ない。

出土遺物

2は、器面が丁寧に研磨された変形土器である。3は、頭部にLRの縄文を施すもの。1は縄文時代前期の土器で、胴部に半截竹管による爪形文が巡り、胴部下半にはRLの縄文が施されるもの。

石器は、大形の打製石斧が1点と、両面に凹孔を有する凹石が1点出土している。

33号住居跡（第524～526図 表77）

本住居跡は、東側台地のほぼ中央部の平坦面にあり、8・9-40・41グリッドに位置し、34・64号住居跡と重複し、43号住居跡の西側、36・37号住居跡の東側にある。重複する34・64号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居が最も古い。ちなみに34・64号住居跡は、平安時代の住居である。

平面形は、東西3.8m、南北3.2mを測り、隅丸長方形を呈している。長軸方向は、北東を示す。壁高は最大で30cmを測る。床面は、硬くしまった平坦な面を確認することができた。また住居の南壁際西寄りには、

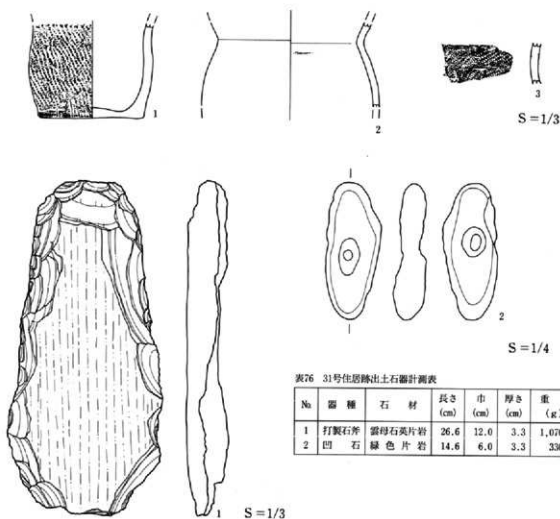


表76 31号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	打製石斧	雲母石英片岩	26.6	12.0	3.3	1,070.0
2	凹石	緑色片岩	14.6	6.0	3.3	330.0

第522図 31号住居跡出土遺物

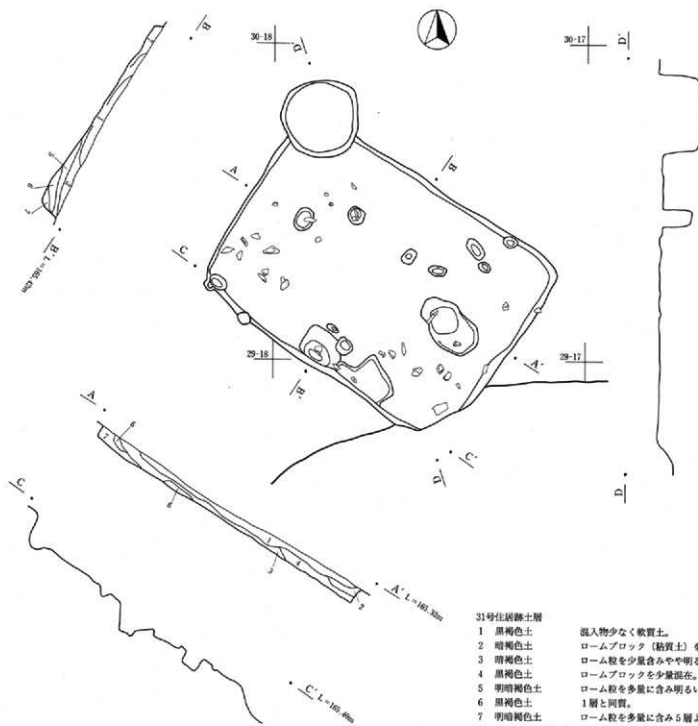
幅75cm、長さ110cm、高さ数cmほどのテラス状の高まりが検出されている。炉跡は住居中央のやや北寄りに位置し、径50cmほどで若干掘り窪められており、炉の底面は焼土化しているとともに細長い石が据えられている。ピットは8基検出されているが、この内の4基が住居の主柱穴と考えられる。主柱穴の深さは、10～20cmほどである。

遺物の分布状況は、住居の西壁寄りには大形の石が散乱し、34号住居と重複する部分にはほとんど遺物は出土していない。炭化材が、壁際に出土している。なお、縄文時代等の遺物も多く混在している。

出土遺物

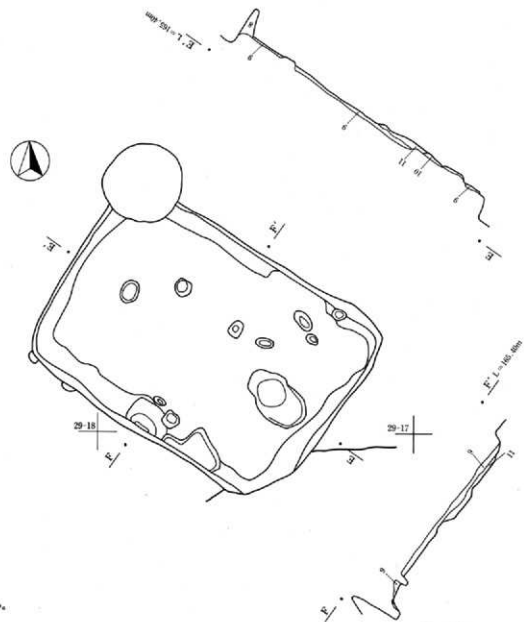
この時期の土器は、28～30の3点だけである。28は折り返し口縁となる甕で、口縁部から頸部にかけて縦位の櫛描が施され、頸部下に櫛描簾状文が廻らされる。1～15は縄文時代の土器で、1～6は前期、7～15は中期後葉のものである。16～27は弥生時代中期の土器である。

石器は、スクレイパーが1点、打製石斧が1点、凹石が2点、多孔石が4点出土している。



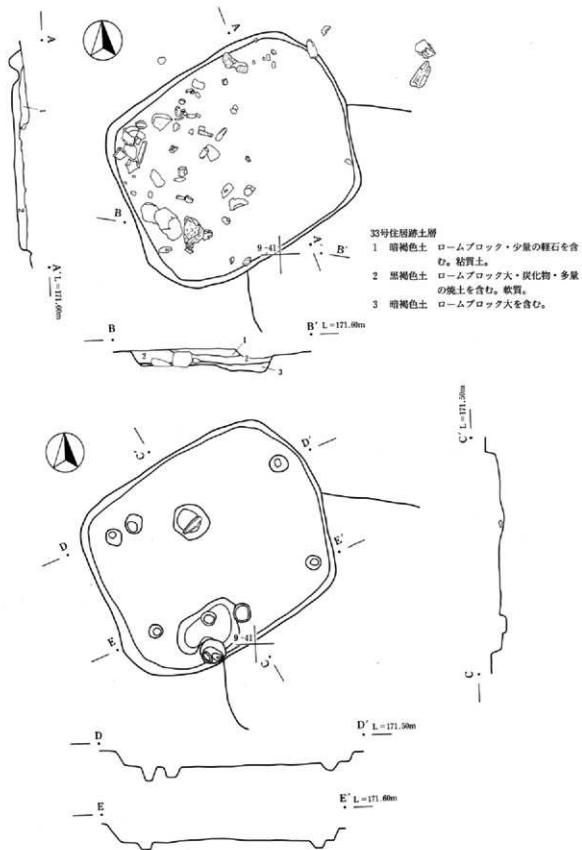
31号住居跡土層

- | | |
|-------------|------------------|
| 1 黒褐色土 | 流入物少なく軟質土。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック（粘質土）を混在。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒を少量含みやや明るい。 |
| 4 黒褐色土 | ロームブロックを少量混在。 |
| 5 明暗褐色土 | ローム粒を多量に含み明るい。 |
| 6 暗褐色土 | 1層と同質。 |
| 7 明暗褐色土 | ローム粒を多量に含みより明るい。 |
| 8 くすんだ黄褐色土 | ローム粒を含み軟質（柱穴）。 |
| 9 くすんだ黄褐色土 | ロームの混土。硬質（粘土）。 |
| 10 赤褐色土 | 焼土硬質（卵）。 |
| 11 くすんだ黄褐色土 | 硬質。 |



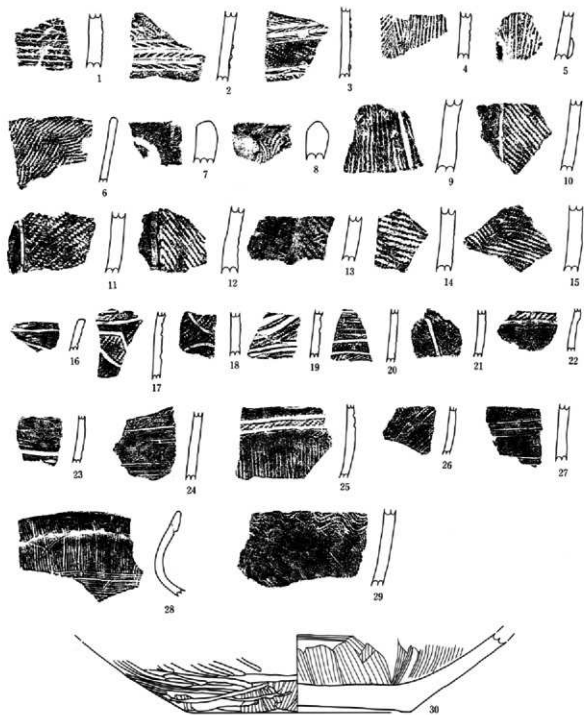
S=1/60

第523図 31号住居跡平面図



第524図 33号住居跡平面図

第3章 検出された遺構と遺物



S = 1/3

第525図 33号住居跡出土遺物 (1)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

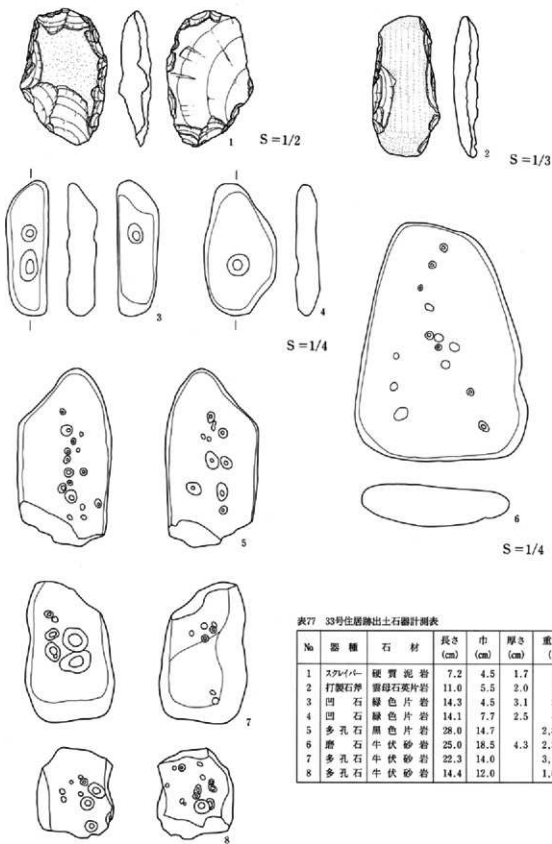


表77 33号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	スレイバー	硬質泥岩	7.2	4.5	1.7	51.8
2	打製石斧	雲母石英片岩	11.0	5.5	2.0	127.2
3	凹石	緑色片岩	14.3	4.5	3.1	310.0
4	凹石	緑色片岩	14.1	7.7	2.5	455.0
5	多孔石	黒色片岩	28.0	14.7		2,800.0
6	磨石	牛伏砂岩	25.0	18.5	4.3	2,290.0
7	多孔石	牛伏砂岩	22.3	14.0		3,160.0
8	多孔石	牛伏砂岩	14.4	12.0		1,600.0

第526図 33号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

47号住居跡 (第527・528図 表78)

本住居跡は、東側台地の東縁辺に寄った平坦面にあり、16・17-20・21グリッドに位置し、中世城郭に伴う3号堀と4号堀の間にある。中世城郭造成時の削平をうけ、さらには3本の耕作溝により壊されているため、遺存状態は良くない。

平面形は、長軸5.9m、短軸4.3mを測り、大形の隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南東を示す。覆土は薄く、壁高は最大で7cmを測る。床面は、硬くしまった平坦な面となるが、住居内にみられるピットは中世のものであり、本住居に伴う柱穴は検出されていない。また住居の西寄りには、径55cmほどの円形に焼土が検出されており、炉跡の可能性が高い。

遺物は散漫に分布状況し、出土量はかなり少ない。

出土遺物

16の胴部に縄文を施すもの1点が、この時期の土器であり、他の1～13は縄文時代および14・15は弥生時代中期の土器である。

石器は、凹石が4点出土している。

49号住居跡 (第529図)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、14-36グリッドに位置し、24号住居跡の東側にある。

住居の北西側半分は、中世城郭に伴う3号堀に壊されている。

平面形は、隅丸となる方形を呈しているものと想定される。覆土は中世城郭造成時の削平をうけているが、壁高は最大で20cmほどを測る。床面は平坦で、硬くしまった面を確認することができた。住居内に検出された3基のピットのうち、中央のものが主柱穴の一つで南西隅に位置するものと考えられる。炉跡等は、検出されていない。

出土遺物は余り多くなく、散漫に分布している。

出土遺物

この時期の土器は2・9の2点だけで、2は頸部に縄文を施すものであり、9は有段口縁となる口縁部に縄文を施し、頸部が無文となるもの。1・3は縄文時代の土器で、1の胎土には繊維を含む。4～8は弥生時代中期の土器である。

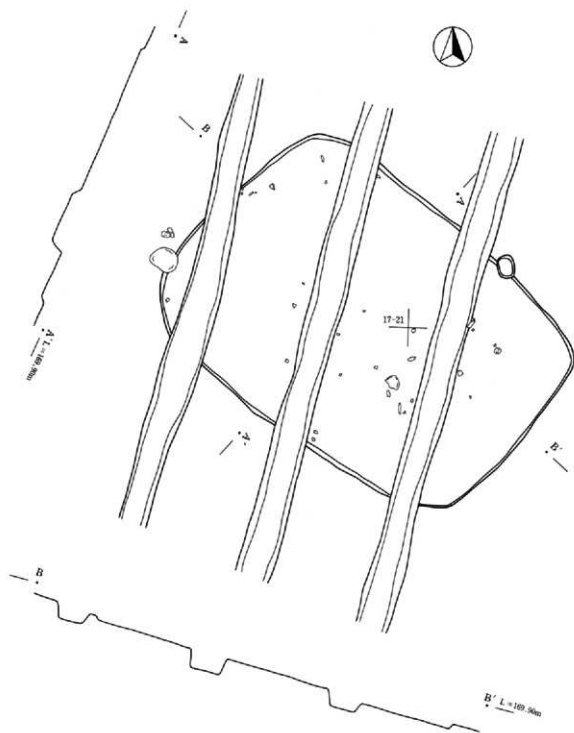
石器は、出土していない。

54号住居跡 (第530～538図 表79)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、13・14-30・31グリッドに位置し、57号住居跡の南東、53・56号住居跡の北西側にある。また住居の南西隅には、630号土坑が隣接している。

平面形は、東西3.4m、南北3.2mを測る方形を呈しているが、南西隅が少し西側へ張り出している。長軸方向は、東南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけているが、残存状態は良好で、壁高は30cmほどを測る。床面は平坦で、硬くしまった面を確認することができた。南壁の壁際には、内側に低い帯状の高まりを伴う幅20cmほどの周溝が検出されている。住居内に検出された5基のピットのうち、東西の壁際中央にある2基が主柱穴とも考えられるが、北東隅を除く各隅のものをも柱穴と考えれば、四隅と壁中央の計7ないし8本の柱穴である可能性も高い。炉跡は、長軸上の中央より西寄りに焼土を伴い検出されている。

出土遺物は比較的が多い。覆土および床面上に大小様々な石が多く出土しており、これらの中には石鏃状



S=1/60

第527図 47号住居跡平面図

第3章 検出された遺構と遺物

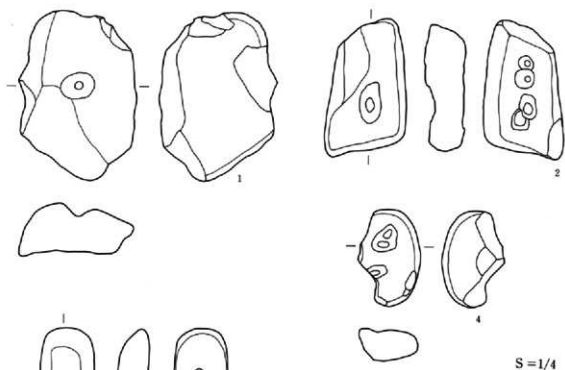
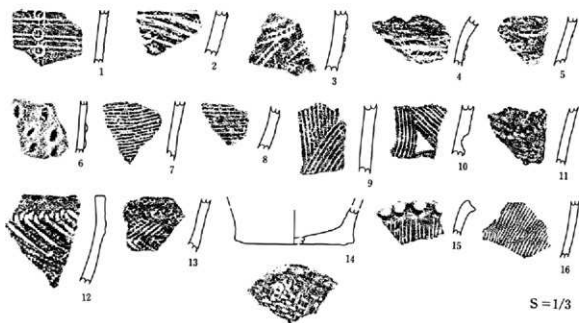
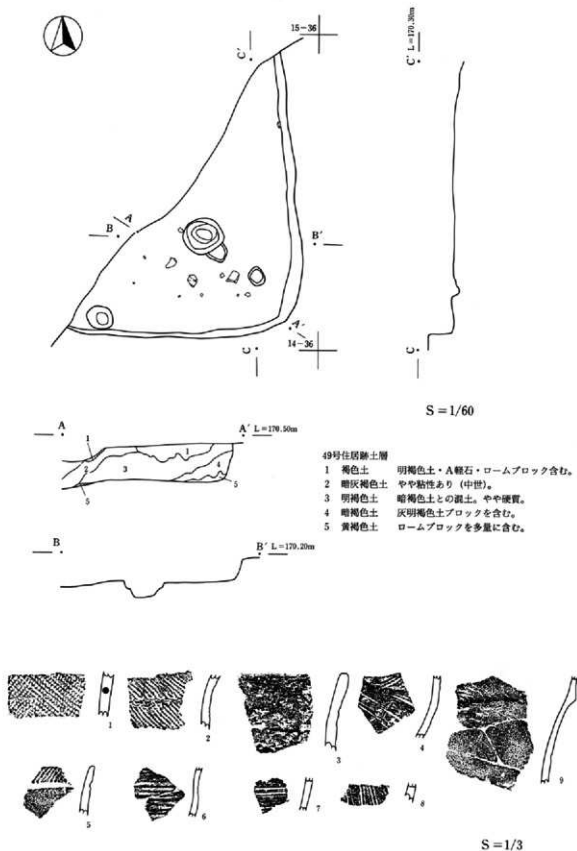


表78 47号住居跡出土石器計測表

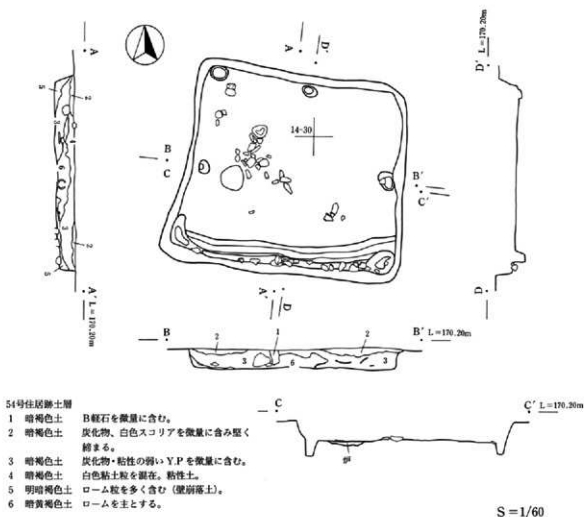
No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	牛伏砂岩	18.0	12.2	5.7	1,150.0
2	凹石	黒色片岩	14.7	8.5	4.4	670.0
3	凹石	黒色片岩	16.3	6.3	3.3	480.0
4	凹石	文象斑岩	10.3	6.7	3.4	250.0

第528図 47号住居跡出土遺物

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第529図 49号住居跡平面図・出土遺物



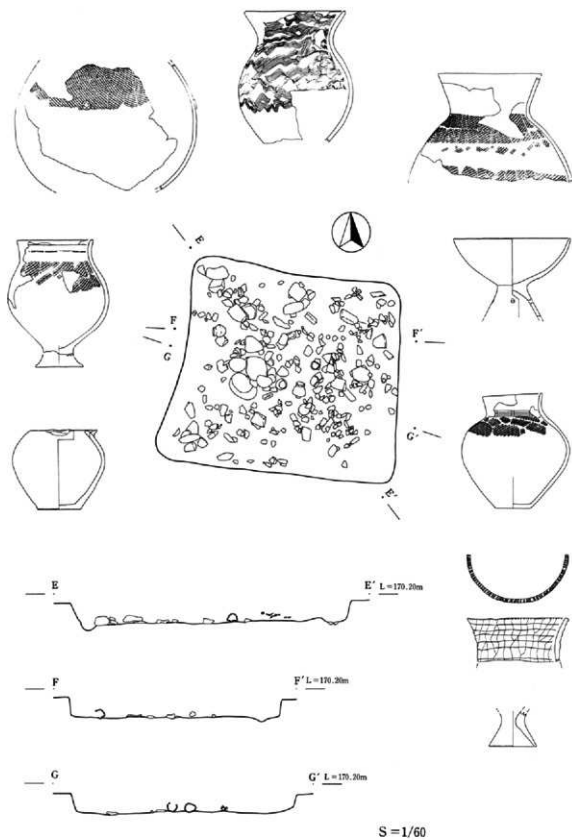
第530図 54号住居跡平面図

石斧、凹石、多孔石、敲石等の石器類も含まれている。また土器についても覆土中のものだけでなく、床面からの完形品等も多く出土している。

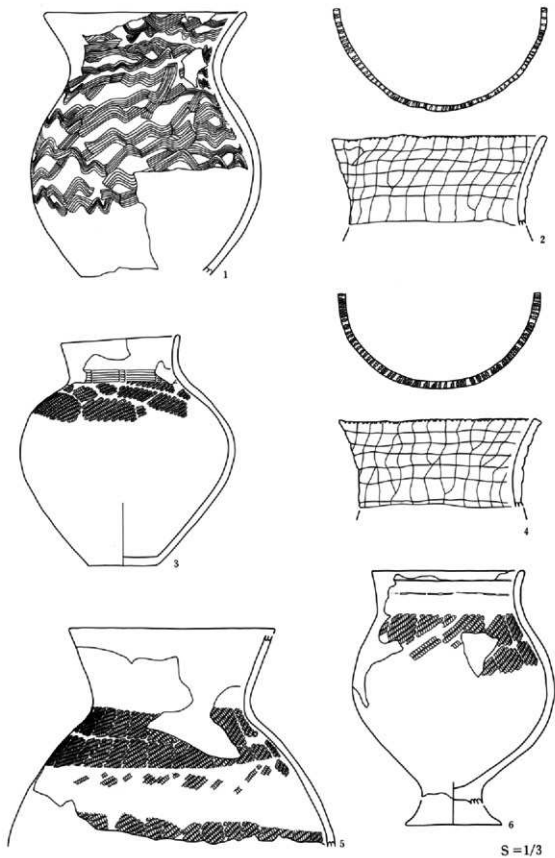
出土遺物

1・2・4・6・12は壘形土器で、6は台付壘となり、12は小形壘となるものである。3・5・7・10・17は壘形土器で、8は片口土器、9・11・13は高坏であり、15・22は壘台である。16は台付壘の脚部と考えられる。1は口縁部から胴部上半にかけて櫛描波状文を施し、胴部下半は丁寧に研磨する。2・4は口唇部に刻みをもち、口縁から頸部にかけて6段の輪襷痕を残す折り返し口縁となり、縦位の無で調整が施される。6は口縁部に輪襷痕を残し、胴部上半にLRの縄文を施す。12は胴部上半にRLの縄文を施すもので、縄文原体の端部がみられる。3は頸部下に櫛描波状文を巡らせ、胴部上半にLRの縄文を施し、胴部下半は丁寧に研磨する。5は口縁部から頸部を無文帯とし、胴部上半と無文帯を挟み胴部中にLRの縄文を施すが、無文帯は研磨されている。7は球胴状となる胴部上半にRLの縄文を施し、刺突をもつ円形の貼付文を配し、胴部下半は丁寧に研磨する。10・17は丁寧に研磨の施された胴部である。8は器面全体を丁寧に研磨した片口土器。

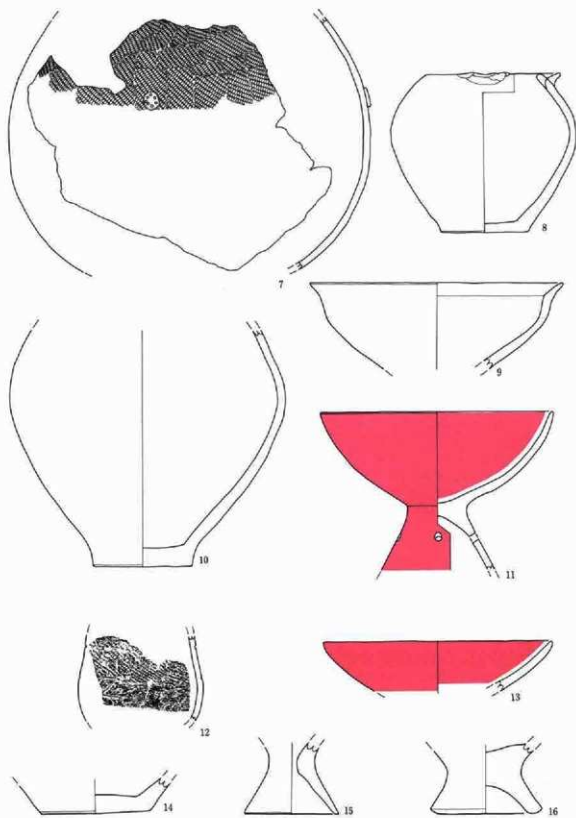
第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第531図 54号住居跡遺物出土状態

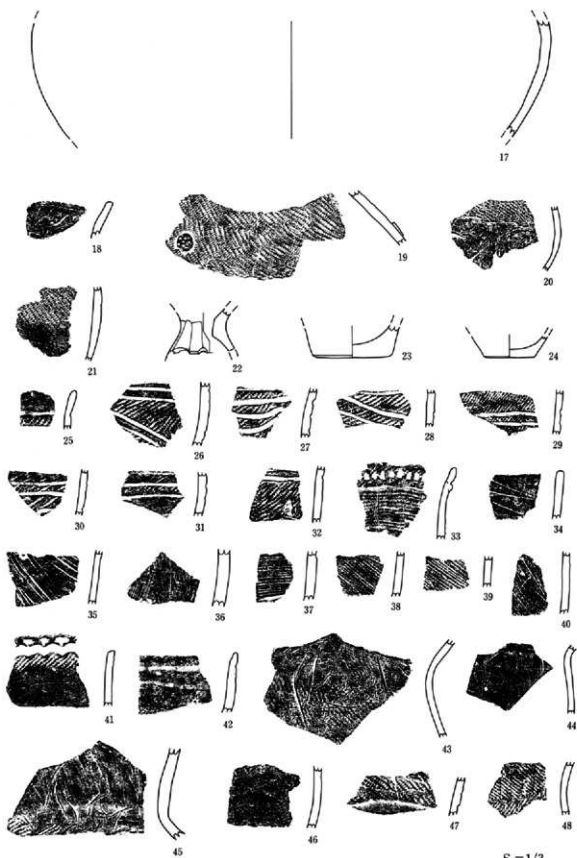


第532図 54号住居跡出土遺物 (1)



S=1/3

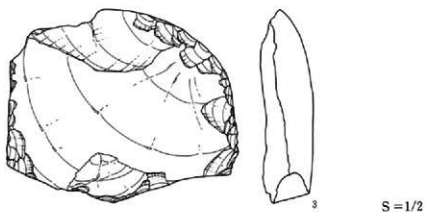
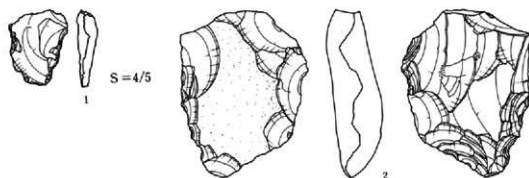
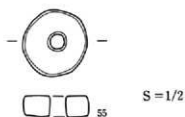
第533図 54号住層跡出土遺物(2)



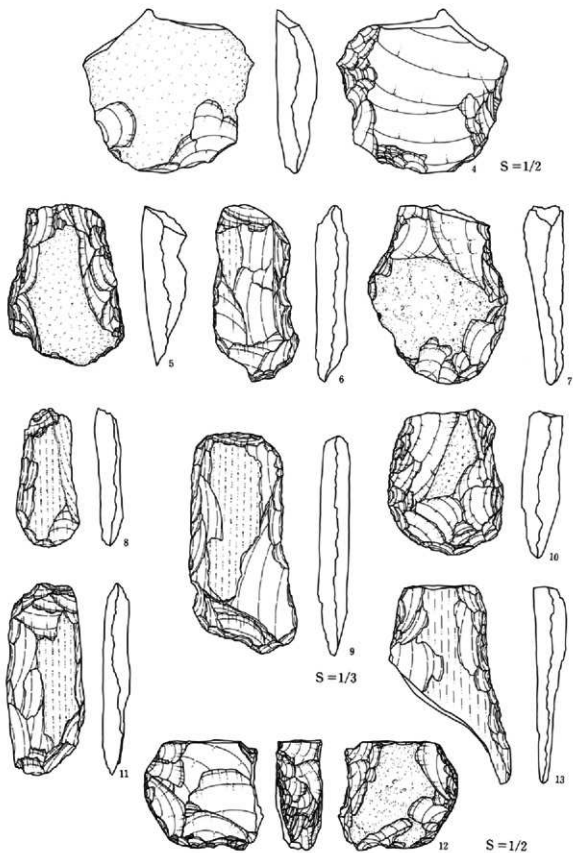
S=1/3

第534図 54号住居跡出土遺物(3)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

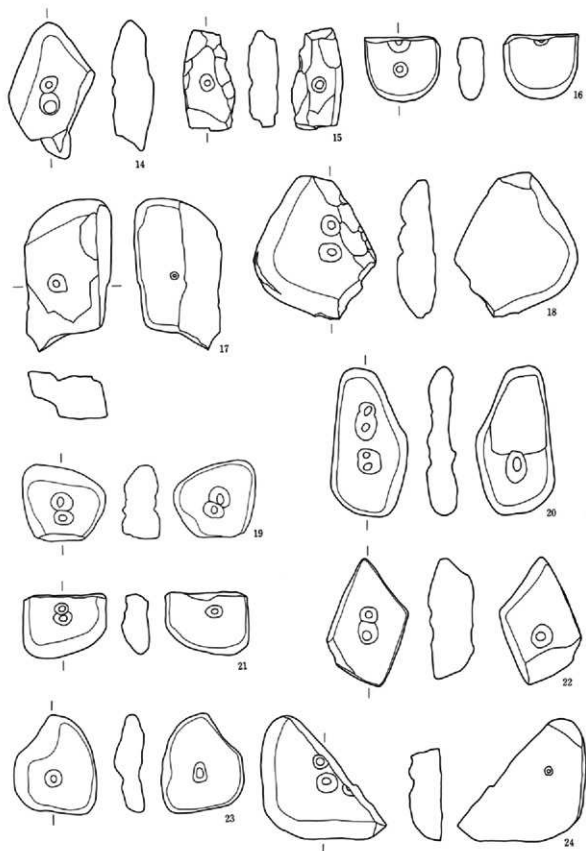


第535図 54号住居跡出土遺物(4)



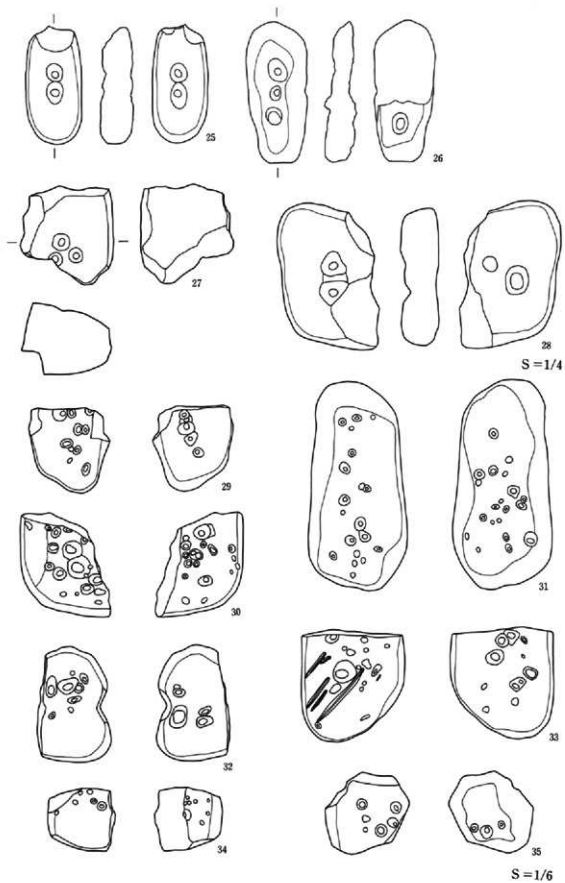
第536図 54号住居跡出土遺物(5)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第537図 54号住居跡出土遺物(6)

S=1/4



第538図 54号住居跡出土遺物（7）

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

表79 54号住居跡出土石類計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	スクレイパー	黒曜石	4.0	3.1	1.1	11.3
2	スクレイパー	硬質泥岩	8.8	6.7	3.0	170.6
3	スクレイパー	硬質泥岩	10.2	12.3	2.8	453.1
4	スクレイパー	硬質泥岩	8.5	9.0	2.1	167.3
5	打製石斧	硬質泥岩	12.7	9.0	3.7	392.4
6	打製石斧	雲母石英片岩	13.9	6.5	2.5	301.2
7	打製石斧	ひん岩	14.1	11.2	3.3	438.8
8	打製石斧	黒色片岩	10.9	5.0	2.0	135.9
9	打製石斧	雲母石英片岩	17.3	8.0	2.4	439.1
10	打製石斧	粗輝安山岩	11.5	9.3	3.1	380.5
11	打製石斧	緑色片岩	15.0	6.2	2.1	211.8
12	石核	硬質泥岩	8.0	9.5	3.7	427.9
13	打製石斧	緑色片岩	15.5	8.0	2.7	287.6
14	凹石	黒色片岩	14.6	9.1	4.4	540.0
15	凹石	緑色片岩	10.7	5.5	3.1	260.0
16	凹石	牛伏砂岩	6.8	7.8	2.9	200.0
17	凹石	黒色片岩	16.0	9.1	5.0	880.0
18	凹石	緑色片岩	15.2	13.0	4.1	1,065.0

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
19	凹石	緑色片岩	8.3	8.7	4.0	495.0
20	凹石	雲母石英片岩	15.8	8.0	3.2	610.0
21	凹石	黒色片岩	6.7	8.7	3.0	270.0
22	凹石	緑色片岩	13.6	8.6	4.7	710.0
23	凹石	牛伏砂岩	10.5	8.8	3.1	290.0
24	凹石	黒色片岩	13.0	13.5	3.5	715.0
25	凹石	変玄武岩	12.5	5.9	3.5	455.0
26	凹石	緑色片岩	15.0	6.5	3.3	370.0
27	凹石	粗輝安山岩	10.4	9.9	7.6	1,025.0
28	凹石	牛伏砂岩	15.5	10.7	4.3	750.0
29	多孔石	牛伏砂岩	13.5	12.7		790.0
30	多孔石	牛伏砂岩	16.5	13.5		1,530.0
31	多孔石	黒色片岩	33.0	15.7		8,900.0
32	多孔石	牛伏砂岩	18.3	11.5		1,650.0
33	多孔石	牛伏砂岩	17.5	16.3		2,360.0
34	多孔石	牛伏砂岩	9.8	10.8		900.0
35	多孔石	牛伏砂岩	12.8	13.5		1,170.0

9・13は高坏の体部で、11は脚部に4個の孔を有する。11・13は土器の内外面に朱を塗布する。18は口縁部に横掛波状文を施すもの。19～21は7と同一個体となるもので、胴部上半に縄文および貼付文をもつ。47は折り返し口縁となる口縁部に、縄文を施すもの。44・45は口縁部から頸部にかけて縦位の刷毛目調整が施され、45の胴部上半には縄文をもつ。43・48～54は胴部上半に縄文を施すもの。

25～42は弥生時代中期の土器で、口縁部ないし胴部に縄文や沈線で文様が描かれ、胴部下半に条痕を施すものである。

55は土製の紡錘車で、1点出土している。

石器は、スクレイパーが4点、大形の打製石斧が9点、凹石が15点、多孔石が7点の計35点が出土しており、この時期の住居の中では最も出土量が多い。

58号住居跡 (第539～543図 表58)

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、8～43・44グリッドに位置し、本住居の北東隅で68号住居跡と一部重複し、36号住居跡の南側にある。重複する68号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況および出土遺物等から本住居の方が古い。ちなみに68号住居は、平安時代のものである。

平面形は、東西4.8m、南北3.7mを測る隅丸長方形を呈している。長軸方向は、ほぼ東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけているため薄く、壁高は10～15cmほどを測る。床面は平坦で、硬くしまった面を確認することができた。炉跡は、住居の中央よりやや北に寄った位置に、焼土を併い検出されている。主柱穴や壁周溝等は検出できなかったが、住居の東側に3基の柱穴と、貯蔵穴とも考えられる径80cmを測る円形の土坑が検出されている。なお炉跡の北側からは、人骨と考えられる歯・骨粉等が検出されている。

出土遺物は比較的に多い。覆土および床面上に大小様々な石が多く出土しており、これらの中には磨き石等の石器類も含まれている。また土器についても覆土中のものだけでなく、床面からの完形品等も出土し

ている。

出土遺物

1～4は変形土器で、5・6は甕の底部である。1は口縁部から胴中位まで櫛描波状文が施され、頸部には櫛描縹状文が巡らされている。器面は研磨されている。2は口縁部から頸部にかけて縦位の櫛描文が施され、胴部には羽状に櫛描文が施される。3は口縁部から頸部にかけて縦位の櫛描文を施し、胴部に羽状に櫛描文を施した後、頸部に櫛描縹状文を巡らせる。4は口縁部を横撫で調整し、胴部には篋状工具による縦位の撫で調整が加えられるもの。47は口縁部に縄文が施されるものであり、48～51は胴部に縄文をもつもの。54～61は胴部上半に櫛描波状文が施されるものであり、54には櫛描縹状文もみられる。

7～46は縄文時代前期の土器で、7～22の胎土には繊維が含まれる。52は、縄文時代中期初頭の土器である。

石器は、黒曜石製の石鏃が1点、凹石が8点の計9点が出土している。

66号住居跡 (第544図 表81)

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、10・11—41・42グリッドに位置し、63号住居跡の東側、37号住居跡の北側に隣接してある。

中世城郭造成時の削平をうけているため残存状態は悪く、炉跡と床面の一部を検出できただけで、平面形状は明確に検出することはできなかった。おそらく、隅丸長方形を呈していたものと推測される。長軸方向は、不明。覆土は薄く、壁は明確ではない。床面は炉跡の南側で、平坦なしまった面を確認することができた。炉跡は、焼土を伴う円形の浅い掘り込みが検出されている。主柱穴や壁周溝等の他施設は検出できなかった。

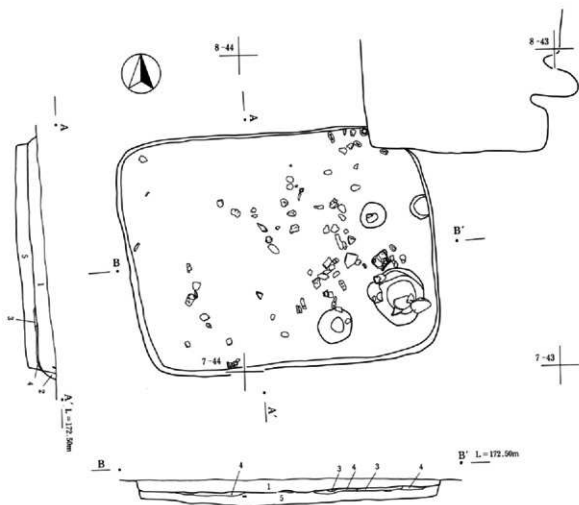
出土遺物は極めて少なく、床面上に数個の石および石鏃状の打製石斧が出土しているのと、土器の小破片が数点出土しただけである。なお土器は、小破片のため掲載できなかった。

69号住居跡 (第545図)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、14—31・32グリッドに位置し、57号住居と重複し、10号住居跡の南東、54号住居跡の北西側にある。重複する57号住居との新旧関係は、本住居の方が古い。住居の中央部は、1号古墳の周溝によって壊され、北側は中世城郭の堀に壊されているため、残存状態は悪く、住居の西南隅と東側部分しか検出できなかった。また57号住居と重複する部分では、本住居の方が深い掘り込みである。

平面形は、東西4.1mを測る方形を呈しているものと想定される。覆土の大半は、1号古墳の周溝によって欠くが、壁高は最大で43cmを測る。床面は、平坦な硬い面を確認することができた。住居の南壁中央には、内側に若干の高まりがみられ、対角線上には4本の主柱穴が検出されている。他のピットは、本住居に伴うかどうかは不明。東壁際には、幅10cmほどの壁周溝が検出されている。炉跡は、検出できなかった。

遺物は極めて少なく、数点の細片が出土したのみで、掲載できなかった。

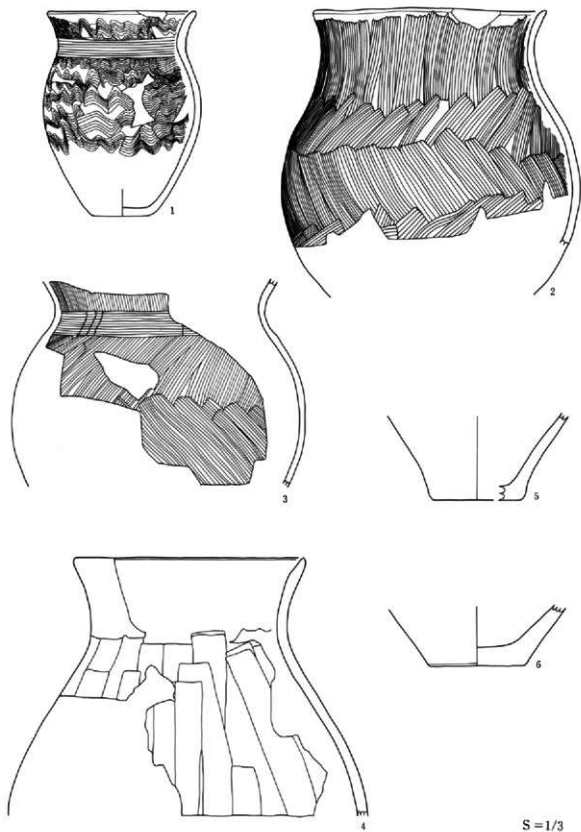


58号住居跡土層

- 1 黒色土 白色軽石（小粒）を多く含む粒子が密。
- 2 黒色土 やや褐色を帯び1層に近似ローム粒子を多く含む。
- 3 褐色土 ローム粒子・ロームブロックを主とした少量の黒色土を含む（粘束）。
- 4 黒色土 1層に近似多量の炭の小ブロックを含む（床下）。
- 5 黒色土 白色軽石を多く含む（地山の層）。

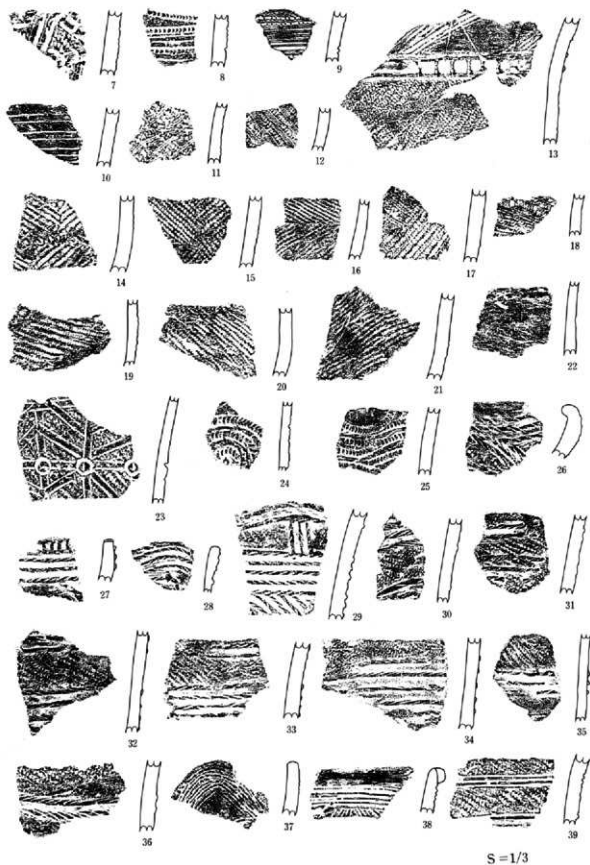
S = 1/60

第539図 58号住居跡平面図

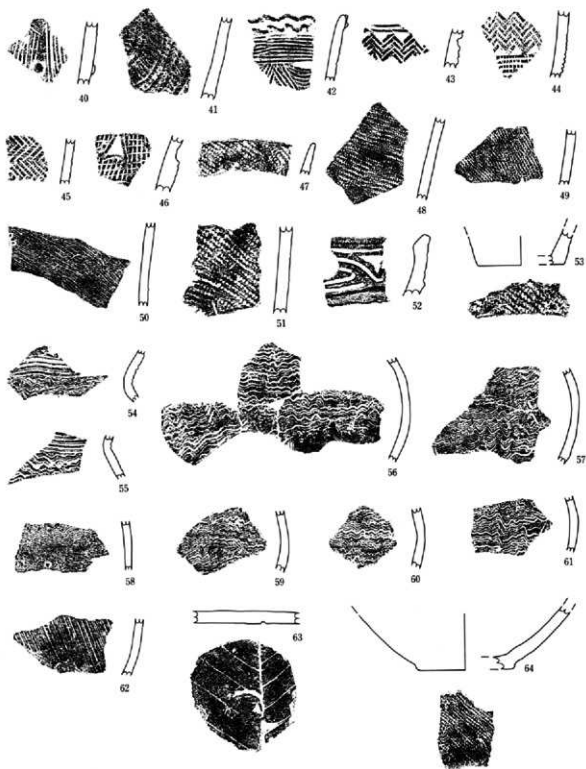


S=1/3

第540図 58号住居跡出土遺物(1)



第541図 58号住居跡出土遺物(2)



S=1/3

第542図 58号住居跡出土遺物(3)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

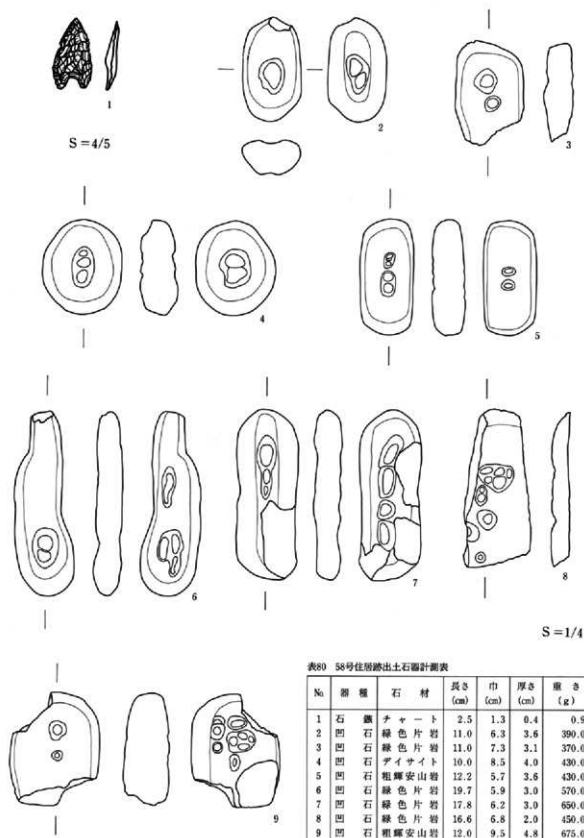


表80 58号住居跡出土石器計量表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石器	チャート	2.5	1.3	0.4	0.9
2	凹石	緑色片岩	11.0	6.3	3.6	390.0
3	凹石	緑色片岩	11.0	7.3	3.1	370.0
4	凹石	アイサイト	10.0	8.5	4.0	430.0
5	凹石	粗輝安山岩	12.2	5.7	3.8	430.0
6	凹石	緑色片岩	19.7	5.9	3.0	570.0
7	凹石	緑色片岩	17.8	6.2	3.0	650.0
8	凹石	緑色片岩	16.6	6.8	2.0	450.0
9	凹石	粗輝安山岩	12.0	9.5	4.8	675.0

第543図 58号住居跡出土遺物(4)

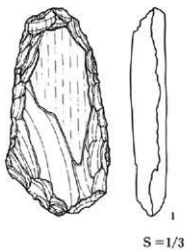
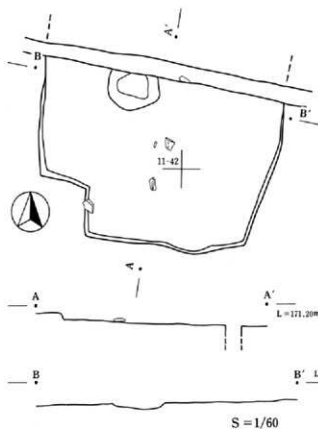
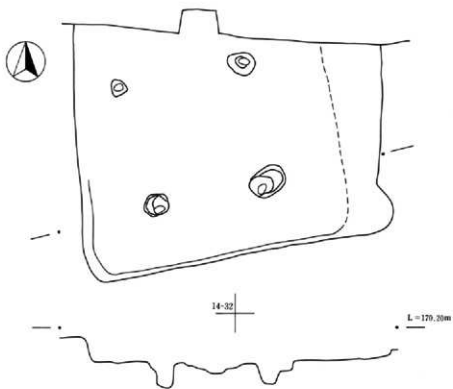


表81 66号住居跡出土石器計測表

No	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	打製石斧	黒色頁岩	16.4	8.3	2.9	508.0

第544図 66号住居跡平面図・出土遺物



第545図 69号住居跡平面図

S = 1/60

2. 方形周溝墓

検出された方形周溝墓は、9基である。東側台地の先端部に1基検出された他は、中央台地上に集中している。この中央台地の延長上で、本遺跡の北側約100mに位置する南高原遺跡(矢島 1994)では方形周溝墓が3基検出されている。こうした状況から、後出する後期古墳群(神保古墳群)とほぼ重複するように、方形周溝墓群が分布することが窺える。

1号方形周溝墓(第546・547図 表82)

東側台地に検出された、唯一の方形周溝墓である。台地の北端部(A区)にあり、25～28-15～18グリッドに位置する。幅2.5m前後の周溝を、ほぼ正方形に巡らせ、その規模は一辺が約15.5mを測る。周溝の深さは、50cm前後と比較的に深い。底面は全体に平坦であるが、北側の隅角で若干の段差がつく。この方形周溝墓の南西角から中央部にかけては、調査区域外であり未調査となった。また北側周溝部には、数基の土坑が重複しているが、土層の堆積状況から本周溝墓の方が新しい。

出土遺物は少なく、甕、壺、高杯等の破片資料で、周溝内に散在している。

2号方形周溝墓(第548図)

中央台地の西寄り(E区)で、調査区の北側にあり、15・16-59～61グリッドに位置する。調査では、南側の1/3を検出しただけで、その主体は調査区外に存在する。幅2m前後の周溝を、ほぼ正方形に巡らせるものと思われ、その規模は一辺が約13mを測るものと推測される。周溝の深さは、70～100cmと西側が深い。底面は全体に平坦であるが、この方形周溝墓の南西角の一部は、攪乱を受けている。

出土遺物は少なく、縄文時代の土器の細片が周溝内に散在する程度であった。

3号方形周溝墓(第549・550図 表83)

中央台地の中央部(E区)で、調査区の北側にあり、16～18-53～55グリッドに位置する。中世城郭の築造に伴う削平を受け、方形周溝墓の大半は消失してしまっているが、調査では南西側の1/3を検出することができた。幅1m前後の周溝を、隅丸状ではあるが、ほぼ正方形に巡らせるものと思われ、その規模は一辺が約11mを測るものと推測される。周溝の深さは、40cm前後と比較的に深い。底面は全体に平坦である。この方形周溝墓の南角の一部は、土坑と重複しているが、土層の堆積状況から本周溝墓の方が古い。

出土遺物は、検出された9基の方形周溝墓の中では最も多い。南西周溝の中央部に、第550図に示す3個体の土器がまとめて出土している。1・2は壺と甕で、完形品であり、3は台付甕の胴部から脚部にかけての半完形品である。この他にも周溝内の覆土中からは、小破片や、縄文・弥生時代の土器片等が多く出土している。

4号方形周溝墓(第551図)

中央台地の中央部(E区)で、3号方形周溝墓の南側、5号方形周溝墓の西側にあり、12～14-54～57グリッドに位置する。中世城郭の築造および近年までの耕作等に伴う削平を受け、方形周溝墓の大半は消失してしまっているが、かろうじて周溝の西側半分の底面を検出することができた。また西側と北側では、土坑との重複も多く、残存状態は極めて悪い。検出された周溝は、周溝内の覆土も7cmほどで、東が開く「コ」状に幅1m前後の周溝で、南側がやや長い。本来は正方形に巡るものと思われ、その規模は一辺が約13.5m

第3章 検出された遺構と遺物

を測るものと推測される。底面は、全体に平坦である。土坑との新旧関係については、土層の堆積状況から本周溝墓の方が古い。

遺物は、出土していない。

5号方形周溝墓（第552・554図 表84）

中央台地の東寄り（E区）で、4号方形周溝墓の東南側にあり、11～13-49～53グリッドに位置する。3号方形周溝墓と同様に、中世城郭の築造および近年までの耕作等に伴う削平を受け、方形周溝墓の大半は消失してしまっているが、かろうじて周溝の南側半分の底面を検出することができた。残存状態は、極めて悪い。検出された周溝は、周溝内の覆土も20cmほどで、北が開く「コ」状に幅2m前後の周溝である。本来は正方形に巡るものと思われ、その規模は一辺が約18mを測るものと推測される。底面は、全体に平坦であるが、南側周溝の中央部が途切れるなど、部分的に浅くなるようである。

出土遺物には、第554図1に示す朱彩の高環が1点ある。

6号方形周溝墓（第553・554図 表84）

検出された9基の方形周溝墓の中で、完掘できた唯一のものである。中央台地の西寄り（E区）で、7・8号方形周溝墓の東側、9号方形周溝墓の西側にあり、6～10-58～62グリッドに位置する。幅2m前後の周溝を、ほぼ正方形に巡らせ、その規模は一辺が約16mを測る。周溝の深さは、70～100cm前後と比較的に深く、残存状態は良好である。底面は全体に平坦であるが、北東側と北西側の中央部が段差がつき深くなっている。この方形周溝墓の南角部分は、3号古墳と重複しており、土層の堆積状況から本周溝墓の方が古いことが確認されている。また西角部分では、669号土坑と重複するが、土層の堆積状況および出土遺物から、本周溝墓の方が新しい。さらに、2本の溝と重複しているが、本周溝墓の方が古い。

出土遺物は少ないが、南西側周溝内から、第554図2・3に示す球胴状となる壺と、台付甕の脚部が出土している。

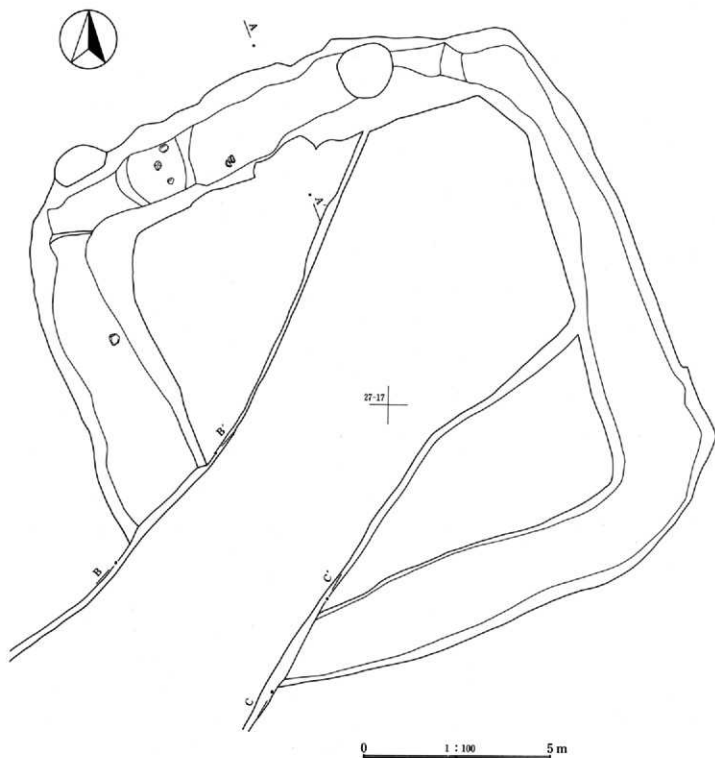
7号方形周溝墓（第554・555図 表84）

中央台地の西寄り（E区）で、6号方形周溝墓の西側、8号方形周溝墓の南側にあり、6～8-62～64グリッドに位置する。調査では、周溝墓の東側半分を検出しただけで、西側については現生活道であることと農業用水管が埋設されているため、調査できなかった。幅1.3m前後の周溝を、ほぼ正方形に巡らせるものと思われ、その規模は一辺が約11mを測るものと推測される。周溝の深さは、30～50cmを測る。底面は全体に平坦であるが、北側がやや浅い。

出土遺物は少ないが、南東側周溝の中央部から、第554図4に示す球胴状となる壺が1点出土している。

8号方形周溝墓（第556・557図）

中央台地の西寄り（E区）で、6号方形周溝墓の西側、7号方形周溝墓の北側、2号方形周溝墓の南側にあり、8～11-61～63グリッドに位置する。調査では、7号方形周溝墓と同様に周溝墓の東側半分を検出しただけで、西側については現生活道であることと農業用水管が埋設されているため、調査できなかった。幅1.8m前後の周溝を、ほぼ正方形に巡らせるものと思われ、その規模は一辺が約16mを測るものと推測される。周溝の深さは、70～110cmを測る。底面は全体に平坦であるが、部分的に段差をもち深くなっている。

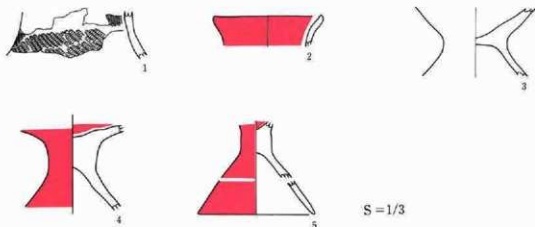


0 1:50 2.5m

- 1号方形周溝墓土層
 1 くすんだ灰褐色土 A 軽石多量を含む。軟質土（耕作土）。
 2 黒色土 C 軽石を含む。
 3 くすんだ灰褐色土 C 軽石を含む。
 4 くすんだ灰褐色土 C 軽石を含む。
 5 A くすんだ灰褐色土 4層と5Bの混土。
 5 B くすんだ黄褐色土 B.P. ロームブロックを多量を含む。C 軽石を少量含む。

第546図 1号方形周溝墓平面図

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第547図 1号方形周溝墓出土遺物

表82 1号方形周溝墓出土土器観察表

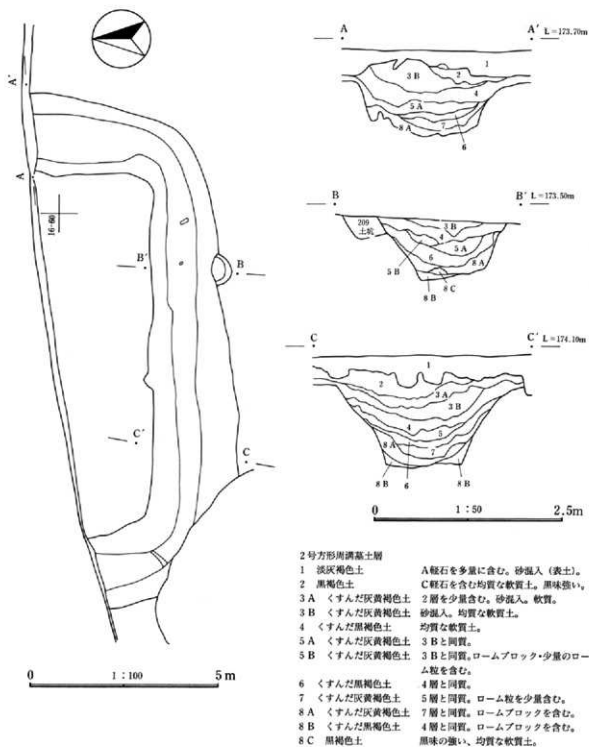
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.構成	2.色調	成・整形の特徴
第547図 1	壺	頸部	一号 方周	—・— (4.0)	1. 緻密 3. 良	2. 橙	頸部に縄文を施す。
第547図 2	壺	口縁部	一号 方周	8.6・— (2.2)	1. 緻密 3. 良	2. 橙	口縁部の内外面に赤色塗彩を施す。
第547図 3	高 坏	脚部	一号 方周	—・— (5.3)	1. 粗砂粒 3. 良	2. 明橙	全体にやや粗い整形。
第547図 4	高 坏	脚部	一号 方周	—・— (6.6)	1. 緻密 3. 良	2. 橙	体部内面および外面に赤色塗彩を施す。
第547図 5	高 坏	脚部	一号 方周	—・9.2 (7.3)	1. 緻密 3. 良	2. 橙	体部内面および外面に赤色塗彩を施す。

遺物は、出土していない。

9号方形周溝墓 (第558図)

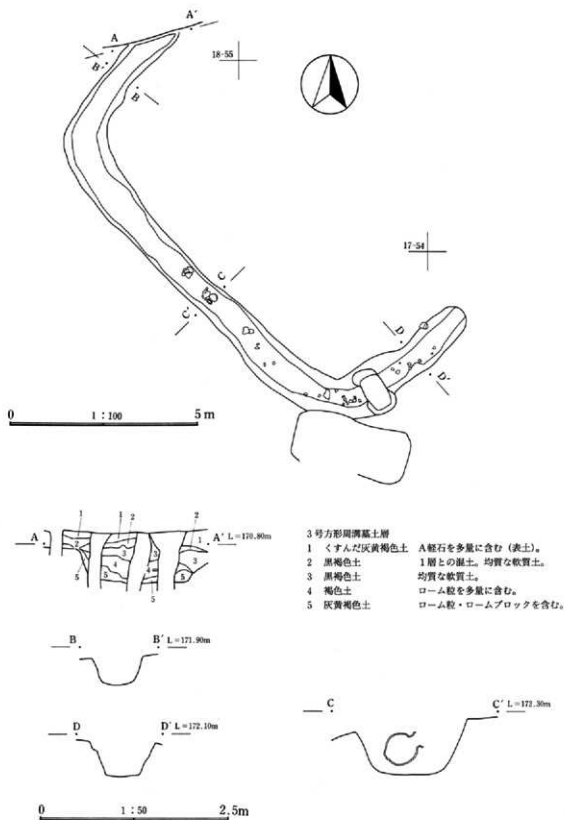
中央台地の中央部(E区)で、6号方形周溝墓の東側にあり、6・7-55~57グリッドに位置する。2・3号古墳と重複し、中世城郭の築造および近年までの耕作等に伴う削平を受け、方形周溝墓の大半は消失してしまっているが、かろうじて西側と東側の周溝の一部を検出することができた。残存状態は、極めて悪い。検出された周溝は、周溝内の覆土も20cmほどで、幅1m前後である。本来は正方形に廻るものと思われるが、その規模は不明である。底面は、全体に平坦であるが、南側の途中で途切れることから、南側ほど浅くなっていたものと考えられる。

遺物は、出土していない。



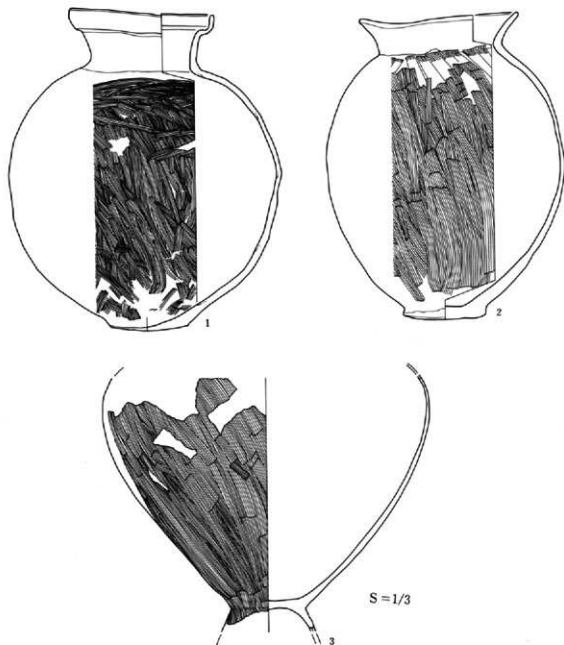
第548図 2号方形周溝墓平面図

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第549図 3号方形周溝墓平面図

第3章 検出された遺構と遺物

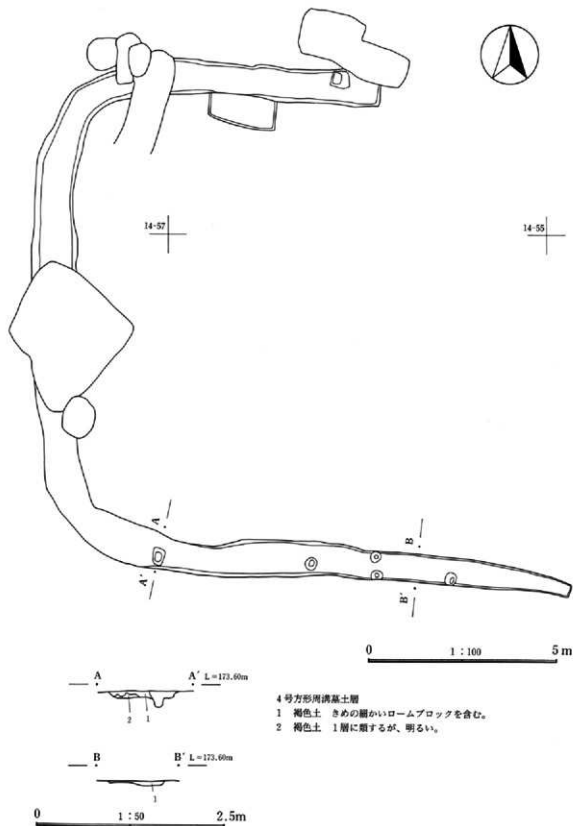


第550図 3号方形周溝墓出土遺物

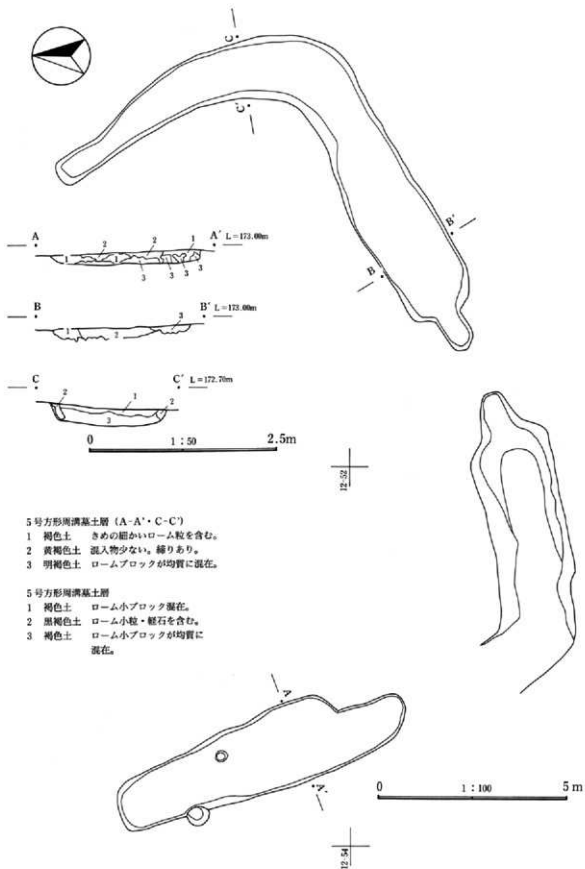
表83 3号方形周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第550図 1	壺	完形	3号 方周	11.5・6.2 25.8	1.緻密 3.良	2.明橙	有段状に直立する口縁で、球脚状。口径部は撫で、頸部下は縦位の刷毛目の後一部に横位の刷毛目を施す。
第550図 2	壺	完形	3号 方周	12.6・6.5 19.0	1.緻密 3.良	2.橙	頸部がくびれ口縁が大きく外反し、胴部は球脚びみ。頸部以下の胴部に縦位の刷毛目を施す。
第550図 3	台付甕	胴部	3号 方周	—・— (20.0)	1.緻密 3.良	2.褐橙	大きく肩の張る胴部。胴部に縦位の刷毛目。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第55図 4号方形周溝墓平面図



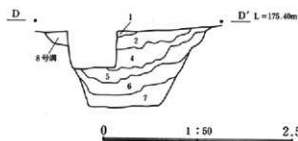
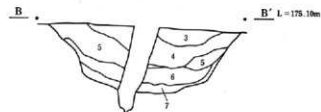
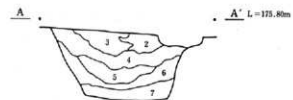
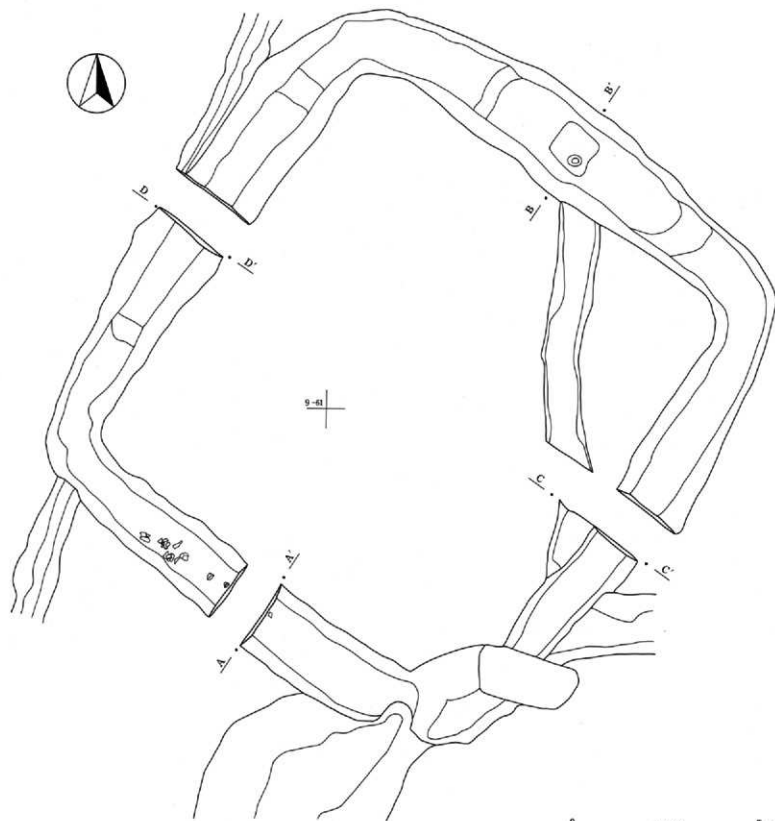
5号方形周溝基土層 (A-A'・C-C')

- 1 褐色土 きめの細かいローム粒を含む。
- 2 黄褐色土 混入物少ない。締りあり。
- 3 明褐色土 ロームブロックが均質に混在。

5号方形周溝基土層

- 1 褐色土 ローム小ブロック混在。
- 2 黒褐色土 ローム小粒・軽石を含む。
- 3 褐色土 ローム小ブロックが均質に混在。

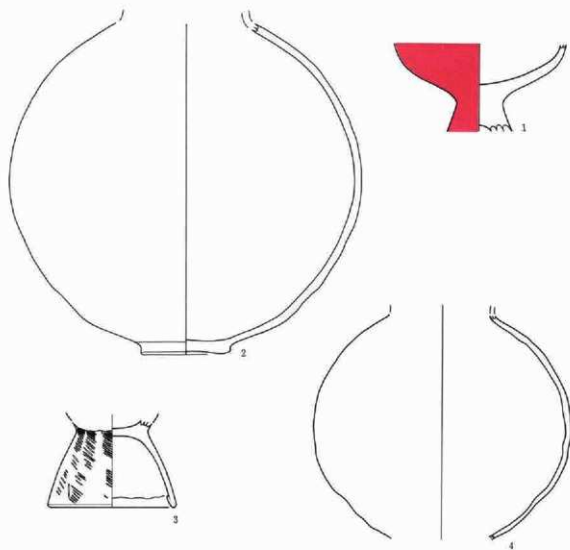
第552図 5号方形周溝基土層平面図



6号方形周溝墓土層

- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 褐色土 | やや軟質。 |
| 2 褐色土 | 溶れたロームとのブロック混土。 |
| 3 黒色土 | C軽石微量に含む。やや軟質。 |
| 4 灰黒褐色土 | 焼土・炭化物を少量。C軽石微量に含む。やや軟質。 |
| 5 灰褐色土 | ロームブロック少量含む。軟質。 |
| 6 くすんだ黄褐色土 | ロームブロック少量含む。やや軟質。 |
| 7 灰褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量に含む。やや軟質。 |

第563図 6号方形周溝墓平面図

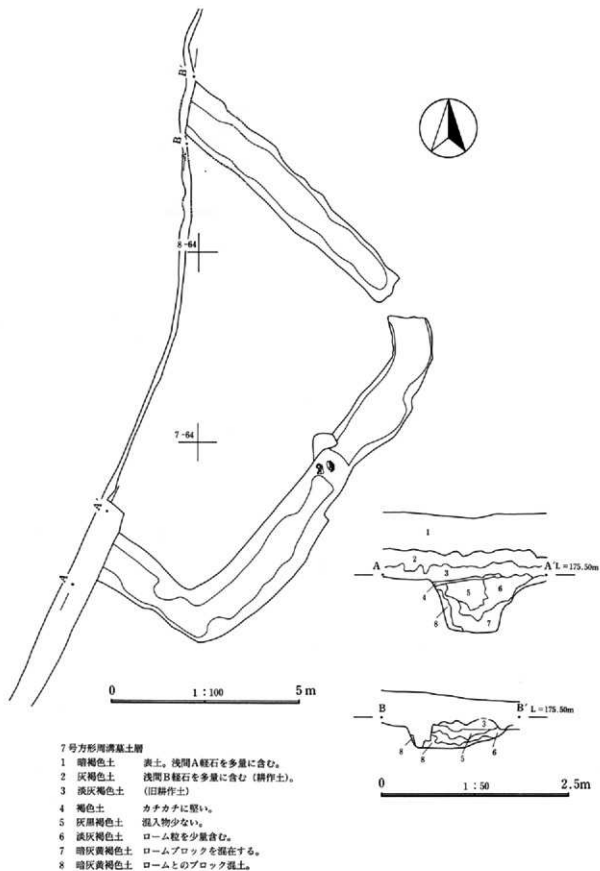


S=1/3

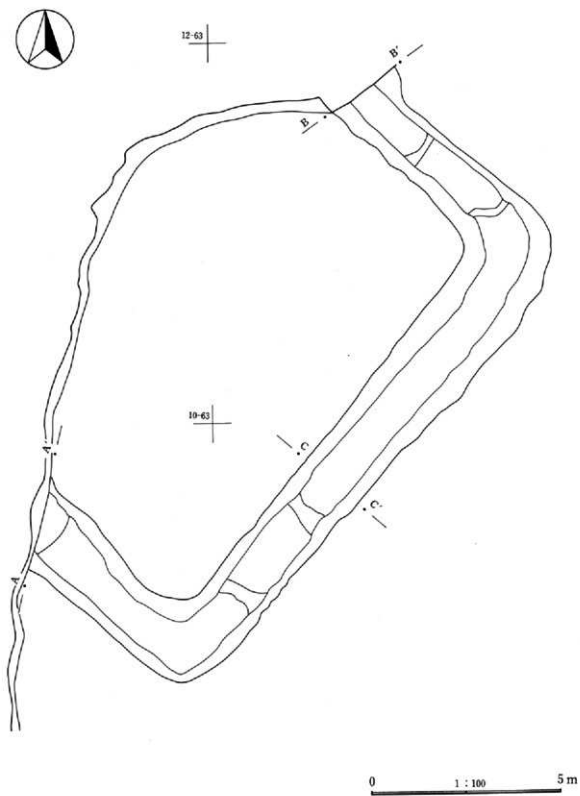
第554図 5・6・7号方形周溝墓出土遺物

表84 5・6・7号方形周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第554図 1	高環	体部	5号 方周	—・— (6.8)	1.緻密 3.良	2.橙	外面全体に赤色塗彩を施す。体部内面は丁寧に研磨されている。
第554図 2	壺	口縁部 欠損	6号 方周	—・7.0 (26.0)	1.緻密 3.良	2.橙	球胴状となる器形を呈す。器面は、内外面ともに丁寧に研磨されている。
第554図 3	台付鉢	台部	6号 方周	—・10.0 (6.7)	1.緻密 3.良	2.赤橙	台部に割目痕を有する。
第554図 4	壺	胴部	7号 方周	—・— (17.6)	1.緻密 3.良	2.明橙	球胴状となる器形を呈す。器面は、内外面ともに丁寧に研磨されている。

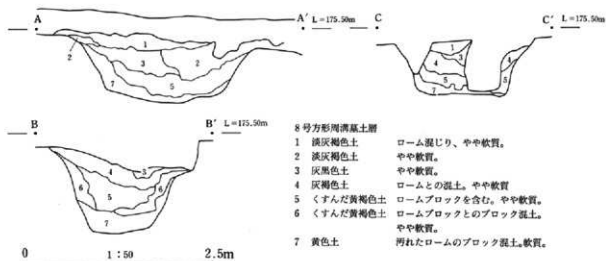


第555図 7号方形周溝墓平面図

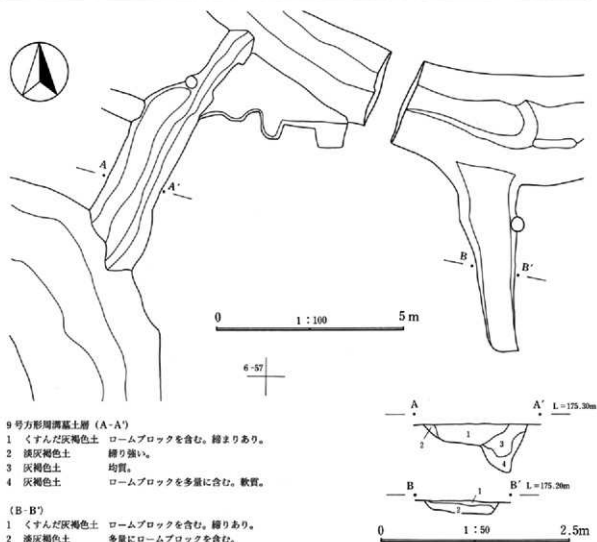


第556図 8号方形周溝基平面図

第3章 検出された遺構と遺物



第557図 8号方形周溝墓土層断面図



第558図 9号方形周溝墓

3. 古墳時代の住居跡

古墳時代の住居としては、東側の台地上の1号古墳の北側に2軒検出されただけである。

11号住居跡 (第559・561図 表85)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央部の平坦面にあり、15・16-32・33グリッドに位置し、10号住居跡の南側にあり、中世城郭の2号堀と重複している。この2号堀により住居の南側半分は破壊されている。さらに住居の一部を現代の耕作溝により破壊をうけている。

平面形は東西5.0m、南北4.8mを測るほぼ正方形を呈している。主軸方向は北北東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は最大で25cmを測る。床面は、平坦な張り床で、特に竈前を中心に硬くしまっている。掘り方では、不整形な床下土坑やピットが確認され、このうち東側の2個のピットは主柱穴と考えられる。掘り片面は、全体に凹凸が著しい。壁周溝等は、検出されなかった。

竈は、東壁のほぼ中央に位置し、幅1.2m、奥行き1.2mを測る。両方の袖部は大きく住居内に張り出し、焚き口部から燃焼部にかけてはやや掘り窪められ、奥に煙道が若干みられる。焚き口部の辺りには、薄く灰の広がりが確認できた。なお、袖部は両方とも、掘り残しによるものであった。

貯蔵穴は、竈の右側で、径65cm、深さ15cmを測る円形を呈する。

遺物は、床面に散漫に分布し量も少なく、個体の残存率も低い。高坏と甕類である。これらの土器は、貯蔵穴内からも出土している。竈の左脇には、人頭大の石が数個集積していた。

12号住居跡 (第560・562・563図 表86)

本住居跡は、東側台地の中央部から西縁辺よりの平坦面にあり、17-37グリッドに位置し、11号住居跡の西方にあり、13号住居跡と重複している。重複する13号住居跡との新旧関係は、土層の堆積状況等から本住居跡が新しい。

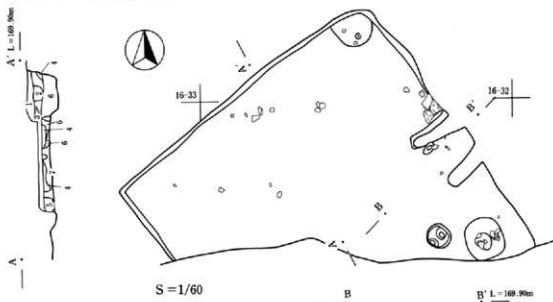
平面形は東西3.7m、南北3.9を測るほぼ正方形を呈している。主軸方向は、11号住居跡と同様に北北東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は13cmから20cmを測る。床面は、平坦な張り床で、特に竈前を中心に硬くしまっている。また住居内には4本の主柱穴が検出され、それぞれ径が30cmから35cmほどの円形で、深さが40cmから60cmを測る。掘り方では、住居の中央と南側に円形の床下土坑が検出された。これら床下土坑の規模は、中央の土坑が径1.2mほどの円形で、深さが15cmを測る。南側の土坑は、径が65cmほどの円形で、深さは30cmを測る。掘り方面は、全体に凹凸が著しい。壁周溝等は、検出されなかった。

竈は、東壁の中央からやや南寄りに位置し、幅1.8m、奥行き1.2mを測る。両方の袖部は大きく住居内に張り出し、焚き口部から燃焼部にかけては緩やかに掘り窪められている。袖部の先端部には両方とも、袖石が使われている。

貯蔵穴は、竈の右側で、径55cm、深さ37cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈周辺に集中し量も多い。竈の左側には、甕と坏。右側には、坏・鉢類と甕が出土し、貯蔵穴上にも甕が出土している。

第3章 検出された遺構と遺物

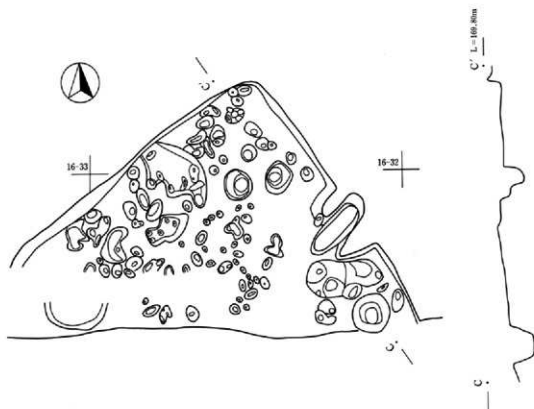


11号住居跡土層

- | | | |
|---|--------|----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 白色軽石粒・ローム粒を含む。堅く締まる。 |
| 2 | 褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。軟質。 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロックを含む。やや締まる。 |
| 4 | 暗灰黄褐色土 | 黄褐色軽石粒・褐色土混在(貼床)。 |
| 5 | 黒色土 | 灰黄褐色土ブロックを含む。 |
| 6 | 褐色土 | 黄褐色土ブロックを含む。 |

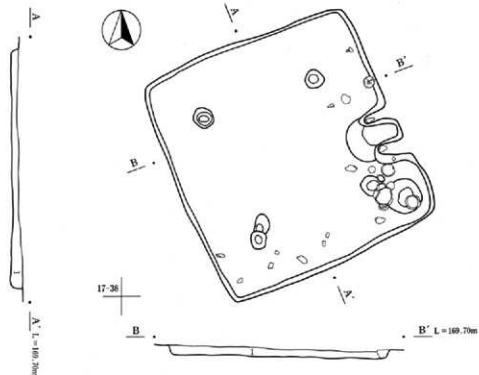
11号住居跡カマド掘り方土層

- | | | |
|---|--------|----------------|
| 1 | 赤褐色土 | 焼土 |
| 2 | 暗灰黄褐色土 | 黒色土ブロックとの混土。 |
| 3 | 暗灰黄褐色土 | 黒色土・焼土ブロックの混土。 |



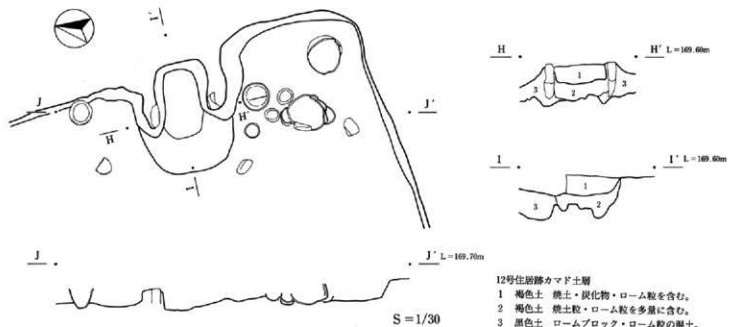
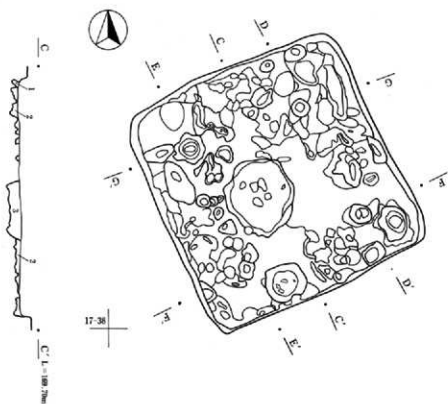
第559図 11号住居跡平面図

S=1/60



12号住居跡土層

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性強い。



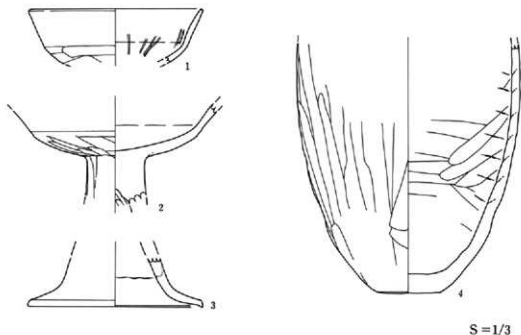
12号住居跡カマド土層

- 1 褐色土 焼土・炭化物・ローム粒を含む。
2 褐色土 焼土粒・ローム粒を多量に含む。
3 黒色土 ロームブロック・ローム粒の混入。

12号住居跡掘り方土層

- 1 黒色土 ローム粒を少し含む。
2 黒色土 ロームブロック大。縦貫。
3 黒色土 ロームブロック版状にたいた土。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



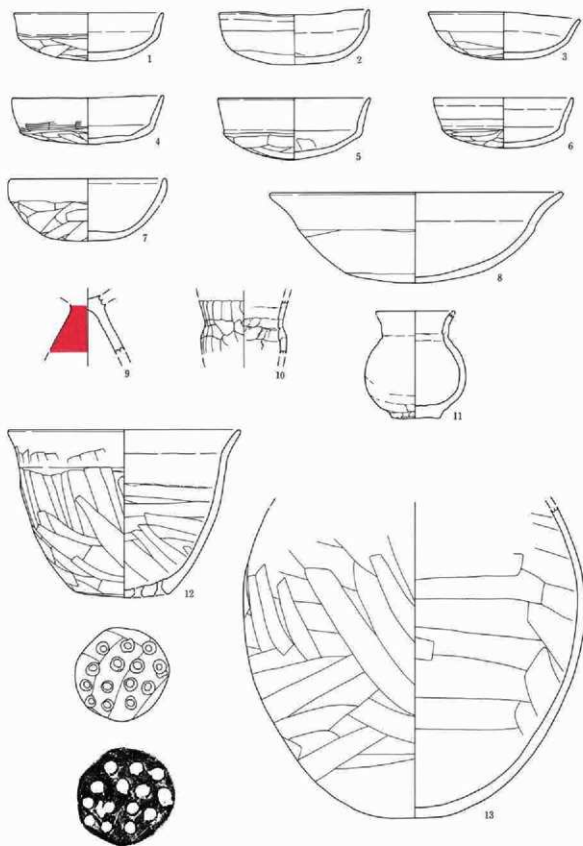
S=1/3

第561図 11号住居跡出土遺物

表85 11号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第561図 1	高 杯	口縁部	貯蔵穴	13.6・— (4.3)	1. 細砂粒 2. 褐色 3. 酸化焰 良	口縁部は横撫で、胴部荒削り。内面に放射状の足跡 き有り。
第561図 2	高 杯	胴・脚	竈内	—・— (6.6)	1. 細砂粒 2. 黄橙 3. 酸化焰 良	口縁部は横撫で、胴・脚部は荒削り。脚部の内面に 指撫で痕有り。
第561図 3	高 杯	脚部		—・13.9 (3.8)	1. 細砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	脚部は、荒削り後に横撫で。内面は横撫で、輪横 痕有り。
第561図 4	甕	胴部		—・4.9 (19.6)	1. 砂粒 2. 褐色 3. 酸化焰 良	胴部は、荒削りの足削り。内面は横撫で。

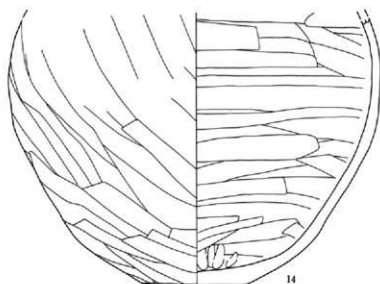
第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

第562図 12号住居跡出土遺物(1)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



S=1/3

第563図 12号住居跡出土遺物(2)

表86 12号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1, 胎土 3, 焼成	2, 色調 2, 橙 やや不良	成・整形の特徴
第562図 1	坏	完形	床直 甕石	11.8・ 3.6	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	口縁部・内面横撫で。胴下半は篋削り。
第562図 2	坏	完形	床直 甕石	11.8・ 4.2	—	1, 砂粒 3, 酸化焰	口縁部横撫で。胴下半は撫でおよび篋削り。内面は撫で。
第562図 3	坏	完形	床直 甕石	11.9・ 3.7	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	口縁部・内面横撫で。胴下半は篋削り。
第562図 4	坏	完形	床直 甕石	11.9・ 3.7	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	口縁部・内面横撫で。胴下半は篋削り。
第562図 5	坏	完形	床直 甕石	11.9・ 4.9	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	口縁部・内面横撫で。胴下半は篋削り。
第562図 6	坏	完形	床直 甕石	11.0・ 3.9	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	口縁部横撫で。胴下半は篋削り。内面横撫で・撫で。
第562図 7	坏	2/3	床直	12.3・ 4.9	—	1, 粗砂粒 3, 酸化焰	口縁部横撫で。胴下半は篋削り。内面横撫で・撫で。
第562図 8	鉢	完形	床直 甕石	23.0・ 7.1	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	口縁部横撫で。胴下半は篋削り。内面横撫で・撫で。 (器面風化により不明瞭)
第562図 9	高坏	脚部		— (3.5)	—	1, 細砂粒 3, 酸化焰	内外面ともに撫で整形。器面に赤色塗彩有り。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第562図 10	手捏	1/2		—・— (4.2)	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに指面直多い。
第562図 11	手捏	完形		6.2・3.8 8.5	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 黄橙 良	器面全体に撫で。
第562図 12	瓶	完形	床直 電左	18.2・7.5 13.2	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 黄橙 良	口縁部横撫で。胴部以下は縦磨り。内面は横撫で・撫で。底部には焼成前の穿孔有り。
第562図 13	甕	割下半	床直 電右	—・8.0 (24.4)	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. におい橙 良	胴部全体に磨削。内面は横位の撫で。
第562図 14	甕	割下半	床直	—・7.6 (21.0)	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. におい橙 良	胴部全体に磨削。内面は横位の撫で、および工具痕を明顯に残す。

4. 古墳

本遺跡地は、周知の神保古墳群の一角にあたる。この神保古墳群は、上毛古墳総覧によると63基の古墳が上げられており、その主体は本調査地の北側に分布する。この北側については、近年吉井町教育委員会により調査が行われ、南高原遺跡として報告書が刊行されている。本調査地周辺に点在する古墳群の一つについて、梅沢重昭氏が群馬県史資料編3（原始古代3）の中で、「城古墳」として紹介している。（第599図参照）それによると、城古墳は墳丘をどどめず石室を被覆する裏込めの積石の状態で残存し、その範囲は南北6m、東西4.5mの楕円形で、高さは50cmほどの盛り上がりを見せようである。主体部は南に開口する横穴式石室で、乱石積による石室を構築していたようである。石室の構築面は、ローム層まで掘り下げた掘り方をもち、長さ5.2m前後の長台形を呈する。石室は、玄室部の破壊が著しく、羨道部は良好な状態で残存し、玄室部の床面は敷石で、羨道部は粘土を盛り土する。出土遺物には、調査以前に出土していた立枝柄共鉄造大刀のほか、鉄鏃2点と銅製金具1点が検出されている。この古墳調査の結果、本調査地周辺の古墳について、神保古墳群のうちの12基以上の古墳規模で構成される「城支群」として扱っており、城古墳については、支群の中でも最終末期の古墳として位置づけ、その構築年代を7世紀末から8世紀初頭にかかる時期としている。

本調査で検出された古墳は3基で、この内の1基は東側台地であり、他の2基が中央台地に存在する。先述した城古墳は、この中央台地に存在したようであり、その特定については不明な点もあるが、検出された遺構の状況等から推察すると、本調査での3号古墳が城古墳である可能性が高い。

1号古墳（第564～570図 表87）

東台地の中央部（B区）で、11～14～30～34グリッドに位置する。中世城郭の築造に伴う削平、さらには近年までの耕作等により、墳丘の存在は認められない。検出されたものは、周堀と石室の床面である。

周堀の平面形は、歪んだ隅方形状を呈しており、北側の一部は中世城郭の堀により検出されなかったが、環状に巡っていたものと考えられる。石室開口部前では途切れ、北西部ではかなり幅広となり、上幅1～5m、下幅0.5～2m、深さ0.5～2m前後で、断面形は凹レンズ状を呈している。外縁部上端での規模は、東



1号古墳墳丘土層 (A-A')

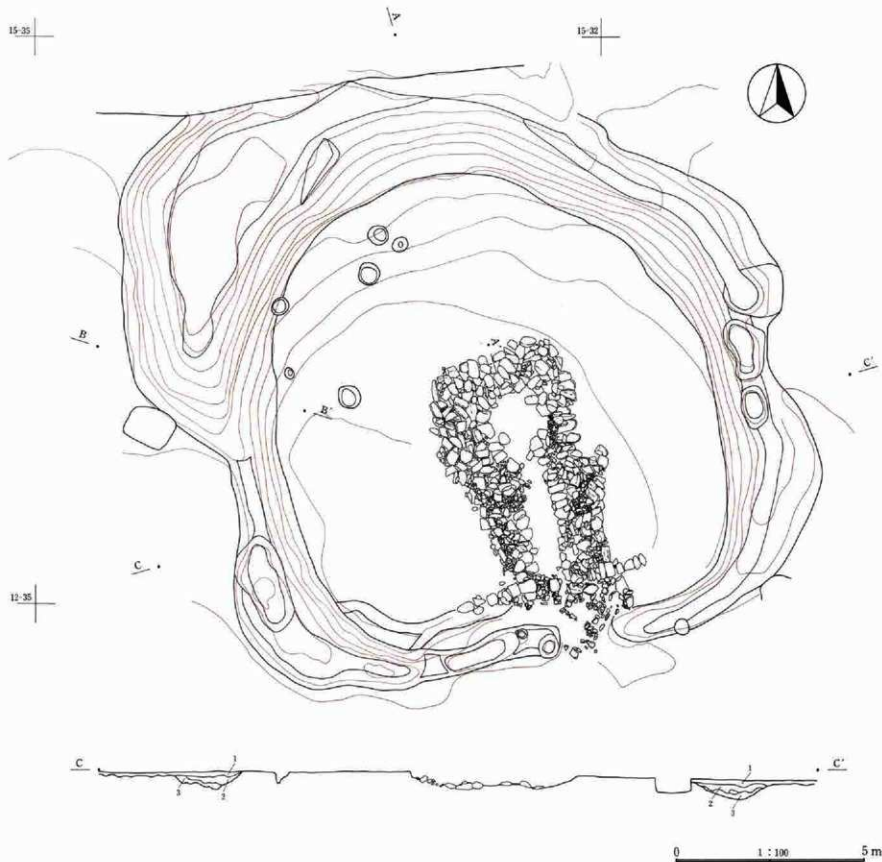
- 1 灰褐色土 ロームブロック・軽石を多く含む。
- 2 灰褐色土 ローム粒・軽石を混在する。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・褐色粘性土ブロック。

1号古墳墳丘土層 (B-B')

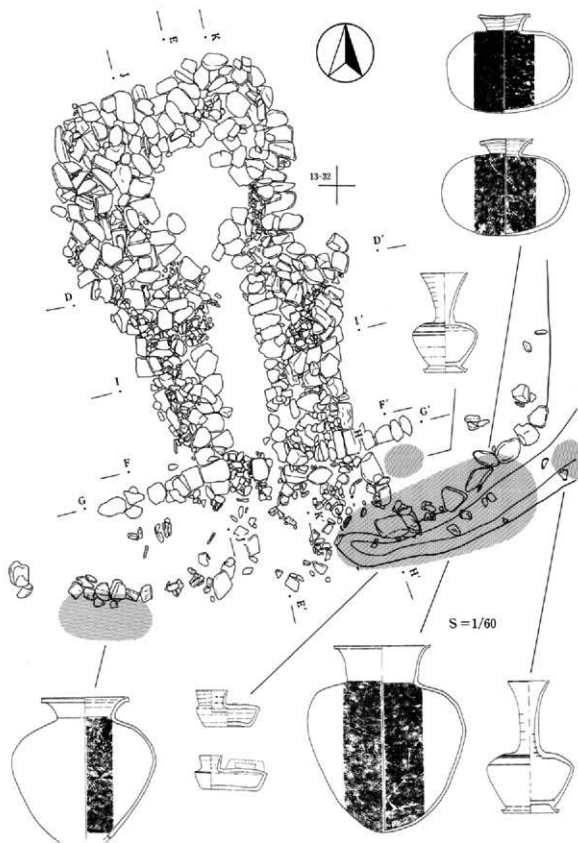
- 1 黄色土 ロームブロック (土層下部)。
- 2 灰褐色土 ロームブロック・軽石を多く含む。
- 3 灰褐色土 明褐色土ブロックを多く、軽石を含む。やや硬質 (中世)。
- 4 暗褐色土 ロームブロック軽石を含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。硬質 (平安~中世)。
- 6 明褐色土 ロームブロック・軽石を含む (平安~中世)。
- 7 暗褐色土 黒色味強い。

1号古墳墳丘土層 (C-C')

- 1 灰褐色土 多量の目軽石・明褐色土を含む。
- 2 褐色土 暗褐色土・ローム粒を含みやや黒味を帯びる。
- 3 褐色土 ロームブロック大、やや黒味を帯びる。

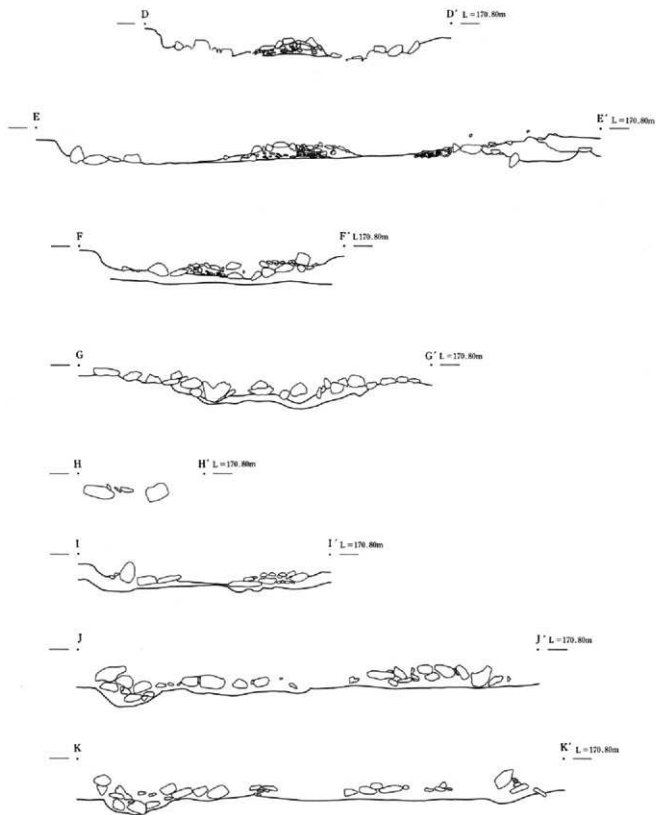


第564図 1号古墳平面図



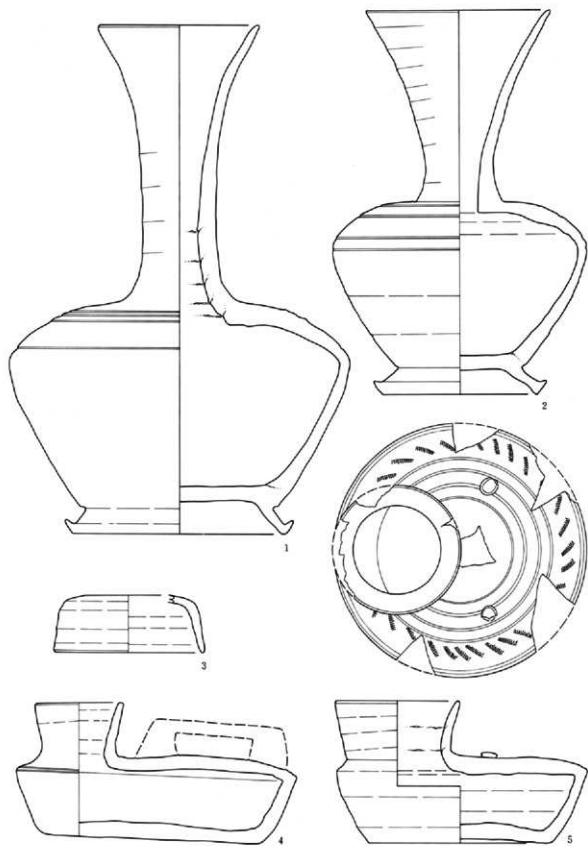
第565図 I号古墳石室平面図

第3章 検出された遺構と遺物



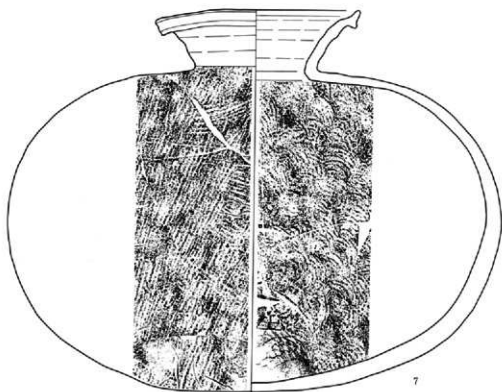
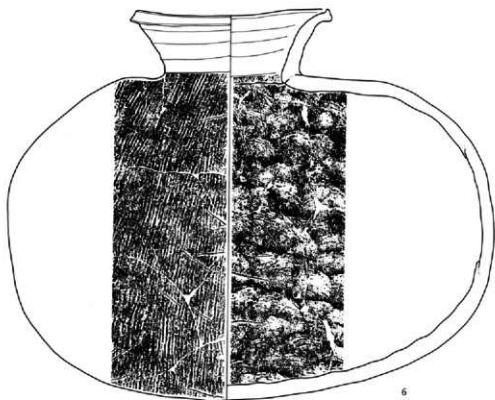
S = 1/60

第566図 I号古墳石室断面図



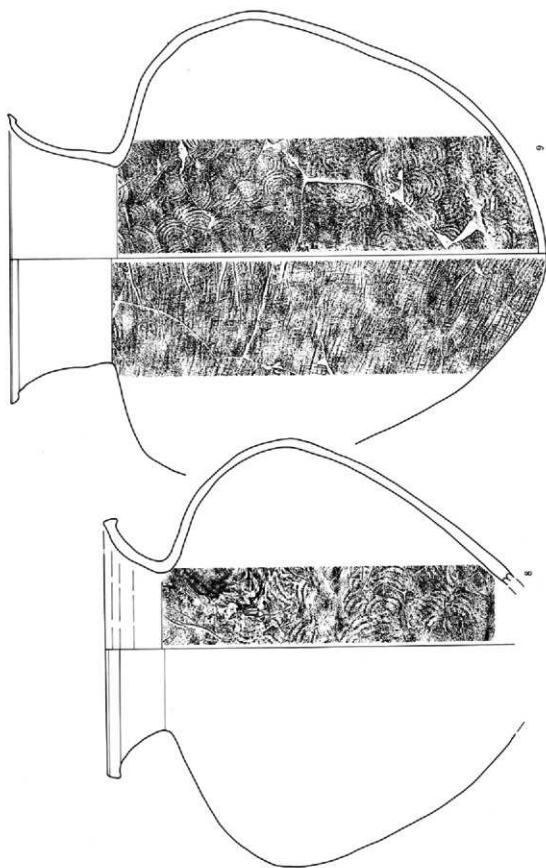
第567図 1号古墳出土遺物 (1)

S = 1/3



S=1/3

第568図 1号古墳出土遺物(2)



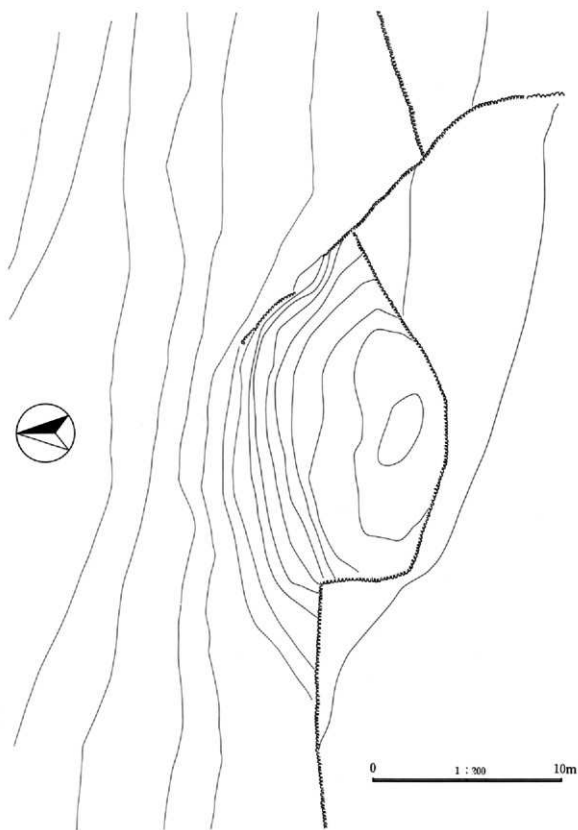
S = 1/6

第569図 1号古墳出土遺物(3)

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

表87 1号古墳出土遺物観察表

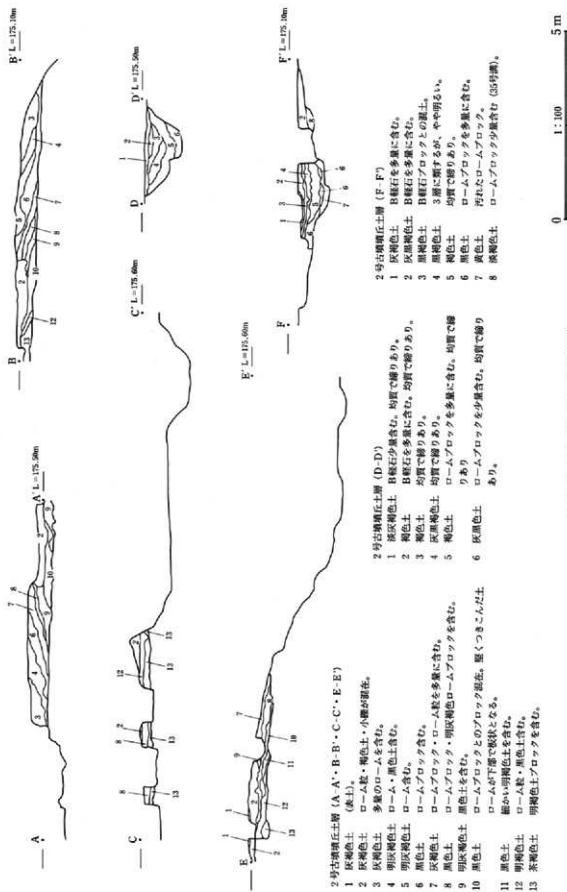
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第567図 1	須志器 長頸壺	完形	1号 古墳	12.7・16.8 40.1	1.緻密 2.灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。高台付。肩部に4条の花輪が巡る。降灰輪が掛かる。
第567図 2	須志器 長頸壺	完形	1号 古墳	14.5・12.0 30.4	1.緻密 2.灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。高台付。肩部に3条の花輪が巡る。降灰輪が掛かる。
第567図 3	須志器 蓋	1/2	1号 古墳	12.0・ 4.5	1.緻密 2.灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。降灰輪が掛かる。
第567図 4	須志器 平瓶	ほぼ完 形	1号 古墳	7.0・17.0 10.6	1.緻密 2.灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。肩部に角状の吊り手を持つ。降灰輪が掛かる。
第567図 5	須志器 平瓶	完形	1号 古墳	10.0・14.4 11.2	1.緻密 2.灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。肩部に4条の花輪が巡り、列点刺突が巡る。さらにボタン状の貼付けを2個持つ。
第568図 6	須志器 横瓶	完形	1号 古墳	16.0・ 31.0	1.緻密 2.灰 3.還元焰 良	口縁部横撫で。胴部は平行叩き。内面には青海波文。厚く緑色の降灰輪が掛かる。
第568図 7	須志器 横瓶	完形	1号 古墳	16.2・ 30.0	1.緻密 2.灰白 3.還元焰 良	口縁部横撫で。胴部は平行叩き。内面には青海波文。降灰輪が掛かる。
第569図 8	須志器 壺	2/3	1号 古墳	27.3・ 43.5	1.緻密 2.灰白 3.還元焰 良	口縁部横撫で。胴部は撫で。内面には青海波文。
第569図 9	須志器 大壺	口縁部 欠損	1号 古墳		1.緻密 2.暗灰 3.還元焰 良	口縁部横撫で。胴部は平行叩き。内面には青海波文。降灰輪が少し掛かる。
第570図 10	須志器 壺	頸部片	1号 古墳		1.緻密 2.暗灰 3.還元焰 良	頸部に4から5本を単位とした櫛歯状文を巡らせる。
第570図 11	須志器 壺	頸部片	1号 古墳		1.緻密 2.暗灰 3.還元焰 良	頸部に4から5本を単位とした櫛歯状文を巡らせる。
第570図 12	須志器 壺	頸部片	1号 古墳		1.緻密 2.灰 3.還元焰 良	頸部に4から5本を単位とした櫛歯状文を巡らせる。
第570図 13	須志器 壺	頸部片	1号 古墳		1.緻密 2.灰 3.還元焰 良	頸部に櫛歯状文を巡らせる。
第570図 14	須志器 壺	胴部片	1号 古墳		1.緻密 2.灰 3.還元焰 良	胴部に平行叩き。
第570図 15	須志器 壺	胴部	1号 古墳		1.緻密 2.暗灰 3.還元焰 良	胴部は平行叩き。内面には青海波文。降灰輪が少し掛かる。



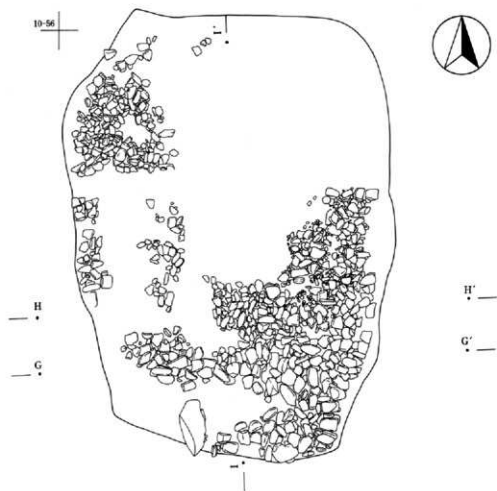
第571図 2号古墳地形図



第572图 2号古坟平面图



第573図 2号古墳丘土層断面図



S=1/60

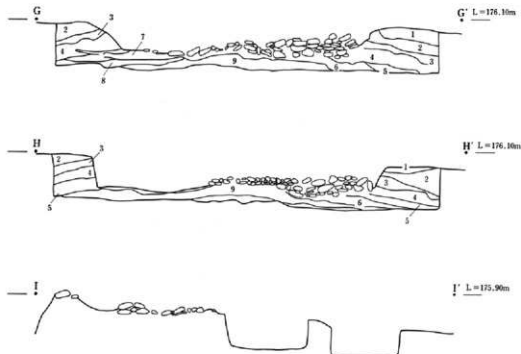
第574図 2号古墳石室平面図

西方向で16m前後、内縁部上端では東西方向11.5m、南北方向12mを測る。覆土中からは、葦石の崩落によると思われる河原石が多く出土し、南側の石室前からは多量の須恵器が出土している。石室前の周堀内縁上端には、大形の礫が列をなし、石室開口部との間にはハ字状に開く前庭部が存在したようである。また、石室開口部の両側には、葦石の根石が1.5mほど検出された。

石室は、墳丘のほぼ中央に位置しており、玄室と羨道からなる横穴式石室である。天井石・奥壁および上部の石は残存せず、玄室および羨道部の床面にも攪乱が及んでいた。玄室床面は、ローム面を掘り方底面とし、大形礫を敷いた上に玉石を敷き詰めたものと考えられる。副葬品の出土はないが、一部に骨粉がみられた。羨道の床は、平坦なローム面を床としていたものと思われ、開口部には閉塞に伴う石積らしきものがみられた。

石室の構築については、先述した城古墳と同様に、ローム面まで掘り込んだ長方形の掘り方をもち、裏込めにはやや大形の片岩を主体に構成されている。壁石には、長方体状の大形の片岩が用いられ、小口面を壁面とするように根石としている。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



2号古墳石室土層 (G・G'・H・H'・I・I')

- | | | |
|---|-------|-----------------------------------------|
| 1 | 灰褐色土 | ローム粒・褐色土・小礫を多量に含む。 |
| 2 | 灰褐色土 | ロームブロック・ローム粒を多量に含む。 |
| 3 | 黒色土 | ロームブロック・明灰褐色ロームブロックを含む。 |
| 4 | 明灰褐色土 | 黒色土を含む。 |
| 5 | 黒色土 | ロームブロックとのブロック混在。堅くつごこんだ土。
ロームが下部で板状。 |
| 6 | 黒色土 | 細かい明褐色土を含む。 |
| 7 | 明褐色土 | ローム粒・黒色土・叩いた土。 |
| 8 | 黒色土 | 明褐色土ブロックを含む。 |
| 9 | 茶褐色土 | 明褐色土ブロックを含む。 |

S = 1/60

第575図 2号古墳石室断面図

出土遺物には、石室開口部前周辺から出土したものがほとんどで、横瓶が2個体、平瓶が2個体、長頸壺が2個体、甕が2個体と、蓋および甕の破片がある。これら2個体ずつの器種の須恵器は、それぞれ大小で構成され、しかも完形品に近い。また、それぞれの器種間には、時間幅が想定されることから、同時存在したかどうかについては疑問な点がある。

2号古墳 (第570～599図 表88)

中央台地の中央部 (E区) で、3号古墳の北東側にあり、7～12-52～58グリッドに位置する。中世城郭の築造に伴う削平、さらには近年までの耕作等により、周囲より一段高く存在し(標高177.30m)、現状での墳丘と思われる周囲には石垣が積まれていた。この石垣は、畑の地境と段差に伴うもので、近世以降に積まれたものと思われる。調査の結果、本古墳の大半は中世以降の削平をうけ、古墳上部および石室南側は失わ

れ、検出されたものは、ローム層中に掘り込まれた周堀と石室の床面の一部である。

周堀の平面形は、若干歪んではいるが円形を呈しており、北東側については削平により検出できなかったが、環状に巡っていたものと考えられる。検出された周堀は、上幅2～3.3m、下幅1～1.5m、深さ0.5m前後で、断面形は凹レンズ状を呈している。外縁部上端での規模は、南北方向で25m前後、内縁部上端では東西方向21m、南北方向21mを測る。覆土中からは、葦石の崩落によると思われる河原石が若干出土し、さらには埴輪片も出土している。石室の南側部分は、削平により消失しているため不明。

埴丘は、石室の周辺に僅かに残っており、黒色土と灰褐色土とが、互層となるように盛り土されていることが確認されている。また、周堀の上部層では、B経石が多量に含まれることも確認されている。

石室は、埴丘のほぼ中央に位置しており、玄室と羨道からなる横穴式石室と考えられるが、羨道部・開口部は削平され消失している。天井石・奥壁および上部の石は残存せず、玄室および羨道部の床面にも擾乱が及んでいた。玄室床面は、ローム面を掘り方底面とし、玉石を敷き詰めたと考えられる。副葬品の出土はない。残存状態は、極めて悪い。

石室の構築については、先述した城古墳と同様に、ローム面まで掘り込んだ長方形の掘り方をもち、裏込めにはやや大形の片岩、牛伏砂岩を主体に構成されている。

出土遺物は、周堀から出土した埴輪片と鉄鏃が1点である。埴輪片については、本古墳の周囲の土坑等からも出土しているが、おそらく本古墳に伴うものであると思われる。その器種には、円筒埴輪および朝顔形埴輪、形象埴輪には家・大刀・盾・柄・鬚・人物・馬がみられる。

3号古墳（第600図）

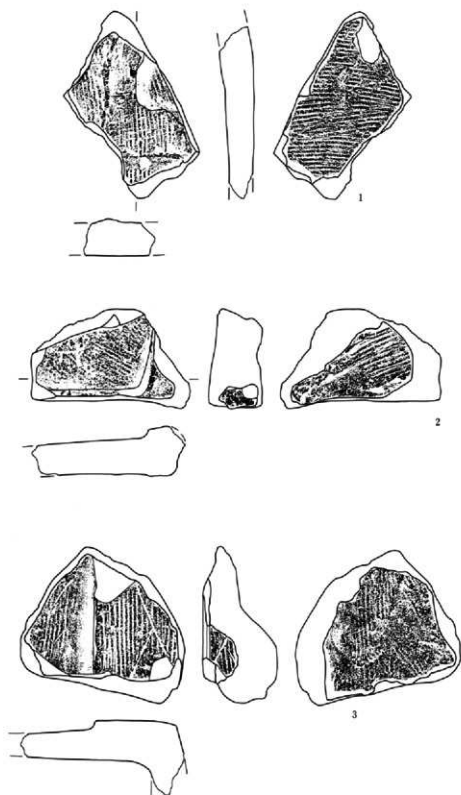
中央台地の中央部（E区）で、2号古墳の南西側にあり、5～7—57～61グリッドに位置する。近年までの耕作等により削平され、埴丘と思われる高まりは存在しない。古墳の主体は南側の調査区外にあり、本調査では北側の1/3を検出することができた。検出されたのは、ローム層中に掘り込まれた周堀の一部（北側）である。

周堀の平面形は、環状に巡っているものと考えられる。上幅2～4.5m、下幅0.8～2m、深さ0.5m前後で、断面形は凹レンズ状ないしは逆台形状を呈している。周堀の一部は、6号方形周溝墓および9号方形周溝墓と重複している。調査区内における外縁部上端の規模は、東西方向で21m、内縁部上端では東西方向13.3mを測る。覆土中からは、葦石の崩落によると思われる河原石が若干出土している。

埴丘は、中央部の一部に僅かに残っており、黒色土（弥生土器包含層）の上にローム土が盛り土されている。また、周堀の上部層では、B経石が多量に含まれることも確認されている。

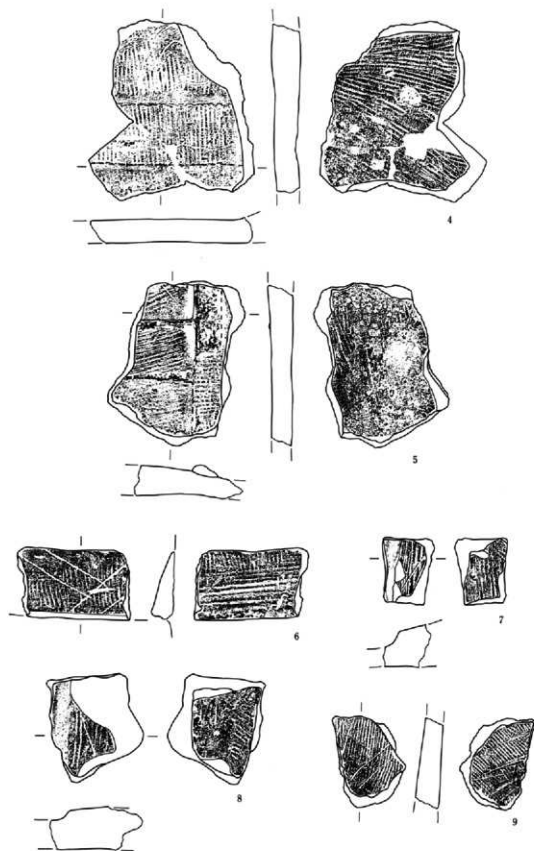
石室等は、検出されなかった。

先述したように、本調査の状況から本古墳が「城古墳」である可能性が高く、それ故に石室が検出されないものと思われる。



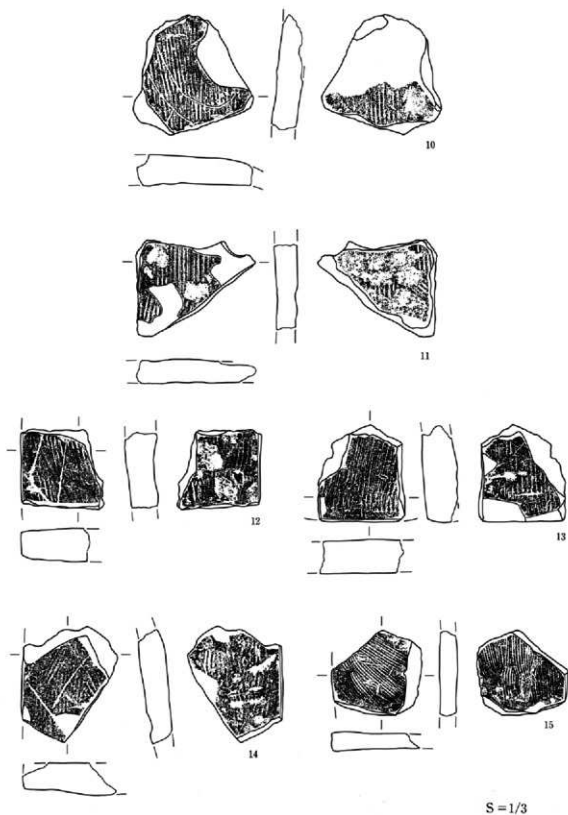
S=1/3

第576図 出土埴輪(1)家形

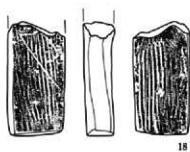
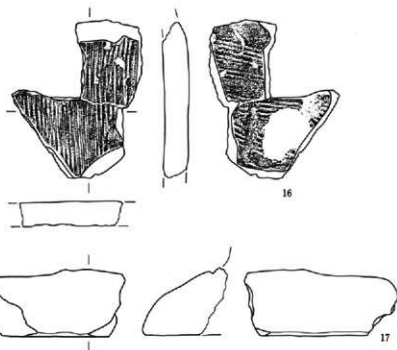


第577図 出土埴輪（2）家形

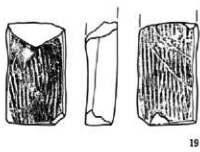
S=1/3



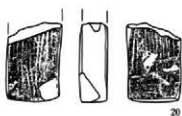
第578図 出土埴輪(3)家形



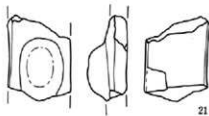
18



19



20



21



22

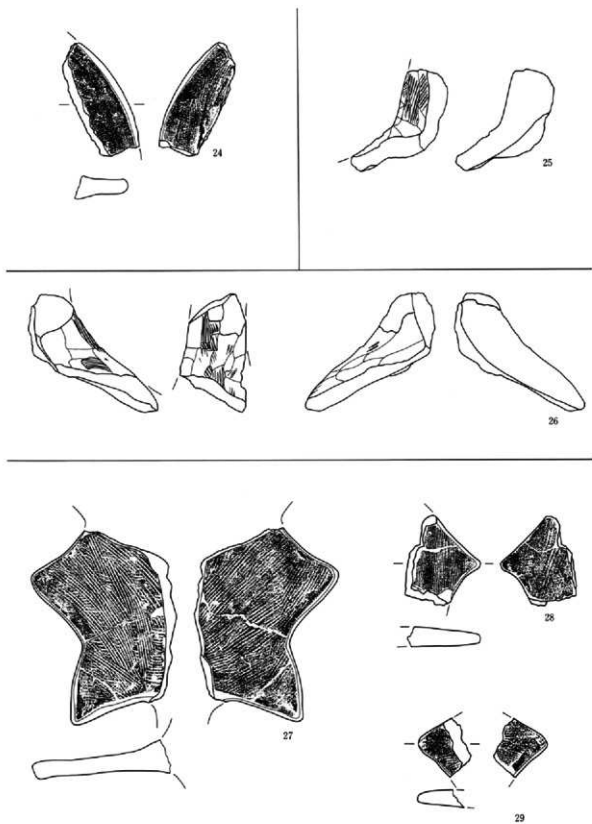


23

第579図 出土埴輪(4) 家形・大刀形

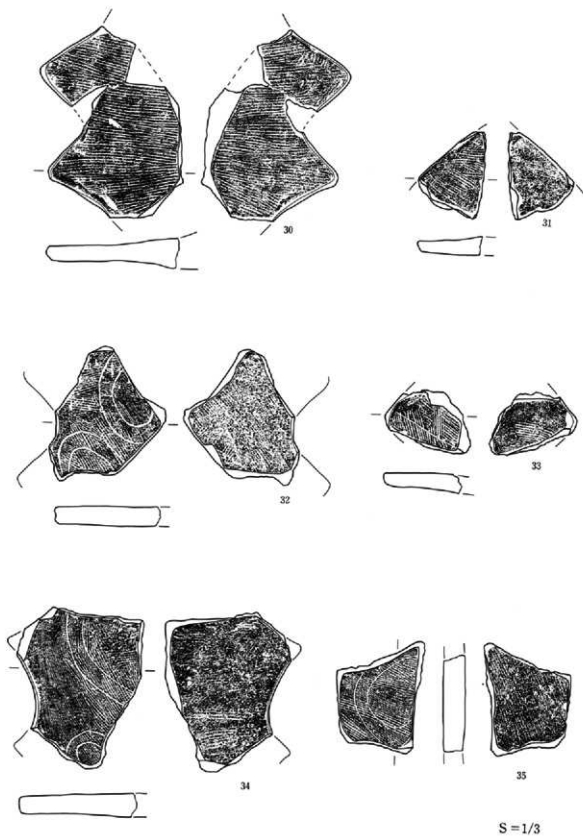
S = 1/3

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

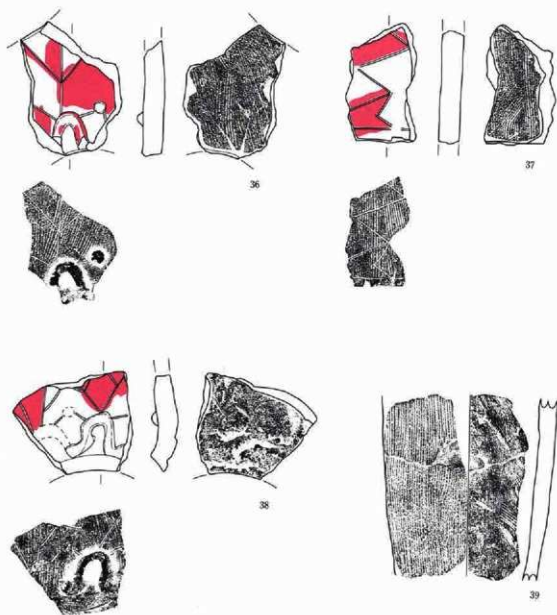


第580図 出土埴輪(5) 盾・柄・鬘形

S=1/3

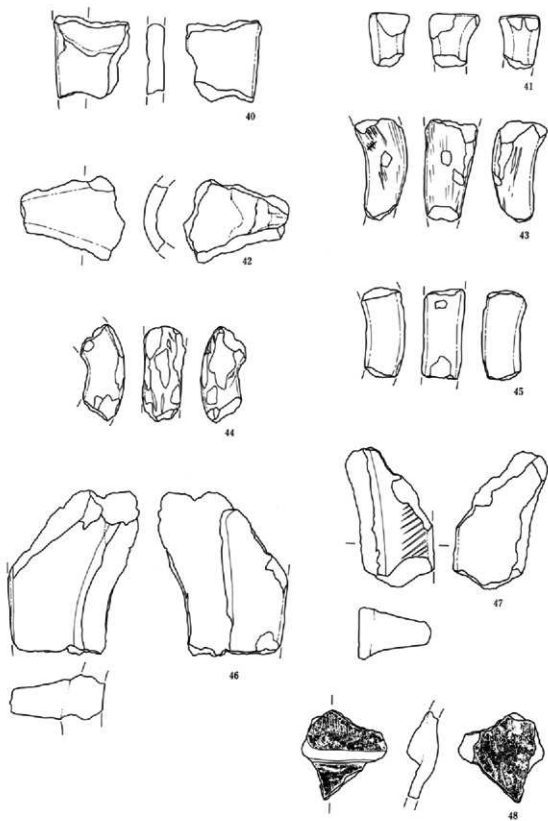


第581図 出土埴輪(6) 鬮形



第582図 出土埴輪(7) 鬚形

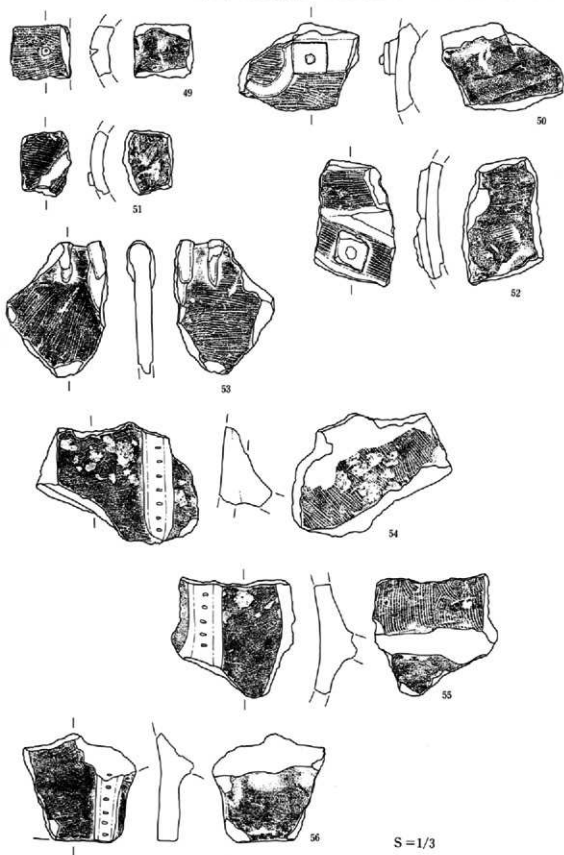
S=1/3



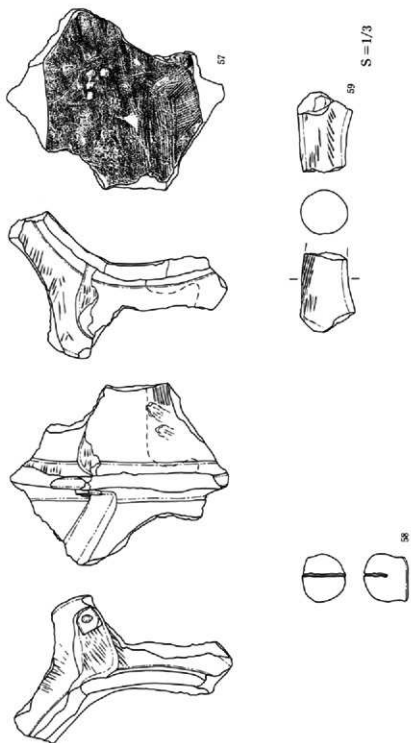
S=1/3

第583図 出土埴輪（8）人物

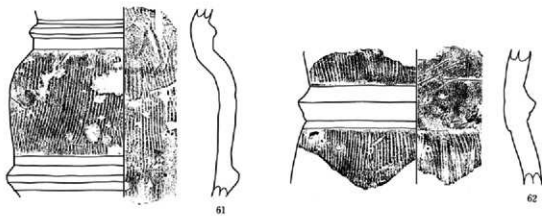
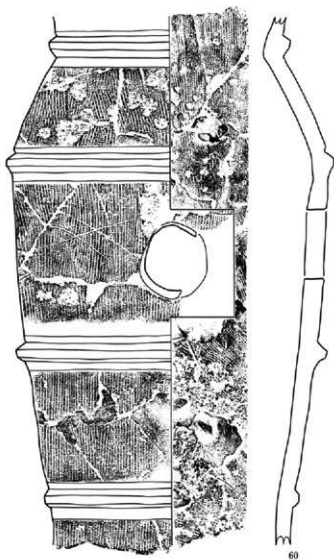
第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第584図 出土埴輪(9)馬形

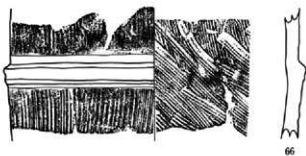
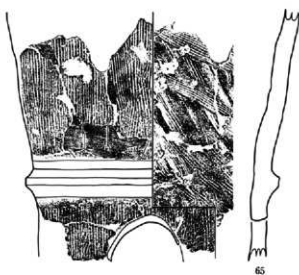
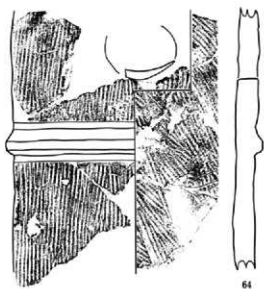
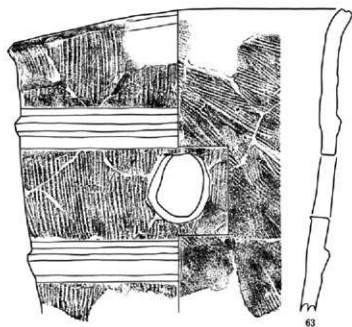


第585図 出土埴輪(10)馬形



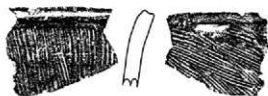
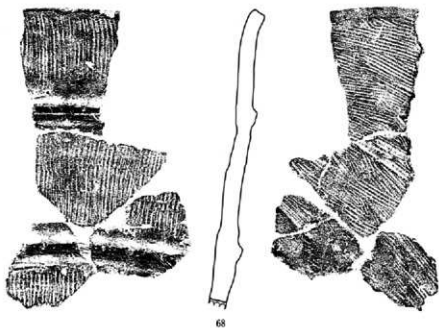
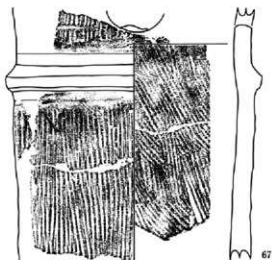
第586図 出土埴輪 (11) 朝顔

S = 1/3



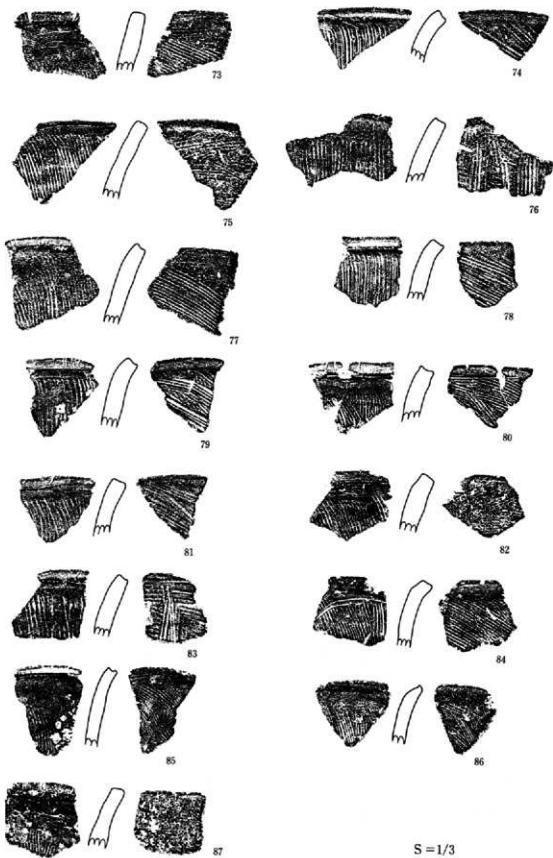
S=1/3

第587図 出土埴輪(12)円筒

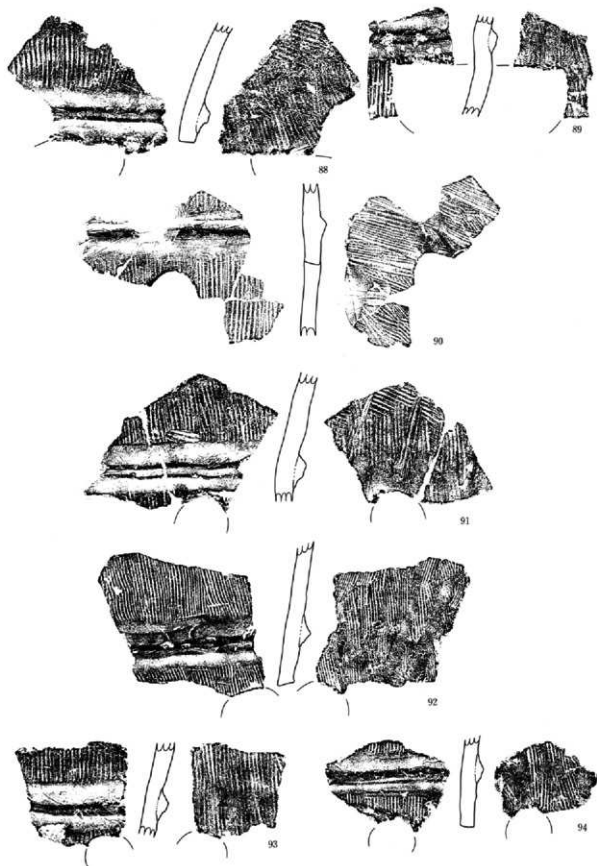


第588図 出土埴輪 (13) 円筒

S = 1/3

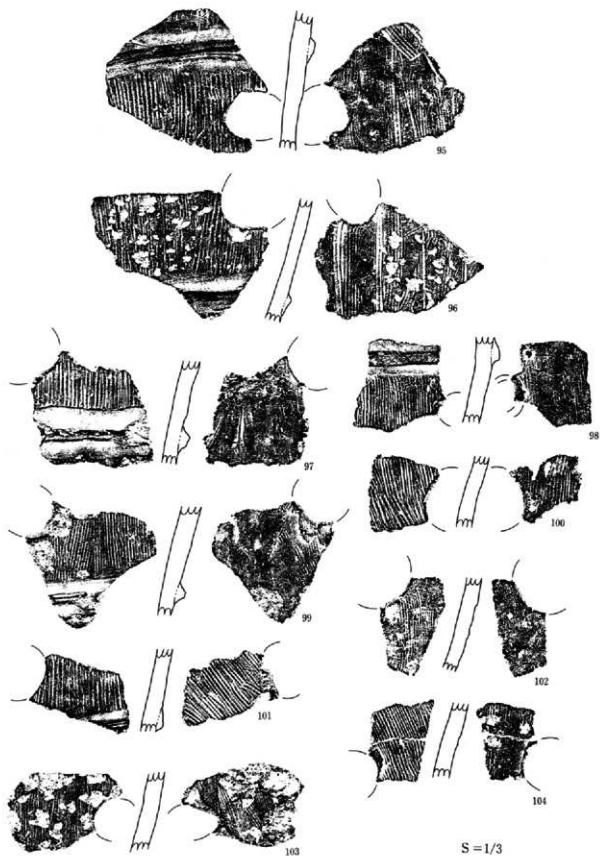


第589図 出土埴輪 (14) 円筒

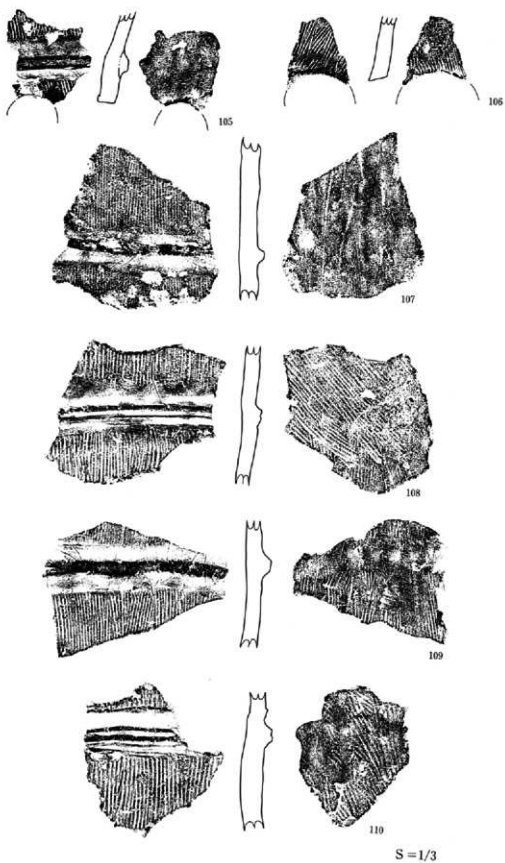


第590図 出土埴輪 (15) 円筒

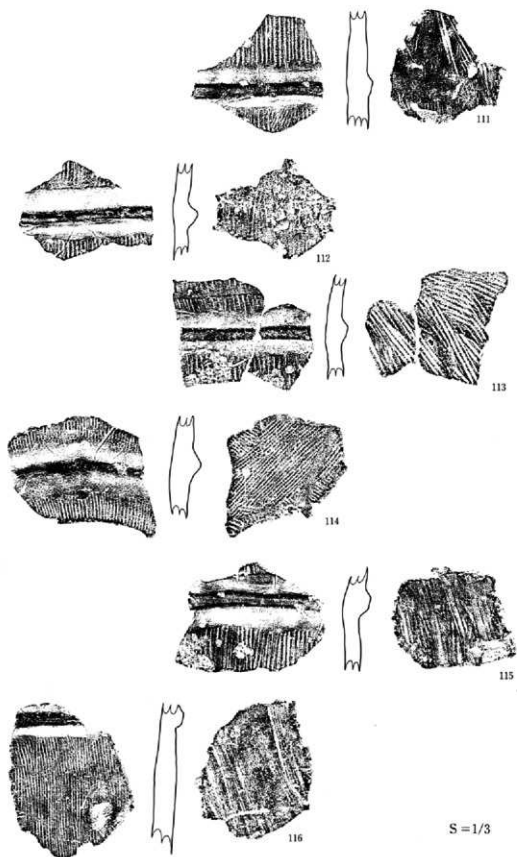
S=1/3



第591図 出土埴輪(16)円筒

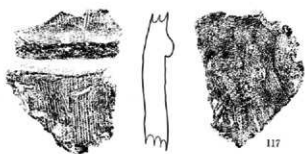


第592図 出土埴輪 (17) 円筒

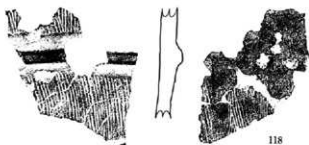


第593図 出土埴輪 (18) 円筒

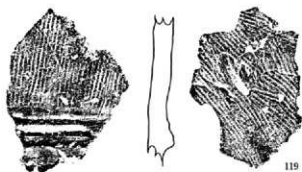
第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



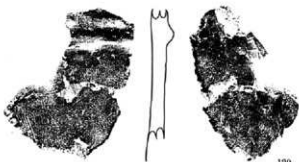
117



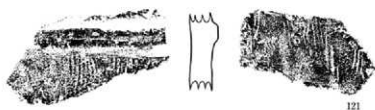
118



119



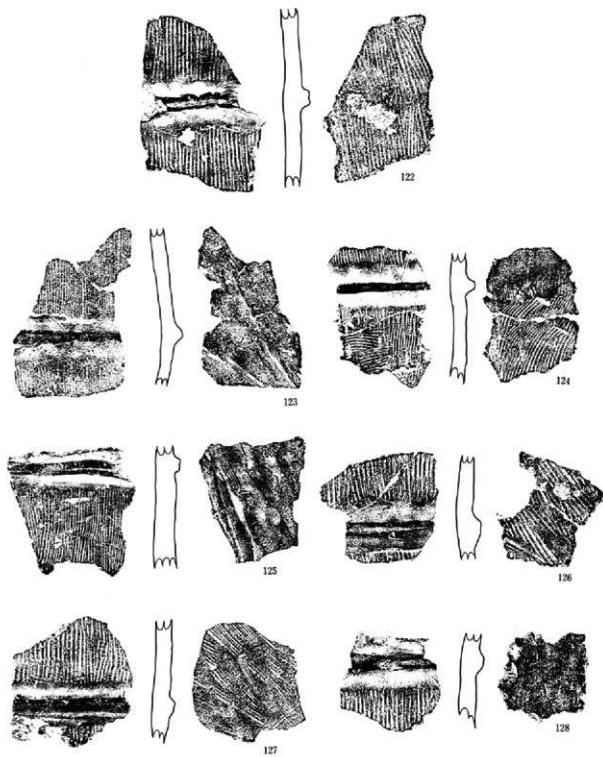
120



121

S = 1/3

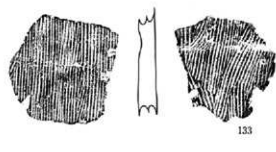
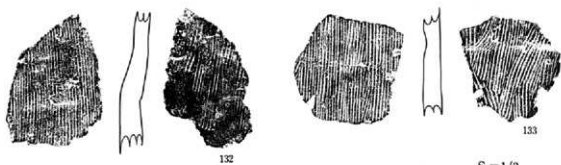
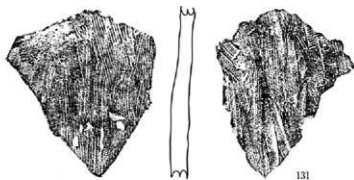
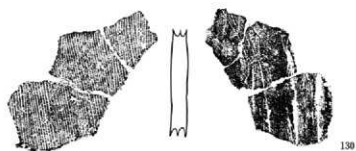
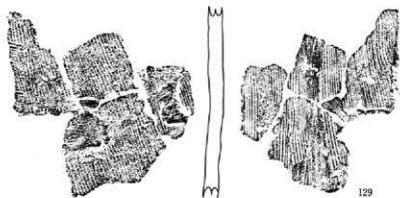
第594図 出土埴輪(19)円筒



S = 1/3

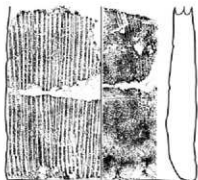
第595図 出土埴輪 (20) 円筒

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の選構と遺物

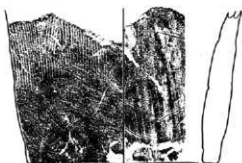


S = 1/3

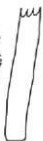
第596図 出土埴輪 (21) 円筒



134



135



136



137



138



139

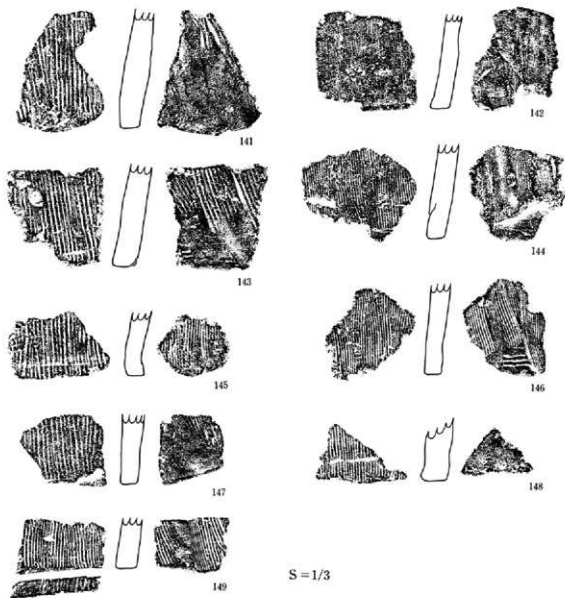


140

S=1/3

第597図 出土埴輪 (22) 円筒

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物



第598図 出土埴輪 (23) 円筒

第3章 検出された遺構と遺物

表 88 遺構外出土埴輪観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第576図 1	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。
第576図 2	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。
第576図 3	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。
第577図 4	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの曲線的な沈線を施す。
第577図 5	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。
第577図 6	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの直線的な沈線を施す。壁部の横位縁帯の剥落したものの。
第577図 7	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。
第577図 8	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。
第577図 9	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。
第578図 10	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの曲線的な沈線を施す。
第578図 11	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。
第578図 12	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。窓等の透かし部。
第578図 13	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。窓等の透かし部。
第578図 14	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。表面に篋描きの沈線あり。窓等の透かし部。
第578図 15	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。窓等の透かし部。
第579図 16	形象 家	壁 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面ともに刷毛目。
第579図 17	形象 家	基部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	かなり厚身がある。表面は撫で。
第579図 18	形象 太刀	勾金部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	両面に刷毛目。
第579図 19	形象 太刀	勾金部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	両面に刷毛目。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第579図 20	形象 太刀	勾金部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面に刷毛目。
第579図 21	形象 太刀	勾金部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	三輪玉が1個残る。
第579図 22	形象 太刀	勾金部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面に刷毛目。
第579図 23	形象 太刀	勾金部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面に刷毛目。
第580図 24	形象 破片	頂部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	表面は撫で。裏面は刷毛目。
第580図 25	形象 破片	頂部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	全体に撫で。一部に刷毛目が残る。
第580図 26	形象 破片	頂部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	全体に撫で。一部に刷毛目が残る。
第580図 27	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。
第580図 28	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。
第580図 29	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。
第581図 30	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。
第581図 31	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。
第581図 32	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる曲線的な沈線を描す。
第581図 33	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる直線的な沈線を描す。
第581図 34	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる曲線的な沈線を描す。
第581図 35	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる曲線的な沈線を描す。
第582図 36	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる沈線および粘土紐の隆帯を持ち、さらに赤色塗彩を施す。
第582図 37	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる沈線を描し、さらに赤色塗彩を施す。
第582図 38	形象 破片	側面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 2. 褐橙 3. 酸化焰 良	両面ともに刷毛目。表面に隈描きによる沈線および粘土紐の隆帯を持ち、さらに赤色塗彩を施す。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第582回 39	形 基 象 部		2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	表面には縦位の刷毛目。内面にも刷毛目が一部残る。
第583回 40	形 象 人 物	面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙 良	板状の鬚。
第583回 41	形 象 人 物	面部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	髷の下端部がやや膨らむ。
第583回 42	形 象 人 物	肩	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	裏面に整形痕が残る。
第583回 43	形 象 人 物	腕	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	
第583回 44	形 象 人 物	腕	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	
第583回 45	形 象 人 物	腕	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	
第583回 46	形 象 人 物	臺台部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	
第583回 47	形 象 人 物	臺台部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	台の上面に刷毛目が残る。
第583回 48	形 象 人 物	基部	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	内外面に刷毛目。
第584回 49	形 象 馬	頭部 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	頭部の破片で先端部。周囲に刷毛目。
第584回 50	形 象 馬	頭部 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	頭部の破片で、隆帯によりベルト等を意匠する。表面に刷毛目。内面には削り痕が残る。
第584回 51	形 象 馬	頭部 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	頭部の破片で、隆帯によりベルト等を意匠する。表面に刷毛目。内面には削り痕が残る。
第584回 52	形 象 馬	頭部 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	頭部の破片で、隆帯によりベルト等を意匠する。隆帯上および内面に刷毛目。
第584回 53	形 象 馬	頭部 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	立て髪の破片であり、表裏面に刷毛目を施す。
第584回 54	形 象 馬	胴体 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	鞍部の破片で、表面及び内面に刷毛目を施す。また表面には鞍部の一部を隆帯で意匠している。
第584回 55	形 象 馬	胴体 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	鞍部の破片で、表面及び内面に刷毛目を施す。また表面には鞍部の一部を隆帯で意匠している。
第584回 56	形 象 馬	胴体 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	鞍部の破片で、表面及び内面に刷毛目を施す。また表面には鞍部の一部を隆帯で意匠している。
第585回 57	形 象 馬	胴体 破片	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	鞍部の破片で、表面及び内面に刷毛目を施す。また表面には鞍部の一部を隆帯で意匠している。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第585図 58	形象 馬	破片 鈴	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	
第585図 59	形象 馬	尾	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	部分的に刷毛目が残る。
第586図 60	朝顔	胴部	2号古 墳周辺	—・— (41.7)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第586図 61	朝顔	胴部	2号古 墳周辺	—・— (14.6)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第586図 62	朝顔	胴部	2号古 墳周辺	—・— (10.4)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第587図 63	円筒	口縁	2号古 墳周辺	26.8・— (23.9)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第587図 64	円筒	胴部	2号古 墳周辺	—・— (15.5)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第587図 65	円筒	胴部	2号古 墳周辺	—・— (19.1)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第587図 66	円筒	胴部	2号古 墳周辺	—・— (10.3)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第588図 67	円筒	胴部	2号古 墳周辺	—・— (19.8)	1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第588図 68	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第588図 69	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第588図 70	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位および縦位の刷毛目。
第588図 71	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第588図 72	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は横位および斜位の刷毛目。
第589図 73	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589図 74	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589図 75	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は横位の刷毛目。
第589図 76	円筒	口縁	2号古 墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・器形の特徴
第589回 77	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 78	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 79	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 80	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 81	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 82	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は横位の刷毛目。
第589回 83	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は横位および縦位の刷毛目。
第589回 84	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 85	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 86	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第589回 87	円筒	口縁	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は横位の刷毛目。
第590回 88	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。半円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第590回 89	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。半円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第590回 90	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第590回 91	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位および縦位の刷毛目。
第590回 92	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第590回 93	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第590回 94	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第591回 95	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位および縦位の刷毛目。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

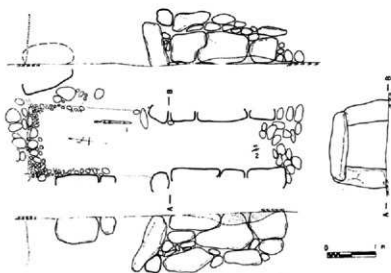
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第591図 96	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第591図 97	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は指撫で。
第591図 98	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第591図 99	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は刷毛目および指撫で。
第591図 100	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。
第591図 101	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第591図 102	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は指撫で。
第591図 103	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は縦位の刷毛目。割落多い。
第591図 104	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第592図 105	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は指撫で。
第592図 106	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。円形の透孔あり。内面は斜位の刷毛目。
第592図 107	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は刷毛目および指撫で。
第592図 108	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位および斜位の刷毛目。
第592図 109	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第592図 110	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位および斜位の刷毛目。
第593図 111	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第593図 112	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第593図 113	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第593図 114	円筒	胴部	2号古墳周辺		1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。

第3章 検出された遺構と遺物

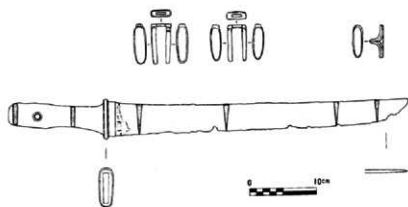
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴	
第593図 115	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第593図 116	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第594図 117	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は刷毛目および指撫で。
第594図 118	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目を残す。
第594図 119	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第594図 120	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目を残す。内面は刷毛目および指撫で。
第594図 121	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第595図 122	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第595図 123	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第595図 124	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位および横位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第595図 125	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目および指撫で。
第595図 126	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第595図 127	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第595図 128	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は撫で。
第596図 129	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第596図 130	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は刷毛目および縦位の撫で。
第596図 131	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位および斜位の刷毛目。
第596図 132	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。
第596図 133	円筒	胴部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は斜位の刷毛目。

第4節 弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物

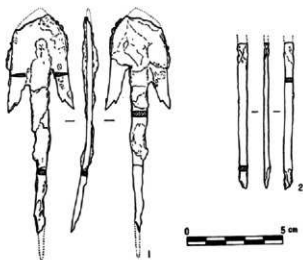
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第597図 134	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第597図 135	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。底部近くは無で。内面は縦位の刷毛目。
第597図 136	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第597図 137	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。底部近くは縦位の無で。
第597図 138	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。底部近くは縦位の無で。
第597図 139	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。底部近くは縦位の無で。
第597図 140	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。底部近くは縦位の無で。
第598図 141	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。底部近くは縦位の無で。
第598図 142	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は無で。
第598図 143	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第598図 144	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目および無で。
第598図 145	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。
第598図 146	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位および横位の刷毛目。
第598図 147	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。底部近くは縦位の無で。
第598図 148	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は無で。
第598図 149	円筒	基部	2号古墳周辺		1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外面は縦位の刷毛目。内面は縦位の刷毛目。



城古墳石室の残存状態

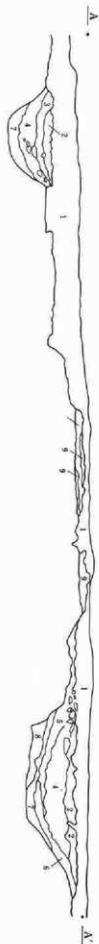
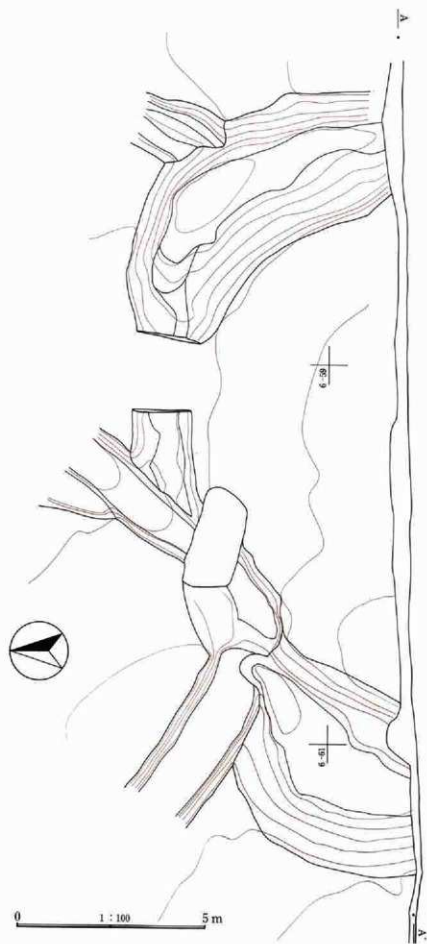


城古墳出土の立腰柄共鉄造大刀



城古墳奥道出土の鉄鏢

第599図 城古墳の石室と出土遺物



3号古墳墳丘土層

- 1 暗褐色土 A 軽石を含む。
- 2 黒褐色土 B 軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 混入物少量。茶褐色系の粘質土。
- 4 暗褐色土 ローム粒・YP 軽石が微量に散在。
- 5 暗褐色土 混入物少量。
- 7 暗褐色土 黄色ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
- 8 明褐色土 黄色ローム・BP 軽石が多量に混在。
- 9 黄色土 ローム土。
- 10 暗褐色土 ロームブロックが散在。

第600図 3号古墳平面図

第5節 平安時代の遺構と遺物

本遺跡における平安時代の遺構としては、中世城郭を形成する東側台地および西側台地に点在するが、その多くは西側台地の中央部の緩い西斜面で比較的平坦な場所に検出される傾向にある。また西側台地においては、西斜面ないしは比較的傾斜の緩くなった場所で検出されている。検出された住居跡は、合計34軒を数えるが残存状態の悪いものが多く、中世における城郭造成のために多くの住居跡が破壊されたものと思われ、当前期の遺構の検出数が実数とは考え難い。土坑等については、遺物等の出土状況等から、明らかに前期に属するものだけを取り上げてある。

1. 住居跡

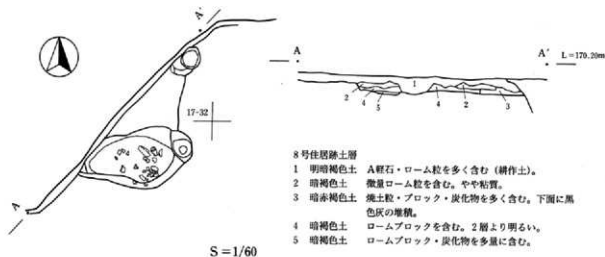
検出された住居跡は、先述したように東側台地のB・C・E区に26軒、西側台地のH・I・J区に8軒である。これらの住居跡は、重複する例は余り多くはないものの、中世城郭等の造成に伴う破壊がひどい状況であった。

8号住居跡 (第601・602図 表89)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央部の平坦面にあり、16・17-32グリッドに位置し、9号住居跡の西隣である。住居跡は調査区の北側で、調査区外へその主体を予測することができ、今調査ではその6分の1ほどが対象となった。

平面形が方形を呈するものと考えられ、この内の南東隅を調査することができたが、その規模等については不明である。残存状態は非常に悪く、竈の一部と貯蔵穴が確認されただけである。床面は硬く平坦ではあるが遺構確認面とのレベル差はあまりない。

竈は東壁中央のやや南寄りにあるものと思われるが、その中央部を中世の柱穴によって壊されており、左側の袖石と若干の焼土が残っているだけで、残存状態はきわめて悪い。

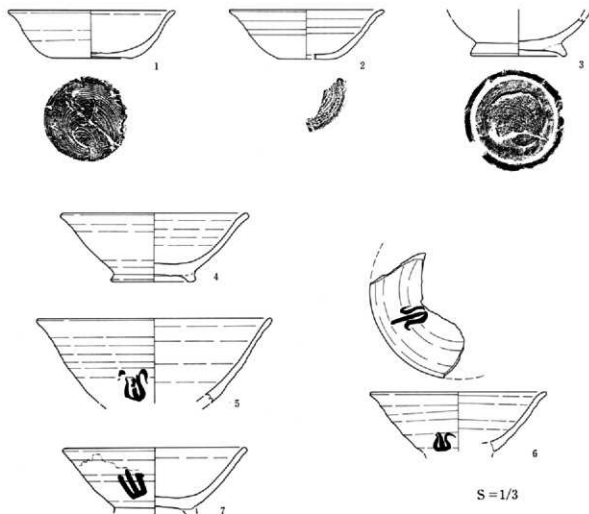


第601図 8号住居跡平面図

第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴は竈の右側にあり、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ10cmを測る楕円形を呈している。なお東側の一部は、中世の柱穴によって壊されている。

遺物は、その多くが貯蔵穴内から出土したもので、坏・埴類が主体をなす。この中には墨書土器が3点含まれている。墨書は「万」と思われる。



第602図 8号住居跡出土遺物

表89 8号住居跡出土土器観察表

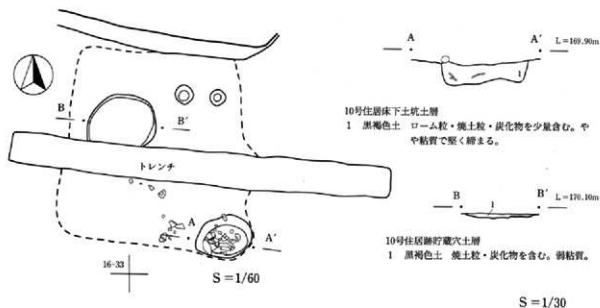
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第602図 1	須恵器坏	ほぼ完形	貯蔵穴	13.0・6.4 3.8	1.細砂粒 3.還元焰	2.黄橙 (酸化気味)	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第602図 2	須恵器坏	1/3	貯蔵穴	12.3・4.4 3.8	1.砂粒 3.還元焰	2.黄灰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第602図 3	須恵器 埴	底部	貯蔵穴	—・7.6 (2.8)	1.砂粒 3.還元焰	2.淡灰白 良	ロクロ整形。底面に糸切り痕あり。付け高台。

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第602図 4	須志器 埴	1/3	貯蔵穴	14.4・6.2 5.4	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。付け高台。
第602図 5	須志器 埴	1/3	貯蔵穴	18.7・— 6.7	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄橙 (酸化気味)	ロクロ整形。墨書あり「万」。
第602図 6	須志器 埴	1/3	貯蔵穴	14.0・— 4.7	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 やや軟質	ロクロ整形。墨書あり「万」。
第602図 7	須志器 埴	1/3	貯蔵穴	14.2・— 4.9	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。墨書あり「万」。付け高台割落。

10号住居跡 (第603・604図 表90)

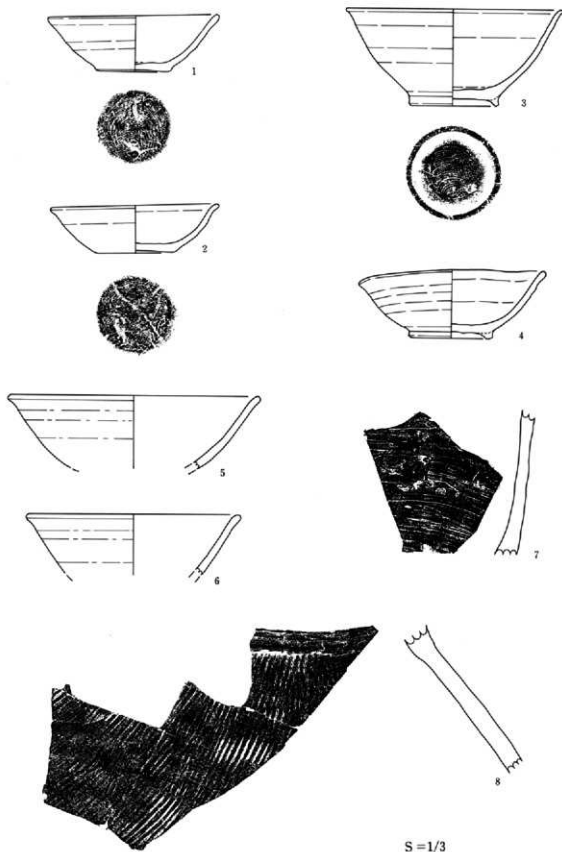
本住居跡は、東側台地のほぼ中央部の平坦面にあり、16-32・33グリッドに位置し、8号住居跡の南西2m、11号住居跡の北側にある。住居跡は調査区の北側にあるため、その一部が調査区外へ伸びるものの、住居本体はほぼ調査することができた。ただし、住居跡の中央を現代の耕作溝により破壊をうけていたため、竈の調査はできなかった。

平面形は東西2.8m、南北3.0mを測るほぼ正方形を呈しているが、南東隅がやや出張っている。主軸方向は、東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため、覆土は薄く若干の壁が確認されただけである。床面は部分的に削平をうけてはいるものの、硬くしまった平坦面を確認することができた。また住居内の東側には、床下土坑が検出され、規模は径1.0m程の円形を呈するものと思われ、深さは6cmと浅い。



第603図 10号住居跡平面図

第3章 検出された遺構と遺物



第604図 10号住居跡出土遺物

表90 10号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調 2. 灰 やや軟質	成・整形の特徴
第604図 1	須恵器 環	ほぼ 完形	貯蔵穴	13.4・5.5 4.4	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第604図 2	須恵器 環	完形	貯蔵穴	13.2・5.8 3.7	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第604図 3	須恵器 埴	2/3	床直	17.2・6.7 7.6	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 やや軟質	ロクロ整形。底面に糸切り痕あり。付け高台。
第604図 4	須恵器 埴	ほぼ 完形	貯蔵穴	14.6・5.9 5.4	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。付け高台。
第604図 5	須恵器 埴	1/3	床直	20.0・ 5.7	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 淡灰 良	ロクロ整形。
第604図 6	須恵器 埴	1/3	床直	17.0・ 4.7	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 淡灰 良	ロクロ整形。
第604図 7	須恵器 羽蓋	胴部	床直		1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	回転横撫で。
第604図 8	須恵器 大甕	胴部	床直		1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	表面に平行叩き目。

なお、住居内にみられるビット2基は、その覆土に浅間B軽石が含まれていることから、中世の柱穴である。

竈は、その本体を耕作溝によって壊されていたため詳細は不明であるが、東壁のやや南寄りにあったものと考えられる。

貯蔵穴は、竈の右側で、住居の南東隅に若干出張るように位置し、長軸90cm、短軸70cm、深さ15cmを測る楕円形を呈する。

遺物は、貯蔵穴から出土したものが多く、環・埴類と羽蓋・大甕の胴部片である。中世の削平により、遺物の遺存状況はかなり悪い。

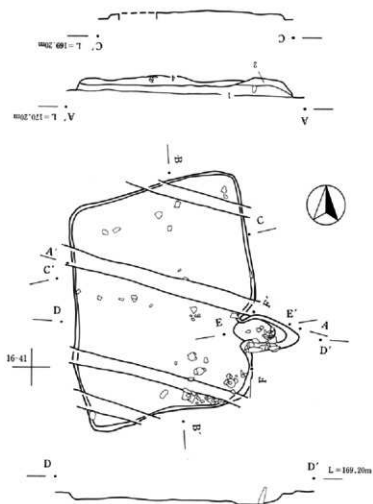
14号住居跡（第605～609 表91）

本住居跡は、東側台地の中央部から西縁辺よりの平坦面にあり、15・16-40グリッドに位置し、35・41号住居跡と重複している。重複する35・41号住居跡との新旧関係は、土層の堆積状況等から本住居跡が新しい。また住居は、現代の耕作溝により斜めに幾筋も破壊をうけている。このため残存状況は、あまり良好とは言えない。

平面形は東西2.8m、南北3.5mを測るやや歪んだ長方形を呈している。主軸方向は、東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため、覆土は薄く、壁高は10cm前後である。床面は全体にやや軟質ではあるが、部分的に竈前は硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方については、重複する住居があったため、明確にはつかめなかった。なお、貯蔵穴等の付属施設は検出されていない。

竈は、東壁中央の南寄りにあるが、耕作溝により一部を壊されている。幅60cm、奥行き80cmを測るが、残存状況は良くない。袖の先端部には、袖石を用いている。

貯蔵穴は、検出されなかった。



14号住居跡土層

- 1 暗褐色土 軽石粒・炭化物粒・焼土粒・ロームブロックを含む。
 - 2 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
 - 3 黄褐色土 ロームブロック（貼床）。
 - 4 暗褐色土 上面ロームブロック（貼床）。
- 褐色土 下面ローム小ブロックを含む。

S=1/60

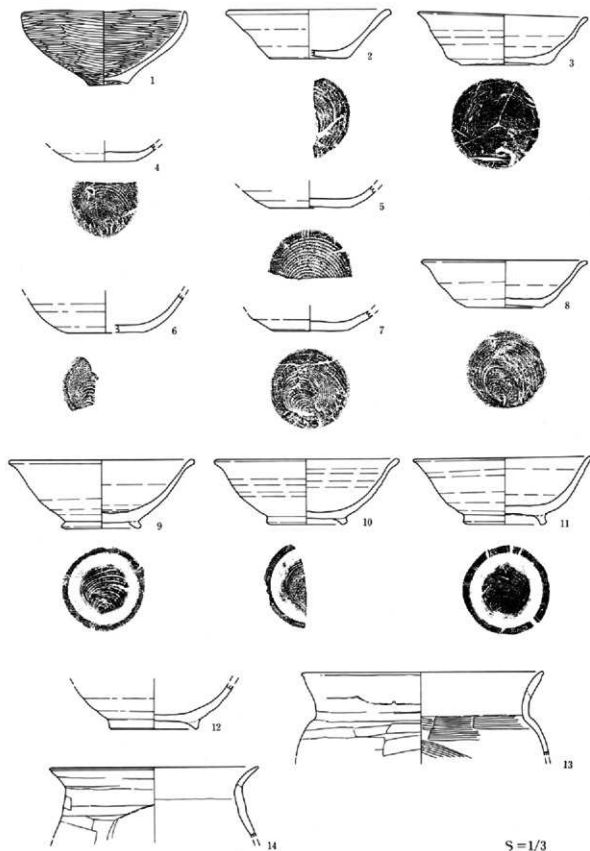


S=1/30

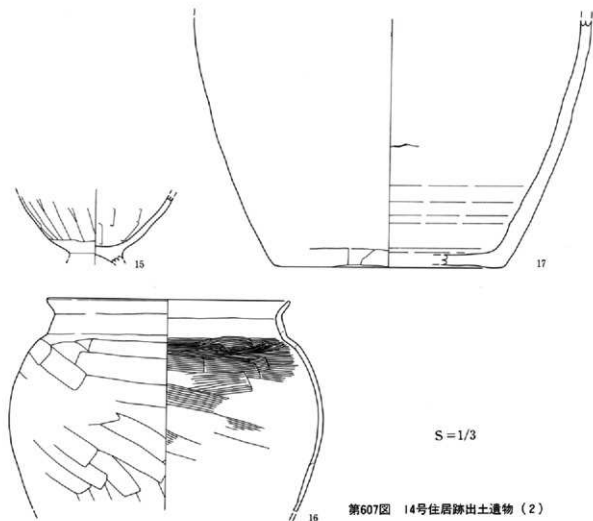
14号住居跡カマド土層

- 1 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を含む。硬質。
- 2 黒褐色土 ローム粒多く含む焼土ブロック（壁のくずれ）も含む。軟質。
- 3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む。軟質。
- 4 黒褐色土 粘性強い。

第605図 14号住居跡平面図



第606図 14号住居跡出土遺物(1)



第607図 14号住居跡出土遺物(2)

遺物は、床面および竈内から出土しているが、住居の南東隅周辺に比較的集中している。坏・埴輪および甕等が出土している。また出土遺物には、第608・609図に示した縄文時代のものも多い。

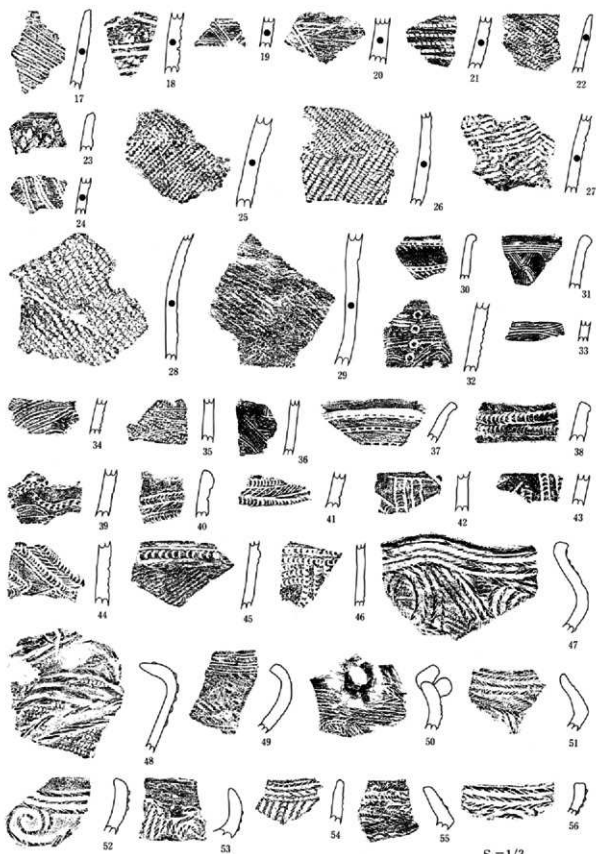
17から29には繊維を含む。17～20は口縁部に沈線で文様を描くもので、鋸歯状に施すものもある。21は口縁部に列点状刺突を施すもの。22・23は口縁部以下に縄文を施すもので、22は附加条の縄が施される。25・26は胴部に、LRとRLによる羽状縄文が施されるもので、25は附加条、26は0段多条の縄が施されている。30・37は口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせるもの。31・32は口縁部に、櫛状工具による沈線で波状文を描くもので、32は円形刺突をもつ。33～36は口縁部に、平行沈線で弧状線を肋骨文状に描くもの。38～46は口縁部及び胴部に、爪形刺突をもつ平行沈線で、曲線的な文様を描くもの。47～56は口縁部に、刻みをもつ細い隆帯で文様帯の区画を行うとともに、曲線的な文様を描く。57～68は胴部から底部にかけて、刻みをもつ細い隆帯を数条巡らせるものや、曲線的な文様を描くものである。69～71は胴部に、数条の平行沈線を幾段も巡らせるもの。73・74は口縁部や胴部に、集合沈線で横位ないし矢羽状等の文様を描くもの。75は口頸部に、横位の沈線上に縦位の隆帯を貼付したもの。76～80は口縁部に沈線等を施した後、蛇行する細い隆帯やボタン状貼付文を施したもの。81は胴部につく把手部で、押し引き状の細い沈線を施すもの。82～94は口縁部ないし胴部に縄文を施すもので、91は結束羽状縄文が施されている。これらの縄文土器は、本住居の床下から多く出土している。

第5節 平安時代の遺構と遺物

表91 14号住居跡出土土器観察表

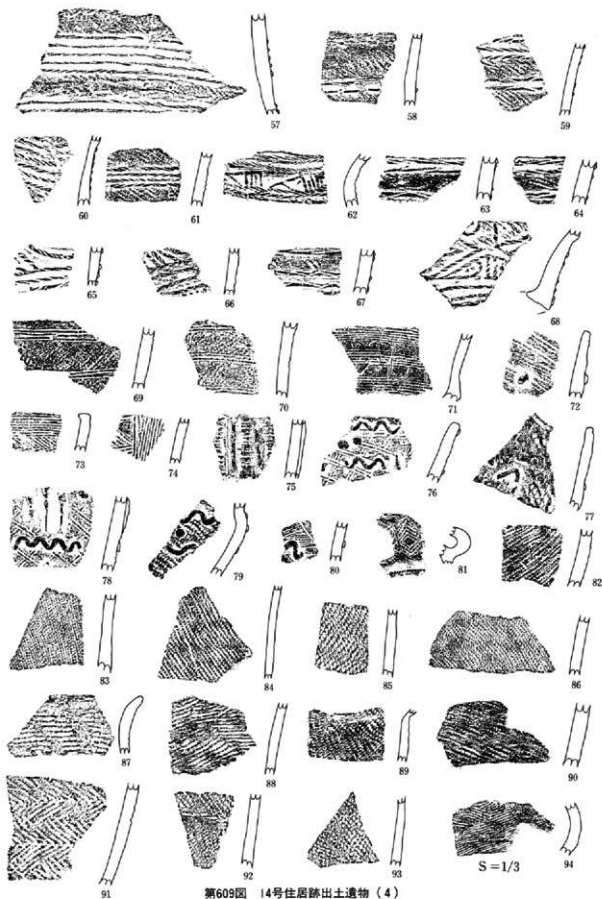
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第606図 1	浅鉢	完形	床下	12.9・3.1 5.8	1. 砂粒 2. 黄橙 3. 酸化焰 良	内外面ともに甍割き。
第606図 2	須恵器 坏	1/3		13.3・6.1 3.8	1. 砂粒 2. 淡灰白 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 3	須恵器 坏	完形	貯蔵穴	13.3・6.6 4.0	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 4	須恵器 坏	底部		—・5.0 (1.3)	1. 砂粒 2. 暗灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 5	須恵器 坏	底部	竈内	—・6.4 (6.4)	1. 細砂粒 2. 暗灰白 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 6	須恵器 坏	底部		—・6.0 (3.0)	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 7	須恵器 坏	底部		—・6.0 (1.6)	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 8	須恵器 坏	完形	床直	12.8・6.0 3.7	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第606図 9	須恵器 塊	1/2	床直	14.9・5.9 5.4	1. 砂粒 2. 淡灰白 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底面に糸切り痕あり。付け高台。
第606図 10	須恵器 塊	1/4		14.4・5.6 5.2	1. 砂粒 2. 橙灰 3. 酸化焰 良	ロクロ整形。底面に糸切り痕あり。付け高台。
第606図 11	須恵器 塊	ほぼ 完形	床直	13.9・5.9 5.3	1. 砂粒 2. 橙灰 3. 酸化焰 良	ロクロ整形。底面に糸切り痕あり。付け高台。
第606図 12	須恵器 塊	底部		—・7.0 (3.5)	1. 砂粒 2. 淡灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第606図 13	甕	口縁	床直	19.2・— (6.5)	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で・横尻撫で。胴部横尻削り。内面は横撫で、横尻撫での糸痕が残る。
第606図 14	甕	口縁	竈内	16.6・— (5.5)	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で・横尻撫で。胴部横尻削り。内面は横撫で、横尻撫での糸痕が残る。
第607図 15	台付甕	胴下部		—・— (5.0)	1. 細砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	胴部に旋位の発削り。脚部は横撫で。内面は甍撫で。
第607図 16	甕	口縁 胴上手	竈内	19.4・— (16.5)	1. 細砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部横および斜位の発削り。内面は横撫で、横尻撫での糸痕が残る。
第607図 17	須恵器 甕	胴下半	床直	—・18.0 (19.5)	1. 砂粒 2. 灰 3. 酸化焰 良	胴部は撫で。底部近くは発削り。内面はやや丁寧な横撫で。一部に叩き目の痕跡あり。

第3章 検出された遺構と遺物

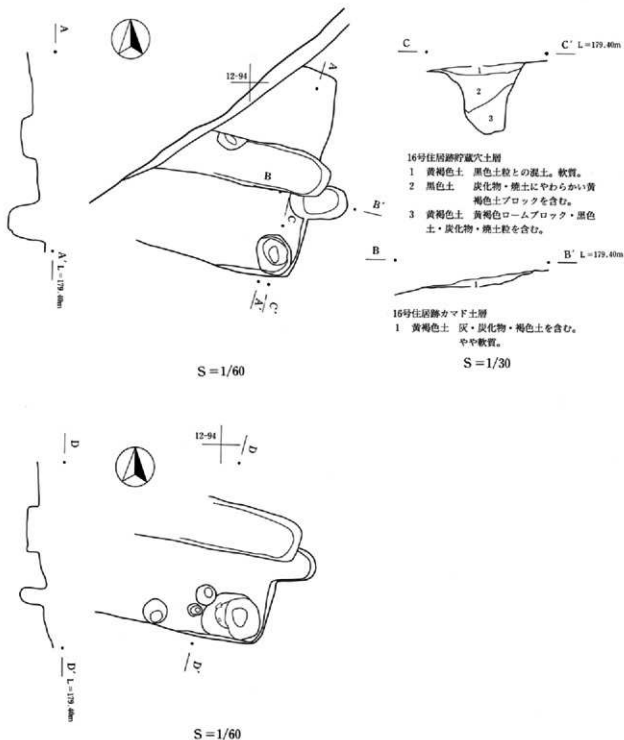


S=1/3

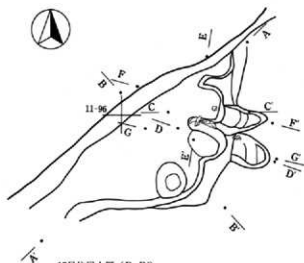
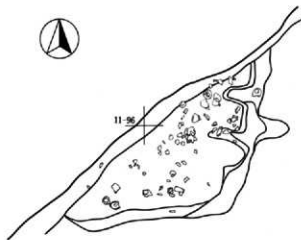
第608図 14号住居跡出土遺物(3)



第609図 14号住居跡出土遺物(4)



第610図 16号住居跡平面図



A. A' L=178.20m



B. B' L=178.90m



C. C' L=178.60m



17号住居跡カマド土層 (C-C')

- 1 明褐色土 やわらかくバヤついている。
- 2 暗褐色土 やや粘性。
- 3 明褐色土 焼土板を多く含むやわらかい、やや粘性。

E. E' L=178.16m



F.

F. L=178.76m



D. D' L=178.90m



17号住居跡カマド土層 (D-D')

- 1 黄褐色土 やわらかくバヤついている (二次堆積のローム)。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色のひたい土と黄褐色土の混合土。
- 3 灰黄褐色土 焼土を少量含む。粘性。
- 4 暗黄褐色土 焼土を少量含むやわらかい。
- 5 褐色土 焼土・炭化物の混成。粘性・粘まり強い。
- 6 灰黄褐色土 黄褐色土と焼土・炭化物を含む (新カマド輪部)。
- 7 褐色土 焼土・炭化物を含む。粘性がありやわらかい。

G. G' L=178.90m



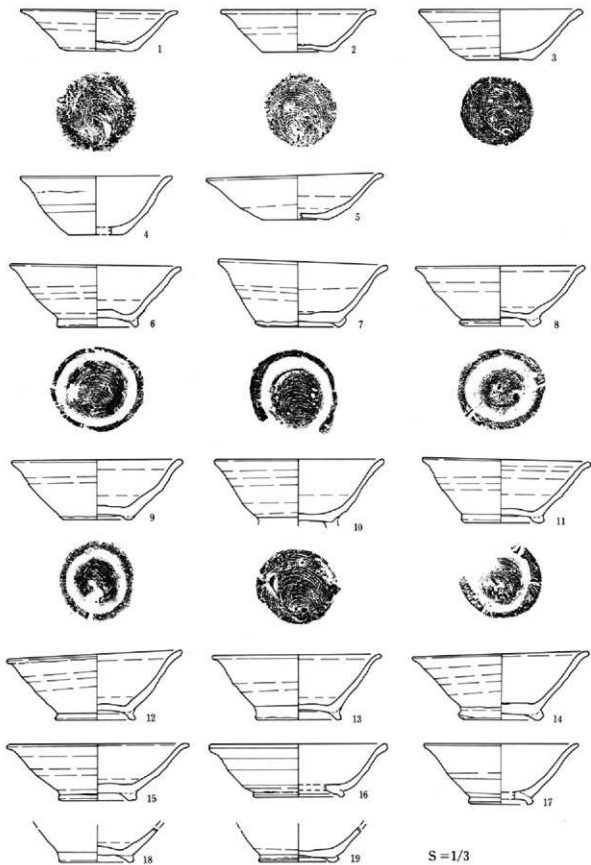
17号住居跡土層 (B-B')

- 1 黄褐色土 やわらかいローム層。
- 2 黄褐色土 ロームブロック・黒色土ブロックが混在。硬質。
- 3 暗褐色土 やや粘性でやわらかい。
- 4 褐色土 黄褐色ローム・黄灰色粘性土ブロックの混合土。焼土・炭化物を含む。

17号住居跡土層 (A-A')

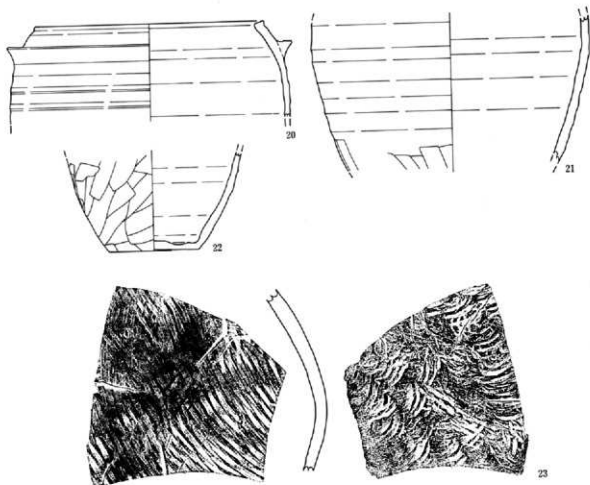
- 1 褐色土 混入物が少ない。締まった土。
- 2 暗褐色土 やや締まる。
- 3 暗褐色土 やや粘質性。
- 4 暗褐色土 上面に板状の黄褐色土ロームブロックをのせる (灰)。
- 5 灰黄褐色土 黄褐色土版・灰黄褐色土ブロック・焼土・炭化物を含む。
- 6 褐色土 黄褐色土・黒色土・焼土次ブロック炭化物多く、英文状に混合する。
- 7 褐色土 黄褐色土ブロックの混合土。軟質。
- 8 褐色土 黄褐色土ブロックの混合土。粘性。
- 9 黄褐色土 褐色土との混合土。やわらかい。
- 10 暗褐色土 粘質土 (カマド焼土)。
- 11 灰黄褐色土 焼土を含む粘質土 (カマド前部)。
- 12 暗灰色土 焼土・炭化物・褐色土を含む。粘性。

S=1/60



第612図 17号住居跡出土遺物 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

第613図 17号住居跡出土遺物（2）

表92 17号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第612図 1	須恵器 坏	完形		12.3・5.0 3.2	1. 細砂粒 2. 黒 3. 酸化焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第612図 2	須恵器 坏	ほぼ 完形		12.1・5.6 3.3	1. 細砂粒 2. 黒 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第612図 3	須恵器 坏	完形		12.7・5.2 4.0	1. 細砂粒 2. 灰白 3. 還元焰（酸化気味）	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第612図 4	須恵器 坏	2/3		12.0・4.4 4.6	1. 砂粒 2. 灰白 3. 還元焰 良	ロクロ整形。
第612図 5	須恵器 坏	ほぼ 完形		13.9・5.1 3.5	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焰（酸化気味）	ロクロ整形。器形に歪みあり。
第612図 6	須恵器 埴	ほぼ 完形		13.4・6.1 4.9	1. 細砂粒 2. 黄灰 3. 還元焰（酸化焰）	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。

第5節 平安時代の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第612図 7	須恵器 埴	3/4		13.3・6.1 5.1	1.砂粒 2.灰 3.酸化焰 やや軟質	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第612図 8	須恵器 埴	1/3	甕内	13.1・5.5 4.8	1.砂粒 2.暗灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第612図 9	須恵器 埴	ほぼ 完形	甕内	13.2・5.3 4.7	1.細砂粒 2.黄灰 3.還元焰(酸化気味)	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第612図 10	須恵器 埴	ほぼ 完形	甕左	13.2・ 5.0	1.砂粒 2.灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台は削落。
第612図 11	須恵器 埴	完形	甕左	13.2・6.1 5.0	1.細砂粒 2.黒 3.還元焰 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第612図 12	須恵器 埴	ほぼ 完形		13.6・6.1 5.1	1.細砂粒 2.黄灰 3.還元焰(酸化気味)	ロクロ整形。付け高台。
第612図 13	須恵器 埴	ほぼ 完形	甕左	13.2・6.3 5.1	1.粗砂粒 2.黒 3.還元焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第612図 14	須恵器 埴	ほぼ 完形	床直	13.7・5.9 5.2	1.細砂粒 2.暗灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第612図 15	須恵器 埴	1/3	甕前	14.0・5.2 4.5	1.砂粒 2.赤褐 3.酸化焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第612図 16	須恵器 埴	1/3		14.2・7.3 4.1	1.砂粒 2.黒褐 3.酸化焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第612図 17	須恵器 埴	1/3	甕前	12.2・5.1 4.7	1.砂粒 2.黄灰 3.酸化焰(酸化気味)	ロクロ整形。付け高台。
第612図 18	須恵器 埴	底部	甕右	—・5.6 (2.7)	1.粗砂粒 2.橙 3.酸化焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第612図 19	須恵器 埴	底部	甕右	—・5.8 (2.7)	1.砂粒 2.黄橙 3.酸化焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第612図 20	須恵器 羽蓋	口縁	甕前	18.0・ (7.5)	1.粗砂粒 2.黄橙 3.還元焰(酸化気味)	口縁部は内反し、口唇部は内傾する。唇部は強く作り出される。外内面は回転盤で調整。
第613図 21	須恵器 羽蓋	胴部	甕前	—・ (11.5)	1.細砂粒 2.灰 3.酸化焰 良	胴部が僅かに膨らむ。上半は回転盤で、下半は篋削り。内面は回転盤で調整。
第613図 22	須恵器 小形壺	胴下平	床直	—・7.0 (7.5)	1.細砂粒 2.灰 3.還元焰 良	外面は篋削り。内面は回転盤で調整。
第613図 23	須恵器 壺	胴部			1.砂粒 2.灰 3.酸化焰 良	外面に平行印き目。内面に青海波文。

16号住居跡 (第610図)

本住居跡は、西側台地の北西斜面にあり、11-93・94グリッドに位置し、17号住居跡の北東にある。住居跡は斜面地に構築されていることや、西側部分は後世の掘削による段差があり、残存状態はきわめて悪い。また住居跡の中央を耕作溝による破壊をうけている。

平面形は、方形を呈しているものと考えられる。主軸方向は、東南東を示す。覆土は薄く、東南隅で若干の壁が確認されただけである。床面の半分以上は削平をうけてはいるものの、貯蔵穴の周りで硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方では、貯蔵穴の西側にピットが検出されている。

竈は、東壁中央の南寄りにあるものと思われ、耕作溝により一部を壊されている。奥行き70cmほどで、焚き口部から燃焼部にかけてやや掘り窪められている。

貯蔵穴は、竈の右側で径60cm、深さ50cmを測る楕円形を呈する。

遺物は、貯蔵穴からも出土しているが、極僅かである。甕の胴部小片である。

17号住居跡 (第611～613図 表92)

本住居跡は、西側台地の西斜面にあり、10-95・96グリッドに位置し、16号住居跡の南西にある。住居跡は斜面地に構築されていることや、後世の台地西斜面の掘削により住居跡の西側3分の2が壊され、残存状態は悪い。

平面形は、方形を呈しているものと考えられる。主軸方向は、東を示す。斜面に構築されているため、住居の南東部はかなり壁高が高く、75cmを測る。特に東南側の壁の高い部分では、上半が傾斜する構造をもつ。床面の西側の半分以上は削平をうけてはいるものの、竈前や貯蔵穴の周りで硬くしまった平坦な面を確認することができた。また竈については、新旧2基の竈の存在が確認された。掘り方はもたない。

竈は、東壁中央の南寄りにあるものと思われ、新旧2基が確認された。この2基の竈は、左側のものが新しく、右側のものが古い。新竈は、幅90cm、奥行き120cmで、袖は住居内に突き出る形で袖石を有する構造である。燃焼部は床面と同じ高さである。煙道は、燃焼部より一段上がったところから急傾斜についており、長さ67cmを測る。なお、新竈の右側の袖は、旧竈の燃焼部の上に造られている。旧竈は新竈の右側にあり、燃焼部の若干の掘り込みと煙道部が残存しているだけである。この旧竈の燃焼部は、東壁を少し掘り込むように造られている点が、新竈と異なる。

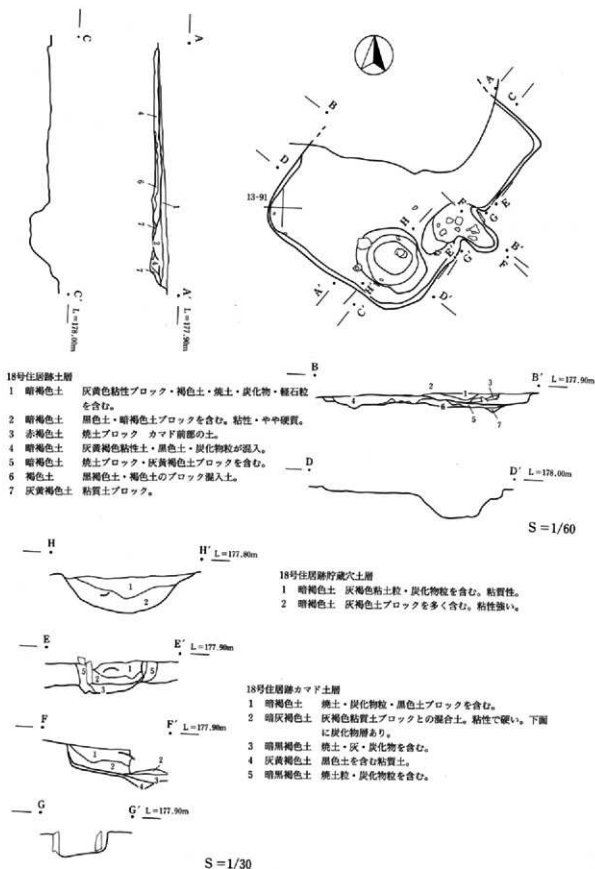
貯蔵穴は、竈の右側で南壁よりにあり、径60cm、深さ15cmを測る円形を呈する。

遺物は、新竈内および竈前を中心に、一定の量が出土している。坏・埴類の他に、甕の破片や羽釜類が多い。羽釜類は竈前に多く出土し、坏・埴類は竈内や竈袖部の辺り、さらには南壁ぎわに多く出土している。

18号住居跡 (第614・615図 表93)

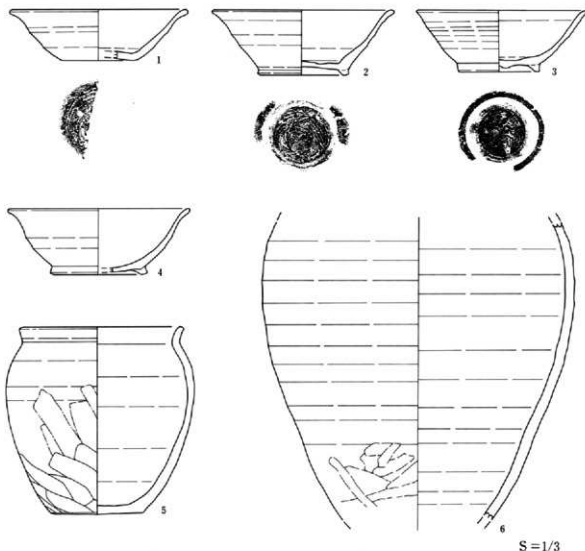
本住居跡は、西側台地北斜面のやや傾斜の緩くなった場所にあり、12・13-90グリッドに位置し、16号住居跡の北東15mにある。本住居跡の周辺には、時期の異なる土坑が点在するものの、他の住居はほとんど検出されていない。また斜面地にある住居のため、住居の北側3分の1ほどは調査できなかった。

平面形は東西2.8m、南北3.8mを測る長方形を呈している。主軸方向は、東南東を示す。覆土は薄く、北斜面に位置するため南隅の壁が最も残存しており、その壁高は10cmほどを測る。床面は北側部分を欠くが、硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方については、床面下10cmほどを掘り下げることができたが、付属する遺構は検出できなかった。



第614図 18号住居跡平面図

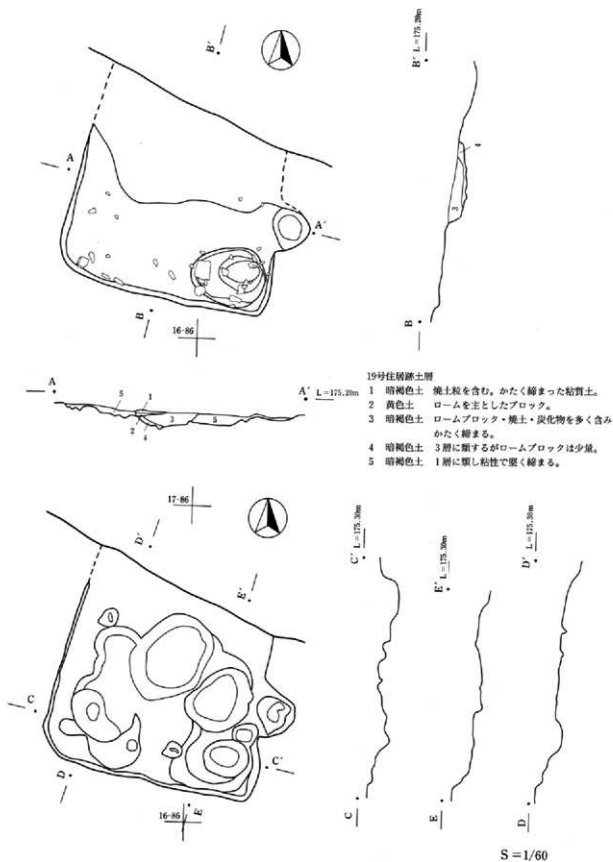
第3章 検出された遺構と遺物



第615図 18号住居跡出土遺物

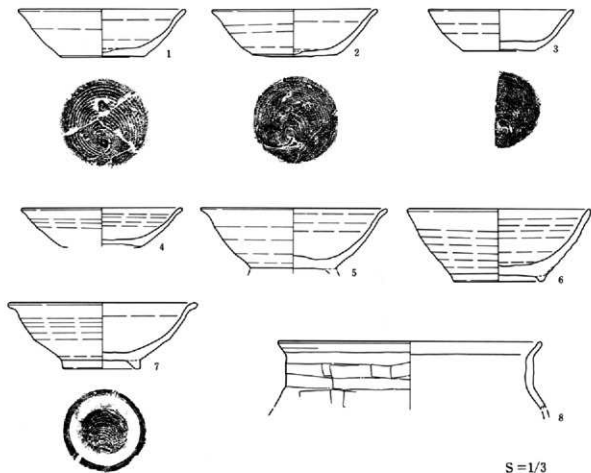
表93 18号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第615図 1	須恵器 坏	1/3		13.8・5.8 4.0	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第615図 2	須恵器 埴	1/2	貯蔵穴	14.2・6.4 5.1	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第615図 3	須恵器 埴	ほぼ 完形	竈前	13.4・6.4 4.8	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 (酸化気味)	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第615図 4	須恵器 埴	1/4		14.4・6.8 5.1	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 やや軟質	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第615図 5	須恵器 小形壺	2/3	貯蔵穴	12.6・7.3 14.7	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. におい煙 (酸化気味)	口縁から胴部上半は回転盤で調整。胴部下半は置盤でないしは置筒り。内面は回転盤で調整。
第615図 6	須恵器 羽蓋	胴部	竈右	- - - 23.4	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 (酸化焰)	胴部上半は回転盤で調整。胴部下半は置筒り。内面は回転盤で調整。



第616図 19号住居跡平面図

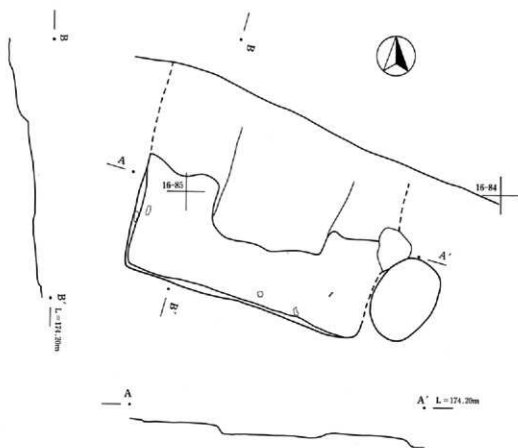
第3章 検出された遺構と遺物



第617図 19号住居跡出土遺物

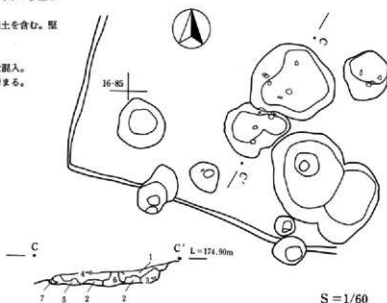
表94 19号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1, 胎土 3, 焼成	2, 色調	成・整形の特徴
第617図 1	須恵器 坏	3/4		13.2・7.0 3.7	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 黄灰 (酸化気味)	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第617図 2	須恵器 坏	ほぼ 完形		13.1・6.8 3.7	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 灰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第617図 3	須恵器 坏	1/3		11.4・5.8 3.3	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 灰白 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第617図 4	須恵器 坏	1/4		12.6・6.3 3.0	1, 砂粒 3, 還元焰	2, 黒 良	ロクロ整形。底面剥落。
第617図 5	須恵器 坏	1/2		14.5・ 4.2	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 黄灰 (酸化気味)	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台は剥落。
第617図 6	須恵器 埴	ほぼ 完形		14.1・6.4 5.7	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 灰白 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第617図 7	須恵器 埴	1/2		14.6・5.8 5.2	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 灰白 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第617図 8	薬	口縁		21.0・ (5.3)	1, 砂粒 3, 酸化焰	2, 橙 良	外反するコの字口縁。口縁部は横溝で、横溝側で、胴部は横溝側。内面は横溝で。



20号住居跡土層 (2列組)

- 1 暗褐色土 Y.P ロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土 焼土・粘質土ブロック・少量の炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 炭化物・多量の焼土を含む。堅く締まる。
- 4 暗褐色土 Y.P 粘質土混入。
- 5 明褐色土 粘質土にY.P 多量混入。
- 6 明褐色土 5層に類し堅く締まる。
- 7 暗褐色土 Y.P 少量混入。



第618図 20号住居跡平面図



S=1/3

第619図 20号住居跡出土遺物

表95 20号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第619図 1	坏	1/3	床下	13.8・10.0 4.3	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙 良	口縁部は横撫で。胴部以下は荒削り。
第619図 2	須恵器 坏	1/3	床直	13.0・ 3.3	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。

竈は、東壁のほぼ中央にあり、袖石を有する袖部が僅かにつき、竈本体は住居の外側へ突き出る。幅70cm、奥行き75cmを測る。燃焼部は床面よりやや窪む。なお、右側の袖石は自然石を用いているのに対し、左側は牛伏砂岩の切り材を用いている。

貯蔵穴は、竈の右側にあり、長軸115cm、短軸95cm、深さ30cmを測る楕円形を呈する。

遺物は、竈内および竈前と、貯蔵穴内から出土している。坏・埴類の他に、甕や羽釜類である。羽釜類は竈前に多く出土し、貯蔵穴内からは小形の甕が出土している。

19号住居跡（第616・617図 表94）

本住居跡は、西側台地の傾斜の緩くなった北斜面にあり、16-85・86グリッドに位置し、20号住居跡の西側で、22号住居跡と重複する。22号住居との新旧関係は、本住居の竈が22号住居跡の一部を壊して造られていることから、本住居の方が新しい。また斜面地にある住居のため、住居の北側半分ほどは調査できなかった。

平面形は東西3.35mを測り、南北にやや長い長方形を呈していたものと想定される。主軸方向は、東を示す。覆土は薄く、北斜面に位置するため南壁が最も残存しており、その壁高は10cmほどを測る。床面は北側部分を欠くが、硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方については、床面下10~20cmほどを掘り下げることができ、住居の中央および竈前に床下土坑等を検出できた。その規模は、住居中央の土坑は長軸145cm、短軸110cm、深さ30cmを測り、竈前の土坑は径90cm、深さ20cmを測る。

竈は、東壁の中央より南寄りにあるものと考えられるが、残存状況は悪い。竈本体は住居の外側へ突き出る形で、幅80cm、奥行き60cmを測る。燃焼部は床面よりやや窪む。

貯蔵穴は、竈の右側にあり、長軸120cm、短軸95cm、深さ30cmを測る楕円形を呈する。

遺物は、小破片が床面上に散漫に分布し、大方は床下から出土したものである。坏・埴類の他に、甕類である。遺存率は悪い。

20号住居跡 (第618・619図 表95)

本住居跡は、西側台地の傾斜の緩くなった北斜面の東側にあり、15・16-84・85グリッドに位置し、19号住居跡の東側で、85・86号土坑と重複する。斜面地にある住居のため、住居の北側半分ほどは調査できなかった。また住居の中央には、後世の攪乱を受けている。

平面形は、南北にやや長い長方形を呈していたものと想定される。主軸方向は、東南東を示す。覆土は薄く、北斜面に位置するため南壁が最も残存しており、その壁高は7cmほどを測る。床面は北側部分を欠くが、硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方については、住居の中央および南西隅等に床下土坑を4基検出できた。その規模は、住居中央の土坑は径120cm、深さ22cmを測り、他の土坑は径80cmを測る円形を呈するものである。

竈は、東壁の中央より南寄りにあるものと考えられるが、残存状況は悪く、燃焼部と思われる位置に焼土が散布している程度であった。竈本体は、おそらく住居の外側へ突き出る形であったものと想定される。

貯蔵穴は、85号土坑と重複したためか、検出できなかった。

遺物は、微量ながら小破片が床面上に散漫に分布し、床下からも若干出土している。遺存率はかなり悪い。

21号住居跡 (第620・621図 表96)

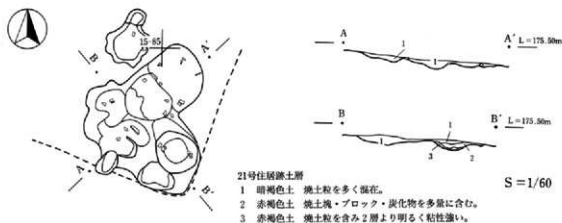
本住居跡は、西側台地の傾斜の緩くなった北斜面の東側にあり、14-84・85グリッドに位置し、20号住居跡の南側にある。斜面地にあることと耕作の削平を著しくうけているため、住居の大半を壊されており、わずかに残存していた住居南東部の掘り方の一部を調査した。

平面形は、長方形を呈していたものと想定されるが、不明である。床面まで削平を受けているため、床面の状態および壁等については不明である。掘り方については、いくつかの床下土坑を検出できたが、この内の南東にあるものが貯蔵穴と考えられる。

竈については、削平により不明である。

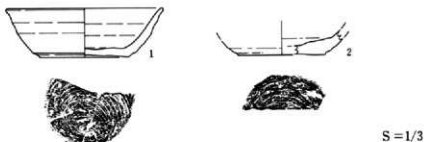
貯蔵穴は住居の南東隅に位置し、径が65cm、深さが25cmを測る円形を呈している。

遺物は、微量ながら小破片が床下から出土している。遺存率はかなり悪い。



第620図 21号住居跡平面図

第3章 検出された遺構と遺物



第621図 21号住居跡出土遺物

表96 21号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第621図 1	須恵器 坏	1/4	貯蔵穴	12.4・7.0 3.8	1.細砂粒 3.還元焰	2.黄灰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第621図 2	須恵器 坏	底部 破片	床下	—・7.0 (1.9)	1.細砂粒 3.還元焰	2.黄灰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。

22号住居跡 (第622図 表97)

本住居跡は、西側台地の傾斜の緩くなった北斜面にあり、16-85グリッドに位置し、20号住居跡の西側で、19号住居跡と重複する。19号住居との新旧関係は、本住居の一部を壊して19号住居の竈が造られていることから、本住居の方が古い。また斜面地にある住居のため、住居の大半は削平等をうけ調査できなかった。わずかに調査できたのは、住居の南東部の一部だけであり、残存状態はきわめて悪い。

平面形は、長方形を呈していたものと想定されるが、不明である。床面については、削平をうけているため不明である。掘り方面の調査で、住居プランの一部が確定でき、この結果残存しているのが住居の南東隅であることが判った。この他に床下土坑と貯蔵穴が検出され、床下土坑の規模は長軸115cm、短軸90cm、深さ30cmを測る。

竈については、削平により不明である。

貯蔵穴は住居の南東隅に位置し、径60cm、深さ20cmを測る円形を呈する。

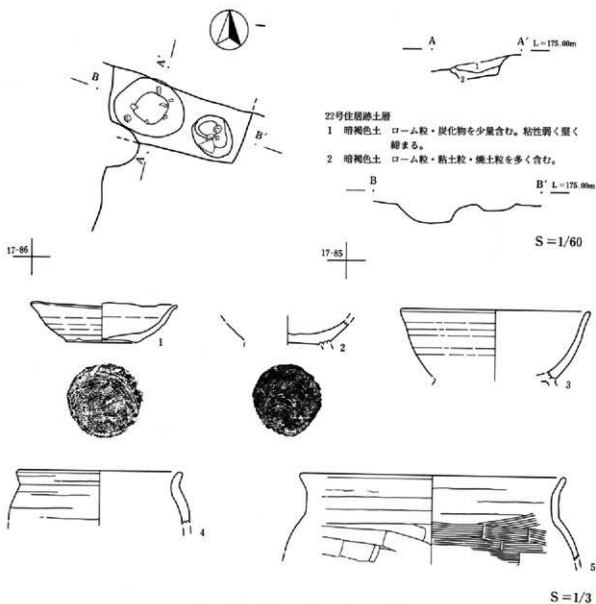
遺物はわずかであるが、貯蔵穴および床下土坑内から出土している。坏・塊類の他に、壺類であり、遺存率は悪い。

32号住居跡 (第623～627図 表98)

本住居跡は、東側台地の西縁辺の緩い西斜面にあり、13・14-42・43グリッドに位置し、38・39・45号住居跡の西側にある。この西縁辺部は、中世城郭造成に伴う整地の際、斜面地を盛り土により平坦面を造り出していることから、盛り土に厚く覆われる結果となり、他の住居の遺存状態が全体的に悪い中において、本住居跡の遺存状態は極めて良好であった。

平面形は東西3.4m、南北3.5mを測る正方形を呈している。主軸方向は、東を示す。土層の堆積は、中世城郭造成時の整地に伴う盛り土が上部にあり、基本土層4層(中世土)・5層(浅間B軽石を多量に含む中世土)に覆われ、7層上面ないしは6層中に当時の生活面があり、住居が掘り込まれたものと考えられる。覆

第5節 平安時代の遺構と遺物

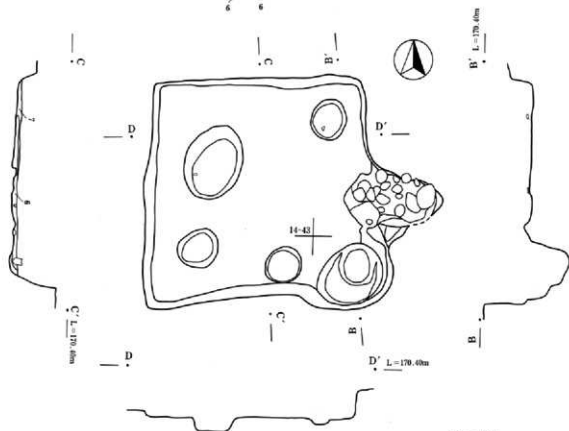
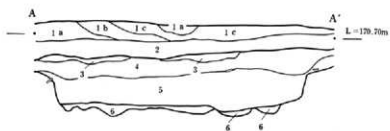


第622図 22号住居跡平面図・出土遺物

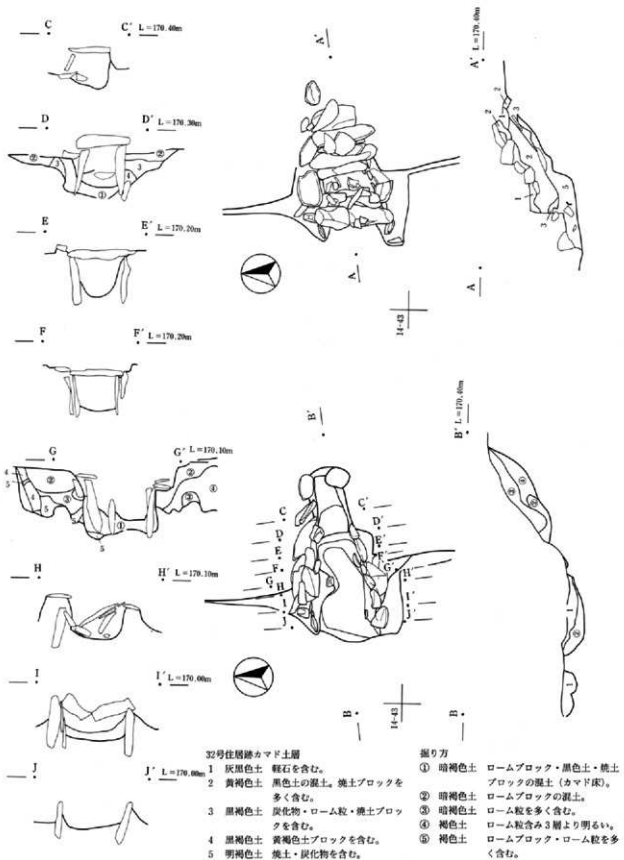
表97 22号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第622図 1	須恵器 環	ほぼ 兜形	床下 土坑	11.6・5.5 3.1	1.粗砂粒 3.還元焰 良	2.灰	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第622図 2	須恵器 埴	底部	貯蔵穴	—・— (2.0)	1.粗砂粒 3.還元焰 良	2.灰	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台は剥落。
第622図 3	須恵器 埴	1/3	貯蔵穴	15.0・— (5.3)	1.粗砂粒 3.還元焰 良	2.灰	ロクロ整形。底部および付け高台は欠損。
第622図 4	小形壺	口縁	床下 土坑	13.2・— (4.2)	1.砂粒 3.酸化焰 良	2.褐橙	やや外反する短口縁。外内面ともに横撫で。
第622図 5	壺	口縁	貯蔵穴	21.2・— (6.5)	1.粗砂粒 3.酸化焰 良	2.橙	外反するコの字口縁。口縁部は横撫で、横撫撫で。胴部は横撫用。内面は横撫でおよび工具の爪痕残る。

第3章 検出された遺構と遺物



第623図 32号住居跡平面図



32号住居跡カマド土層

- 1 灰黒色土 軽石を含む。
- 2 黄褐色土 黒色土の混土。焼土ブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 炭化物・ローム粒・焼土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 5 明褐色土 焼土・炭化物を含む。

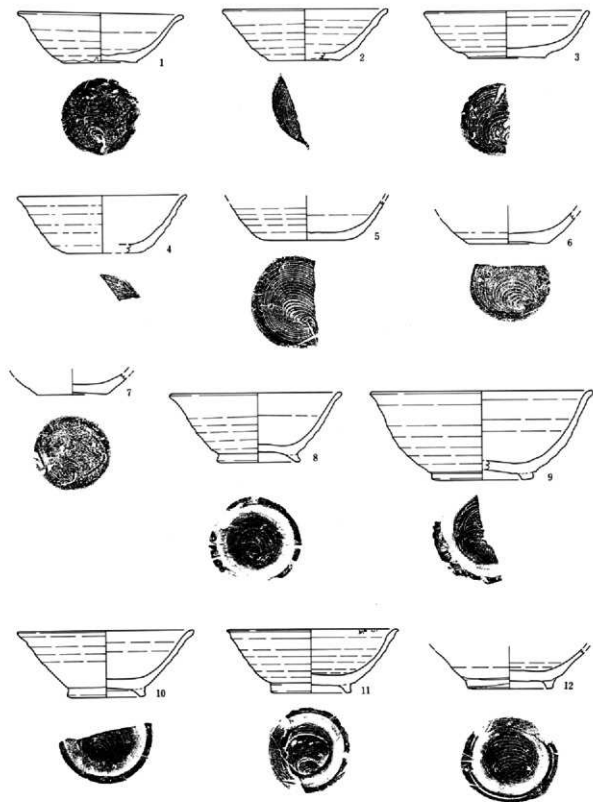
掘り方

- ① 暗褐色土 ロームブロック・黒色土・焼土ブロックの混土（カマド床）。
- ② 暗褐色土 ロームブロックの混土。
- ③ 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- ④ 褐色土 ローム粒含み3層より明るい。
- ⑤ 褐色土 ロームブロック・ローム粒を多く含む。

第624図 32号住居跡カマド

S=1/30

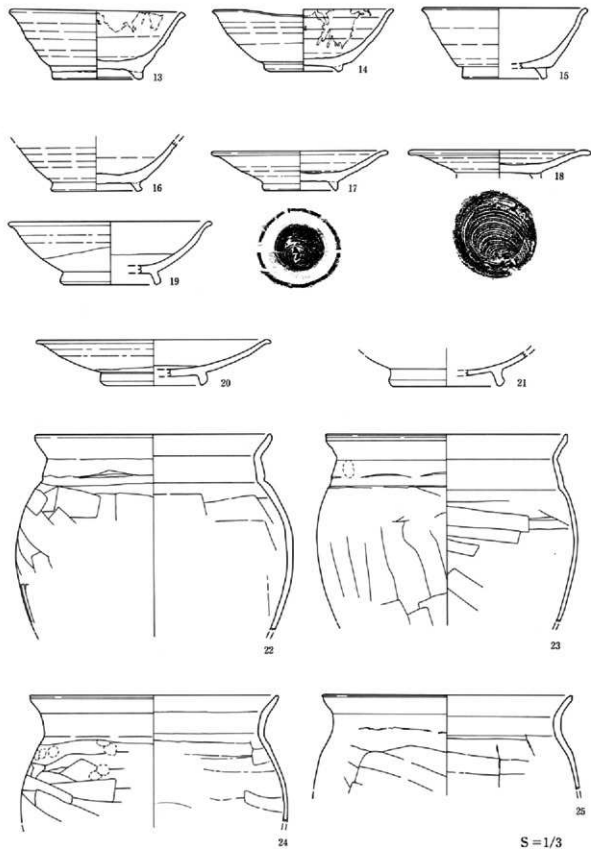
第3章 検出された遺構と遺物



第625図 32号住居跡出土遺物(1)

S=1/3

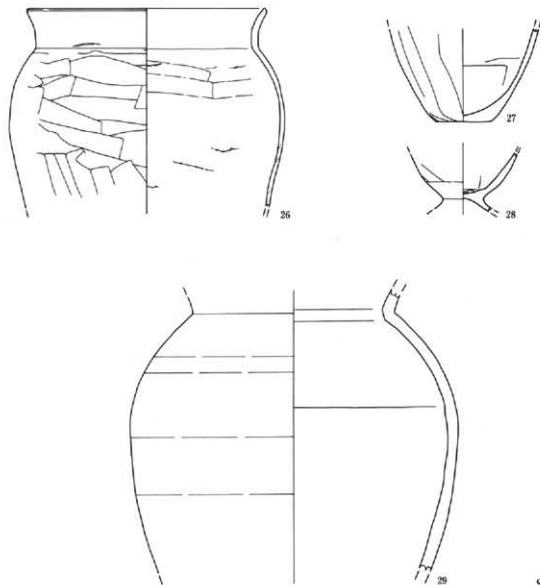
第5節 平安時代の遺構と遺物



S = 1/3

第626図 32号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第627図 32号住居跡出土遺物（3）

S=1/3

表98 32号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第625図 1	須恵器 坏	3/4		13.0・5.8 3.9	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第625図 2	須恵器 坏	1/3		13.0・5.6 4.0	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第625図 3	須恵器 坏	1/3		12.8・6.0 3.7	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黒 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第625図 4	須恵器 坏	1/4		13.5・6.0 4.5	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第625図 5	須恵器 坏	底部		—・7.0 (3.0)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. によい壇 (酸化気味)	ロクロ整形。底部回転糸切り。

第5節 平安時代の遺構と遺物

遺物番号	器 種	部 位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第625図 6	須恵器 環	底部		—・6.2 (2.4)	1. 砂粒 3. 還元焰 2. 灰白 良	口クロ整形。底部回転糸切り。
第625図 7	須恵器 環	底部		—・5.8 (1.5)	1. 砂粒 3. 酸化焰 2. 黄褐色 良	口クロ整形。底部回転糸切り。
第625図 8	須恵器 環	ほぼ 完形		13.4・6.2 5.4	1. 砂粒 3. 酸化焰 2. 黄褐色 軟質	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第625図 9	須恵器 環	1/2	貯蔵穴	17.4・6.7 7.0	1. 細砂粒 3. 還元焰 2. 褐灰 やや軟質	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第625図 10	須恵器 環	1/2		13.9・5.6 5.2	1. 細砂粒 3. 還元焰 2. 灰白 やや軟質	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第625図 11	須恵器 環	ほぼ 完形		13.4・5.8 5.0	1. 粗砂粒 3. 酸化焰 2. 浅黄 やや軟質	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第625図 12	須恵器 環	底部		—・6.5 (3.2)	1. 細砂粒 3. 還元焰 2. 黄灰 やや軟質	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第625図 13	須恵器 環	ほぼ 完形		13.4・6.6 5.4	1. 細砂粒 3. 酸化焰 2. 灰 良	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。油煙が付着。
第625図 14	須恵器 環	ほぼ 完形		14.2・7.3 4.9	1. 砂粒 3. 酸化焰 2. によい橙 良	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。油煙が付着。
第626図 15	須恵器 環	1/4		12.2・6.2 5.6	1. 砂粒 3. 還元焰 2. 灰白 良	口クロ整形。付け高台。
第626図 16	須恵器 環	底部		—・6.8 (3.9)	1. 粗砂粒 3. 酸化焰 2. 橙 良	口クロ整形。付け高台。
第626図 17	須恵器 皿	3/4		13.9・5.7 3.1	1. 砂粒 3. 酸化焰 2. 褐褐色 やや軟質	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第626図 18	須恵器 皿	3/4		14.6・— (1.8)	1. 粗砂粒 3. 酸化焰 2. 明赤褐色 良	口クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台は剥落。
第626図 19	灰 軸 環	1/4		16.2・5.0 7.2	1. 緻密 3. 還元焰 2. 青灰 良	口クロ整形。付け高台。
第626図 20	灰 軸 皿	2/3		18.6・7.7 3.6	1. 緻密 3. 還元焰 2. 青灰 良	口クロ整形。付け高台。
第626図 21	灰 軸 環	底部		—・8.6 (2.7)	1. 緻密 3. 還元焰 2. 青灰 良	口クロ整形。付け高台。
第626図 22	甕	口縁か ら胴部		18.8・— (15.4)	1. 砂粒 3. 酸化焰 2. 赤褐色 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横篋撫で。胴部上半横篋撫で、下半は縦位。内面横撫で、横篋撫で。
第626図 23	甕	口縁か ら胴部		19.2・— (14.7)	1. 砂粒 3. 酸化焰 2. 赤褐色 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横篋撫で。胴部は縦位の篋撫で。内面横撫で、横篋撫で。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第626図 24	甕	口縁から 胴部		19.6・— (10.0)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 赤褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横寛撫で。胴部は横寛削り。内面横撫で、横寛撫で。
第626図 25	甕	口縁		19.8・— (7.4)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. におい橙 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部は横寛削り。内面横撫で、横寛撫で。
第627図 26	甕	口縁から 胴部		19.0・— (15.5)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横寛撫で。胴部上半横寛削り、下半は縦位。内面横撫で、横寛撫で。
第627図 27	甕	底部		—・4.3 (7.3)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. におい橙 良	胴部下半は縦位に篋削り。内面は縦撫で。
第627図 28	台 村 甕	底部		—・— (4.6)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. におい橙 良	胴部下半は縦位に篋削り、および横撫で。胴内面は縦撫で。胴内面は横撫で。
第627図 29	須志 甕	胴部	甕前	—・— (21.3)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	外内面ともに回転撫で調整。

土には、基本土層の6層ないしは6層に近似する土が上部に、下部には7層に近似する土が厚く堆積している。壁高は最大で80cm前後を測る。床面は貼床状で全体に硬く、特に甕前は硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方については、全体に10cm前後床下を下げることができ、4基の床下土坑を検出することができた。床下土坑の規模は、長軸120cm、短軸90cm、深さ18cmを測る楕円形を呈するものと、径60cm前後の円形を呈するものである。

甕は東壁中央のやや南寄りにあり、袖部が住居内に突き出て本体および煙道部が住居外へ張り出す形で、焚き口から煙道部までの天井には大きな長い石が架けられ、袖部を含めた甕の内壁にも石が用いられ、鳥居状に石を組む構造となっている。また燃焼部には、支脚として細長い石が直立している。甕前には広く焼土や灰が散乱しており、燃焼部は窪み、燃焼部奥壁の一段高い部分から煙道部が斜めに上がっていく。甕の規模は、幅90cm、奥行き120cmを測る。残存状況は、本遺跡の中でも最良である。

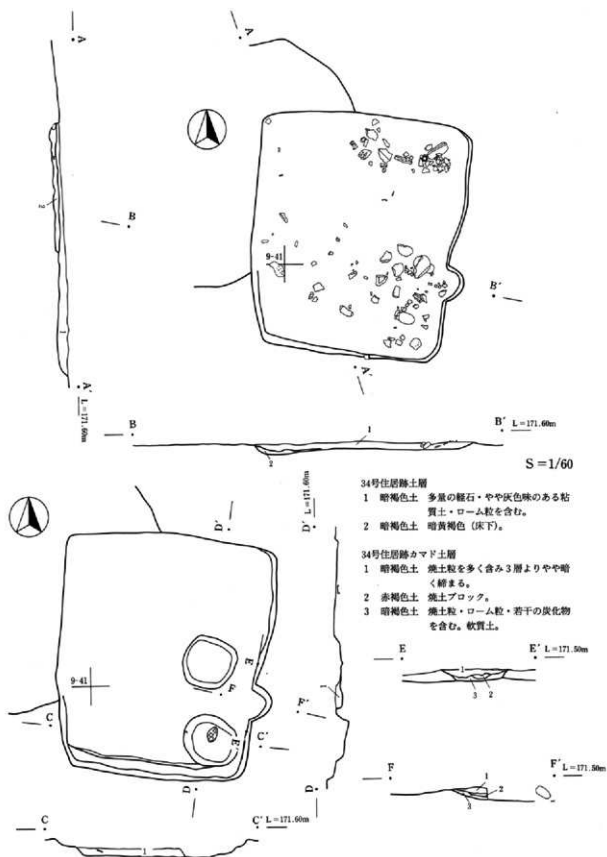
貯蔵穴は、甕の右側に南壁に接して検出され、その規模は径95cmほどの円形を呈し、二重の底となっている。

出土遺物は、甕前に大型の石が散乱するとともに、全体的に土器が分布している。土器の出土量も比較的多く、坏・埴類とコの字口縁となる甕が主体をなし、羽釜は含まれていない。なお、灰陶器の埴・皿が出土している。甕内出土の土器には、甕が多い。他に薦編み石状のものが、数点出土している。

34号住居跡 (第628～631図 表99)

本住居跡は、東側台地の中央部より西寄りの平坦面にあり、8・9-40・41グリッドに位置し、33・64号住居跡および355号土坑と重複し、43号住居跡の西側、36・37号住居跡の東側にある。重複する33・64号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居が最も新しく、次いで64号住居、33号住居の順となる。ちなみに33号住居跡は、弥生時代末の住居である。また355号土坑との新旧関係は、355号土坑が縄文時代の土坑であることから、本住居跡が新しい。

平面形は、東西3.0m、南北3.8mを測り、南北に長い長方形を呈している。主軸方向は、東を示す。中世



34号住居跡土層

- 1 暗褐色土 多量の軽石・やや灰色味のある粘質土・ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 暗黄褐色(床下)。

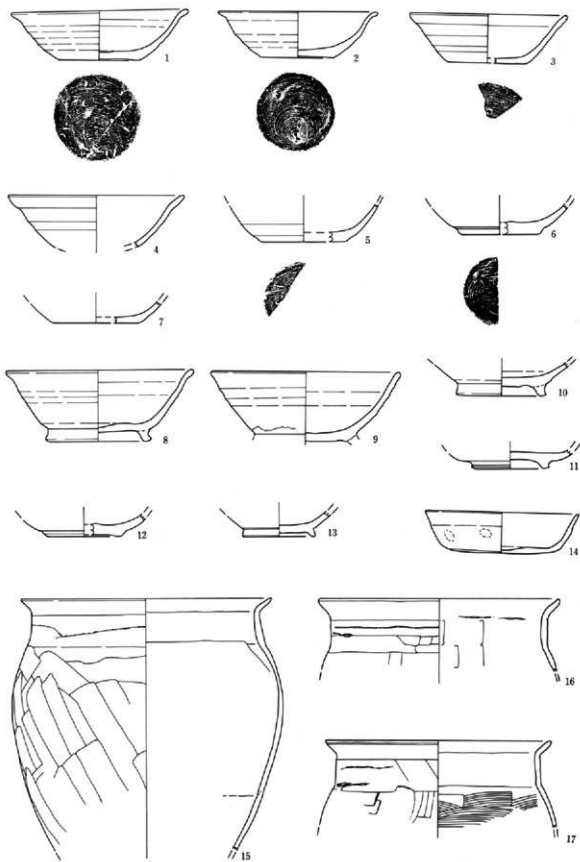
34号住居跡のマド土層

- 1 暗褐色土 焼土粒を多く含み3層よりやや暗く締まる。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック。
- 3 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・若干の炭化物を含む。軟質土。

第628図 34号住居跡平面図

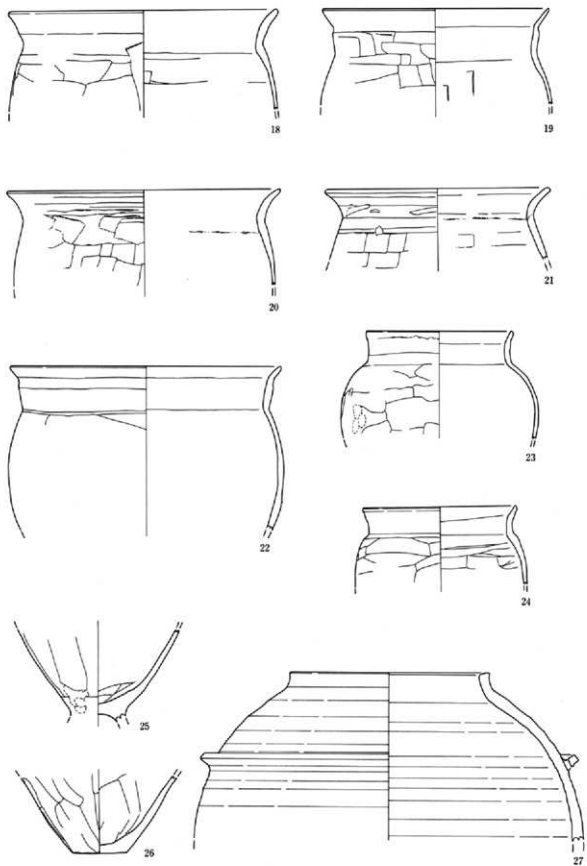
S=1/30

第3章 検出された遺構と遺物



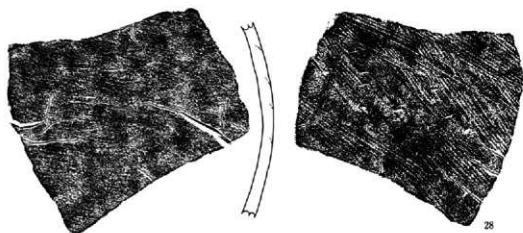
S=1/3

第629図 34号住居跡出土遺物(1)



第630図 34号住居跡出土遺物(2)

S=1/3



S=1/3

第631図 34号住居跡出土遺物(3)

表99 34号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調 ヤや軟質	成・整形の特徴
第629図 1	須恵器 坏	3/4	床直	13.9・6.4 3.9	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. にぶい橙 ヤや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第629図 2	須恵器 坏	ほぼ完 形	床直	12.3・5.9 3.6	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黒 ヤや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第629図 3	須恵器 坏	1/3		12.6・6.2 3.8	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第629図 4	須恵器 坏	1/3		14.0・ (4.1)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。
第629図 5	須恵器 坏	底部	床直	—・6.4 (2.9)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第629図 6	須恵器 坏	底部		—・6.2 (2.1)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 ヤや軟質	ロクロ整形。底面に回転糸切り。
第629図 7	須恵器 坏	底部		—・6.8 (1.5)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。
第629図 8	須恵器 塊	1/2	床直	14.7・7.8 5.6	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰 ヤや軟質	ロクロ整形。付け高台。
第629図 9	須恵器 塊	1/2		14.7・ (5.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	ロクロ整形。付け高台は剥落。
第629図 10	須恵器 塊	底部	床直	—・6.4 (2.6)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 良	ロクロ整形。付け高台。
第629図 11	須恵器 塊	底部		—・6.2 (1.1)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 良	ロクロ整形。付け高台。
第629図 12	須恵器 塊	底部	床下 土坑	—・6.0 (1.4)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰 良	ロクロ整形。低い付け高台。

第5節 平安時代の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第629図 13	灰 軸 埴	底部	床直	— ・ 5.8 (1.6)	1. 緻密 3. 還元焰	2. 青灰 良	ロクロ整形。付け高台。
第629図 14	坏	1/3		12.2 ・ 8.0 3.2	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. におい地 やや軟質	口縁および体部は撫で。底部は荒削り。
第629図 15	甕	口縁か ら胴部	甕前	20.0 ・ — (20.4)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 赤褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部上半横削り。下半は縦位。内面横撫で、横荒削り。
第629図 16	甕	口縁		19.2 ・ — (5.7)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 赤褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部横荒削り。内面横撫で、横荒削り。
第629図 17	甕	口縁		17.9 ・ — (6.7)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部横荒削り。内面横撫で、横荒削り。赤灰が残る。
第630図 18	甕	口縁	床直	21.0 ・ — (7.8)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部横荒削り。内面横撫で、横荒削り。
第630図 19	甕	口縁		18.1 ・ — (7.5)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部横荒削り。内面横撫で。
第630図 20	甕	口縁		21.4 ・ — (6.3)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	縦く外反する口縁。口縁部横撫で、縦位荒削り。胴部横荒削り。内面横撫で。
第630図 21	甕	口縁		17.9 ・ — (5.5)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部横荒削り。内面横撫で、横荒削り。
第630図 22	甕	口縁か ら胴部		21.5 ・ — (12.9)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横荒削り。胴部は横荒削り。内面横撫で、横荒削り。
第630図 23	小形 甕	口縁	床直	11.5 ・ — (9.0)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 赤褐 良	わずかに外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部横荒削り。内面横撫で、横荒削り。
第630図 24	小形 甕	口縁		12.2 ・ — 6.2	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部は横荒削り。内面横撫で、横荒削り。
第630図 25	台付 甕	底部		— ・ — (7.3)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. におい地 良	胴部下半は縦位に荒削り。および横撫で。胴内面は荒削り。胴部内面は横撫で。
第630図 26	甕	底部		— ・ 4.2 (6.0)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. におい地 良	胴部下半は縦位に荒削り。内面は荒削り。
第630図 27	須志 器 蓋	口縁か ら胴部		16.0 ・ — (13.2)	1. 緻密 3. 還元焰	2. 灰 良	球胴状で口縁が僅かに直立し、胴上半に上下に穿孔を有する脚を持つ。外内面ともに回転で調整。
第631図 28	須志 器 甕	胴部 破片			1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	外面は撫で。内面は荒削り。

第3章 検出された遺構と遺物

城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は最大で15cmを測る。床面は、硬くしまった平坦な面を確認することができた。また住居の南壁際には、幅15cmほどのテラス状の高まりが帯状に検出されている。掘り方については、部分的に掘り下げられることができたが、住居に伴う施設は検出できなかった。

竈は、東壁のやや南寄りに位置しているが残存状態は悪い。燃焼部が住居外へ張り出す形で、残存する規模は幅60cm、奥行き35cmを測る。

貯蔵穴は、竈の右側でテラス状の高まりの内側に位置し、その規模は径85cm、深さ15cmを測る円形を呈している。

遺物は比較的に多く、竈前には竈に使われたと考えられる大形の石が散乱し、土器等は住居内全体に分布する。出土土器には、坏・埴輪とコの字口縁の甕、釜があり、甕の個体数は他の住居に比べ多い。なお、縄文時代等の遺物も多く混在している。

36号住居跡（第632～636図 表100）

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、9・41・42グリッドに位置し、65号住居跡および358号土坑と重複し、33・34号住居跡の西側、37号住居跡の南に隣接している。重複する65号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居が新しい。358号土坑は、縄文時代のものである。

平面形は、東西4.3m、南北3.1mを測り、東西に長い長方形を呈しているが、南東隅がやや出張している。主軸方向は、東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は最大で20cmを測る。床面は、硬くしまった平坦な面を確認することができたが、西側から電方向へ若干傾斜する。また住居の西側の壁際には、幅10cmほどの周溝が検出されている。掘り方については、竈前を含め幾つもの床下土坑が検出された。

竈は、東壁の南寄りに位置している。袖部が住居内にわずかに突き出て、燃焼部が住居外へ張り出す形で、規模は幅80cm、奥行き100cmを測る。袖および燃焼部の内側には、石が用いられ、竈内に崩落・散在する石からすれば、32号住居と同様に鳥居状に石を組む構造であったものと考えられる。燃焼部中央には、支脚として細長い石が直立している。

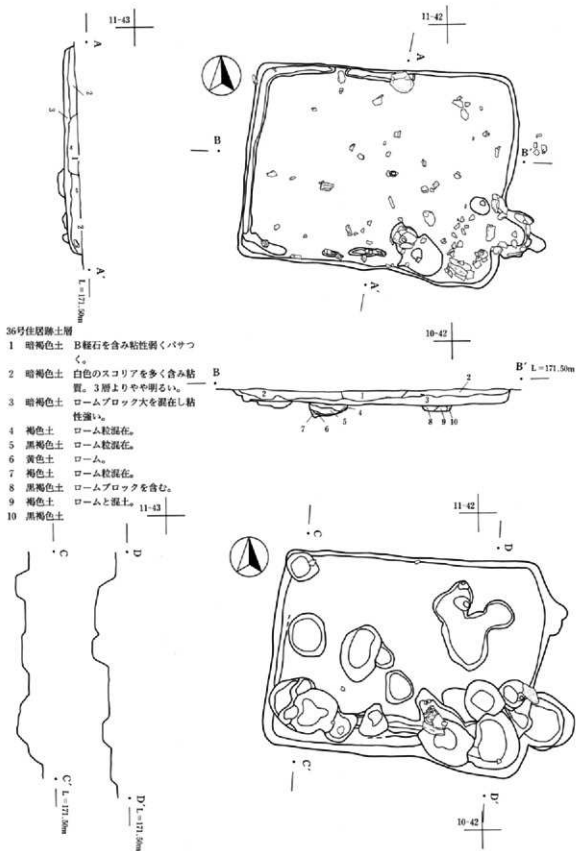
貯蔵穴は竈前に位置し、径60cm、深さ25cmを測る円形を呈している。この貯蔵穴の西側には、大形の石を詰めたピットが検出されている。

遺物は比較的に多く、竈前を中心に全体的に分布している。出土土器には、坏・埴輪と小形甕、羽釜があり、羽釜の個体数は他の住居に比べかなり多い。

37号住居跡（第637～639図 表101）

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、9・10—41・42グリッドに位置し、65号住居跡と重複し、33・34号住居跡の西側、36号住居跡の北に隣接している。重複する65号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居が新しい。

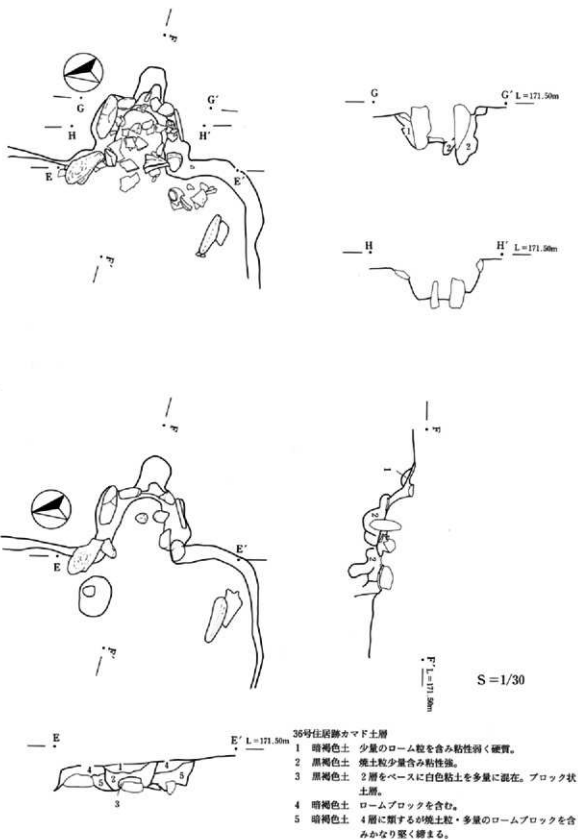
平面形は、東西3.4m、南北3.5mを測るほぼ正方形を呈しているが、東壁の南東隅が食い違うように段ができています。主軸方向は、東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は最大で18cmを測る。床面は平坦で、竈前から中央部にかけて硬くしまった面を確認することができたが、壁際はやや弱い。また住居の南壁際には、幅10cmほどの周溝が検出されている。掘り方については、竈前と



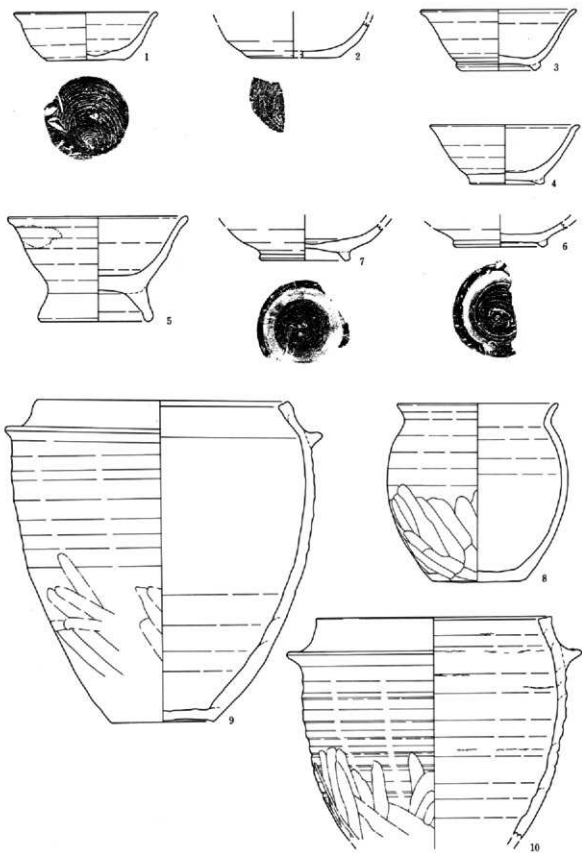
第632図 36号住居跡平面図

S=1/60

第3章 検出された遺構と遺物

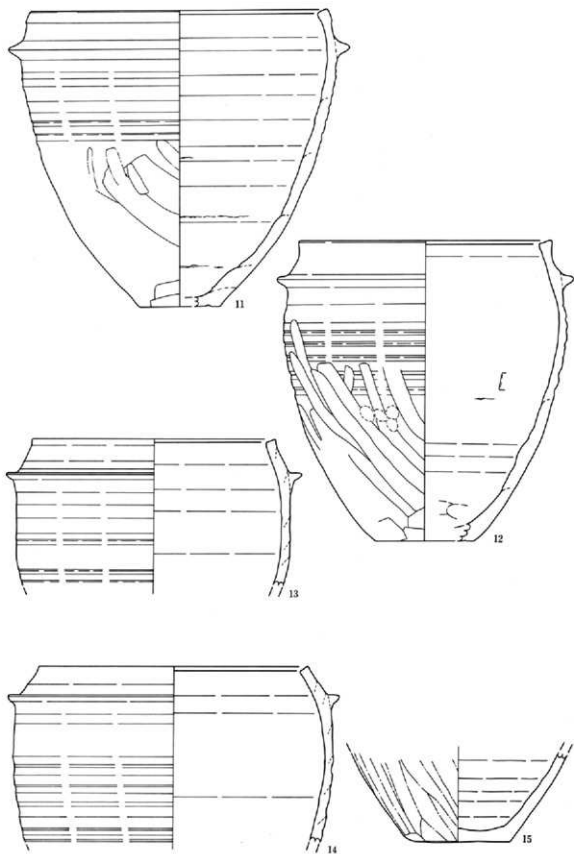


第633図 36号住居跡カマド



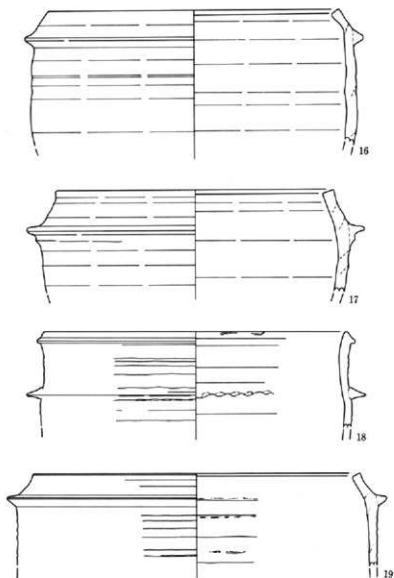
第634圖 36号住居跡出土遺物(1)

S=1/3



第635図 36号住居跡出土遺物（2）

S=1/3



S = 1/3

第636図 36号住居跡出土遺物（3）

表100 36号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高 (cm)	1, 胎土 3, 焼成	2, 色調	成・整形の特徴
第634図 1	須恵器 坏	母ば 宛形	床直	11.2・6.1 3.8	1, 細砂粒 3, 酸化焰	2, にぶい橙 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第634図 2	須恵器 坏	底部		—・6.9 (2.5)	1, 細砂粒 3, 酸化焰	2, 黄橙 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第634図 3	須恵器 埴	1/3	床直	12.1・5.7 4.8	1, 細砂粒 3, 還元焰	2, 黄灰 良	ロクロ整形。付け高台。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第634図 4	須恵器 埴	1/2	竈内	11.6・5.5 4.7	1. 砂粒 3. 還元焰	2. ぶい褐色 (酸化気味)	ロクロ整形。付け高台。
第634図 5	須恵器 埴	3/4	床直	14.0・8.6 8.2	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 黄褐色 良	ロクロ整形。付け高台。
第634図 6	須恵器 埴	底部		—・7.5 (1.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。底面に回転余切り。付け高台。
第634図 7	須恵器 埴	底部		—・7.3 (2.5)	1. 粗砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。底面に回転余切り。付け高台。
第634図 8	須恵器 小形壺	1/2	床直	12.5・7.1 14.0	1. 粗砂粒 3. 還元焰	2. 灰白 良	口縁は緩く外平。口縁から胴部上半は回転無で調整。胴部下半は縦位の寛削り。内面は回転無で調整。
第634図 9	須恵器 羽蓋	3/4	床直	19.8・8.2 25.3	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 黄褐色 やや軟質	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部上半は回転無で調整。下半は寛削り後無で調整。
第634図 10	須恵器 羽蓋	1/3	竈内	18.5・— (17.4)	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. ぶい褐色 やや軟質	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は強く突出。口縁から胴部上半は回転無で調整。下半は縦位の無で調整。
第635図 11	須恵器 羽蓋	1/4	竈内	23.5・6.4 23.3	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 褐色 良	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部上半は回転無で調整。下半は寛削り後無で調整。
第635図 12	須恵器 羽蓋	1/3	床直	19.8・7.8 23.6	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 明褐色 良	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部上半は回転無で調整。下半は寛削り後無で調整。
第635図 13	須恵器 羽蓋	口縁 破片		19.0・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 赤褐色 良	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部は回転無で調整。
第635図 14	須恵器 羽蓋	口縁 破片	床直	21.1・— —	1. 粗砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐色 やや軟質	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部は回転無で調整。
第635図 15	須恵器 羽蓋	底部	床直	—・7.5 (7.0)	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. ぶい褐色 良	胴部下半は縦位の寛削り後無で調整。内面は回転無で調整。
第636図 16	須恵器 羽蓋	口縁 破片	床直	22.9・— —	1. 粗砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐色 やや軟質	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部は回転無で調整。
第636図 17	須恵器 羽蓋	口縁 破片		21.8・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 黄褐色 良	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部は回転無で調整。
第636図 18	須恵器 羽蓋	口縁 破片		24.0・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 褐色 良	口縁部はやや外反さみ。口唇部は外傾。唇部は強く突出。口縁から胴部は回転無で調整。
第636図 19	須恵器 羽蓋	口縁 破片		26.0・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 褐色 良	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から胴部は回転無で調整。

中央よりやや北側に床下土坑が2基検出された。電前のは径110cm、深さ20cm前後の不整形を呈し、北側のものは長軸90cm、短軸70cm、深さ30cmを測る楕円形を呈するものである。他にピットが2基検出されている。

竈は、東壁の南寄りに位置している。左側の袖部が住居内に大きく突き出て、それと対象となる右側の袖は食い違う東壁を共有する。燃焼部は住居内にあり、煙道部が外へ張り出す形で、竈全体の規模は幅70cm、奥行き90cmを測る。煙道部は、燃焼部奥壁から斜めに上がるように続くが、煙道部の両側には大形の石が据えられている。燃焼部の中央には、支脚として長い石が直立している。

貯蔵穴は住居の南西隅に位置し、径75cm、深さ34cmを測る円形を呈している。

遺物の出土量は少なく、竈内および電前に分布している。なお、電材として使用されたと考えられる被熱した大形の石が、破損し散在している。出土土器には、埴と羽釜があり、羽釜は竈内より多く出土している。他に瓦が1点出土している。

38号住居跡 (第640～642図 表102)

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、13-40・41グリッドに位置し、39・45号住居跡と重複し、32号住居跡の東側、37号住居跡の北側にある。重複する39・45号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居が最も新しい。39号住居と45号住居跡の新旧関係については、不明である。

平面形は、東西3.7m、南北3.7mを測るほぼ正方形を呈しているが、39号住居と重複する北東壁および45号住居と重複する西壁については検出できなかった。主軸方向は、南東を示す。覆土は薄い。壁高は最大で20cmを測る。床面は平坦で、硬くしまった面を確認することができた。また住居の南西隅には、ピットが検出されたが、中世のものである可能性が高い。掘り方調査では、4基の床下土坑が検出されている。竈左側に3基と貯蔵穴の西側に1基、大方は円形を呈している。

竈は、東壁の南寄りに位置している。袖部は住居内に突き出ず、燃焼部が外へ張り出す形で、竈全体の規模は幅50cm、奥行き60cmを測る。竈の内側には、石が使用されていたようであり、右側壁には残存している。燃焼部は床面と同じ高さで、その中央には支脚としての石が直立している。

貯蔵穴は竈の右側に位置し、径70cm、深さ20cmを測る円形を呈している。

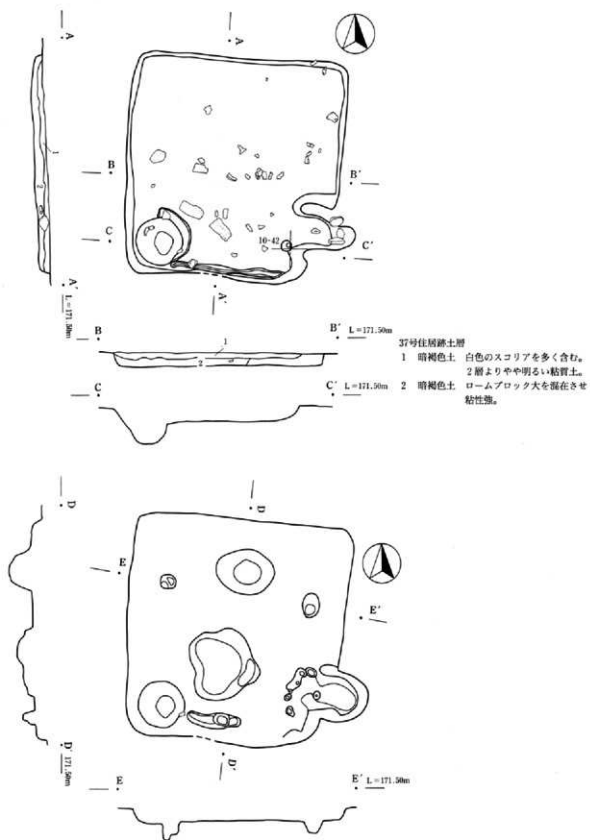
遺物の出土量はあまり多くなく、電前を中心に分布している。なお、電材として使用されたと考えられる被熱した大形の石が、破損し竈内に散在している。出土土器には、埴と甕（土釜）および小破片があり、甕は電前より出土している。他に炭化材が数点出土している。

39号住居跡 (第640～642図)

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、13・14-40グリッドに位置し、38号住居跡と重複し、32号住居跡の東側、37号住居跡の北側にある。重複する38号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が古い。また中世城郭造成時の削平により、住居の北側は残存していない。

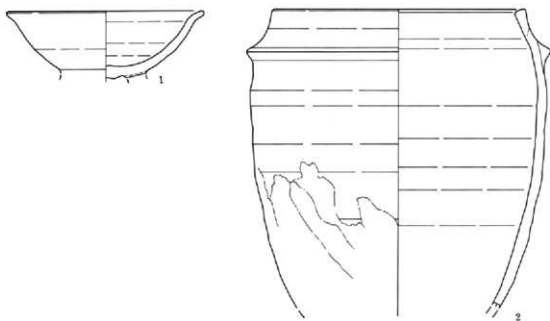
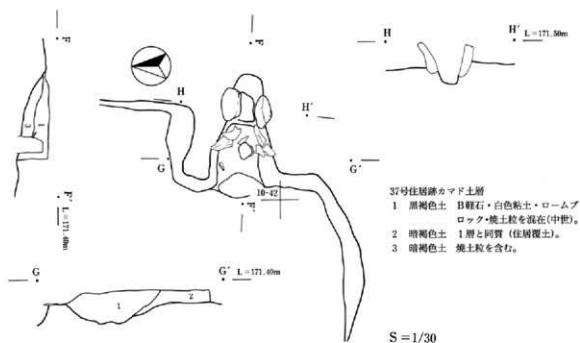
平面形は、東西2.7mを測り、小形ではあるが方形を呈しているものと想定される。38号住居と重複する南西壁は検出できなかった。主軸方向は、東を示す。覆土は薄い。壁高は最大で9cmを測る。床面は平坦で、硬くしまった面を確認することができた。また電前には、ピットが検出されたが、中世のものである可能性が高い。掘り方調査では、6基の床下土坑が検出されている。

竈は、東壁の南寄りに位置している。袖部は住居内に突き出ず、燃焼部が外へ張り出す38号住居と同様な



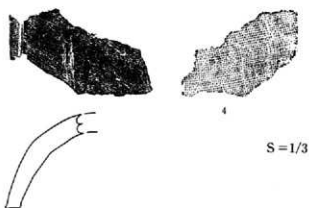
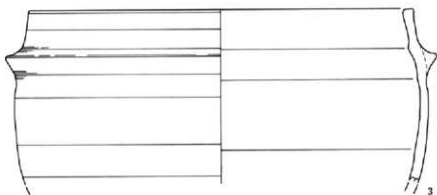
第637図 37号住居跡平面図

S=1/60



第638図 37号住居跡カマド・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

第639図 37号住居跡出土遺物

表101 37号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第638図 1	須恵器 埴	1/2		15.1・6.6 (5.2)・3.9	1.細砂粒 2.鈍い橙 3.酸化焰	口縁部は内反。口唇部内傾。胴部は三角。口縁から胴部上半は回転態で調整。下半は置削り後態で調整。
第638図 2	須恵器 釜	1/4	竈内	18.0・ 23.5	1.粗砂粒 2.にぶい橙 3.酸化焰	口縁部は内反。口唇部内傾。胴部は三角。口縁から胴部上半は回転態で調整。下半は置削り後態で調整。
第639図 3	須恵器 羽釜	口縁 破片		30.4・ —	1.粗砂粒 2.褐橙 3.酸化焰	口縁部は内反。胴部は三角。口縁から胴部は回転態で調整。
第639図 4	丸瓦	破片			1.砂粒 2.褐橙 3.酸化焰	外面は撫で。内面は布目。

形状で、竈全体の規模は幅60cm、奥行き70cmを測る。袖部位置となる両側には、袖石が残存し、燃焼部は床面と同じ高さで、その中央には支脚としての石が直立している。

貯蔵穴は、検出されていない。

遺物の出土量は少なく、散漫に分布している。出土土器には、坏と甕等の小破片がある。他に炭化材が数点出土しているが、これは38号住居跡に伴うものである。

45号住居跡（第640～642図）

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、13-41グリッドに位置し、38号住居跡と重複し、32号住居跡の東側、37号住居跡の北側にある。重複する38号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が古い。また中世城郭造成時の削平により、残存状態はきわめて悪く、しかも重複する38号住居により本住居の東側半分を壊されている。

平面形は、南北3.6mを測り、他住居と同様に方形を呈しているものと想定される。覆土は薄く、壁高は最大で7cmを測る。床面は平坦で、硬い面を確認することができた。掘り方調査では、南東隅に床下土坑が検出され、長軸80cm、短軸50cmを測る楕円形を呈している。他にピット1基を検出している。

竈は、38号住居により壊され不明。

貯蔵穴についても、38号住居により壊され不明。

遺物の出土はほとんどなく、わずかに石が3点出土しただけである。

42号住居跡（第644・645図 表103）

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、11-38・39グリッドに位置し、43号住居跡の北側10mほどのところにある。住居の北側では、401・402号土坑と重複し、東壁際および南側でもピット3基と重複している。これら重複する遺構との新旧関係は、2基の土坑よりは本住居の方が新しく、ピット3基は中世建物の柱穴であることから本住居が古い。

平面形は、東西2.8m、南北3.0mを測るやや不整な正方形を呈している。主軸方向は、南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平により薄く、壁高は最大で10cmを測る。床面は平坦で、硬くしまった面を確認することができた。また住居の西中央には、ピットが検出されたが、本住居に伴うかどうかは不明。掘り方は、検出されなかった。

竈は、東壁の中央よりやや南寄りに位置している。左側の袖石が残存していることから、袖部は住居内に突き出て、燃焼部が外へ張り出す形で、残存する竈の規模は幅60cm、奥行き80cmを測る。残存状態は悪い。

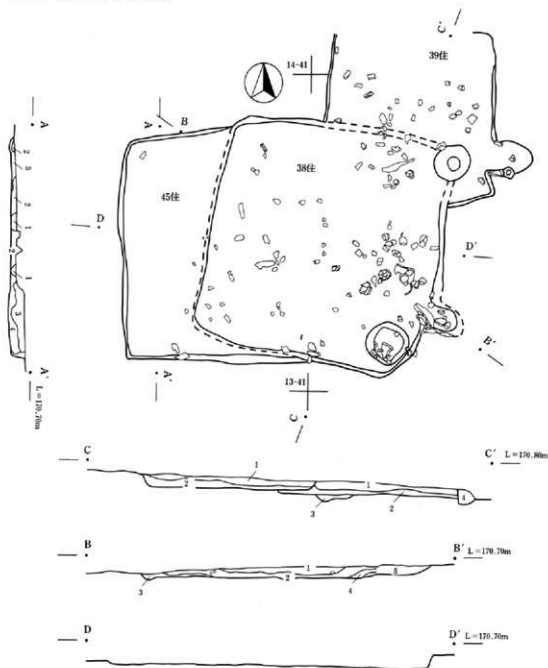
貯蔵穴は、検出されなかった。

遺物の出土量は余り多くなく、竈前を含め散漫に分布している。なお、電材として使用されたと考えられる被熱した大形の石が、破損し住居内に散在している。出土土器には、甕（土釜）および小破片がある。他に縄文時代の土器が混在している。

43号住居跡（第646・647図 表104）

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、8-39グリッドに位置し、42号住居跡の南側10m、33号住居跡の東側、44号住居跡の北側にある。

平面形は、東西3.2m、南北2.8mを測り、東西に長い長方形を呈している。主軸方向は、東を示す。覆土



38号住居跡土層

- 1 暗褐色土 混入物少ないが炭化粒を含む。2層より暗く硬質。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・炭化物（大形の木炭）を含む。硬質で締まる。
- 3 暗褐色土 炭化物を多量に含む。2層よりやや暗く軟質。
- 4 暗褐色土 焼土粒を多く含む5層に類似。
- 5 暗赤褐色土 焼土ブロックを主とするカマドの焼土崩落土。

39号住居跡土層

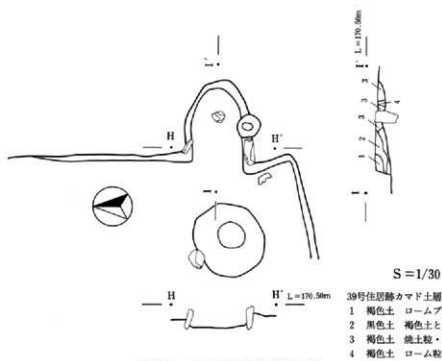
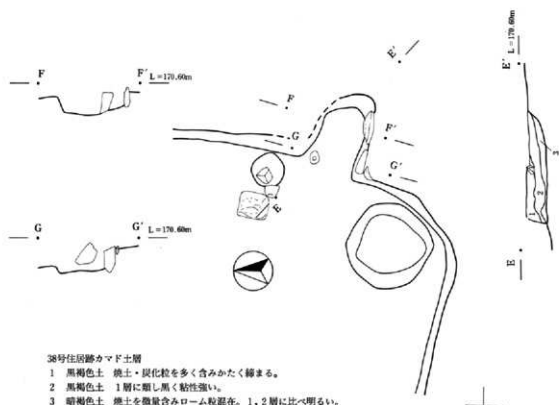
- 1 暗褐色土 38号住居1層に近似。粒子は密である。
- 2 暗褐色土 ロームブロック粒・少量の大形炭化物を含み1層よりかなり明るい。
- 3 暗褐色土 ロームブロック混在。粘性で暗い（柱穴）。

45号住居跡土層

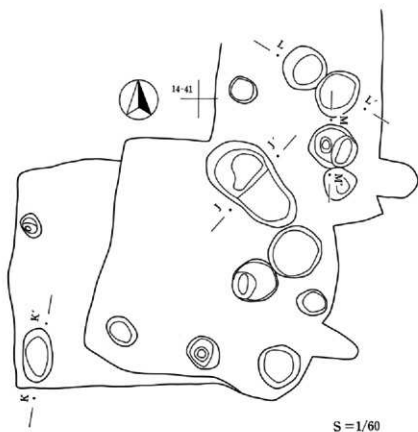
- 1 褐色土 ロームブロック・軽石を多く含む。
- 2 褐色土 ロームブロックとの混土。粘性強い。
- 3 黒褐色土 炭化物粒・多量の軽石粒を含む。硬質。
- 4 黒褐色土 軽石粒少なく3層より少々やわらかい粘質土。
- 5 明褐色土 軽石粒を含む。

S = 1/60

第640図 38・39・45号住居跡平面図



第641図 38・39・45号住居跡カマド



38号住居跡床下土坑土層

- 1 灰褐色粘質土 ローム粒混在。
- 2 灰黄褐色土 ロームとの混土。



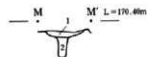
39号住居跡床下土坑土層

- 1 黒褐色土 ロームを少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム混在。
- 3 黒褐色土 2層と同質



45号住居跡床下土坑土層

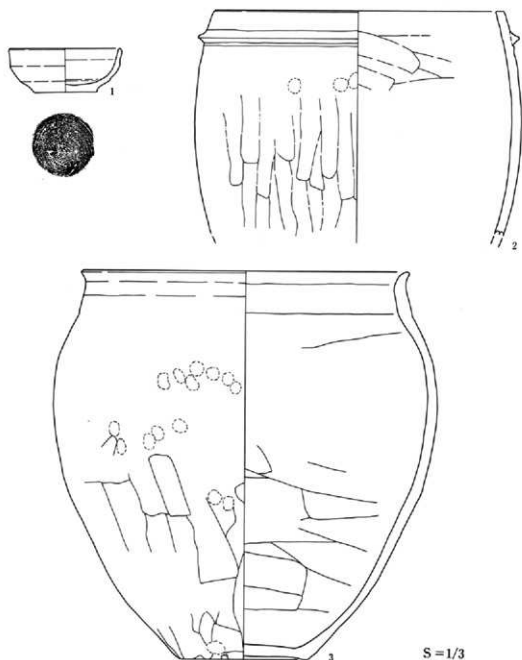
- 1 黒褐色土 淡い褐色土を含む。
- 2 淡褐色土 黒褐色土を少量含む。



39号住居跡床下土坑土層

- 1 黒褐色土 灰白色粘土を少量含むローム混在。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。

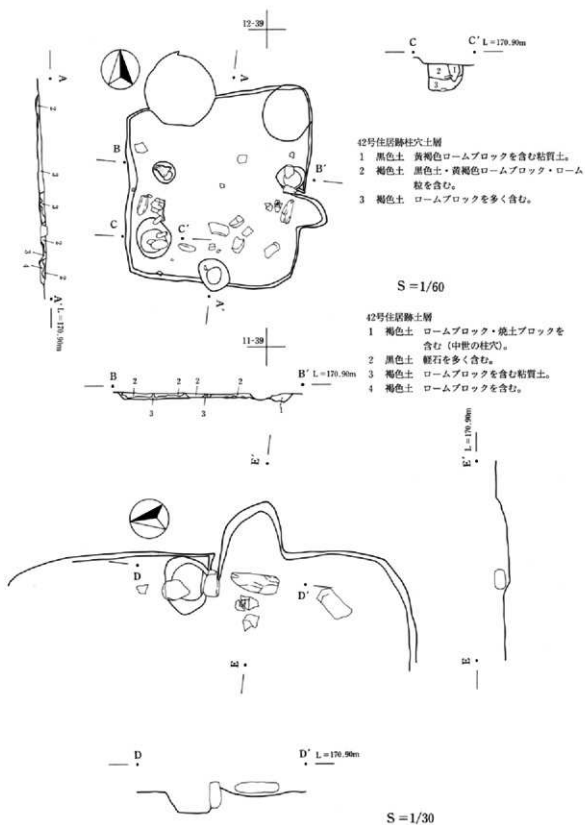
第642図 38・39・45号住居跡掘り方



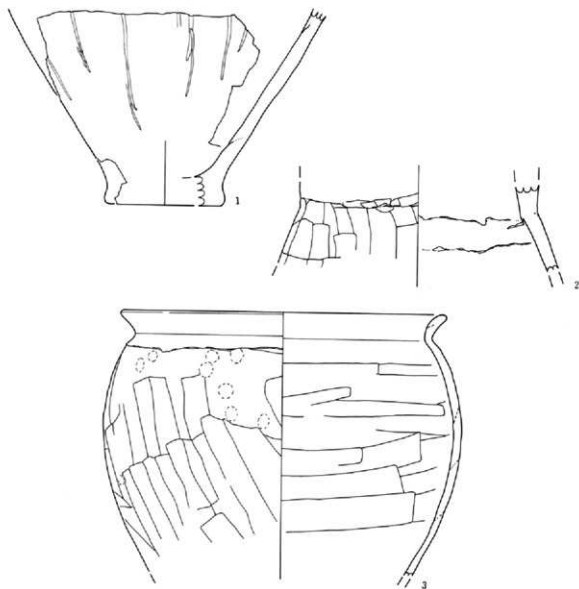
第643図 38号住居跡出土遺物

表102 38号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第643図 1	須恵器 坏	ほぼ 完形	床直	8.9・5.0 3.5	1. 細砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	ロタロ整形。底部回転糸切り。
第643図 2	須恵器 羽 釜	口縁か ら胴部	床直	22.9・— 17.5	1. 粗砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	口縁部は内反。口唇部は平。胴部は低い三角。口縁部上半は撫で調整。下半は鼠目に寛撫で調整。
第643図 3	甕	2/3	床直	25.7・10.0 30.5	1. 砂粒 2. 褐 3. 酸化焰 良	口縁部は僅かに外反。口縁は横撫で。胴部上半は撫で(指頭痕が顕著)。下半は寛用り。内面は寛撫で。



第644図 42号住居跡平面図



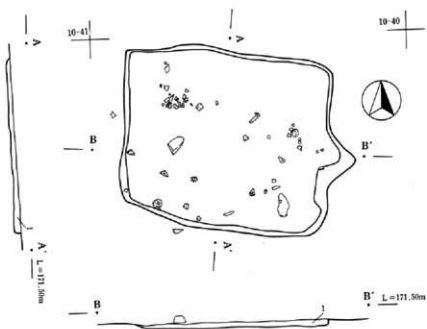
S=1/3

第645図 42号住居跡出土遺物

表103 42号住居跡出土土器観察表

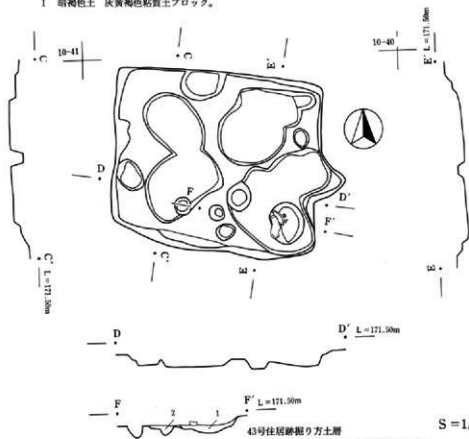
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第645図 1	縄文深鉢	胴下半		—・9.0 (16.2)	1.粗砂粒 2.にぶい青 3.良	底部近くまで垂下する比線が施される。
第645図 2	甕	頸部 破片			1.細砂粒 2.黄橙 3.酸化焰 良	口縁から頸部にかけて横線で、頸部以下は縦位の荒撫で。内面横撫で。
第645図 3	甕	口縁から 胴部		25.4・— 20.5	1.粗砂粒 2.にぶい青 3.酸化焰 良	胴が張り、口縁は外反。口縁部横撫で。胴上半は無で(指頭圧痕を残す)。下半は縦位に荒撫で。

第3章 検出された遺構と遺物



43号住居跡土層

1 暗褐色土 灰黄褐色粘質土ブロック。



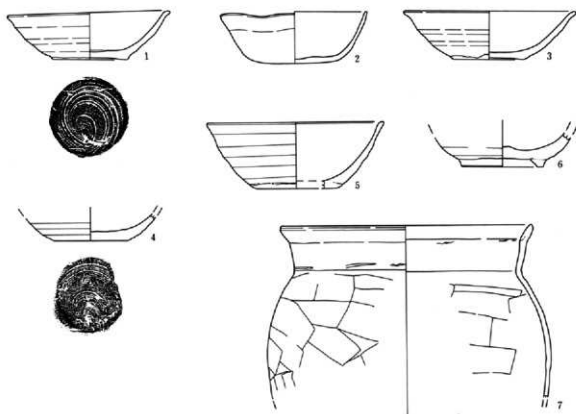
43号住居跡掘り方土層

1 暗褐色粘質土 焼土・炭化物粒を含む。
2 暗褐色土 ロームブロック。

S = 1/60

第646図 43号住居跡平面図

第5節 平安時代の遺構と遺物

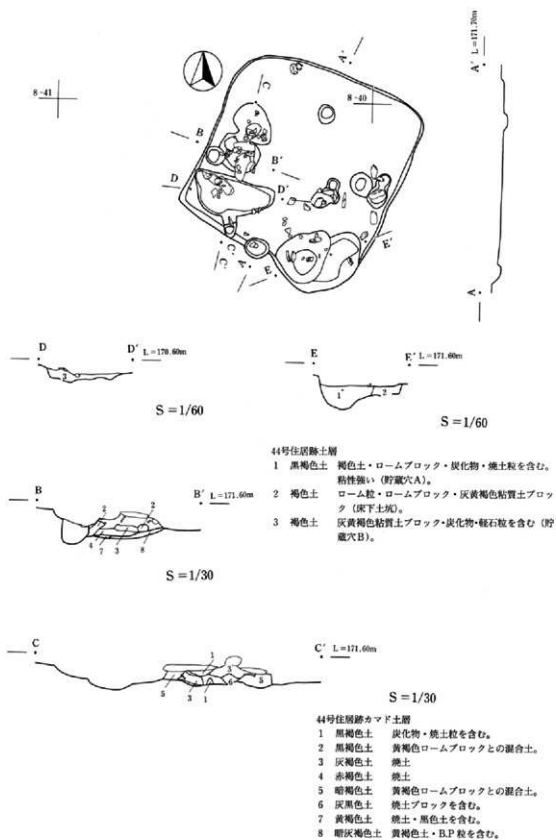


S=1/3

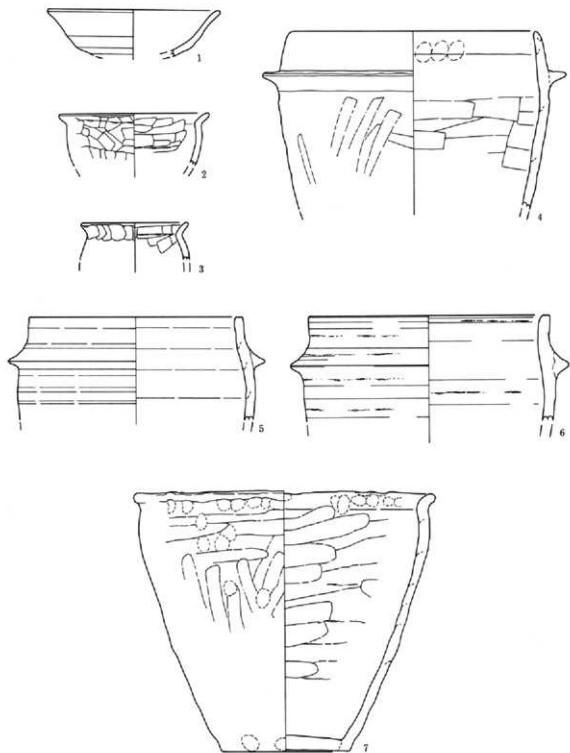
第647図 43号住居跡出土遺物

表104 43号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第647図 1	須恵器 坏	3/4	床直	12.6・6.0 3.7	1.細砂粒 2.暗灰 3.還元焰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第647図 2	坏	1/3	床下土 坑	12.0・7.0 4.1	1.細砂粒 2.明赤褐 3.酸化焰 良	口縁から体部は無で。底部は寛削り。
第647図 3	須恵器 坏	1/4		13.4・5.5 3.8	1.細砂粒 2.灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第647図 4	須恵器 坏	底部		—・5.8 (1.8)	1.細砂粒 2.灰白 3.還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第647図 5	須恵器 坏	1/4		14.1・6.4 5.2	1.細砂粒 2.灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第647図 6	須恵器 埴	底部		—・6.4 (2.3)	1.細砂粒 2.灰 3.還元焰 やや軟質	ロクロ整形。付け高台。
第647図 7	甕	口縁か ら胴部	床直	19.8・— (13.5)	1.砂粒 2.橙 3.酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横無で、横段無で。胴部は横寛削り。内面横狭で、横段無で。



第648図 44号住居跡平面図



S=1/3

第649図 44号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

表105 44号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第649図 1	須恵 環	1/3	床直	13.8・— (3.6)	1.砂粒 3.酸化焰	2.橙	口縁整形。
第649図 2	鉢	1/4	床直	12.0・— (4.1)	1.砂粒 3.酸化焰	2.褐色 良	口縁は短く、頸部で屈曲外反する。外面は段無でおよび張削り。内面は段無。
第649図 3	小形甕	1/4	床直	8.5・— (2.9)	1.砂粒 3.酸化焰	2.褐色 良	口縁は短く、外反する。外面は張で調整で、口縁部に指頭板が顕著。内面は段無。
第649図 4	須恵 羽蓋	口縁か ら胴部	床直	19.6・— (14.0)	1.粗砂粒 3.酸化焰	2.にぶい橙 良	口縁部は内反。口唇部は丸。胴部は強く突出。口縁から胴部上半は回転無で調整。下半は縦位の無で調整。
第649図 5	須恵 羽蓋	口縁か ら胴部	床直	17.0・— (8.0)	1.粗砂粒 3.酸化焰	2.橙 良	口縁部は内反。口唇部は平。胴部は三角。口縁から胴部および内面は回転無で調整。
第649図 6	須恵 羽蓋	口縁か ら胴部		19.2・— (8.3)	1.粗砂粒 3.酸化焰	2.褐色 良	口縁部は内反。口唇部は平。胴部は三角。口縁から胴部および内面は回転無で調整。
第649図 7	甕	1/3	床直	23.7・10.2 20.5	1.粗砂粒 3.酸化焰	2.にぶい褐 良	口縁は短く、外反する。外面は段無で調整で、口縁部に指頭板が顕著。内面は段無。

は中世城郭造成時の削平により薄く、壁高は最大で10cmほどを測る。床面は平坦で、竈前を中心に硬くしまった貼床面を確認することができた。掘り方調査では、床面全体に大小の床下土坑が数多く検出された。それぞれ円形や、楕円形を呈するものである。また竈石側において、貯蔵穴を検出できた。

竈は、東壁の中央よりやや南寄り位置している。残存状態は悪く、燃焼部が外へ張り出す形で、残存する竈の規模は幅50cm、奥行き50cmを測る。

貯蔵穴は床下面で検出され、径60cm、深さ15cmほどの円形を呈している。内部から大形の石が出土している。

遺物の出土量は余り多くなく、竈前を含めた全体に散漫に分布している。なお、電材として使用されたと考えられる大形の石が、破損し住居内にくっつか散在している。出土土器には、環・埴輪とコの字口縁の甕および小破片がある。

44号住居跡 (第648・649図 表105)

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、7・8—39・40グリッドに位置し、34・43号住居跡の南側にある。

平面形は、東西3.0m、南北3.0mを測るほぼ正方形を呈しているが、南東隅が少し張り出す。主軸方向は、北西を示す。覆土は中世城郭造成時の削平により薄く、壁高は最大で8cmほどを測る。床面は平坦で、竈前を中心に硬くしまった面を確認することができた。住居内に検出されたいくつかのピットは、本住居に伴わない可能性が高い。掘り方は、検出されていない。

竈はそのほとんどが壊されているが、西壁中央よりやや南寄りの床面が若干掘り窪められ、焼土を残していることから、この位置に竈があったものと考えられる。残存状態は極めて悪く、掘り窪められた部分が燃焼部と考えられ、周辺に電材として使用されたと考えられる被熱した石が散在する。

貯蔵穴は竈の右側の南西隅と、南東隅の2箇所で見出された。南西隅のものは長軸120cm、短軸55cm、深さ10cmほどの楕円形を呈している。南東隅のものは径75cmほどの円形を呈している。

遺物の出土量は余り多くなく、竈周辺および貯蔵穴から出土しているものが多い。出土土器には、坏と壺および羽釜がある。

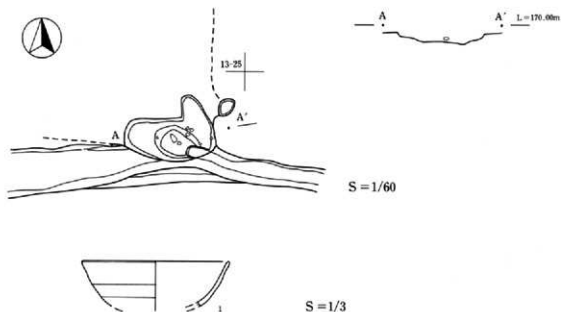
48号住居跡 (第650図 表106)

本住居跡は、東側台地の東縁辺寄りの平坦面にあり、13-25グリッドに位置し、53・56号住居跡の東側にある。中世城郭等により住居の大方の部分が削平をうけ、残存するのは住居の南東隅の部分でしかなく、残存状態は極めて悪い。

平面形は、方形を呈していたものと想定される。遺構確認時に、この南東隅付近でのプランが薄らと検出され、焼土粒の分布が確認された。覆土は中世城郭造成時の削平をうけ、床面等は残存していない。

竈はそのほとんどが壊され、東壁と思われる辺りに焼土粒の分布が認められた。

貯蔵穴は住居の南西隅に検出され、楕円形を呈し、若干ではあるが坏・壺等の小破片を数点出土させている。



第650図 48号住居跡平面図・出土遺物

表106 48号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第650図 1	須恵器 坏	1/4	貯蔵穴	11.8・— (3.5)	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焙良	ロクロ整形。

50号住居跡 (第651図 表107)

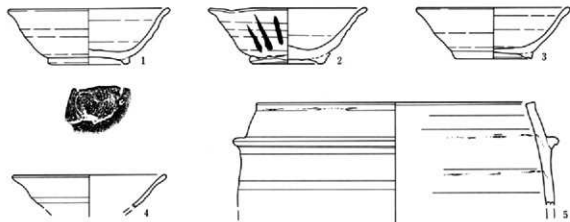
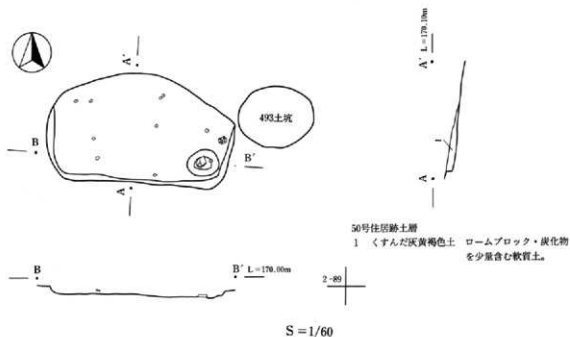
本住居跡は、西側台地のやや傾斜きつい北斜面にあり、2-89グリッドに位置し、51号住居跡の北西側で、493号土坑と隣接する。斜面地にある住居のため、住居の北側は調査できなかった。

平面形は、東西3.0mを測る方形を呈しているものと想定される。覆土は薄く、北斜面に位置するため南壁が最も残存しており、その壁高は10cmほどを測る。床面は北側部分を欠くが、硬くしまった平坦な面を確認することができた。掘り方は、検出できなかった。

竈は、東壁にあるものと考えられるが、残存していない。

貯蔵穴は住居の南東隅に位置し、径50cmほどの円形を呈している。

出土遺物は少なく、床面上に散漫に分布している。遺存率はかなり悪い。出土土器は、坏・埴類と羽釜があり、埴には墨書が記されている。



第651図 50号住居跡平面図・出土遺物

表107 50号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第651図 1	須志器 埴	2/3	床直	12.8・5.8 4.4	1.細砂粒 2.黒褐 3.還元焰 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第651図 2	須志器 埴	ほぼ 完成形	床直	12.6・5.4 4.4	1.粗砂粒 2.灰 3.還元焰 やや軟質	ロクロ整形。付け高台。墨書あり。
第651図 3	須志器 埴	1/2		11.9・6.0 4.0	1.細砂粒 2.灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。付け高台。
第651図 4	須志器 埴	1/4		12.2・— (2.5)	1.細砂粒 2.灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。
第651図 5	須志器 羽蓋	口縁 破片		19.0・— —	1.粗砂粒 2.暗灰 3.還元焰 良	口縁部は内反。口唇部内傾。唇部は三角。口縁から 胴部は回転盤で調整。

52号住居跡（第652・653図 表108）

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、9・10—36・37グリッドに位置し、42号住居跡の南西側、43号住居の北西側にある。住居は、中世城郭の内土塁下から検出された。また住居内には、中世の掘立建物の柱穴が2基検出されている。

平面形は、東西3.1m、南北3.7mを測り、南北に長い長方形を呈している。主軸方向は、東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平により薄く、壁高は最大で15cmを測る。床面は平坦で、竈前を中心に硬くしまった面を確認することができた。西壁・北壁および東壁には、部分的に幅10cmほどの壁周溝が検出され、さらにその内側の住居中央部にも同様の幅10cmほどの溝がコ字状に検出されている。また竈前および西側のピットは、中世のものである。掘り方面は検出されなかったが、南西隅に長軸100cm、短軸80cmほどの楕円形となる浅い床下土坑が、2基重複して検出されている。

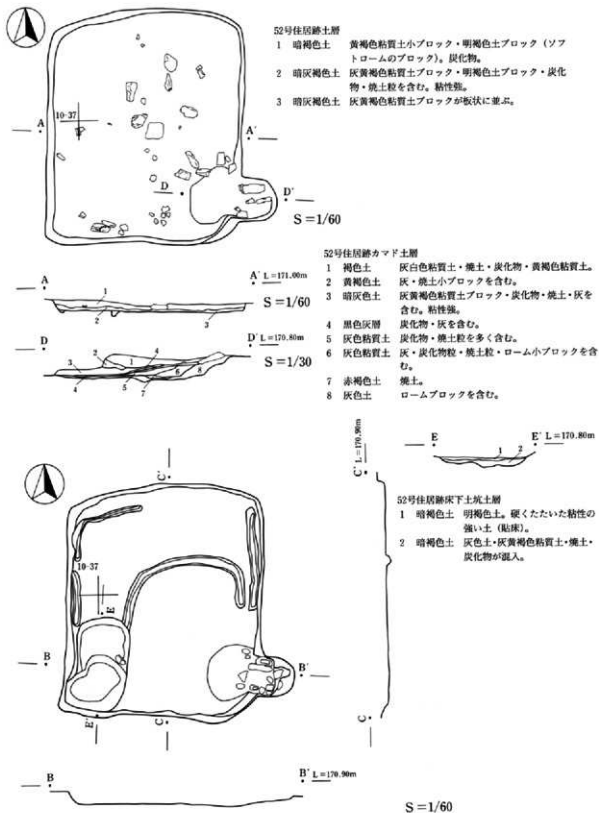
竈は、東壁の南東隅に寄った位置にある。竈前には、黒灰が薄く広がっている。袖部は不明であるが、燃焼部が外へ張り出す形で、残存する竈の規模は幅60cm、奥行き80cmを測る。残存状態は悪いが、竈使用面が上下2枚確認されている。底面および掘り方面には石の抜き取り痕がみられることから、袖石を含めた石組の構造であったものと考えられる。

貯蔵穴は、竈付近には検出されなかったが、南西隅に検出された床下土坑にその可能性をもつ。

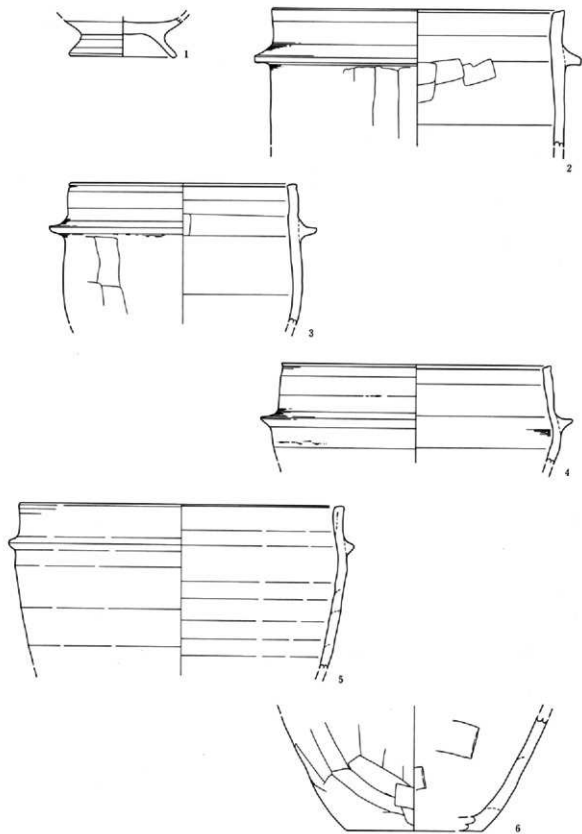
遺物の出土量は余り多くなく、住居全体に散漫に分布している。なお、竈材として使用されたと考えられる被熱した大形の石が、破損し住居内に散在している。出土土器には、埴・羽釜、甕の小破片がある。遺存状態は悪い。

53号住居跡（第654図 表109）

本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、11・12—28・29グリッドに位置し、56号住居跡と重複し、54号住居跡の南東、48号住居跡の南西側にある。重複する56号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が新しい。また中世城郭造成時の削平および掘に壊されているため、残存状態はきわめて悪く、住居の東側部分は残存していない。また住居内にみられるピットは、中世のものである。



第652図 52号住居跡平面図



第653図 52号住居跡出土遺物

S=1/3

第3章 検出された遺構と遺物

表108 52号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第653図 1	須恵器 埴	底部		—・8.4 (3.1)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. にぶい橙 良	口クロ整形。付け高台。
第653図 2	須恵器 羽蓋	口縁 破片	床直	23.3・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 良	口縁は直立。口唇部はやや内傾。罅は厚く高い。口縁部は回転横撫で。胴部は縦位の寛削り。
第653図 3	須恵器 羽蓋	口縁 破片	床直	18.2・— —	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 良	口縁は直立さみ。口唇部はやや内傾。罅は強く突出。口縁部は回転横撫で。胴部は縦位の寛削り。
第653図 4	須恵器 羽蓋	口縁 破片		21.2・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 褐橙 良	口縁部は内反。口唇部内傾。罅部は三角。口縁から胴部は回転撫で調整。
第653図 5	須恵器 羽蓋	口縁 破片	床直	25.8・— —	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 褐 やや軟質	口縁は直立さみ。口唇部は平。罅は低い三角。口縁部から胴部にかけて回転横撫で。
第653図 6	須恵器 羽蓋	底部 破片		—・10.8 9.1	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 赤褐 良	胴部下半の外面には縦位の削削り。内面は覆撫で。

平面形は、南北3.7mを測り、他住居と同様に方形を呈しているものと想定される。覆土は薄く、壁高は最大で25cmを測る。床面は平坦で、硬い面を確認することができた。56号住居と重複する部分は、貼床となっている。南壁および西壁際には、幅10cmほどの壁周溝が検出されているが、重複する部分の一部での検出は困難であったが、およそ住居内に巡っていたものと考えられる。また住居の南側の一部に、焼土粒の広がりが見られる。掘り方はもたないようであるが、重複する部分のみに貼床材としての灰黒褐色土が確認されている。

竈は、中世の1号竈により壊され不明。

貯蔵穴についても、不明。

遺物の出土はほとんどなく、わずかに坏・埴類と須恵器片を出土しただけである。遺存状態はきわめて悪い。

55号住居跡（第655・656図 表110）

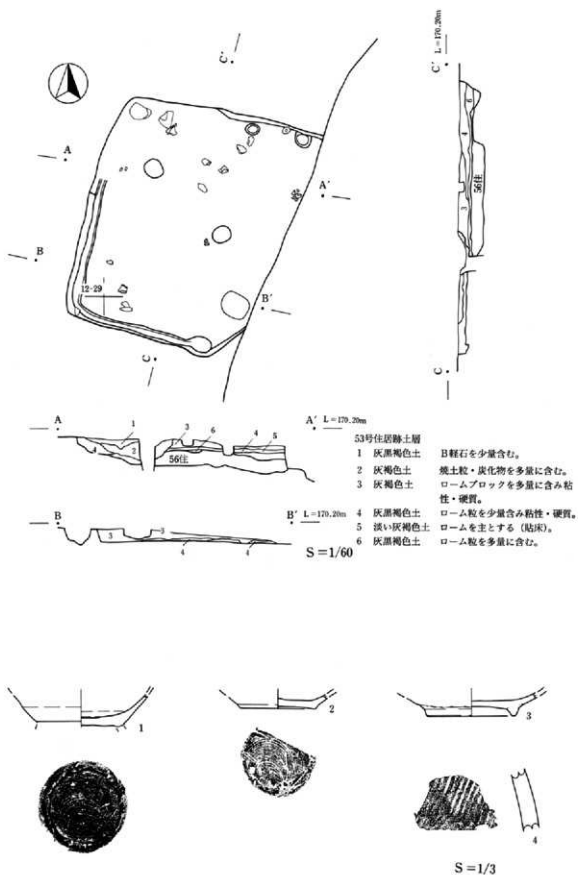
本住居跡は、西側台地の傾斜の緩くなった北斜面にあり、10-87グリッドに位置し、18号住居跡の南東20mほどのところにある。斜面地であることと、耕作や攪乱等により住居の大部分が削平をうけ、残存するのはわずかに掘り方に係わる床下土坑のみで、残存状態は極めて悪い。

平面形は、他の住居跡と同様な方形を呈していたものと想定される。壁および床面等は、残存していない。掘り方として、円形や楕円形の床下土坑が確認できた。

竈は壊され、存在しない。

貯蔵穴は不明である。

遺物は床下土坑内から出土しており、坏類とコの字口縁の甕がある。



第654図 53号住居跡平面図・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

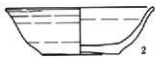
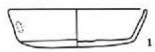
表109 53号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴	
第654図 1	須恵器 埴	底部		—・— (3.4)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 (酸化気味) 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台は刺高。
第654図 2	須恵器 埴	底部		—・6.0 (1.1)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第654図 3	須恵器 埴	底部		—・7.0 (1.8)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	ロクロ整形。付け高台。
第654図 4	須恵器 壺	胴部 破片			1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 良	外面に平行叩き目。

11-87

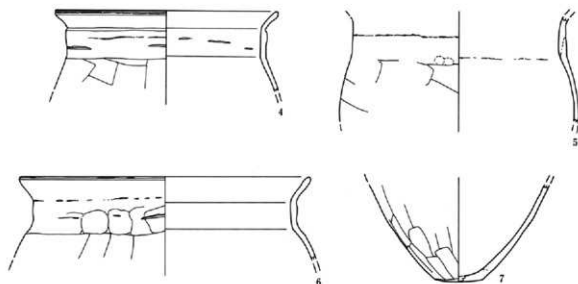


S=1/60



S=1/3

第655図 55号住居跡平面図・出土遺物



S=1/3

第656図 55号住居跡出土遺物

表110 55号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第655図 1	坏	3/4	床下 土坑	11.0・9.2 3.1	1.砂粒 2.赤橙 3.酸化焰 軟質	口縁から体部は撫で。底部は篋削り。器面の剥落が顕著。
第655図 2	須恵器 坏	1/4	床下 土坑	11.6・6.2 3.5	1.細砂粒 2.灰 3.還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第655図 3	須恵器 坏	2/3	床下 土坑	12.0・6.0 3.8	1.細砂粒 2.橙 3.酸化焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第656図 4	甕	口縁 破片	床下	17.8・— —	1.砂粒 2.褐橙 3.酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、横篋撫で。胴部横篋削り。内面横撫で。
第656図 5	甕	胴部 破片	床下		1.砂粒 2.橙 3.酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、胴部は横篋削り。内面横撫で。
第656図 6	甕	口縁 破片	床下 土坑	23.2・— —	1.砂粒 2.橙 3.酸化焰 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で、胴部は横篋削り。内面横撫で。
第656図 7	甕	底部	床下 土坑	—・3.8 (7.6)	1.砂粒 2.赤褐 3.酸化焰 良	胴部から底部にかけて縦位の篋削り。内面は篋撫で。

56号住居跡 (第657・658図 表111)

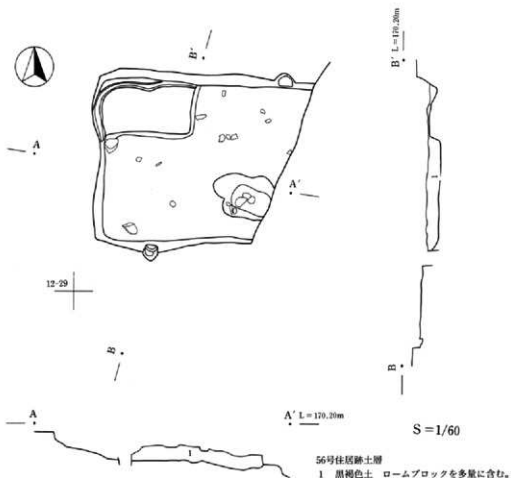
本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、12-28グリッドに位置し、53号住居跡と重複し、54号住居跡の南東、48号住居跡の南西側にある。重複する53号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が古い。また中世城郭造成時の削平および堀に壊されているため、残存状態は悪く、住居の東側部分は残存していない。

平面形は、南北2.7mを測り、東西に長い長方形を呈しているものと想定される。覆土は、重複する53号住居により覆土の上部を欠くため薄い。壁高は最大で38cmを測る。床面は平坦で、硬い面を確認することができた。住居の北西隅には、東西150cm、南北80cmほどの長方形のベット状に一段高い面があり、その壁際には周溝が巡る。この周溝は重複する53号住居に付随するものとも思われるが、調査時の所見としては本住居に伴うものと考えている。掘り方では、住居中央のやや南寄りに、床下土坑が検出されている。

竈は、中世の1号堀により壊され不明。

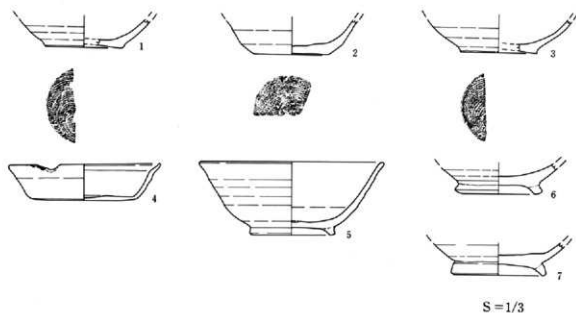
貯蔵穴についても、不明。

遺物の出土は少なく、わずかに環・埴類と甕の小片、および刀子の小片を出土しただけである。遺存状態は悪い。



第657図 56号住居跡平面図

第5節 平安時代の遺構と遺物



第658図 56号住居跡出土遺物

表111 56号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第658図 1	須恵器 坏	底部		—・6.0 (2.6)	1. 細砂粒 2. 灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第658図 2	須恵器 坏	底部		—・6.0 (2.8)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第658図 3	須恵器 坏	底部		—・6.0 (2.2)	1. 細砂粒 2. 灰白 3. 還元焰 良	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第658図 4	坏	完形	床下 土坑	11.8・8.0 3.2	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰 良	口縁部および内面は機織で。体部は撫で。底部は篋削り。
第658図 5	須恵器 埴	2/3	床直	14.4・6.0 5.7	1. 細砂粒 2. 灰白 3. 還元焰 やや軟質	ロクロ整形。付け高台。
第658図 6	須恵器 埴	底部		—・6.8 (2.4)	1. 細砂粒 2. 灰白 3. 還元焰 軟質	ロクロ整形。付け高台。
第658図 7	須恵器 埴	底部		—・7.5 (2.6)	1. 砂粒 2. 黄灰 3. 還元焰 軟質	ロクロ整形。付け高台。

第3章 検出された遺構と遺物

57号住居跡 (第659・660図 表112)

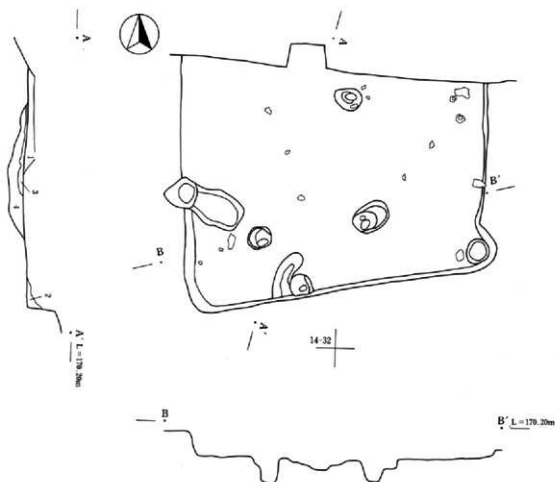
本住居跡は、東側台地のほぼ中央の平坦面にあり、14-31・32グリッドに位置し、69号住と重複し、10号住居跡の南東、54号住居跡の北西側にある。重複する69号住との新旧関係の認識、中世城郭造成時の削平および住居の北側は堀に壊されているため、残存状態は悪く、住居の東側部分しか検出できなかった。69号住居跡との新旧関係は、本住居跡の方が新しい。

平面形は、他の住居と同様に方形を呈しているものと想定される。覆土は薄く、壁高は最大で7cmを測る。床面は、平坦な硬い面を確認することができた。住居の南東隅には柱穴がみられるが、本住居に伴うかどうかは不明。掘り方では、南東隅に楕円状の床下土坑が検出されており、貯蔵穴の可能性が高い。

竈は、不明。

貯蔵穴については、先の床下土坑に可能性がある。

遺物の出土は少なく、床面上から環・埴類と甕（土釜）および小片、瓦片2点を出土しただけである。遺存状態は悪い。

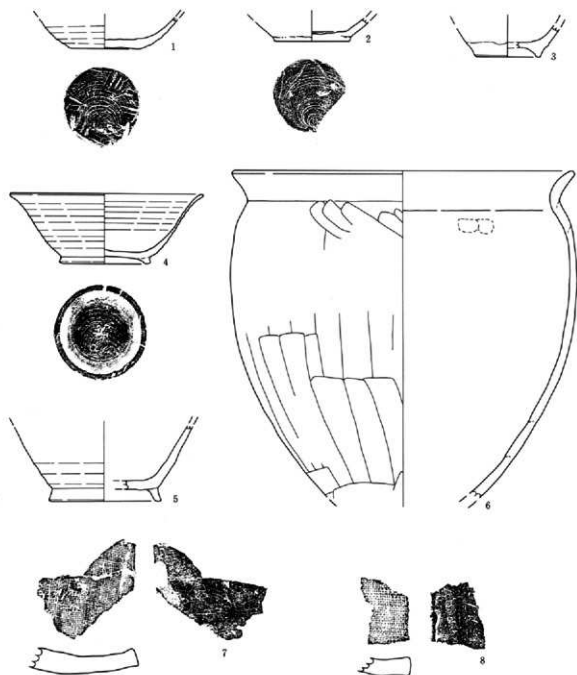


57号住居跡土層

- 1 暗褐色土 混入物少なく暗い。
- 2 明褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む（壁崩落土）。
- 3 褐色土 混入物少。1層より暗い。
- 4 褐色土 ローム粒・粘土粒を含み硬質。

S=1/60

第659図 57号住居跡平面図



第660図 57号住居跡出土遺物

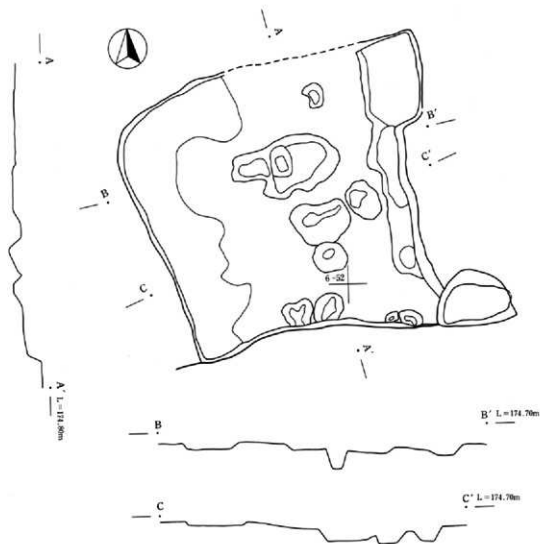
S=1/3

表112 57号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴	
第660図 1	須恵器 坏	底部	床直	—・5.6 (2.4)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。
第660図 2	須恵器 坏	底部		—・6.0 (1.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰 やや軟質	ロクロ整形。底部回転糸切り。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・直径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴	
第660回 3	須恵器 埴	底部		—・5.0 (2.2)	1. 細砂粒 3. 酸化焰 良	2. 褐橙 良	ロクロ整形。付け高台。
第660回 4	須恵器 埴	2/3	床直	15.4・6.5 5.5	1. 細砂粒 3. 還元焰 良	2. 黒 良	ロクロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第660回 5	須恵器 埴	底部	床直	—・8.6 (5.9)	1. 細砂粒 3. 還元焰 (酸化気味)	2. ぶい槽 良	ロクロ整形。付け高台。
第660回 6	埴	口縁から胴部	床直	26.7・— (25.7)	1. 粗砂粒 3. 酸化焰 良	2. 暗赤褐 良	割が張り、口縁が大きく外反する。口縁部横撫で。胴部上半は篋削り後撫で調整。下半は縦位の篋削り。
第660回 7	平瓦	破片			1. 粗砂粒 3. 酸化焰 良	2. 褐橙 良	布目あり。
第660回 8	平瓦	破片			1. 粗砂粒 3. 酸化焰 良	2. 褐橙 良	布目あり。



第661図 62号住居跡平面図

S=1/60

62号住居跡（第661図）

本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、5・6-51・52グリッドに位置し、59・60号住居および61号住居跡の南西側にある。住居の南側部分は調査区外にあるため、その全体像は不明である。住居の北東部は26号溝によって壊され、南東部の調査区境は709号土坑と重複して壊されている。重複する709号土坑との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が古い。なお本住居は中世城郭造成時の削平等により、掘り方調査だけである。残存状態はきわめて悪い。

平面形は、東西4.0mを測る方形を呈しているものと想定される。中世城郭造成時の削平をうけているため、壁および床面はなく、掘り方面は、全体に凹凸のある状態を呈し、中央には床下土坑とも考えられる掘り込みがみられる。

竈は検出されず、不明である。

貯蔵穴についても、不明。

遺物は、出土していない。

63号住居跡（第662・663図 表113）

本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、9・10-41・42グリッドに位置し、65号住居跡と重複し、33・34号住居跡の西側、36号住居跡の北に隣接している。重複する65号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居が新しい。

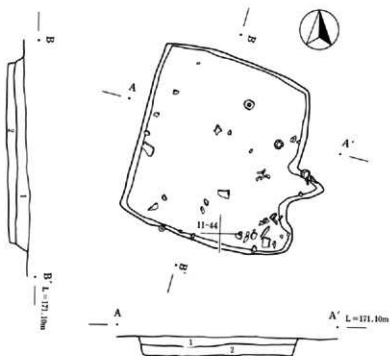
平面形は、東西3.4m、南北3.5mを測るほぼ正方形を呈しているが、東壁の南東隅が食い違うように段ができています。主軸方向は、東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は最大で18cmを測る。床面は平坦で、竈前から中央部にかけて硬くしまった面を確認することができたが、壁際はやや弱い。また住居の南壁際には、幅10cmほどの周溝が検出されている。掘り方については、竈前と中央よりやや北側に床下土坑が2基検出された。竈前のものは径110cm、深さ20cm前後の不整形を呈し、北側のものは長軸90cm、短軸70cm、深さ30cmを測る楕円形を呈するものである。他にピットが2基検出されている。

竈は、東壁の南寄りに位置している。左側の袖部が住居内に大きく突き出て、それと対象となる右側の袖は食い違う東壁を共有する。燃焼部は住居内にあり、煙道部が外へ張り出す形で、竈全体の規模は幅70cm、奥行き90cmを測る。煙道部は、燃焼部奥壁から斜めに上がるように続くが、煙道部の両側には大形の石が据えられている。燃焼部の中央には、支脚として長い石が直立している。

貯蔵穴は住居の南西側に位置し、径75cm、深さ34cmを測る円形を呈している。

遺物の出土量は少なく、竈内および竈前に分布している。なお、竈材として使用されたと考えられる被熱した大形の石が、破損し散在している。出土土器には、埴と羽釜があり、羽釜は竈内より多く出土している。他に瓦が1点出土している。さらに多くの縄文土器が、覆土中から出土している。

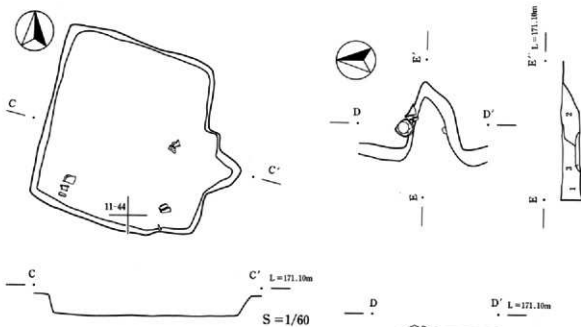
第3章 検出された遺構と遺物



63号住居跡土層

S=1/60

- 1 黒色土 ローム粒子殆ど含まず粒子密、白色礫石少量含む。
- 2 黒色土 1層に類するがローム粒子をやや多く含む。



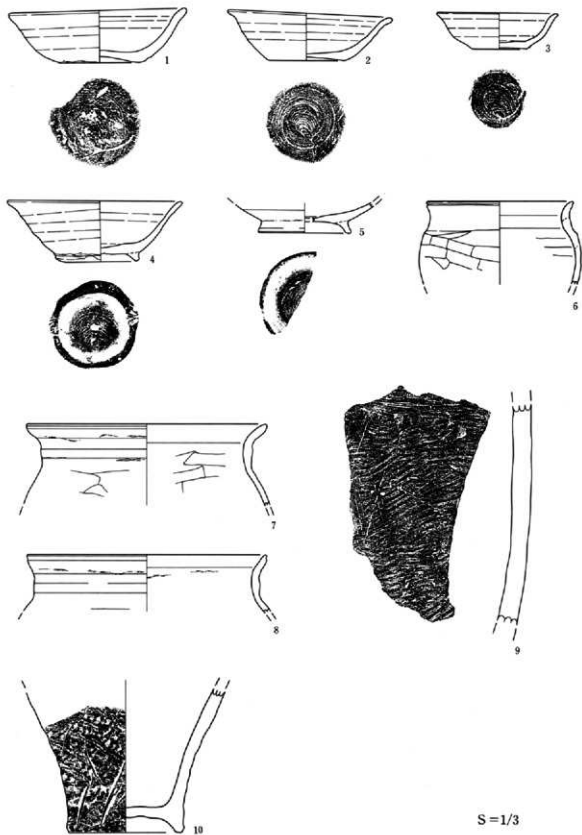
63号住居跡のMFD土層

S=1/60

- 1 暗褐色土 黒褐色土を主とし少量のローム粒子を含む。
- 2 赤褐色土 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。
- 3 灰黒色土 灰色の粘土を多く含む。

S=1/30

第662図 63号住居跡平面図



S=1/3

第663図 63号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

表113 63号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第663図 1	須恵器 環	完形	床直	14.0・6.4 4.1	1.砂粒 3.還元焰	2.ぶい湯 (酸化気味)	クロ整形。底部回転糸切り。
第663図 2	須恵器 環	ほぼ 完形	床直	13.1・6.0 3.7	1.細砂粒 3.還元焰	2.黄灰 軟質	クロ整形。底部回転糸切り。
第663図 3	須恵器 環	完形	床直	9.6・4.4 2.8	1.細砂粒 3.還元焰	2.黄橙 良	クロ整形。底部回転糸切り。
第663図 4	須恵器 埴	ほぼ 完形	竈内	13.8・5.7 4.8	1.細砂粒 3.還元焰	2.灰白 やや軟質	クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第663図 5	須恵器 埴	底部		—・7.4 (2.4)	1.細砂粒 3.還元焰	2.灰 良	クロ整形。底面に回転糸切り。付け高台。
第663図 6	小形壺	口縁から 胴部	竈前	11.6・— (6.5)	1.砂粒 3.酸化焰	2.黄橙 良	僅かに外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部は横置削り。内面横撫で、横置撫で。
第663図 7	壺	口縁 破片		19.2・— —	1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部は横置削り。内面横撫で、横置撫で。
第663図 8	壺	口縁 破片		19.0・— —	1.砂粒 3.酸化焰	2.褐橙 良	外反するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部は削り。内面横撫で。
第663図 9	須恵器 壺	胴部 破片			1.砂粒 3.還元焰	2.暗灰 良	外面に平行叩き目。

64号住居跡 (第664図)

本住居跡は、東側台地の中央部より西寄りの平坦面にあり、9—40グリッドに位置し、33・34号住居跡と重複し、43号住居跡の西側、36・37号住居跡の東側にある。重複する33・34号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から34号住居が最も新しく、次いで本住居、最も古いものが33号住居の順となる。ちなみに33号住居跡は、弥生時代末から古墳時代初頭の住居である。残存状態は、中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけていることと、34号住居に壊されていること等からかなり悪く、竈周辺の掘り方の一部が検出されただけである。

平面形は、方形を呈していたものと推測され、主軸方向は、およそ東を示すものであろう。覆土は削平され、壁は竈から南東部の一部で確認されただけである。床面は不明で、竈前が若干掘り下げることができた。他の住居に伴う施設は不明である。

竈は、東壁のやや南寄りに位置しているものと考えられるが、残存状態は悪い。燃焼部が住居外へ張り出す形で、残存する規模は幅50cm、奥行き35cmを測る。

貯蔵穴は、竈の右側で大きく竈にまで延びるように位置し、その規模は短軸90cm、長軸120cm、深さ6cmを測り、浅い楕円形を呈している。

遺物は、わずかに竈内から壺の胴部片が数点出土しただけである。

68号住居跡 (第665・666図 表114)

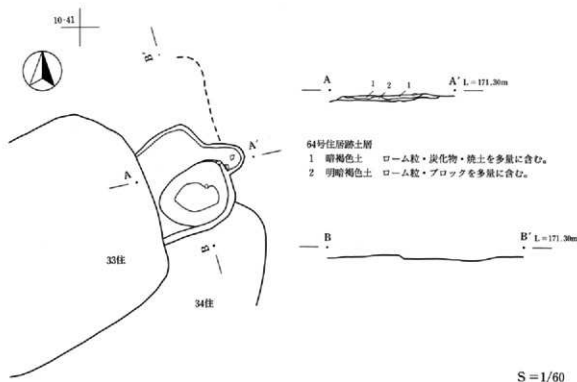
本住居跡は、東側台地の西寄りの平坦面にあり、8・9-43グリッドに位置し、58号住居跡と一部重複し、36号住居跡の南側にある。重複する58号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況および出土遺物等から本住居が新しい。

平面形は、東西3.2m、南北3.8mを測る南北に長い長方形を呈している。主軸方向は、東を示す。中世城郭造成時の整地に伴う削平をうけているため覆土は薄く、壁高は最大で18cm程を測る。床面は平坦で、竈前から中央部にかけて硬くしまった面を確認することができたが、壁際はやや弱い。掘り方については、住居全体に約20cm程掘り下げることができ、さらに竈前の中央部に浅い床下土坑が2基検出された。竈前のは径80cm前後の円形を呈し、中央のものは長軸110cm、短軸80cmを測る楕円形を呈するものである。他にピットが南西隅に1基検出されている。

竈は、東壁の南寄りに位置している。両袖部が住居内に突き出て、燃焼部は住居外へ張り出す形で、袖部を含めた竈の内壁には石が用いられている。竈全体の規模は幅80cm、奥行き100cmを測る。竈底面は、燃焼部がやや窪んでいる。

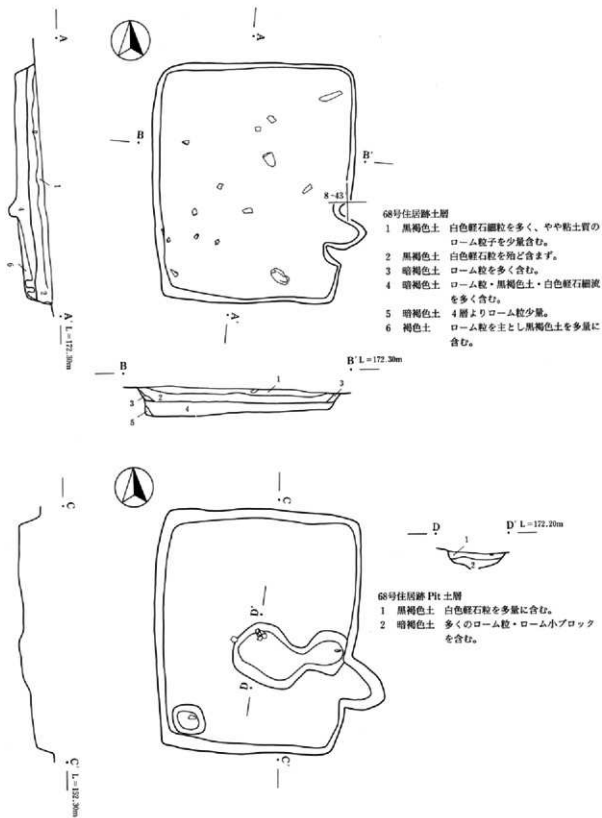
貯蔵穴は、検出されていない。

遺物の出土量は少なく、竈材として使用されたと考えられる被熱した大形の石が、散在している。出土土器には、甕と羽釜の小片であり、床下土坑内からも若干出土している。他に瓦が1点出土している。



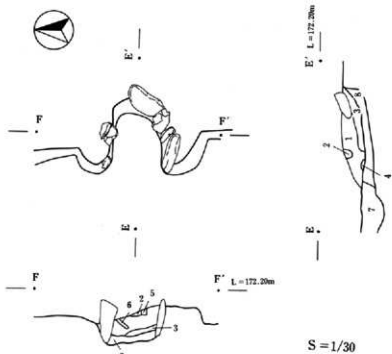
第664図 64号住居跡平面図

第3章 検出された遺構と遺物



S = 1/60

第665図 68号住居跡平面図



68号住居跡カマド土層

- 1 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
- 2 黒色土 炭黒色の粘土を主とする。
- 3 赤色土 黒褐色土中に多くの焼土粒を含む。
- 4 褐色土 ローム層を主とし少量の黒褐色土を含む。
- 5 赤色土 焼土粒を主とする。
- 6 褐色土 ローム粒を主・少量の黒褐色土を含む。
- 7 暗褐色土 白色軽石細粒を多く含む。
- 8 褐色土 ローム粒を主・焼土粒・焼土小ブロックを含む。



S=1/3

第666図 68号住居跡カマド・住居出土遺物

表114 68号住居跡出土土器観察表

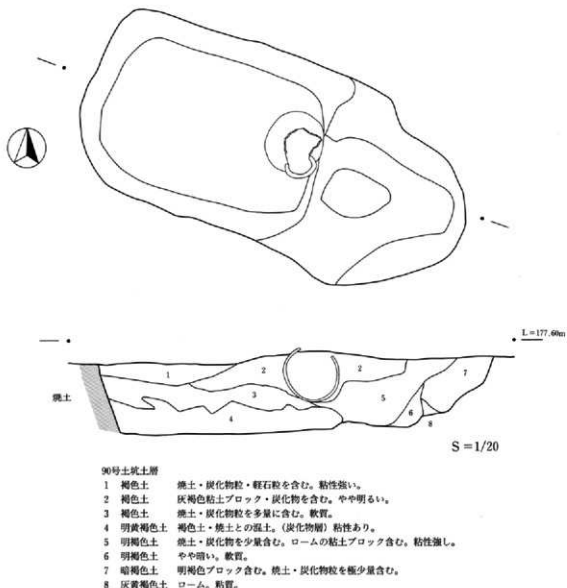
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第666図 1	平瓦	破片			1. 粗砂粒 2. しぶい橙 3. 酸化焰	2. にぶい橙 布目あり。

2. 土 坑

本遺跡で検出された800基余の土坑のうち、この時期の所産の土坑には6基が上げられる。後述する中世土坑、不明土坑として扱った中でも、平安時代の遺物を出土させる土坑は存在するが、共伴する遺物に明らかに異なる時代のものを含むため、本項とは分別して扱うこととした。

90号土坑 (第667図 表115・116)

西側台地北斜面の傾斜の緩くなった1区で、18号住居跡の東側にあり、13-88グリッドに位置する。平面形状は、不整な長方形を呈し、長軸2.1m、短軸0.98m、深さ40cmを測る。焼土、炭化物を含む褐色系の土を覆土とし、覆土中からは第669図に示すほぼ完形の土師器の壺が出土している。

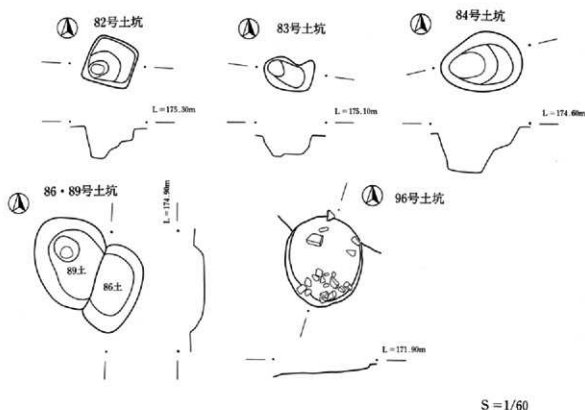


第667図 90号土坑

82～84・86・89・96号土坑については、第668図および表115に示す通りであり、89土坑からは第669図1の甕が出土し、他の土坑からは土師器・須恵器の小破片が出土している。

3. 遺構外出土土器 (第670～674図 表117)

ここで扱った遺構外出土土器は、表土および中世城郭の堀等から出土したもので、明らかに平安時代の遺構に伴わないものである。特に、表土に次いで、中世城郭の7号堀から出土したものが多し。器種には、環、埴、皿、蓋、羽釜、甕、甕等があり、須恵器、灰軸陶器、土師器から構成されている。また、これらの中には、墨書土器も含まれている。



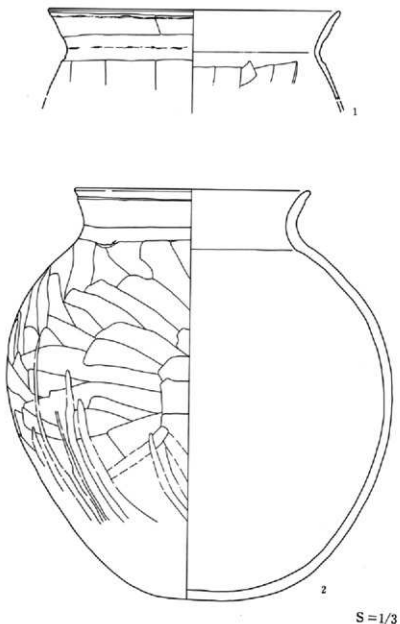
S=1/60

第668図 平安時代土坑平面図

表115 平安時代土坑一覧表

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
82	16-87	方 形	0.76	0.74	49	
83	17-87	楕 円	0.78	0.48	31	
84	17-87	楕 円	1.24	0.94	57	
86	15-84	楕 円	1.33	(0.75)	8	
89	15-84	楕 円	1.35	1.08	31	
90	13-88	不整長方	2.10	0.98	40	
96	14-78	円 形	1.38	1.24	14	

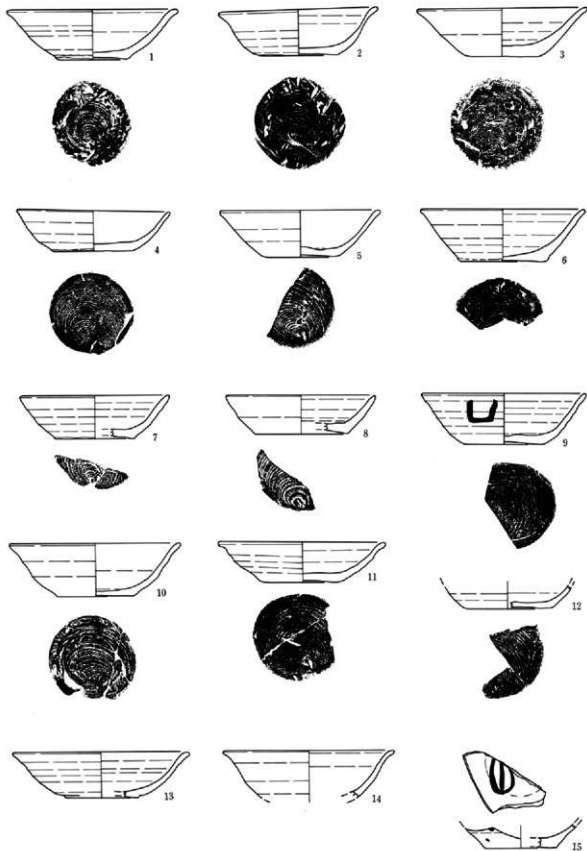
第3章 検出された遺構と遺物



第669図 土坑出土遺物

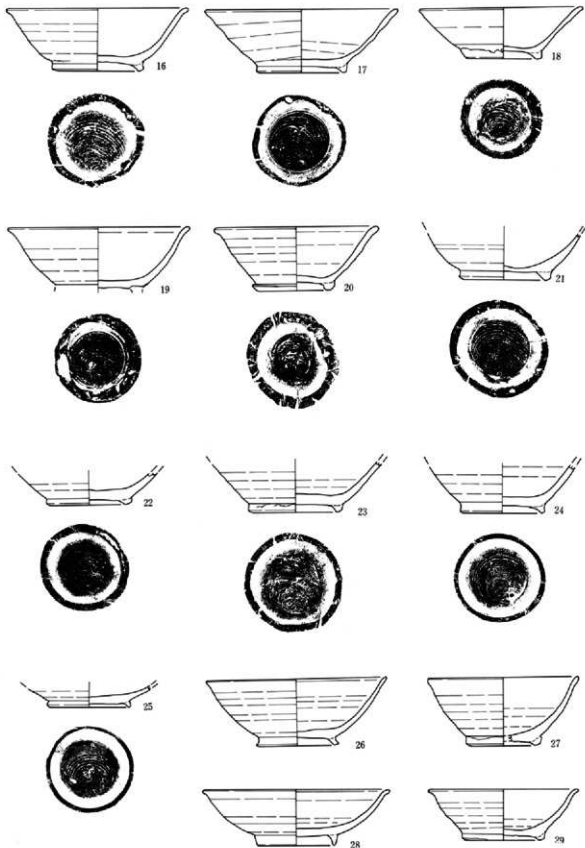
表116 89・90号土坑出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第669図 1	甕	口縁 破片	89号 土坑	23.1・— —	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. によい橙 良	外反するコの字さみの口縁。口縁部横撫で。胴部は横尻削り。内面横撫で、横尻撫で。
第669図 2	甕	ほぼ 完形	90号 土坑	18.4・— 32.4	1. 粗砂粒 3. 酸化焰	2. 明褐色 良	口縁は外反し、胴が大きく張る。口縁部は横撫で。胴上半は尻削り。下半は無で。



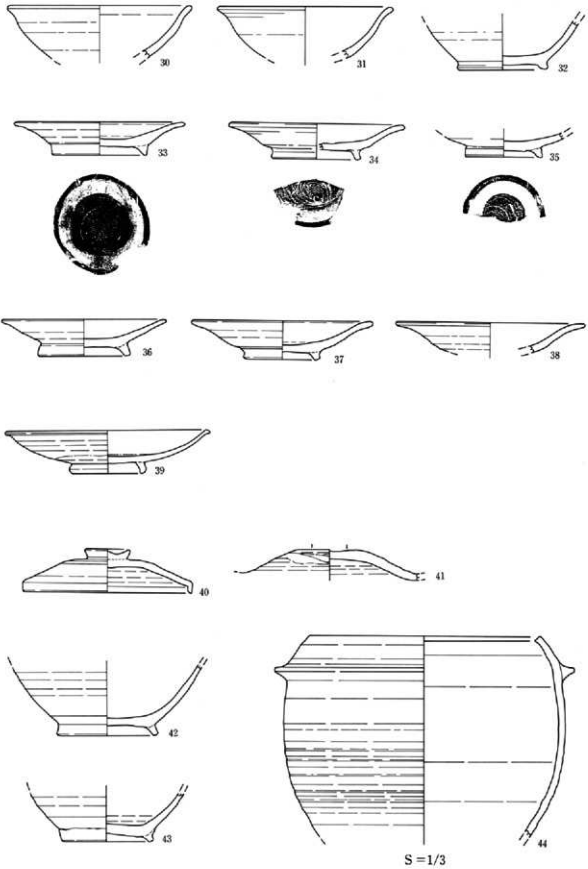
S=1/3

第670図 遺構外出土遺物(1)



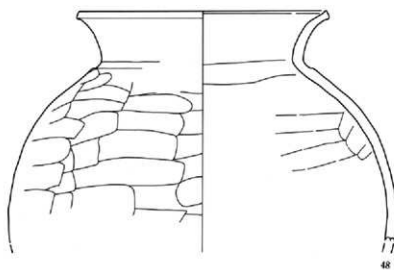
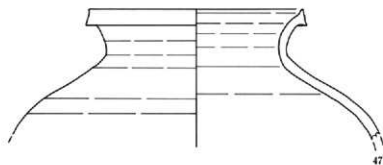
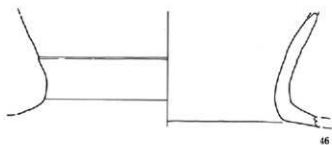
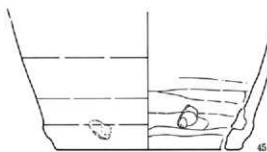
第671図 遺構外出土遺物(2)

第5節 平安時代の遺構と遺物



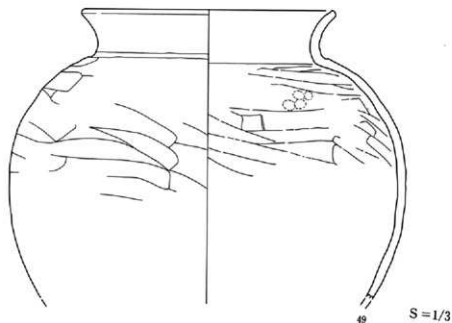
第672図 遺構外出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物



S=1/3

第673図 遺構外出土遺物(4)



第674図 遺構外出土遺物(5)

表117 遺構外出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第670図 1	須恵器 坏	ほぼ 完形	C区	(13.4)・5.3 4.0	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄褐色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 2	須恵器 坏	ほぼ 完形	C区	12.5・6.3 3.7	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 3	須恵器 坏	ほぼ 完形	B区	13.3・5.7 3.8	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 褐色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 4	須恵器 坏	ほぼ完 形	H区	12.1・6.4 3.2	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰白	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 5	須恵器 坏	1/4	B区	(12.6)・(5.5) (3.7)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰黄色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 6	須恵器 坏	1/5	B区	(12.9)・(6.8) (4.1)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 7	須恵器 坏	1/2	B区	11.2・(6.3) 3.4	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 8	須恵器 坏	1/4	H区	(11.8)・(7.5) (3.1)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 9	須恵器 坏	1/2	表探	(13.0)・6.2 4.0	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。墨書あり。
第670図 10	須恵器 坏	ほぼ 完形	B区	(14.7)・(6.6) (4.2)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 11	須恵器 坏	ほぼ 完形	B区	13.2・6.6 4.2	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 浅黄橙	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 3.焼成	2.色調	成・整形の特徴
第670図 12	須恵器 環	1/2	B区	— ・ 6.7 —	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 灰黄褐色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 13	須恵器 環	1/5	B区	(13.8) ・ (5.7) (3.6)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第670図 14	須恵器 埴	1/5	B区	(13.6) ・ — (3.8)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄褐色	ククロ整形。
第670図 15	須恵器 環	底部片	表採	— ・ 5.6 —	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄褐色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。内外面に墨書あり。
第671図 16	須恵器 埴	ほぼ 完形	B区	(14.3) ・ 6.5 5.0	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 褐色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 17	須恵器 埴	ほぼ 完形	B区	(15.2) ・ 7.0 5.0	1. 細砂粒 3. 酸化焰	2. 褐色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 18	須恵器 埴	ほぼ 完形	H区	12.9 ・ 5.7 4.1	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黄灰色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 19	須恵器 埴	1/2	B区	14.4 ・ — (4.9)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 20	須恵器 埴	ほぼ 完形	H区	12.7 ・ 5.8 5.0	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰黑色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 21	須恵器 埴	体部か ら高台	C区	— ・ 6.5 (3.7)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 22	須恵器 埴	体部か ら高台	B区	— ・ 6.0 (2.5)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 23	須恵器 埴	体部か ら底部	B区	— ・ 6.8 (4.0)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 24	須恵器 埴	体部か ら底部	H区	— ・ 6.2 (4.4)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 25	灰釉陶器 皿	体部か ら高台	C区	— ・ 6.3 (1.7)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 26	須恵器 埴	ほぼ完 形	B区	(14.4) ・ 5.0 (5.3)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 27	須恵器 埴	1/3	B区	(11.9) ・ (6.0) (5.4)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第671図 28	灰釉陶器 埴	1/5	C区	(14.6) ・ 6.1 (4.4)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰白色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。輪は不明瞭。
第671図 29	須恵器 埴	1/5	H区	(11.8) ・ (5.8) (4.0)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 黒色	ククロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 30	須恵器 埴	口縁か ら体部	B区	(14.6) ・ — (4.2)	1. 細砂粒 3. 還元焰	2. 灰色	ククロ整形。

第5節 平安時代の遺構と遺物

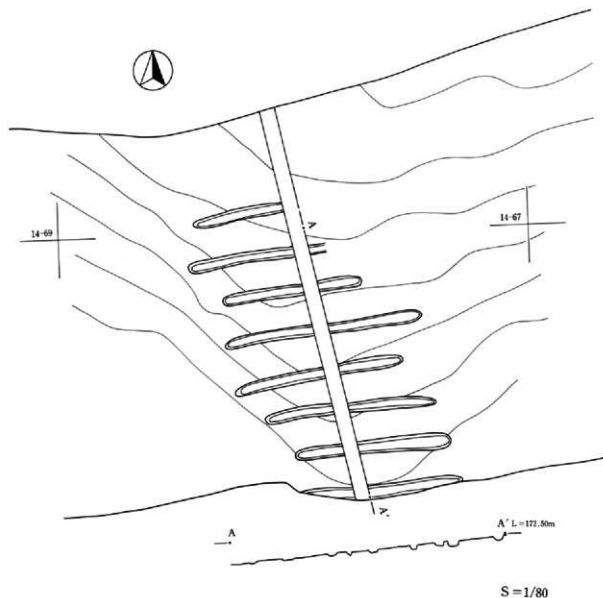
遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1.胎土 2.色調 3.焼成	成・整形の特徴
第672図 31	須恵器 環	口縁から 体部	B区	(14.0)・ (4.0)	1.細砂粒 2.褐色色 3.還元焰	ロクロ整形。
第672図 32	須恵器 埴	体部から 高台	B区	—・(3.8) (7.0)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 33	須恵器 埴	体部から 高台	B区	—・7.5 (5.5)	1.細砂粒 2.灰白色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 34	須恵器 埴	体部から 高台	B区	—・7.2 (3.9)	1.細砂粒 2.黄褐色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 35	須恵器 皿	ほぼ完 形	B区	(13.4)・7.4 (2.7)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 36	須恵器 皿	ほぼ完 形	B区	(14.0)・(7.2) (2.8)	1.細砂粒 2.淡褐色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 37	須恵器 皿	体部から 高台	B区	—・(6.0) (1.9)	1.細砂粒 2.褐色色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 38	須恵器 皿	完形	B区	(13.0)・(7.0) 2.9	1.細砂粒 2.灰黄色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 39	須恵器 皿	ほぼ完 形	C区	(14.2)・5.6 (3.1)	1.細砂粒 2.灰白色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 40	須恵器 皿	口縁から 体部	B区	(15.0)・ (3.3)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	ロクロ整形。
第672図 41	灰輪陶器 皿	ほぼ完 形	C区	(16.2)・(5.6) (4.4)	1.細砂粒 2.灰白色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。軸は潰け掛け。
第672図 42	須恵器 蓋	完形	H区	(13.4)・ (3.4)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 43	須恵器 蓋	1/4	H区	—・ (1.9)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
第672図 44	須恵器 羽釜	口縁から 胴部	B区	(18.4)・ (15.8)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	口縁部は内反する。口唇部は平。胴部は低い三角。口縁から胴部にかけて回転漉で調整。
第673図 45	須恵器 甕	胴部から 底部	B区	—・(14.5) (10.2)	1.細砂粒 2.黄褐色 3.還元焰	胴部外面に回転漉で。内面に横漉で。
第673図 46	土師器 甕	口縁から 頸部	表採	—・ (8.2)	1.細砂粒 2.褐色 3.還元焰	胴部外面に撫で。内面に横漉で。
第673図 47	須恵器 甕	口縁から 胴部	H区	(17.0)・ (9.9)	1.細砂粒 2.灰色 3.還元焰	口縁部は外反する。口唇部は平。胴部外面に回転漉で。内面に横漉で。
第673図 48	土師器 甕	口縁から 胴部	表採	19.5・ (18.2)	1.細砂粒 2.褐色 3.還元焰	口縁部は外反する。口唇部は平。頸部に横漉で。胴部内・外面に荒削り。
第674図 49	土師器 甕	口縁から 胴部	表採	(19.8)・ (22.7)	1.細砂粒 2.褐色 3.還元焰	口縁部は丸味があり外反する。頸部に横漉で。胴部内・外面に荒削り。内面に圧痕あり。

4. 畠状遺構 (表675図)

中央台地と西台地の間の低地となるF区において、B軽石下の畠状遺構が検出された。このF・H区は、台地間の低地部分であったことから、遺構の存在がないものと考えられており、工事用道路としての引渡し之急がれていた。そこで、遺構の存在の有無を確認するため、試掘調査がなされた結果、中世土坑および遺物包含層の存在が知れることとなり、本調査がなされた。

畠状遺構は、F区の南側で、13・14-67・68グリッドに位置し、約100m²の広さの中に溝状に畠のさきが検出された。地表面から約1.2mほどの深さで、B軽石の準層に薄く覆われていた。この場所は、周辺よりも若干低くくぼむ位置で、B軽石の堆積が明瞭であったために検出できたものと思われ、この畠状遺構がもう少し広い範囲に存在したものと考えられる。

畠状遺構内からの出土遺物はないが、その下部からは土師器片が若干出土している。



第675図 F区畠状遺構図

第6節 中世の遺構と遺物

本遺跡地は、調査以前から中世城郭の存在が知られていた。このため城郭はもとより、その周辺での中世遺構の存在が予測できた。調査対象となった中世城郭は、高速道路の本線部分が城郭のほぼ中央を東西に横切る形で、しかもその東縁辺および北側は高速道路に付属する側道となる計画であり、この調査によって城郭のおよそ半分が調査対象地となった。この城郭については、城郭研究の第一人者であった（故）山崎一氏によって「群馬県古城址の研究一下巻」（1972）の中で、「植松城」として紹介されている。その後、吉井町が刊行した城郭内の鉄塔工事に伴う調査報告書（1986）では、鉄塔調査の結果を基に縄張り図の修正と考察が行われている。さらに、群馬県教育委員会発行の「群馬県の中世城郭跡」（1988）の中で同氏は、本調査の内容を盛り込んだ修正図と考察を加えている。なお、同書では辛科神社の社人神保氏の城と規定した上で、植松城ではなく「神保城」と呼称している。そこで本書では、こうした経緯を踏まえ、本中世城郭を「神保城（植松城）」として兩名を併用する形で呼称することとした。

城郭に伴う遺構としては、城郭および城郭内の各郭を区画する堀、堀内の橋脚、土橋、外土居・内土居、各郭内の掘立建物、櫓列、木戸・門跡、井戸、土坑、竪穴状遺構等が検出され、この内の掘立建物は城郭中央の二つの郭内から数十棟もみつかっている。こうした城郭調査例は、群馬県内でも無く、本城郭の存在時間幅および性格を解明できる内容で、中世城郭研究にとっても良好な資料と言える。なお、本調査では、工事予定地内に含まれていた城郭の北端斜面および東斜面については、斜面下に現耕作地ならびに住宅があったため、その安全性から斜面部の調査を行うことはできなかった。

城郭以外の遺構としては、土坑墓、城郭外の掘立建物、さらには西側台地で検出された竪穴状遺構等がある。これらの各遺構も、城郭とほぼ同じ時期に存在したものと考えられ、在地における中世研究の良好な資料と言える。

1. 城郭の堀と郭

本城郭は、稲荷山から北へ延びる台地の中でも東端の台地で、北流し鏡川にそそぐ大沢川の西側台地上に位置し、台地の付け根の辺りから先端部にかけてを利用した城郭で、東側は大沢川への崖となっている。また、台地の西側中央部を谷間に、台地の北側へ廻り込むように、大沢川へ開口する深い谷が弓なり状にある。このため北側から西側へかけては、東側の崖の高低差ほどではないが、急な斜面となっている。

こうした地形に選地した本城郭は、調査前の現況としては桑畑が主体の畑地であり、城郭の外側を画すると思われる堀跡が、幅10m、高低差1～1.5mほどで北側から西側、南側へと帯状にみられ、南側の堀の内側には土居が2mほどの高さで残存していた。この堀の西側には、古墳が点在しており、特に稲荷山との間には集中して存在する。また、南側の堀の南方約70mほどには、稲荷山の裾から東側の大沢川へ延びる竪堀状の堀と思われるものがみられる。西側は、堀の西方約70mほどが平坦となり、その西側は西台地との低地帯となる。この西側の平坦部が、稲荷山から北へ延びる台地の付け根部分にあたり、くびれて最も狭くなった場所となっている。北側の台地先端部斜面は、狭いテラスを持ちながら段状に下る。

城郭内部は、概ね平坦で、その広さは堀の内側で南北185m、東西125mを測る。その平面形は、勾玉状を呈している。城郭内には農道が縦走しており、城郭の北側台地から谷を横切り、城郭北西部から城郭内にはいる形で南北に通じ、南に残る土居の北約30m程の所で東へ直角に曲がり、さらに南へ分岐して土居を登り上げるようにしながら堀を横断し、南へと通じるものである。この農道のうち、南北方向から東西方向への

曲角の北30m、東25mは、周囲より一段高くなっている。

こうした現況下において、山崎氏の発表された縄張り図・考察（1972・1986）では、次のように記されている。

「…（前略）…南北200m、東西の最大幅125mの崖端城である。南の崖端に東北—西南75m、幅60mの外郭もあったと思われる。北部は段下りの地形に四段の腰郭が設けられ、最段下るのは、北の自然濠内側に添って弧状に240mも続き、西南端は掘鑿された空堀の北端部に達している。その東北端の坂戸口から入った通路は、西に廻って西北戸口まで各腰郭をたどる。これらのことから考え、腰郭を除く平坦部が郭面で、その外縁に土居が築かれていたと推定する。現在は南側の土居だけが残存している。西北戸口には、自然濠の土橋から下段腰郭を通ってはいいる。そこの腰郭入口にも木戸が設けられ、馬出し様の施設があったのではあるまいか。南面中央にも戸口があり、空堀の土橋から斜板ではいるが、木戸は土居上に設けられ、土居を越えて出入りする形式になっている。…（後略）…」

とし、吉井町教育委員会の飲塔調査の結果については、

「…（前略）…かねてから、西北戸口を入った通路が土居らしい部分の上を通るので、内部に中仕切りのあることが推定されていたが、今回発見された空堀をたよりに50m四方の別郭のあることがほぼ認められた。しかしこの別郭は堀の規模が3.4mであまり小さく、郭内も狭くこの内側に高さ2m程の土居を盛っただけでも、幅は方40mにすぎず本郭としての作戦には用立ちえない。おそらく、高崎市浜川町の矢鳥城の別郭や、同市鳥島城本丸内の別郭等のような、城主等居宅の区画に過ぎぬものと思われる。

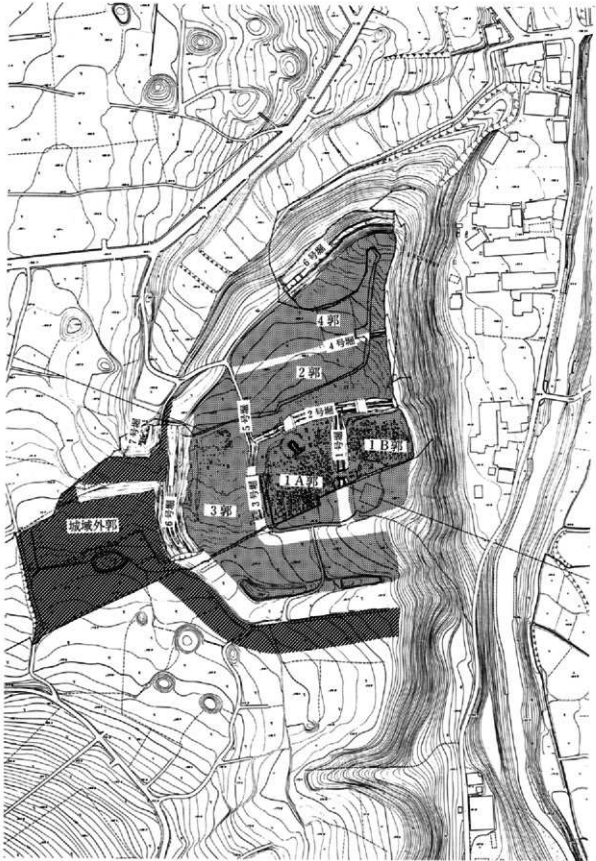
発掘の際の石組は、堀を渡る土橋側面の被覆らしく、南に偏して異様に感じるが、そこから東の崖端に戸口跡があり、中段に踊り場も認められるので、この位置でも差支えないであろう。」

としている。こうした記述と共に掲載された1986年の縄張り図では、記述のごとく城郭平坦部の北縁に、堀ではなく腰郭としてのテラスが示され、城郭のほぼ中央部の農道内側に堀で区画された方形の内郭が想定されている。

この山崎氏の所見を基に、本調査を行った。その結果、城郭の北縁部での腰郭とされていたものは、堀であることが確認された。また、南側から延びる堀は、西側で谷に連結されるのではなく、そのまま北側へと続くことも確認できた。さらに、西側からきた側へ回り込む谷については、その谷頭部分の調査から、盛り土による平坦面の整地、谷底部への石積等から、自然の谷を人工的に手を加える形で、堀としていることが確認されるに至った。これらの堀については、北側で検出された堀と、南側から西側へ続き北方向へ向かう堀とが連結し、城郭の外縁部を囲う一連の堀であるものと想定していることから、両者を6号堀とした。加えて、6号堀の外側に位置する谷を、7号堀とした。

城郭内部の調査では、山崎氏の示された内郭を区画する堀とは、大きく異なる状況であった。南北に縦走する農道の西側で、6号堀とした西側堀の東約30m、東の崖縁から西へ約90m程の所に南北方向に縦走する堀が検出され、この縦走する堀にT字状に交差する東西方向の堀、そしてこの東西方向の堀の中央部からT字状に南側へ延びる南北方向の堀が検出された。そこで、東西方向の堀を2号堀とし、2号堀の中央部から南へ延びる堀を1号堀。2号堀の西側でT字状となる堀については、その交点から南へ延びる部分を3号堀とし、北側を5号堀と呼称することとした。さらに、城郭の東側で、2号堀の北30m、北側6号堀の南50mの位置でも東西方向の堀が検出され、4号堀とした。

このように、当初の予測とは異なる城郭内の堀の検出状況から、各堀に区画された各郭については、第●図に示すように、城郭中央部に位置し1・2・3号堀に囲まれる郭を1A郭とし、その東側の1・2号堀に



第676図 各郭の呼称図

区画される郭を1B郭とした。さらに、1A・B郭の北側に位置する2・4・5号堀に区画される郭を2郭とし、西側の3・5号堀と6号堀の間を3郭、北端部の4号堀と6号堀の間を4郭として、それぞれの郭を呼称することとした。また、城郭を取り巻く6号堀の外側、特に調査区内となる6号堀の西側については、低地部分までの間の平坦面を、城郭に付随する外側の郭と考え、域外郭として呼称した。

1号堀（第677～680図）

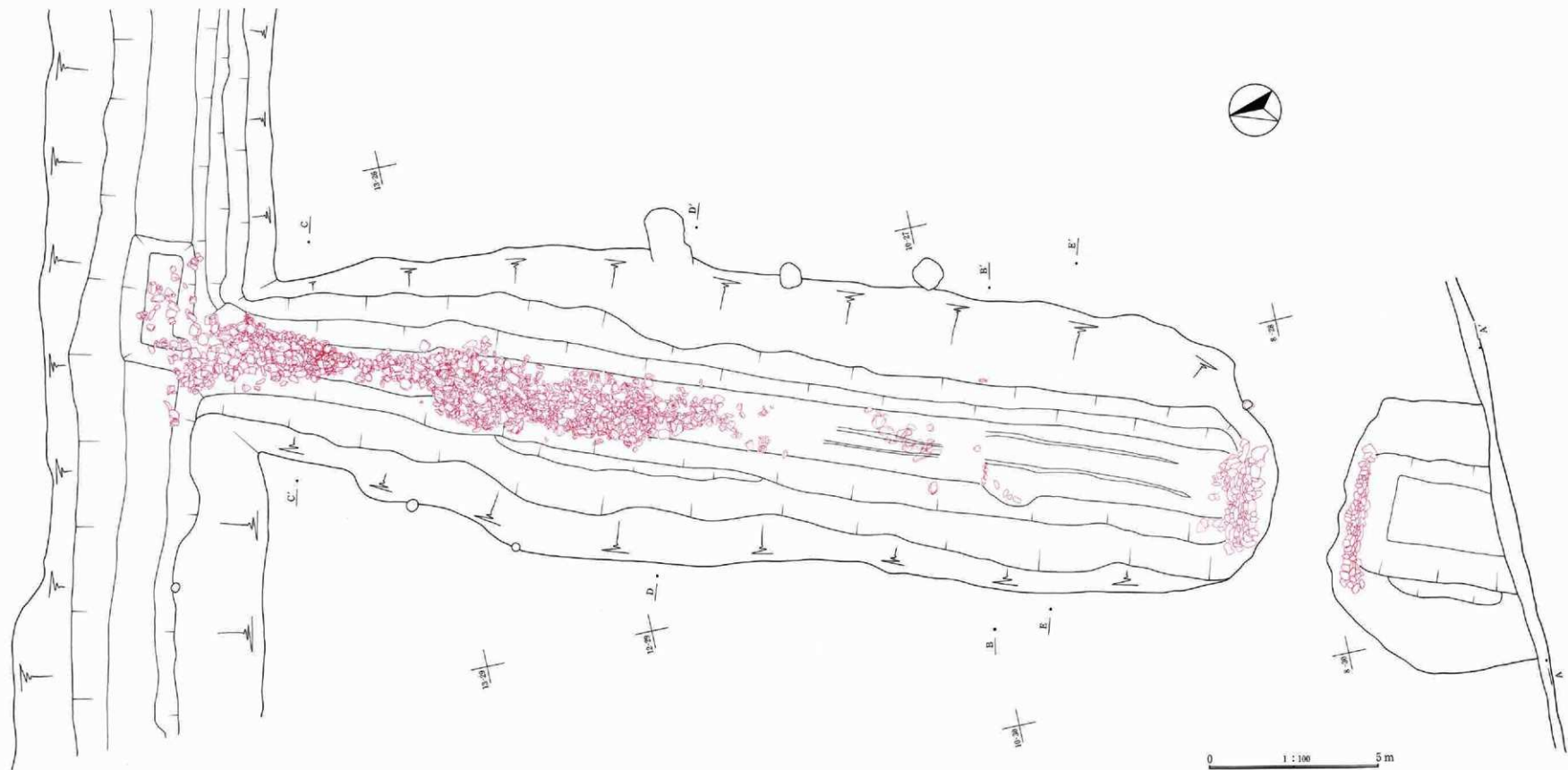
東西方向に横走する2号堀のほぼ中央部（14—26グリッド付近）を交点に、T字状に南へ縦走する堀で、1A郭と1B郭を東西に区分するようである。検出されたのは、この交点から南へ約40m程で、さらに南側の調査区外へと続くものである。堀幅は、2号堀との交点部では狭く5mを測り、それ以外では約8.5～9mを測る。堀底は平坦で、その幅は1～2mを測り、断面形は逆台形状の箱堀である。なお、2号堀の交点から南へ32m程の位置には、上幅2m程の土橋が設けられており、この土橋により1号堀は北側と南側とに大きく二分されている。（土橋については、別項で記する）

この1号堀は、埋没土中に多量の大形礫を出土させるという特徴をみせている。当初、この大形礫を取り除きながら掘削を進めていたが、調査が進捗するにつれて、大形礫が堀全体に及ぶことが確認され、その出土状況の図を作成するに至った。この大形礫は、埋没土の中間に位置し、土橋北側のB-B'セクションを見ると9層中に含まれていることが解る。

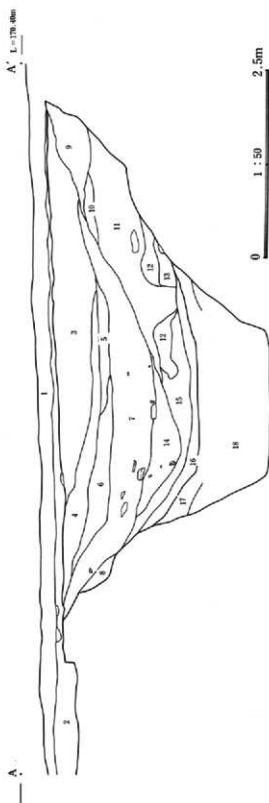
この堆積状況を見ると、Aセクションでは3層、Bセクションでは2層までにA軽石が含まれていることから近世以降の堆積土であり、近世のある時期までは堀の痕跡が残っていたものと思われる。Aセクションでは、7層が東側の1B郭側から主に堆積し、11層が西側の1A郭側から主として堆積していることが解る。Bセクションでは、7層が1A郭側から主に堆積し、9層が1B郭側から堆積している可能性が高い状況をみせている。このことから1A・Bの両郭には、低い土居状の施設が設けられていた可能性があり、さらに1B郭側に崩落した大形礫が伴い、土橋にみられる乱石積み of 石垣が存在した可能性が高い。また、Aセクションの16層とBセクションの10層は、「ノロ」状の黒色土系の同質堆積土であり、その下部に赤褐色の酸化層が薄く堆積していることから、両層が同一時期の堆積土である可能性が高く、両層の下面が堀の底面として存在していたことを強く窺わせている。さらに、Aセクションの17・18層およびBセクションの11～13層は、上層とは全く質の異なる堆積土で占められており、明らかに人為的な堆積によるものと考えられる。つまり、この1号堀の底面は、Aセクションの18層下面およびBセクション13層下面と、Aセクション16層下面およびBセクション10層下面の2面が存在し、下位底面を人為的に埋めて、上位下面を作り出したものと考えられ、堀の改修作業があったものと推察でき、上位底面の存続時期が本城郭の最終時期に伴うものと思われる。また、石垣等の付属施設についても、上位底面の時期に伴い、城郭最終時期まで存在し、その後崩落・埋没したものと思われる。

なお、下位底面時の堀は、先にも述べたように底面が平坦となる箱堀形状となるもので、上位底面時の堀は、下位底面よりも底面幅が広く、一応平坦となる箱堀形状をとるものと思われ、堀の上端幅は下位底面時の堀幅よりも広がっているものと推測し得る。

堀内から出土した遺物には、内耳鍋やかかわらけ、石臼、板碑、五輪塔があり、崩落した石垣の大形礫に混在して出土している。また、下位底面付近からは、内耳鍋の破片が出土している。このことから、堀の改修時期がある程度推測できるものと思われる。



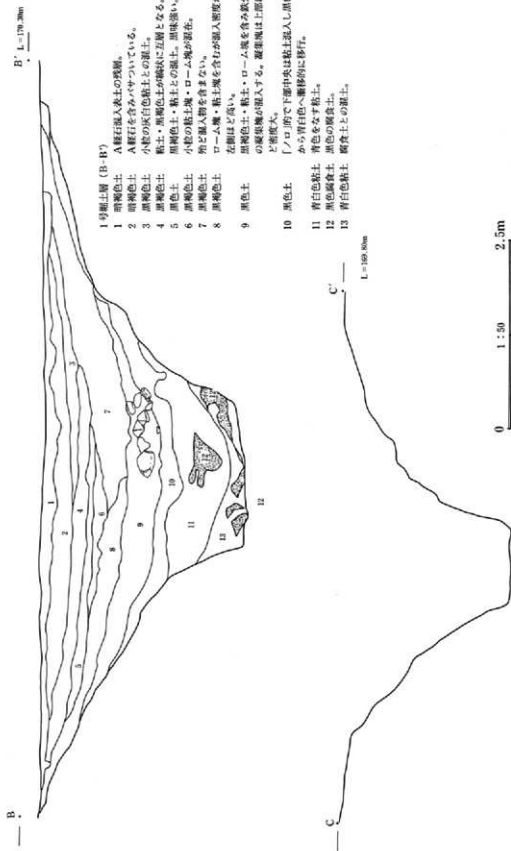
第677图 1号墓平面图



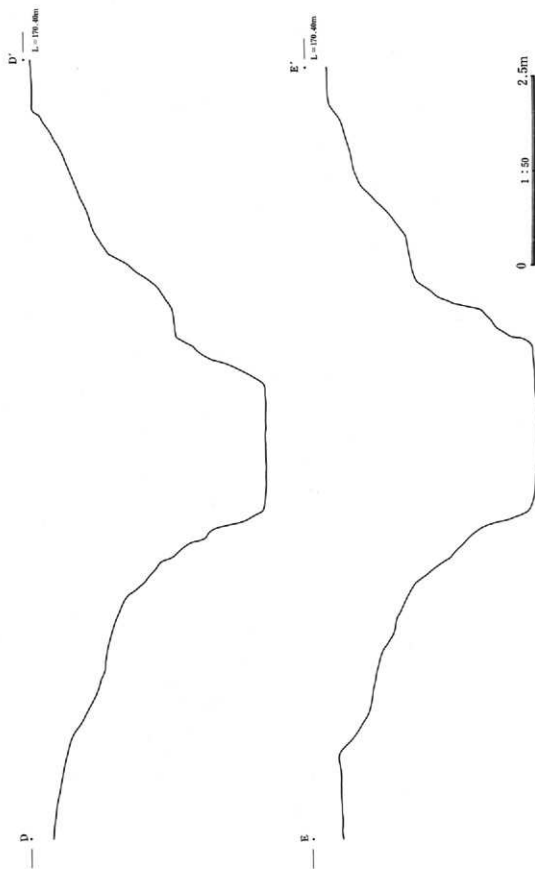
1号墳土層 (A-A')

- 1 暗褐色土 A層石を含む耕作土。
- 2 暗褐色土 A層石を含む。赤土。
- 3 暗褐色土 A層石を含みバラツいている。
- 4 暗褐色土 B層石、多量の粘土粒を含み固まる。やや明るい。
- 5 暗褐色土 2層に同じ粘土粒・B層石を含む。やや暗い。
- 6 黄白色粘土 黄白色粘土層を主とする。
- 7 暗褐色土 B層石を含む粘質土。
- 8 明暗褐色土 B層石を微量、ローム粒を多く含む。
- 9 暗褐色土 B層石を含み粘質があり固く固まる。
- 10 暗褐色土 9層に固するが、粘土粒を多く含む。
- 11 黄白色粘土 6層と同様に、粘土層を多く含む。
- 12 黄灰色土 粘土粒・砂粒を多く含む粘質なし。
- 13 黄白色粘土 11層に同じ暗褐色土が多く固む。
- 14 暗褐色土 B層石・粘土粒を含みやや明るく粘質あり。
- 15 暗褐色土 B層石、多量の粘土粒を含み黄色系でやや明るい粘質土。
- 16 暗褐色土 B層石を含む「ノロ」状の暗褐色粘質土。下部に赤褐色状の酸化層が薄く埋覆。
- 17 灰黒褐色土 B層石・粘土粒を含むがややグライ化気味で強粘性。
- 18 黒褐色土 強粘性。

第67図 1号墳土層断面図



新679図 1号掘断面図(1)



第680図 1号堀断面図(2)

2号堀（第681～684図）

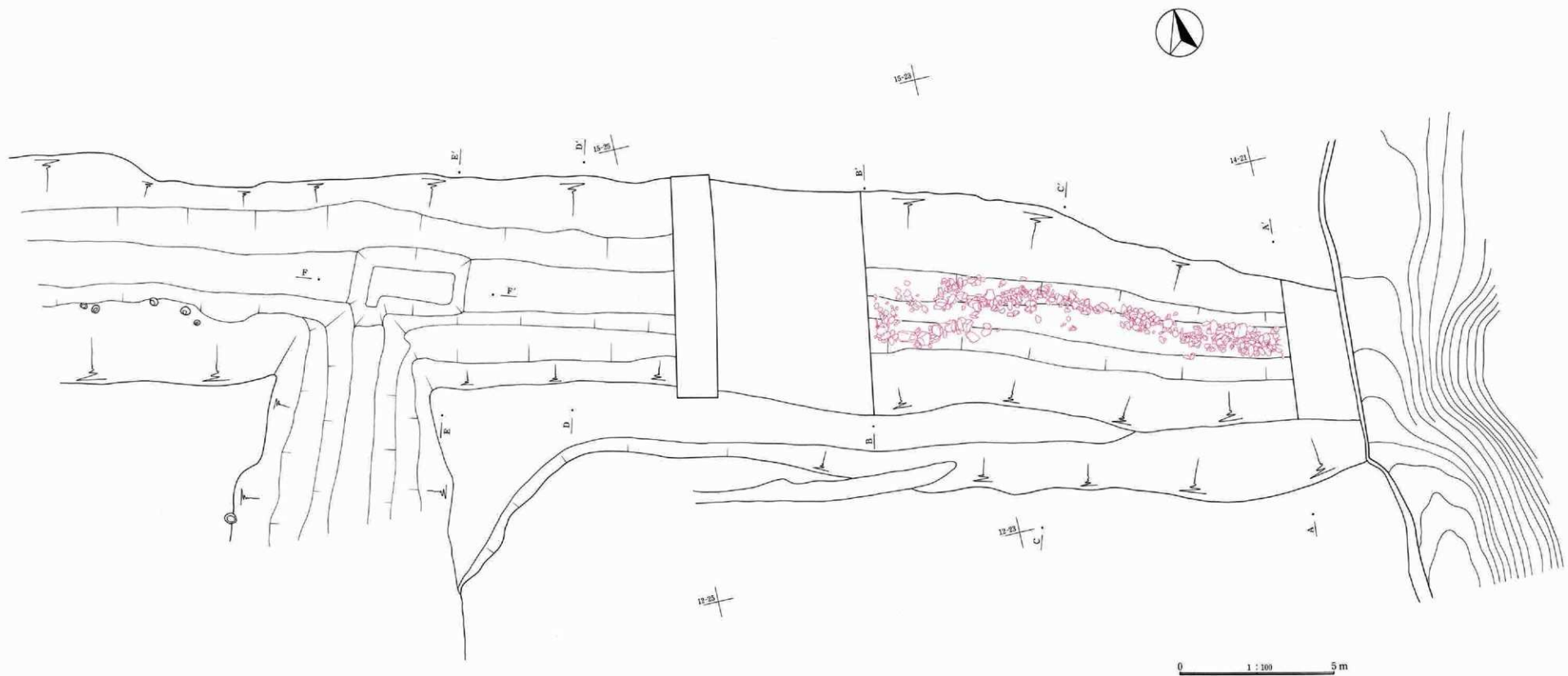
1A・B郭を区画する北側の堀で、2郭の南縁にある。15-36グリッド付近で、南北方向に縦走する3号堀および5号堀とT字状に交差する交点を起点に、東西方向に横走り、東端の崖へ到達する。崖部分は安全性の面（崖下に民家があるため）から調査できなかったが、その地形等から堅堀が存在するものと考えられ、2号堀の東端は、この堅堀へとつながるものと思われる。また、中央部の14-26グリッド付近では、1号堀とT字状に交差し、1号堀は南へ縦走する。堀の長さは、3・5号堀の交点を起点に東端まで、約80mを測り、その規模・構造は1号堀の交点を境に、東側の1B郭側と西側の1A郭側で異なっている。

東側の1B郭側では、1号堀との交点から東端まで約34m程あり、堀の上端幅は7m前後で続き、東端で4m程に狭くなる。堀の深さは、交点付近では2郭面より2mを測り、東端付近では2郭面より2.5m、1B郭面より3mを測り、西側から東側へ下り勾配となりながら堅堀へと続く。堀の底面は、先述した1号堀と同様に上下2面の底面が確認されたが、両面とも基本的には箱堀の形状をとっている。底面幅は、下位底面で1.5～1mを測る。1号堀との交点部には、L字状の升堀が設けられており、その規模は長軸3.7m、短軸2.2～2.6m、深さ80cmを測り、堀底面よりもさらに一段低くなっている。

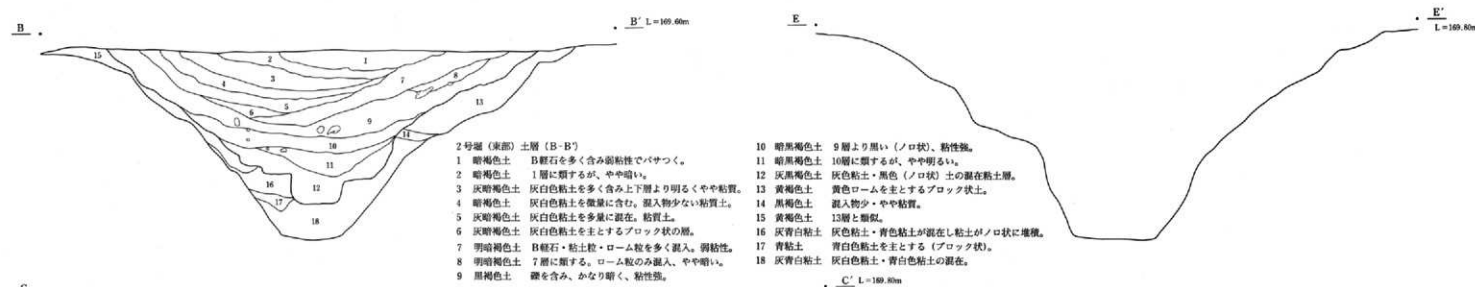
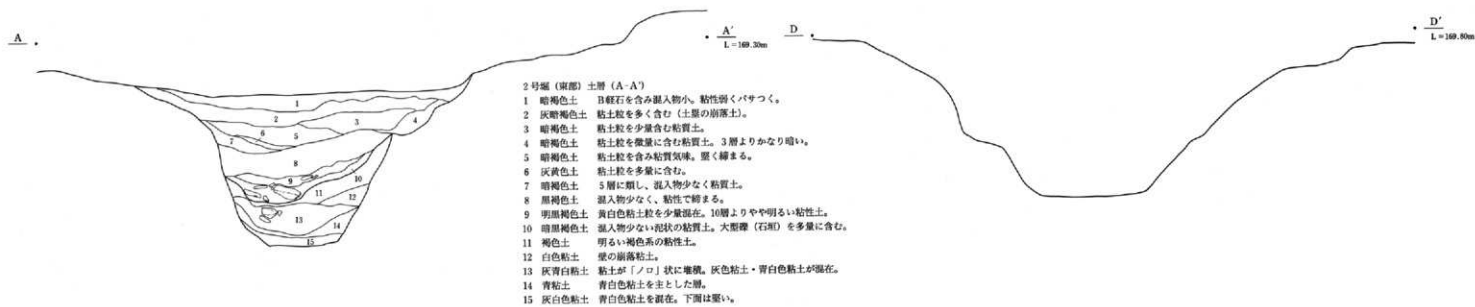
この1B郭側堀では、1号堀と同様に埋設土中に多量の大形礫を出土させるという特徴をみせている。当初、この大形礫を取り除きながら掘削を進めていたため、その出土状況の平面図では一部で図示できなかった部分がある。この大形礫は、埋設土の中間に位置し、A-A'セクションでは9・10層に、B-B'セクションでは9層中に含まれていることが確認されている。

堀の堆積状況を見ると、A・BセクションともにA軽石を含む土層が無いことから、かなり早い段階で埋設していたものと思われる。近世のA軽石降下時（天明三年）には堀の痕跡が残っていなかったものと考えられる。Aセクションでは、粘土粒を混在する土を主体に、1～8層までが南側の1B郭側から主に堆積していることが解る。その下層の9・10層には、大形礫が多量に含まれ、10層は「ノロ」状の土が堆積している。12・13層でも、白色ないし灰青色粘土を主としながら、13層では「ノロ」状に粘土が堆積している状況がみられる。さらに14・15層が堆積し、15層下面には堅い地山の底面が検出されている。Bセクションでも、粘土粒を混在する土を主体に、1～6層までが南側の1B郭側から主に堆積していることが解る。その下層の9層には礫が含まれ、10層は「ノロ」状の暗黒褐色土が堆積している。12層にも「ノロ」状の土が堆積し、さらに13～18層が堆積し、18層下面には堅い地山の底面が検出されている。

このことから1B郭の北縁には、土居状の施設が設けられていた可能性があり、さらには1号堀での状況と同様に崩落した大形礫が伴うことから、1B郭北面にも乱石積み石垣が存在した可能性が高い。また、1号堀でも確認された「ノロ」状の堆積土下面に、堀底面が存在することを考えれば、Aセクションでは10層下面、13層下面、15層下面の3面が存在することになる。Bセクションでも同様に、10層下面、12層下面、18層下面の3面が存在する。従って、1号堀では2面の底面の存在から一度の改修が行われたのに対し、この1B郭北側の堀では、二度の改修が行われたものと考えられる。この上位底面と1号堀上位底面が、そして下位底面と1号堀下位底面が同時期の底面であったものと考えられ、上位底面が本城郭の最終時期に伴うものと思われる。中位底面については、不明な点があり、1号堀の上位底面と同時期の改修である可能性も否定できない。何れにしても、部分的な小改修の様相を示しているものと思われる。また、石垣等の付属施設については、1B郭西面から続く一連のもので、上位底面の時期に伴い、城郭最終時期まで存在し、その後崩落・埋設したものと思われるが、中位底面時にも存在した可能性は否定できない。

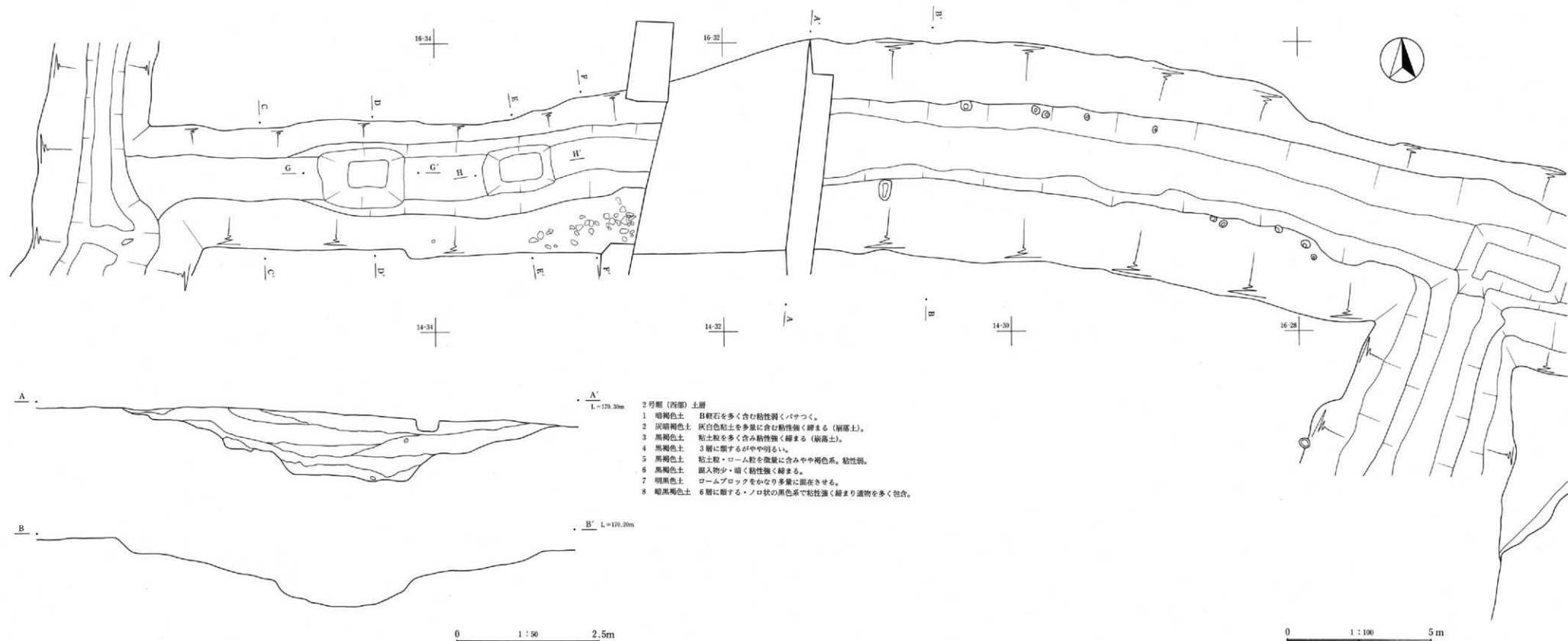


第681图 2号掘(东侧)平面图

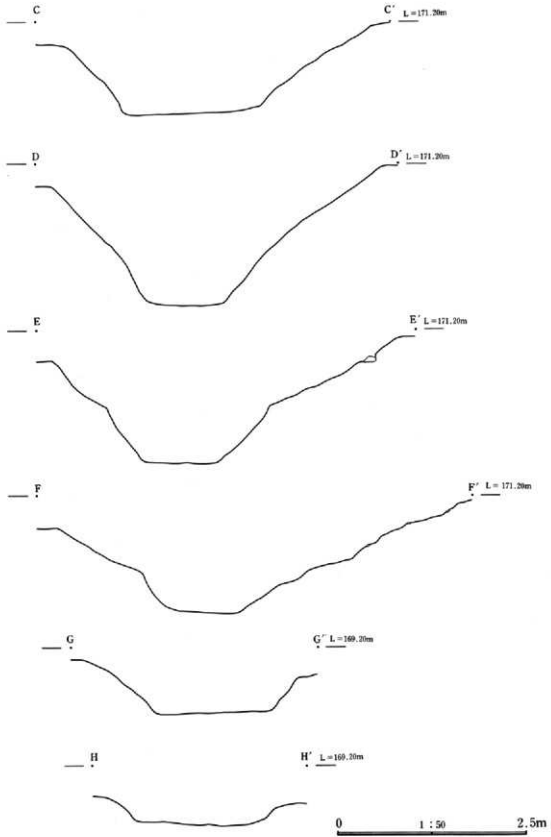


0 1:50 2.5m

第682図 2号堀 (東側) 土層断面図



第683図 2号堀（西側）平面図



第684図 2号堀(西側)断面図

第3章 検出された遺構と遺物

西側の1A郭側では、3・5号堀との交点から1号堀の交点まで約47m程あり、堀の中央から東側が弓なりに緩い弧を描く。堀の上端幅は、西側で4.5m前後で続き、緩い弧状を描く部分では7.5mと広がっている。堀の深さは、西側の交点付近では2郭面より1m、1A郭面より1.2mを測り、中央よりやや東寄りの幅広となる辺りでは2郭面より1m、1A郭面より1.3mを測る。底面は、西側から東側へとほぼ平坦に続き、東側の幅広部分からやや狭くなる辺りから1号堀の交点に向かって下り勾配となる。また、堀の中央より西側底面には、2箇所に方形の升堀状の土坑が検出されており、その規模は長軸2.5m前後、短軸1.5mないし2m、深さ30～50cmを測り、底面より一段低くなっている。さらに、緩い弧状を描き堀幅の広がった中央部には、堀斜面に数個の柱穴状のピットが検出されており、この部分の堀の形状等を考え併せると、何等かの施設が存在した可能性を窺わせる。

この1A郭側では、1号堀および2号堀1B郭側に見られた、埋没土中に多量の大形礫の出土は無かった。堀の堆積状況を見ると、2号堀1B郭側と同様にA軽石を含む土層が無いことから、かなり早い段階で埋没していたものと思われ、近世のA軽石降下時（天明三年）には堀の痕跡が残っていないかかったものと考えられる。堆積土は、粘土粒を混在する土を主体に、1～4層までが南側の1A郭側から主に堆積していることが解る。最下層となる8層は、「ノロ」状の土が堆積しており、この下面が堅い地山の堀底面となっている。

このことから1A郭の北縁には、土居状の施設が設けられていた可能性があり、1B郭を区画する1号堀および2号堀1B郭側で確認された複数の堀底面の存在が見られなかったことから、大規模な堀の改修はなかったものと考えられる。但し、1号堀との交点付近の急な下り勾配を見ると、部分的な改修の可能性は否定できない。

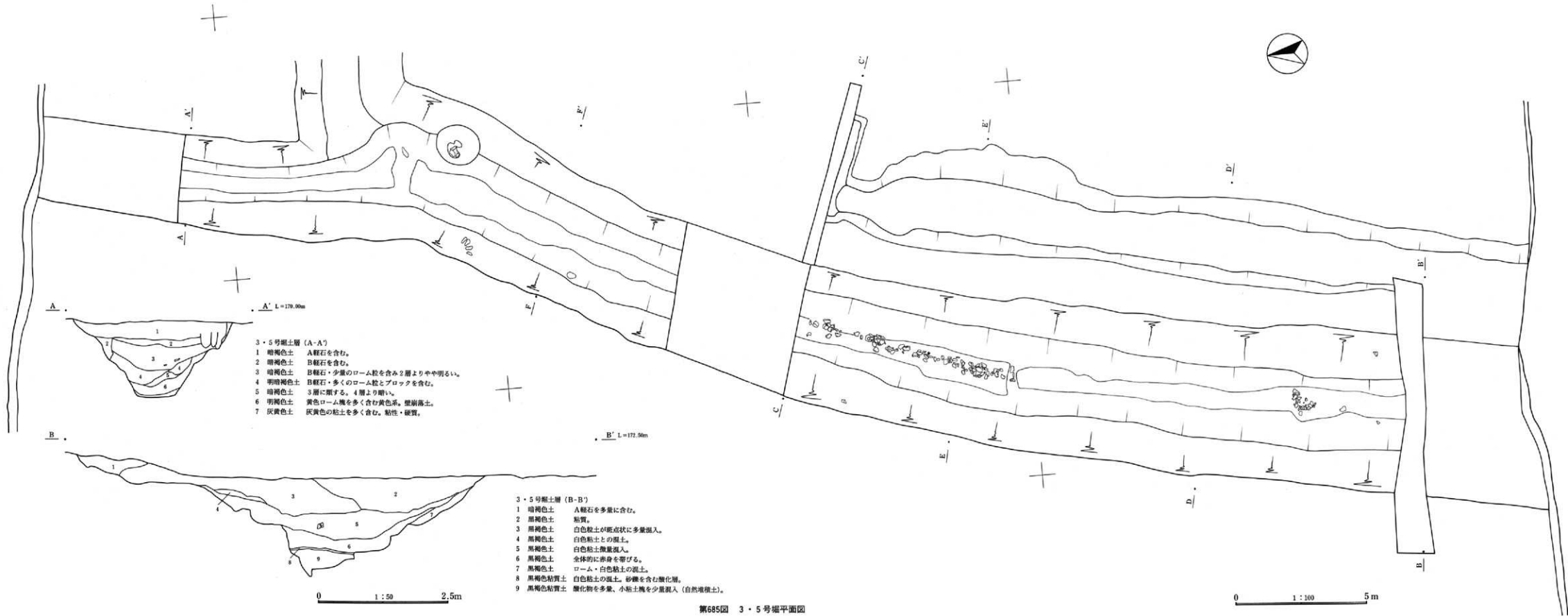
堀内から出土した遺物には、東側の交点近くの底面から内耳鍋の完形品が出土している。

3号堀（第685・686図）

1A郭と3郭を区画する堀で、1A郭の西縁、3郭の東縁にある。15～36グリッド付近で、南北方向に縦走る5号堀と東西方向に横走る2号堀と交差する交点を起点に、南側へ約46mほど縦走り、調査区外へ至る。堀の上端幅は、北側の交点付近で5.5m、南側の調査区端付近で6mを測り、ほぼ横規模の幅を保ち続けている。堀の深さは、交点付近では1.5mを測り、南側付近では1.7mを測り、ほぼ同様の深さを保つ。堀の底面は、先述した1・2号堀よりも幅が狭く40cm前後で、むしろ藁研堀に近い形状となっている。また、5号堀とはほぼ同様の底面形状をとるが、交点部にはその境的に一段高い部分が存在し、2号堀底面はさらに高い位置にある。この交点のすぐ南側には、円形の井戸状の土坑が1基検出されている。

この3号堀でも部分的に礫を出土させてはいるが、先の2号堀1A郭側と同様に、1号堀および2号堀1B郭側に見られた多量の大形礫の出土は無い。堀の堆積状況を見ると、B・CセクションともにA軽石を含む土層が無いことから、かなり早い段階で埋没していたものと思われ、近世のA軽石降下時（天明三年）には堀の痕跡が残っていないかかったものと考えられる。Bセクションでは、粘土粒を混在する土を主体に堆積し、下層の8層は砂礫を含む酸化層が形成され、9層下面が地山となり底面となる。Cセクションでは、暗褐色土を主体に堆積し、下層の8層には「ノロ」状の暗黒褐色土が堆積している。この8層下面が、地山となり堀の底面となる。

なお、この3号堀の東側で1A郭の西縁には、一段高い土手を現農道とされていたが、調査の結果、この土手は土居であることが解った。このことから、1A郭には土居が走り、さらにその外側に堀が走り郭を区画するものと理解でき、調査区のすぐ南側で農道が直角に東側へ曲がることから、農道下の土居が同様に

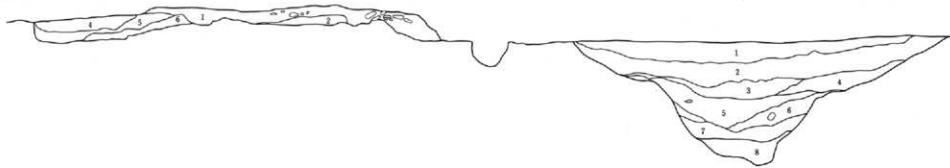


- 3・5号堀土層 (A-A')
- 1 暗褐色土 A軽石を含む。
 - 2 暗褐色土 B軽石を含む。
 - 3 暗褐色土 B軽石・少量のローム粒を含み2層よりやや明るい。
 - 4 明暗褐色土 B軽石・多くのローム粒とブロックを含む。
 - 5 暗褐色土 3層に類する。4層より暗い。
 - 6 明褐色土 黄色ローム塊を多く含む黄色系。壁崩落土。
 - 7 灰黄色土 灰黄色の粘土を多く含む。粘性・硬質。

- 3・5号堀土層 (B-B')
- 1 暗褐色土 A軽石を多量に含む。
 - 2 暗褐色土 粘質。
 - 3 黒褐色土 白色粘土が板状に多量混入。
 - 4 黒褐色土 白色粘土との混土。
 - 5 黒褐色土 白色粘土微量混入。
 - 6 黒褐色土 全体的に砂身を帯びる。
 - 7 暗褐色土 ローム・白色粘土の混土。
 - 8 黒褐色粘質土 白色粘土の混土。砂礫を含む層。
 - 9 黒褐色粘質土 鹽化物を多量、小粘土塊を少量混入 (自然堆積土)。

第685図 3・5号堀平面図

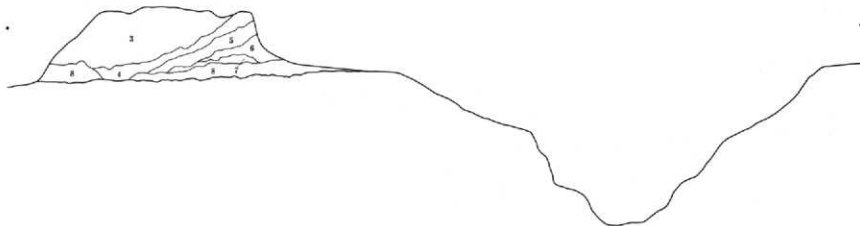
C. C' L=171.30m



3・5号掘土層 (C-C')

- 1 暗褐色土 B軽石を多量に含む粘性質・堅く締まる。
- 2 暗褐色土 B軽石・少量のローム粒を含む。やや粘質 (崩壊土)。
- 3 暗褐色土 灰黄色粘土ブロック粒・ローム粒を多量に含む粘性土。
- 4 暗褐色土 5層に類するがローム粒多く明るい。
- 5 黒褐色土 ローム粒を少量含み、粘性・堅く締まる。
- 6 暗褐色土 ローム粒・ブロック (壁崩壊土) を多く含む明るい黄色系。
- 7 暗黒褐色土 8層に類するが8層よりやや粘性弱。
- 8 暗黒褐色土 ノロ状で粘性強。

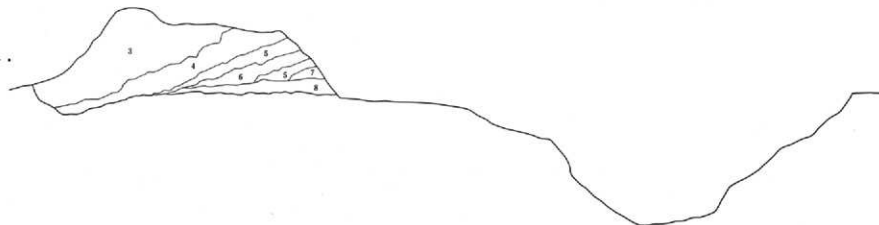
D. D' L=172.00m



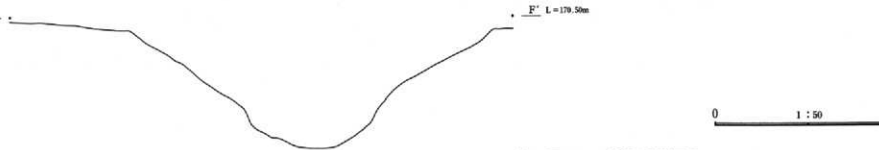
3・5号掘土原産土土層 (C-C'・D-D'・E-E')

- 1 暗褐色土 A軽石を多量に含む耕作土。
- 2 暗褐色土 A軽石を微量。B軽石・ローム粒を多く含む。
- 3 青白色粘土 基礎の青白色粘土 (藍土)。
- 4 淡黄色粘土 基礎の淡黄色粘土 (藍土)。
- 5 暗灰色土 淡黄色粘土の大形ブロック。B軽石を多く含む粘質土 (藍土)。
- 6 暗灰色土 淡黄色粘土の小ブロックを多く。B軽石を含む (藍土)。
- 7 暗灰色土 掘入物少。4層に類似 (藍土)。
- 8 暗灰色土 B軽石を多く含む。

E. E' L=172.00m

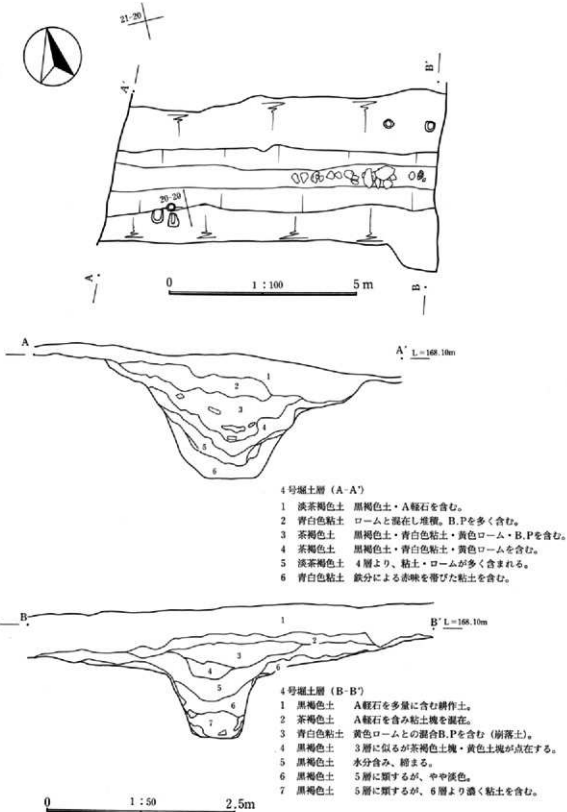


F. F' L=179.50m



0 1:50 2.5m

第686図 3・5号掘土層断面図



第687図 4号堀平面・土層断面図

第3章 検出された遺構と遺物

曲がり、それに付随してこの3号堀も調査区南側で大きく東へと屈曲していくものと推察できる。

堀内から出土した遺物には、内耳鍋やかわらけ、陶磁器、石臼、板碑等があり、特にかわらけの出土量が他に比べて多い。

4号堀 (第687図)

本堀は、城郭の東側で、1号堀の北側約35mの位置に、東西方向に走行するように8.5m程が検出された。検出された堀の西側は、調査区外へと延びるものと考えられ、東側は崖面へ達するものと推測でき、2郭の北縁、4郭の南縁にあたり、2郭と4郭を区画する堀と考えられる。堀の規模は、上幅が4m前後で、底面幅が60cm前後、深さは2郭面より1.5m、4郭面より1.2mを測る。堀の形状は、底面が平坦となる箱堀を呈しているが、1～3号堀にみられる規模はない。

この3号堀でも部分的に礫を出土しているが、先の2号堀1A郭側と同様に、1号堀および2号堀1B郭側に見られた多量の大形礫の出土は無い。堀の堆積状況を見ると、A・BセクションともにA軽石を含む土層が認められるものの、かなり早い段階で埋没していたものと思われ、近世のA軽石降下時(天明三年)には堀の痕跡が残っていなかったものと考えられる。堆積土は、粘土およびロームを混在する土を主体に、2郭方向から堆積したものと考えられ、下層の6ないし7層には酸化気味の粘質土が堆積している。この6ないし7層下面が、地山となり堀の底面となる。

これらのことから、この4号堀の南側の2郭北面には、土層が設けられていた可能性がある。また、礫の出土は、石垣の存在とは関係しないものと考えられる。なお、この4号堀が西側へ直進するとすれば、後述する6号堀とぶつかる地点で、5号堀とも交差するものと予測される。

堀内から出土した遺物は少量であるが、内耳鍋やかわらけ、石臼等がある。

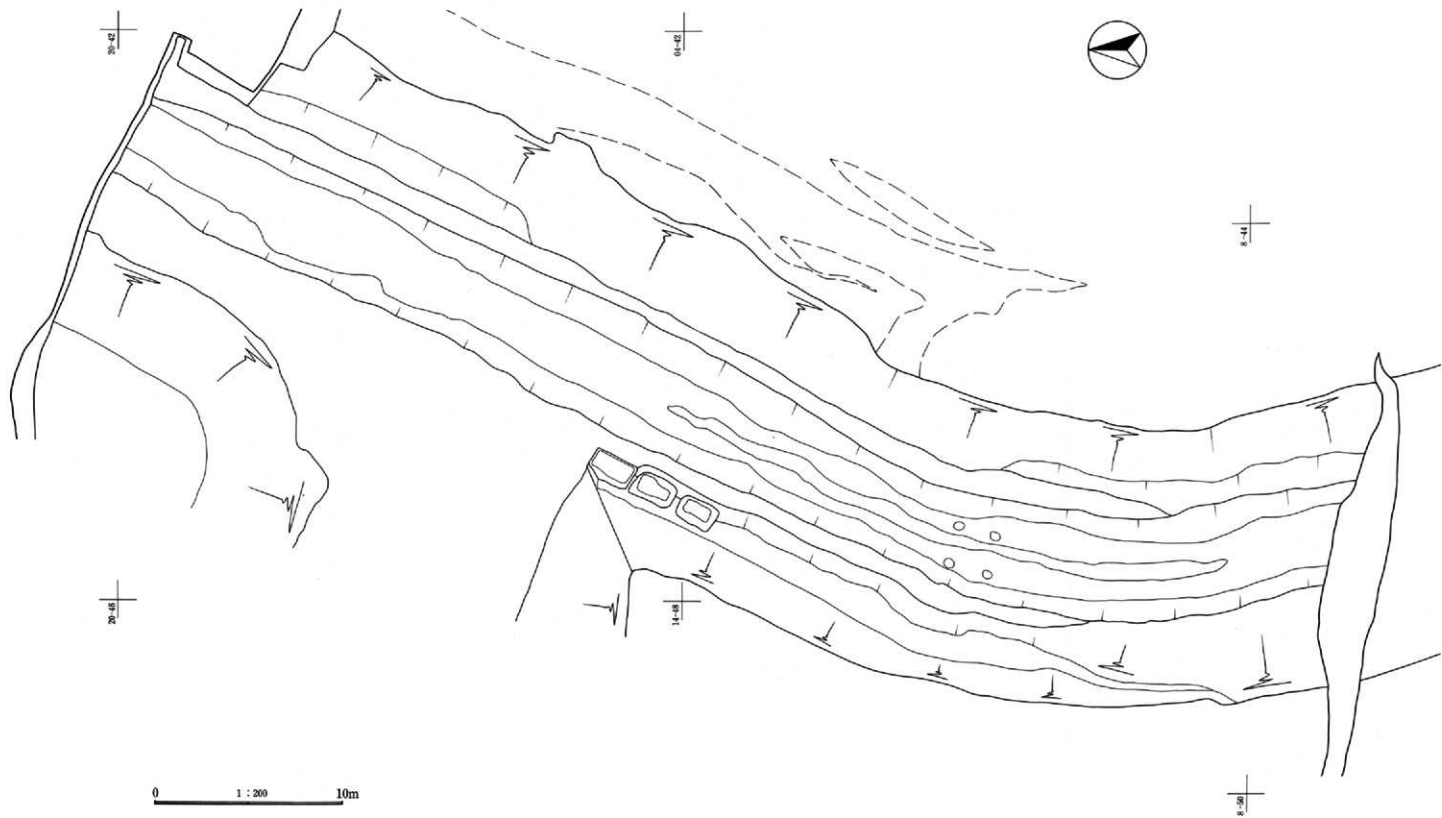
5号堀 (第685・686図)

城郭の北西部から続く、現農道の直下にある。2郭と3郭を区画する堀で、2郭の西縁、3郭の東縁にある。15-36グリッド付近で、南北方向に縦走する3号堀と東西方向に横走する2号堀と交差する交点を起点に、北側へ約13mほど縦走し、調査区外へ至る。堀の規模は、上幅で約3.5mを測り、深さは1.4mを測る。堀の底面は、先述した3・4号堀と同様に70cm前後を測る。規模的には、先の4号堀と同規模と言える。一応、箱堀に近い形状となっている。また、3号堀とはほぼ同様の底面形状をとるが、交点部にはその境的に一段高い部分が存在する。

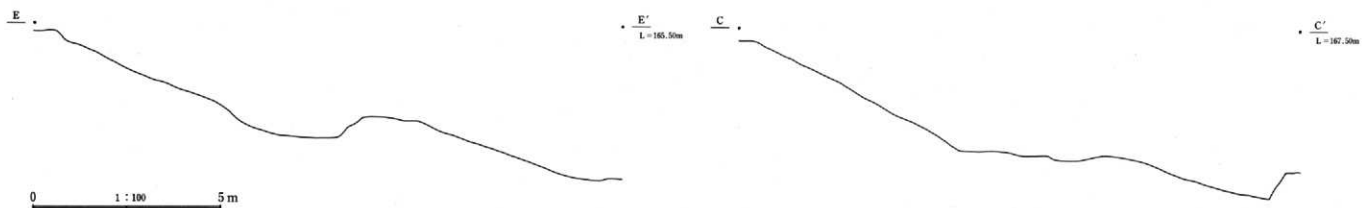
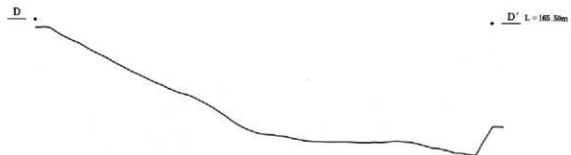
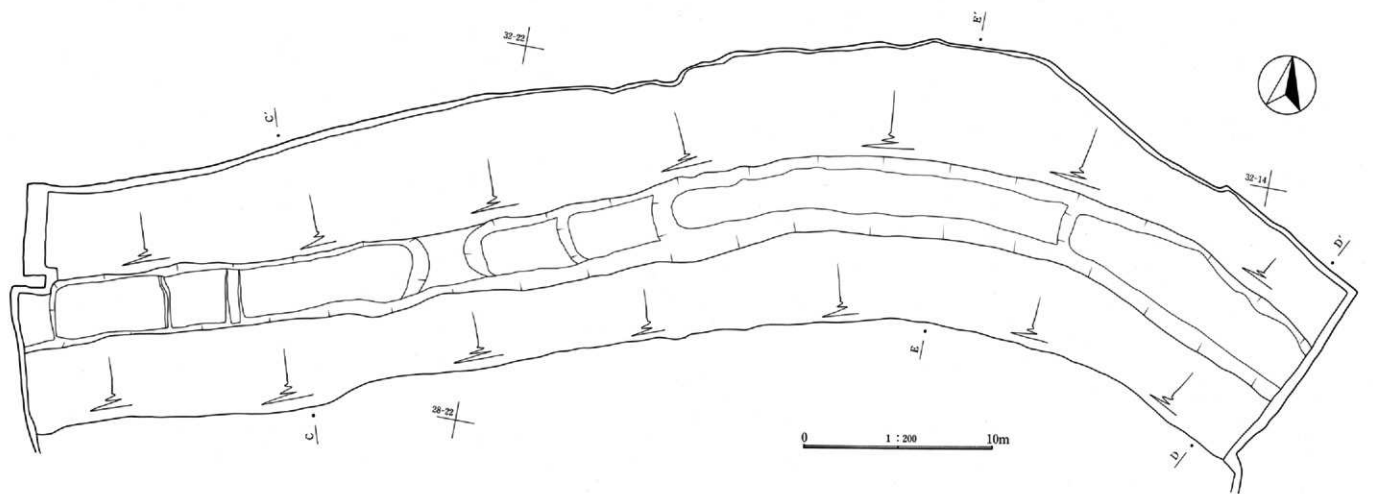
堀の堆積状況を見ると、上層の1層にA軽石を含むが、この層は農道に起因する堆積土であると思われ、本来的にはかなり早い段階で埋没していたものと考えられる。堆積土は、ローム粒を混在する黒褐色土を主体とし、下層の7層は灰黄色粘土を混在させ、7層下面が地山となり底面となる。また、堆積土の流入方向も判然とせず、大形礫の出土も認められていない。

これらのことから、この5号堀の両側に当たる2郭西面および3郭東面には、土居の施設は設けられていないものと考えられる。なお、この5号堀が北側へ直進すれば、後述する6号堀とぶつかる地点で、先の4号堀とも交差すると予測される。

堀内から出土した遺物は少量であるが、内耳鍋やかわらけ等がある。



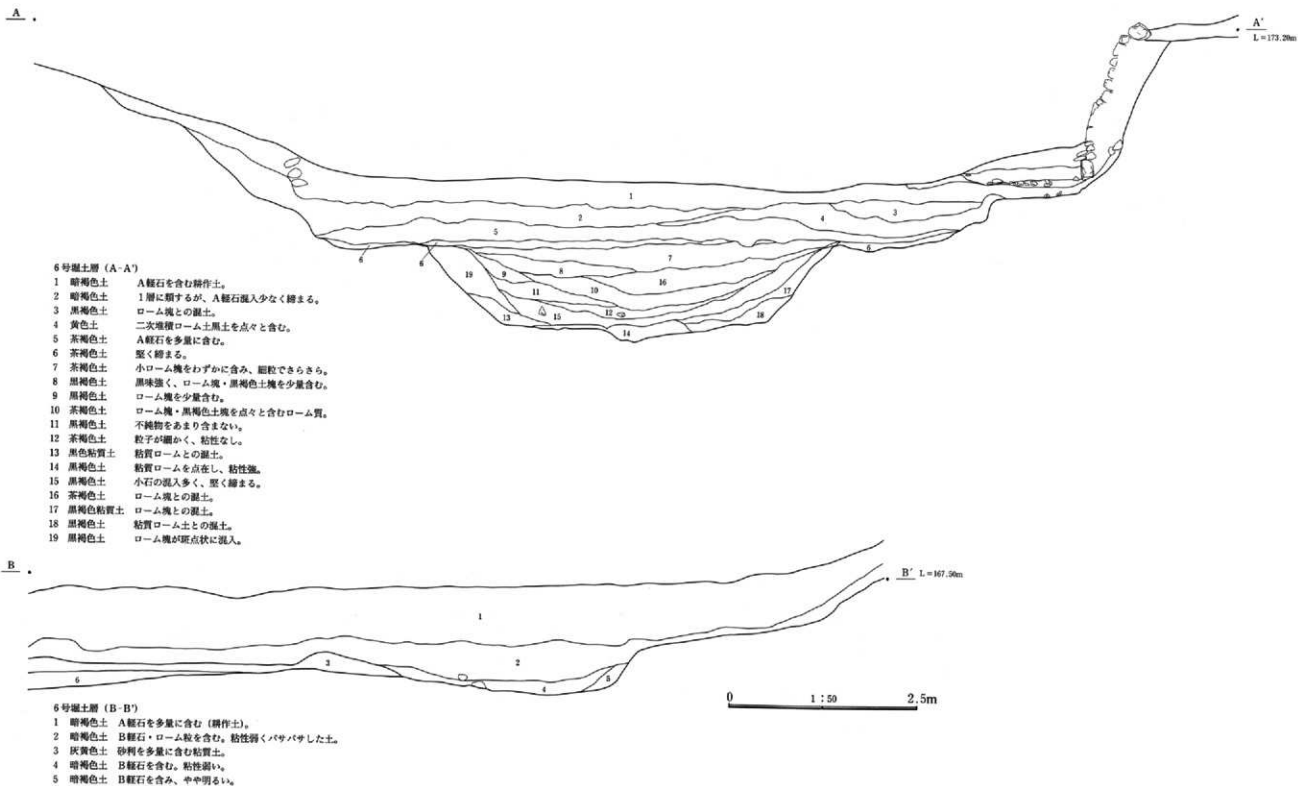
第688图 6号墓(西侧)平面图



第689号 6号地 (北侧) 平面图

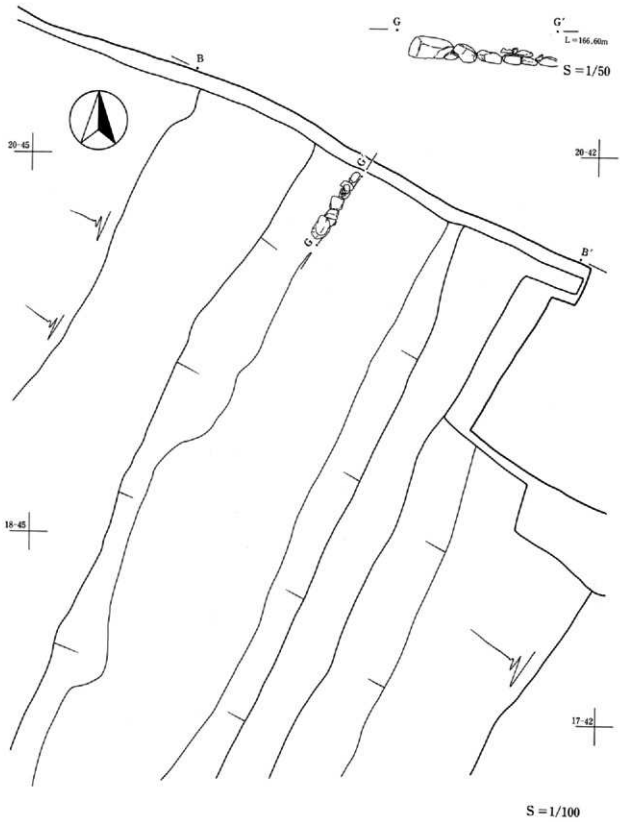


第690图 6号坑(西南侧)平面图



第691図 6号堀断面図

第6節 中世の遺構と遺物



第692図 6号墳（西側北部）平面図

6号堀 (第688～692図)

先述したように、本堀は本城郭の外側を取り巻くようにある堀で、調査前から周辺よりも帯状に一段低く、その存在を明示していた。特に南側では、堀の北側の城郭内縁に高さ2m程の土居が現存している。こうした点を踏まえて調査を行った結果、3郭西側で南側から西側へと続く堀が検出されると共に、A区とした城郭北側の4郭の縁辺でも堀が検出され、両者の堀が城郭を取り巻く一連の堀であることが明かとなった。検出されたそれぞれの堀は、3郭西側で南北方向に約70m、4郭北西側で約70mを調査した。この両者の堀は、その地形等に起因するように、構造をやや違えている。

3郭西側で検出された堀は、城郭内(3郭)と城郭外(城外郭)とを区画する堀で、当初予測されていた後述する7号堀と連結することなく、3郭と7号堀の間を北に延びることが明かとなった。また、堀の走行は、3郭のほぼ中央部で外側にやや弓なりとなるように弧状に出張するものであった。堀の規模は、上幅15mを測り、底面幅は3～3.5m、深さは3.8m前後を測る。先述してきた各堀に比べ、かなり大規模な堀である。堀の底面は、ほぼ平坦となり、箱型形状を呈する。また、堀の弧状に出張部分の底面中央には、溝状の施設がみられ、さらには4本の柱穴(橋脚として、別項で後述する)が四角く配置され、検出された。堀底面の両側には、一段高い位置に大走的な幅30cm程の帯状のテラスが設けられ、弧状に出張部分から北側に続く。この6号堀の西側に位置する城外郭は、6号堀の出張部分までは3郭と同一の高さの面をもつが、その北側では一段低い面が造り出されており、この低い面に先ほどの西側帯状テラスが置付く。なお、堀の西側斜面には、帯状テラスよりも一段高い位置に石垣と農作業用の小道があるが、この石垣は小道面より積まれたもので、その積み方も小口面が矢羽根状であること、および石垣の裏込め土にA軽石を含むこと等から、近世以降の造作であると判断された。堀の東斜面の一部に見られた石垣についても、同様のものである。こうした近世以降の石垣とは別に、第690図に示すように西側帯状テラスの一部には、大形礫を2段ほど積み上げた石積みを検出されており、同様の石積みが35m程北側(第692図)でも検出されている。その石積みのあり方および帯状テラスに、直接に積み上げられている点等から、この2箇所(箇所)の石積みは本城郭に伴うものである可能性が高いものと考えられる。

堀の堆積状況を見ると、弧状に出張部分でのA-A'セクションでは、1層が現耕作土としてあり、以下の5層までにA軽石が含まれている。これらの堆積土内に、先ほどの農作業用の小道や、石垣が存在する。5層の下面は平坦となり、6層は堀の両側に付く帯状テラスの上面に、薄く水平に堆積している。7層以下は、帯状テラスからさらに一段下がる堀底面に至る堆積土で、黒褐色系の土が堆積している。堀の底面には、柱穴の北側約15mの間に礫が比較的多く出土しており、この部分の西側帯状テラス上にある石積みとの関連を窺わせている。堀の北側の調査区境で、7号堀と3郭の間に位置するB-B'セクションでは、1層としたA軽石を含む現耕作土が厚く堆積し、7号堀をも覆っている。2層は暗褐色土が堆積し、5層は同様のやや明るい暗褐色土となる。3層は砂利を多量に含む粘質土で、地山面の上であり、4層内の6号堀面には、先述した石積みの列が存在する。この石積みと、3層とした土層を考え併せると、6号堀と7号堀との間を造成していることは明かであり、3層はその盛り土である。また、土居状の施設が設けられていた、可能性も否定できない。

なお、この6号堀については、戦前に堀の内側にあった土居を崩して堀を埋めた、との話を地元の方から聞いており、現存する土居がかなり良好な状態で巡っていたものと思われる。

4郭の北西部で検出された堀は、城郭の北端部から4郭の縁を巡るように西側へ延び、先述した3郭西側で検出された堀と連結し、城郭を区画する一連の堀である。検出された堀の北端部東端は、調査できなかつ

たが、東の崖面へ達し収束するものと考えられ、西側は調査区外へと延びる。この4郭を取り巻く本堀は、郭の平坦面の縁の斜面部を利用する形で存在し、4郭平坦面から堀底面までは2.5～3mを測る高低差をもち、概ね平坦となる堀底面から僅かに立ち上がり下り斜面となる。堀底面は、概ね平坦ではあるが、部分的に低い段をもち、障子堀風な低い高まりによって区切られる部分もある。堀の外側は、急斜面へと続き谷底へと達するが、北端の先端部は階段状の狭いテラスを取り付けるように下っていく。この先端部については、トレンチ調査で確認した。

7号堀 (第693・694図)

先述したように、城郭の北西に位置する自然の谷を7号堀とした。この谷は、城郭の北端部付近で東側に開口し、城郭の北西部を回り込むように西側へ谷頭が達している。この谷頭部分が調査区内に当たるため、当初想定されていた南から続く外堀との連結を確認するべく、調査を行った。その結果、城域外郭北側の一段低いテラスを造成し、堀としての谷頭を造作したものであることが判明した。堀の斜面はかなり急勾配で、斜面下に幅2.1m程の平坦となるテラスを設け、そのテラス端部に石組を巡らせている。このテラス部も、部分的に造成している。堀底は、さらに一段低くなり、谷底となる。堀上部の平坦面から堀下テラス面までは、3.2m前後の高低差を測り、テラス面から最下面までは2.3m程を測る。これは、3郭面からすれば、ゆうに8m以上の高低差があることになる。

堀の堆積状況を見ると、1～3層までがA軽石を含む近世以降の堆積土であり、堀下のテラス面および石組の一部が部分的に露出していたようである。それよりも下層の4層から15・18層までは、7・10層のような黄色ローム土と互層になりながら黒褐色系の土が堆積し、堀(谷)底に近い16・17層は「ノロ」状の黒褐色土が、17層には酸化層が互層に堆積している。さらに、21層から23層までは、本来斜面であった6号堀と7号堀との間を造成した際の盛り土であり、21層は6号堀Bセクションの6層と同層となり、22層が同Bセクションの7層と同じ層となる。

つまり、城郭内の3郭から6号堀、そしてこの7号堀までの土層のあり方を見る限り、本城郭の築成に際し、台地のぎりぎりまで城郭内に取り込むように造成による平坦面を確保する中で、西側に位置する城域外郭を整地し、さらに自然の谷を取り組む形での2重堀構造を成すため、大がかりな造成が行われたものと考えられる。

1郭

本城郭の中心的機能をもつ郭で、東側の崖を背に回字状に堀で区画された中心に位置する。郭は中央部で分割され、東側と西側の郭に分かれる。このため、東側を1A郭、西側を1B郭として扱うこととした。

1A郭

城郭のほぼ中央部に位置し、北側を2堀、西側を3堀、東側を1堀によって区画され、東西40m、南北約55mの方形な平坦面を作り出している。このうち調査されたのは、郭全体の北側五分の四ほどに達し、僅かに南側を残すのみである。平坦面は暗褐色土を面としているが、東側ほど薄く、下層の黄色土が露出する部分も見られる。この郭面は、後述する2・3郭面よりも僅かに一段高く(2号堀第683図、3号堀第685図参照)、その高低差は20～30cmを測る。

郭に付随する施設としては、西側を区画する3号堀の内側に、先述した土居が現存し、その土居の延長部

第3章 検出された遺構と遺物

(一段高い農道)が調査区外縁で直角に折れ曲がり南側に回り込むことから、南側にも土居が巡り区画されるものと思われる。土居については、第686図の3号堀平面・セクション図に示すように、幅約4m、高さ1m前後、長さ26mが検出された。その構築状況は、セクションで見ると、3層の青白色粘土、4層の淡黄色粘土が外側(上部)を覆うように、内部(下部)に5～8層の暗灰色土を盛り土している状態で、その層順は正位の土層堆積順の逆であり、あたかも3号堀を掘り上げた土を、そのまま盛り上げているかの様である。また、検出された土居の規模については、セクションの状況および3号堀との間が1.8m程はなれていることから、これは近世以降の耕作等により削られたことによるものと思われる、本来は幅5m前後で、高さも2m近くあったのではないかと推測される。さらに、セクションでは、土居底面の内側(東側)には溝を有することが確認でき、この溝が現存する土居の北側に続くことが、その覆土の堆積土から明かとなっており、土居が伴っていたものと考えられる。この溝は、3号堀に並行して北進し、その後折れ曲がり2号堀と並行して進み、郭内に存在した古墳へと続く。さらに、古墳の東縁では検出されなかったが、郭の北東角(2号堀と1号堀の交差する付近)において、整地面となる暗褐色土面上に淡黄色粘土が鍵の手状(L字状)に検出されている。東側の1号堀に面する部分での、土居に関する痕跡は確認されていないが、先述した1号堀の堆積土にもあったように、その可能性は否定できないが、無い可能性も強い。なお、第698図に示した図は、土居の下面から出土した内耳鏡の出土状況を示す図であり、この土居の構築時期を知る良好な資料である。また、土居の下面からも数基の柱穴が検出されていることから、この土居が当初から存在したものではないことが理解できる。

これらのことから、本郭を取り巻く土居は、南側は未調査であるが南・西側は巡り、北側は西側から続く土居が古墳まで続き(古墳の一部を土居として取り込んでいる可能性が高い)、古墳の東側約9mの間が開き、郭の北東角に鍵の手状の土居が付く形で、西側には巡っていないものと推測される。

郭内から検出された土居以外の遺構には、掘立建物遺構、柵列・出入口施設(木戸)、井戸、土坑等が検出されており、その数も多い。特に掘立建物遺構は、第699～701図に示すように26・36・39・44・46・48～50号掘立建物の21棟が検出され、郭内の空間利用に規制されるかのように、若干のずれを見せながらも同じ様な場所に位置しており、建物の重複状況から数時期の建て替えが考えられる。大形な掘立建物には、26・31・46号建物が上げられ、建物の多くは郭の中央から南側に配置されている。48・49号建物だけが、北側の土居の検出されなかった部分、ないし北東角に位置する。また、34号建物は、L字状となる小形のもので、北東角の土居状盛り土の南隣に位置する。32号建物は南西角に位置し、3号井戸を中央に位置させている。

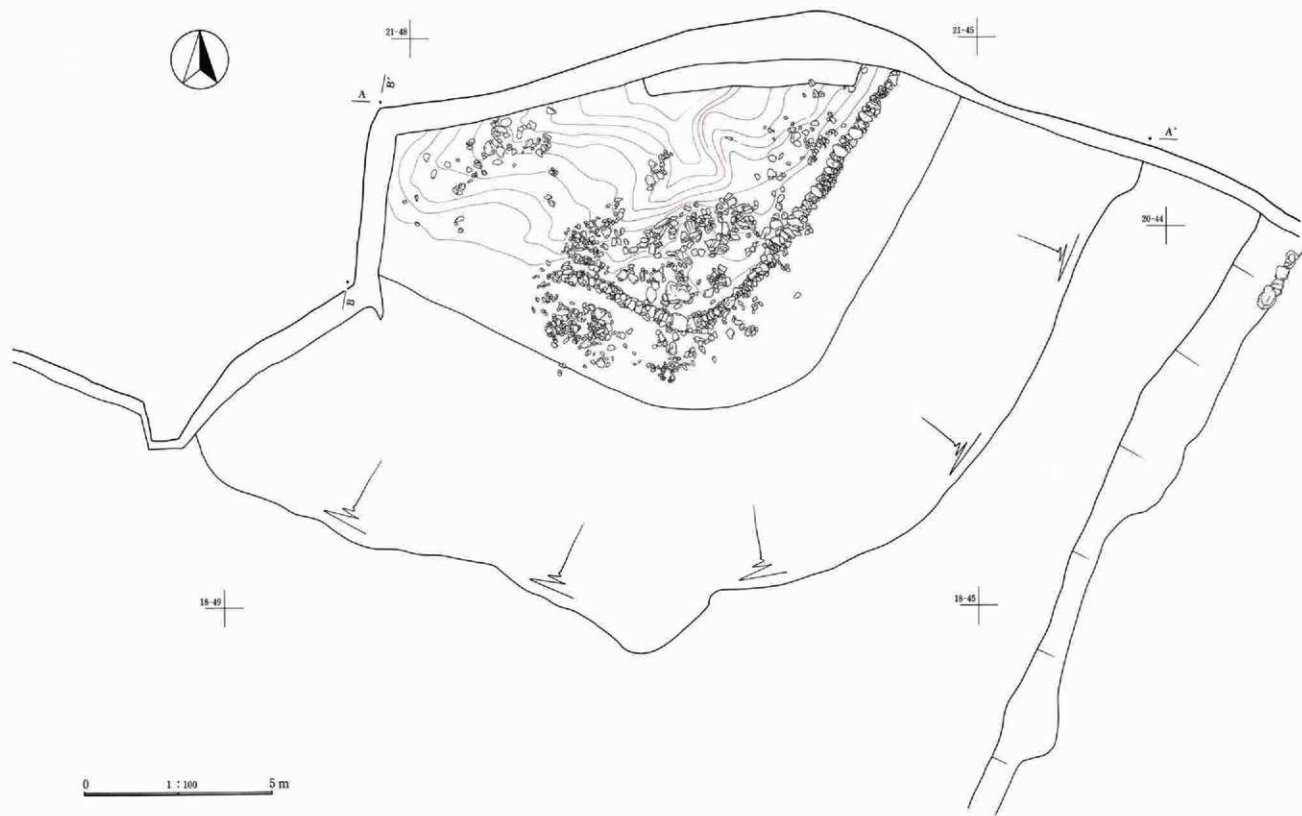
柵列とした遺構には、北東角の土居状盛り土の北側で検出されたもの。郭の西側で、34号建物に接し、1号堀の土橋前に入開口を設ける形のもの。1号古墳の南側を、区画するようにあるもの。郭の中央部で、東西に延びるものや、南北方向に延びるものが検出されている。

井戸には、郭の南西角で32号建物の中央に位置する3号井戸、郭の西側の土橋南西脇に位置する5号井戸の、2本の井戸が検出されている。

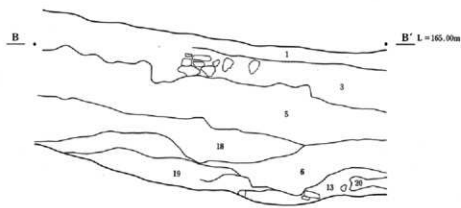
土坑は、426～455・458～462・464～467・471・475・477～479・572・575～593・631号の62基の土坑が検出されており、これらの形状は必ずしも定型な形状をとるものではなく、むしろ不定型なものが多い。

以上、本郭の内部施設について記してきたが、次に他郭との出入口について触れてみたい。

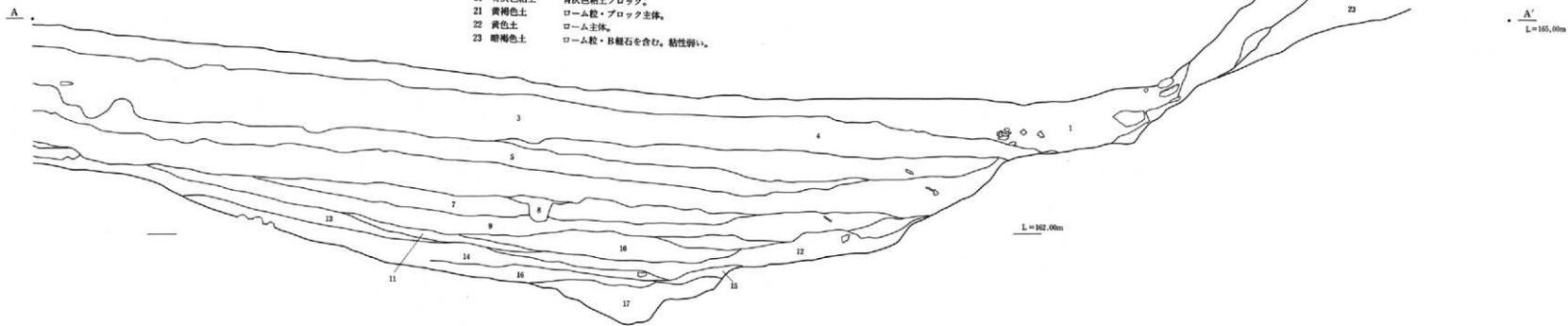
本郭の出入口は、東側の1号堀の途中にある土橋の存在から、1B郭との出入口は明確であり、検出された遺構からも疑う余地はないものと考えられる。一方、2郭・3郭とでは、3郭に面する西側および南側には土居が連続して巡ることから、その存在は考え難い。2郭に面する北側では、郭を区画する2号堀が、



第693图 7号楼平面图

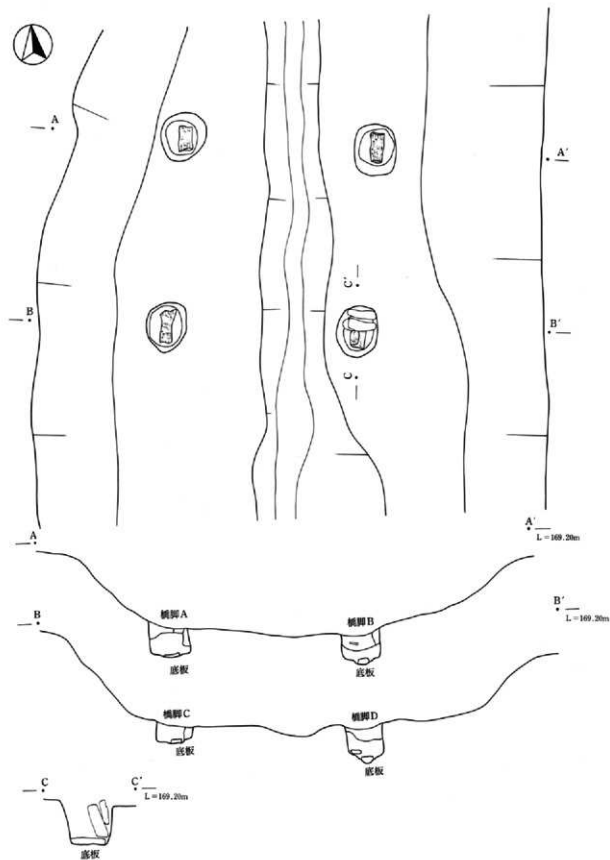


- 7号掘土層
- 1 暗褐色土 A軽石を多量に含む(耕作土)。
 - 2 暗褐色土 A軽石を多量に含む。腐食土。
 - 3 暗褐色土 A軽石を多量に含む(耕作土)。
 - 4 黒褐色土 B軽石を含む。混入物少ない細粒。粘性あり。
 - 5 暗黒褐色粘質土 B軽石を含む。混入物の少ない細粒でシルト質。粘性強し。
 - 6 暗茶褐色土 B軽石、ローム粒・小礫を含む。やや粘性あり。
 - 7 黄色土 黄色ロームを主体とする。
 - 8 黒褐色土 4層に類似する。
 - 9 黒褐色土 B軽石、やや褐色がかかった細礫・ローム粒を含む。粘性強い。
 - 10 黄色土 黄色ロームを主体とする。
 - 11 暗黒褐色土 B軽石・細礫を少量含む。
 - 12 黒褐色土 小細礫を含む。粘性強い。
 - 13 黒褐色土 B軽石・礫・粘土ブロックを含む。粘質。
 - 14 黒褐色土 砂礫を多量に含む。粘質。
 - 15 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 - 16 暗褐色土 ノロ状で粘性強い。
 - 17 暗褐色砂 酸化した赤褐色砂層と互層となる。
 - 18 黒褐色土 B軽石を含みやや褐色系であるが暗く粘性強い。
 - 19 暗褐色土 ノロ状で粘性強い。
 - 20 青灰色粘土 青灰色粘土ブロック。
 - 21 黄褐色土 ローム粒・ブロック主体。
 - 22 黄色土 ローム主体。
 - 23 暗褐色土 ローム粒・B軽石を含む。粘性強い。



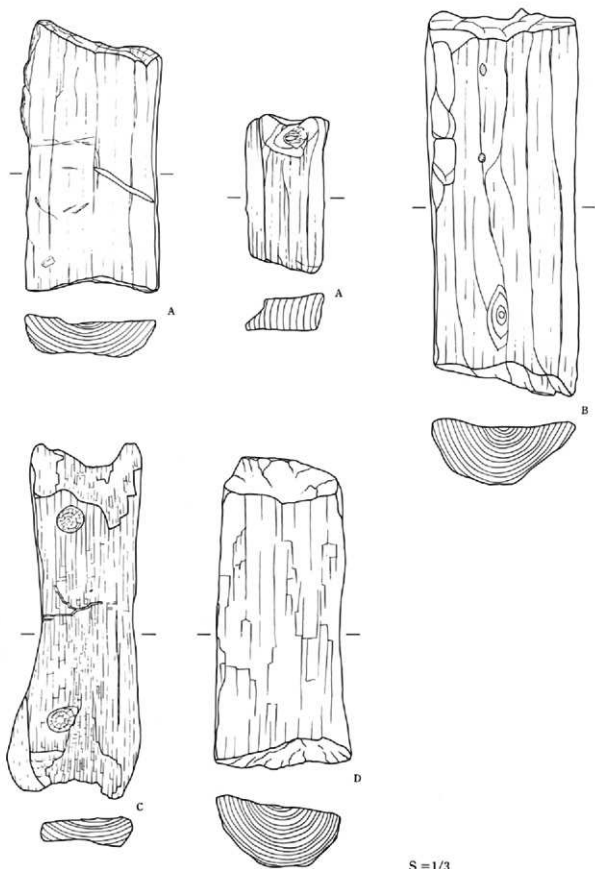
0 1:50 2.5m

第694図 7号掘断面図



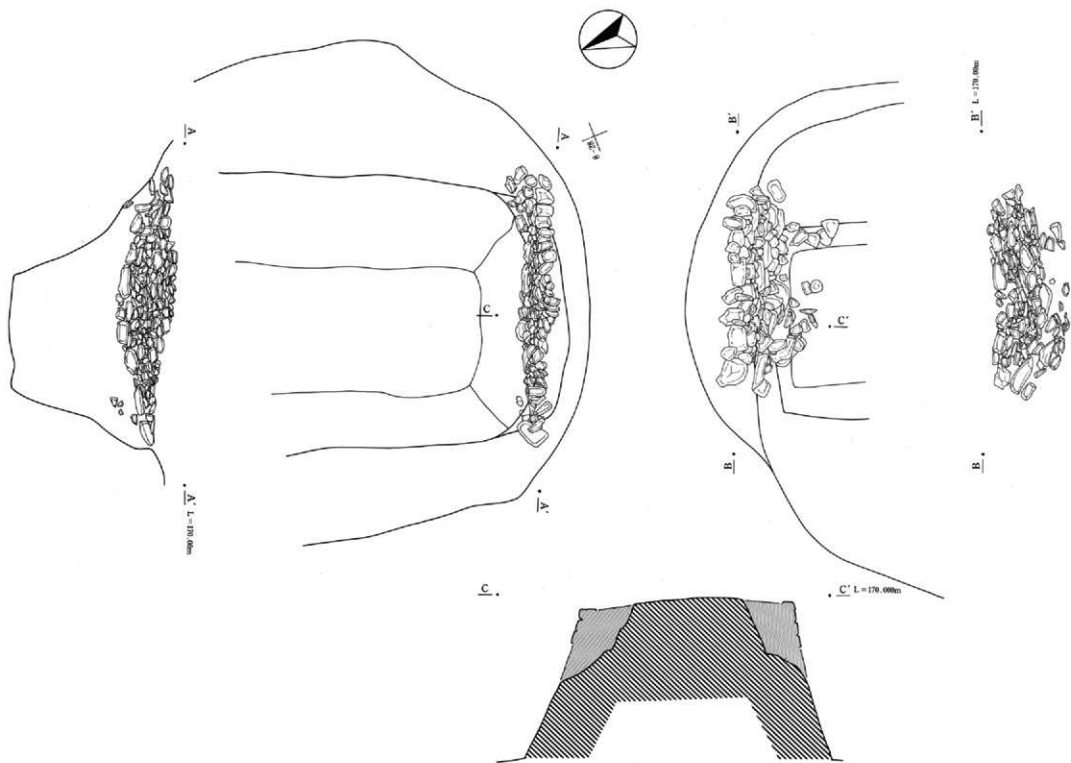
第695図 橋脚遺構平面図

S=1/40

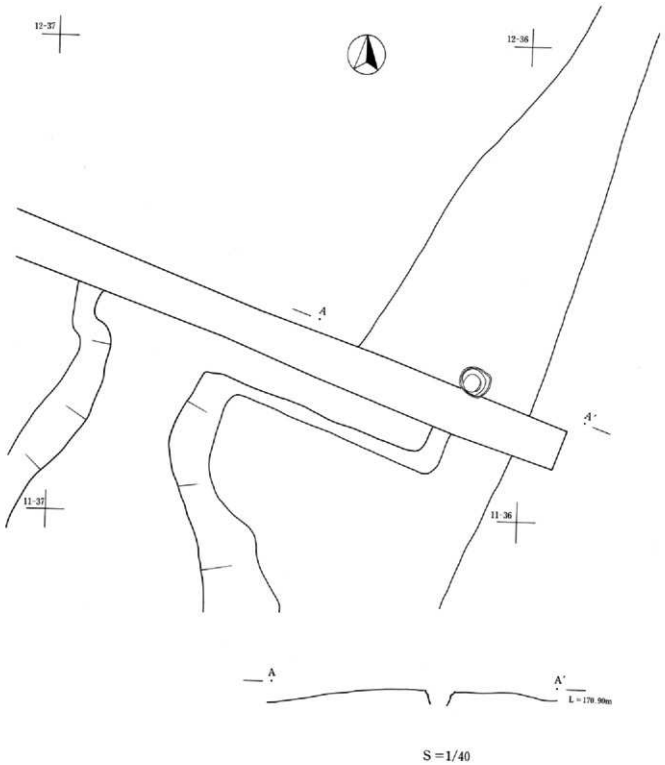


S=1/3

第696図 機脚遺構出土木製品（礎板）



第697图 土坑(1号壕)



第698図 土居下遺物出土状態平面図

第3章 検出された遺構と遺物

中央東寄りであり、弓なりに出張することはすでに述べた通りであり、この状況が6号堀の橋脚跡と堀の出張る状況に近似する点、この2号堀の出張る位置に並行する部分での土居が検出されていない点、さらに出張る部分での堀と検出された遺構との間に空間が生じていることが見て取れる。つまり、この部分に、本郭と2郭とを結ぶ、出入口が存在した可能性が高い。

1 B郭

城郭の中央東寄りであり、先の1 A郭の東側に位置し、東側の大沢川に下る崖を背に、北側を2堀、西側を1堀によって区画され、東西35m、南北約55mの方形な平坦面を作り出している。このうち調査されたのは、郭全体の北側約半分以上におよぶ。平坦面は黄色粘土・青白色粘土を面としており、東側ほど青白色粘土面となる。この青白色粘土層は、本遺跡の基本土層をみると、ローム層よりも下層に堆積する土層であることから、本郭の造成にあたっては、相当量の土量が削平されたものと考えられる。この郭面は、先の1 A郭面との高低差はなく、後述する2郭面よりも一段高く（2号堀第681図参照）、その高低差は30～50cmを測る。なお、本郭の南の区画については、先の1 A郭と同様に、3号堀の延長によって区画されるものと考えられる。

郭に付随する施設としては、先の1 A郭にみられた土居の痕跡は検出されていないが、先述した1号堀・2号堀の堆積状況を見ると、土居が巡っていた可能性は高く、後述する掘立建物遺構の配置からしても、堀と建物群との間が3～4mほど空いている状況が窺え、やはり土居の存在した可能性が高い。また、本郭を区画する堀内で出土した崩落石から、本郭の周囲には、1号堀に設けられた土橋側面に見られる石垣状の石積みが見られたものと考えられる。

郭内から検出された遺構には、掘立建物遺構、柵列(木戸)、門跡、井戸、土坑等が検出されており、その数も多い。特に掘立建物遺構は、第701～703図に示すように7～17・19～24号掘立建物の18棟が検出され、郭内の空間利用に規制されるかのように、若干のずれを見せながらも同じ様な場所に位置しており、建物の重複状況から数時期の建て替えが考えられる。大形な掘立建物には、11～14・20・21・24・25号建物が上げられ、建物の多くは郭の中央から北側に配置されている。

柵列(木戸)とした遺構には、西側の1号堀に設けられた土橋部分にみられるものがあり、そのすぐ東には中央に礎石をもつ門跡が検出されている。いずれも、土橋に関連した入口施設と考えられる。

井戸は、1基検出された。郭のほぼ中央部に位置する4号井戸であるが、他の井戸と比べるとかなり浅い。また、郭の北西角付近から東へ延びて、2号堀へ続く幅30cmほどの溝が検出されているが、これは石組による暗渠であることが確認されている。

土坑は、361～425・456号の52基の土坑が検出されており、これらの形状は必ずしも定型的な形状をとるものではなく、むしろ不定型なものが多い。また、大小も様々である。

本郭の出入口部は、先にも触れたように西側の1号堀の途中にある土橋の存在から、1 A郭との出入口部は明確であり、検出された遺構からも疑う余地はないものと考えられる。北側の2郭との間には、入口施設を窺うような積極的な根拠がなく、不明である。また、南側については未調査区であるため、詳細は不明。

2郭

城郭の中央北寄りであり、先の1 A・B郭の北側に位置し、東側は大沢川に下る崖に達し、南側を2号堀、西側を5号堀、北側を4号堀によって区画され、東西80m、南北30～35mの長方形となる平坦面を作り出して

いる。このうち調査されたのは、東側と南側に当たり、郭全体の約半分におよぶ。平坦面は黄色ローム土ないし黄色粘土を面としており、南東の1B郭側ほど黄色粘土面となる。やはり造成にともない、この面まで削平されたものと考えられる。この郭面は、先述したように1A・B郭面より一段低く、後述する3郭面とは高低差がなく、さらに4郭よりも一段高く（4号堀第687図参照）、その高低差は20cm前後を測る。

郭に付随する施設としては、郭の平坦面上での土居の痕跡は検出されていないが、先述した4号堀の堆積状況を考えて、郭の北面に土居が巡っていた可能性は高い。

郭内から検出された遺構には、掘立建物遺構、井戸、土坑等を検出しているが、先の1A・B郭に比べると、遺構数はだいぶ少ない。掘立建物遺構は、第704図に示すように4・5号掘立建物の2棟が検出されただけで、先述した1A郭との入口部と考えられる部分の北側に位置する。郭内での柱穴の検出数も少なく、4号建物の東側にややまとまって検出されたにすぎない。井戸は、1基検出された。4号建物の東側約15mほどの、1B郭対岸近くに位置する2号井戸である。土坑も、31～34号土坑の、僅か4基が検出されただけである。

本郭の出入口部は、先述した1A郭との位置の他は、未調査区に掛かるため、詳細は不明。

3郭

城郭の西側および南側で、先の2郭の西側および1A・B郭の西・南側を取り巻くように位置し、郭の外側を6号堀、内側を3・5号堀によって区画され、幅30～35mのL字状となるような形状を呈する平坦面を作り出している。このうち調査されたのは、西側部分の中央部に当たり、郭全体の約三分の一におよぶ。南側の未調査区についての詳細は不明であるが、6号堀が延長する南側の堀跡の内側には高土居が残存していることから、郭の南限は推測できる。また、高土居の残存状況から、本郭の北側で検出された5号堀のような堀の存在は、考え難い。平坦面は暗褐色土を面としているが、東の1A郭側ほど薄く、西の6号堀寄りほど厚く堆積している。しかし、6号堀寄りには盛り土による整地面であることは先述した通りであり、3郭の途中で切り土から盛り土へ整地方法が変わっていることが解る。この郭面は、先述したように1A郭面より一段低く、2郭面とは高低差はない。

郭に付随する施設としては、郭の西側中央部で、6号堀が弓なりに出張ると並行して、郭面も出張る形状をとっており、6号堀底面から検出された橋脚用柱穴とを考え併せると、この出張り部分が城郭の内外を結ぶ入口部であり、本城郭の大手口となるものと考えられる。また、未調査地である本郭の南側に現存する高土居の存在、さらには土居の一部を崩したという地元の話等から、現存する土居が本郭の外側（6号堀面）を巡っていたものと推測できる。その痕跡と思われるものが、郭の出張る入口部よりも北側に、6号堀に添うような形で、黄色ローム土の帯が続いていることが確認できた。このことにより、郭を巡る土居の存在は確実であり、入口部については土居が空いていたものと推測できる。

郭内から検出された遺構には、掘立建物遺構と土坑が検出されている。先の1A・B郭に比べると、遺構数はだいぶ少ない。掘立建物遺構は、第704図に示すように1～3・51～53号掘立建物の6棟が検出されており、全体に北側ないし東側の1A郭寄りに位置する。建物として確定できた以外にも、郭内での柱穴の検出数は比較的多く、より多くの建物等が存在していた可能性が高い。

土坑は、281・337・692・727・728・735・736号土坑の、7基が検出されただけである。

4 郭

城郭の北側で、2郭の北側位置し、東側を崖を背に、郭の北・北西部外縁を6号堀が回り、南側を4号堀により区画される。郭の形状は、三角形を呈し、南北50m、東西80mの規模となる平坦面を作り出している。このうち調査されたのは、東の崖際付近と北側部分であり、郭全体の約半分に当たる。平坦面は暗褐色土を面としているが、南の4号堀側ほど薄く、一部では黄色ローム土を面としている。6号堀に面する平坦面際では、盛り土による整地が成されている。この郭面は、先述したように2郭面より一段低い位置にある。

郭に付随する施設としては、郭の北端部から台地先端部にかけて、狭いテラス状の平坦面を幾段か設けながら階段状に下っていく。また、先の3郭に巡る土居については、本郭にも連続して巡る可能性をもつものの、その痕跡は確認できず、積極的な根拠に欠ける。むしろ、存在しない可能性も高い。

郭内から検出された遺構には、竪穴遺構と土坑が検出されている。他の郭にみられた掘立建物遺構は検出されず、内容もだいたい違っている。郭内での、柱穴の検出数も少ない。竪穴遺構は方形を呈するもので、郭の縁寄りに2基検出されている。土坑は、2・5・6・15・17号土坑の5基が検出されただけである。

城域外郭

城郭の外側を取り巻く平坦部を本郭とした。この郭は、城郭内の3郭に面した外側に広がる部分で、北側は7号堀（自然の谷）に接し、西側は6号堀より西へ約70mほどの所で一段低い低地となり、南西には稲荷山が、南側は6号堀の延長する南堀跡から南へ約70mほどにある堀状のもので、区画されるものと考えられる。この間には、現在でも古墳の墳丘が現存し、点在している。このうち調査されたのは、北西部分で3郭西側に当たり、大手口対面となる。郭の平坦面は、3郭の大手口対面となる面に対し、北側の7号堀と接する面は一段低く、その高低差は2mほどとなる。この一段低い平坦面は、7号堀の南端部のみに向けられているものと思われ、先述したように自然の谷頭部を埋めて整地した面である。一方、大手口対面となる面は、ローム土を面とするように整地され、北縁では部分的に盛り土による整地が成されている。3郭との高低差はなく、調査区内のほぼ中央には2号墳とした円墳が存在する。この古墳は、現状では墳丘および石室上部を削平されている（2号古墳の項を参照）が、周囲の整地面よりも一段高く残されており、また周囲に中世遺構が存在すること、周辺に墳丘を残す古墳が現存すること等から、当時においては墳丘が残されていたものと考えられる。

郭内から検出された遺構には、掘立建物遺構と土坑がある。掘立建物遺構は、先の2号墳の北側と南側の2箇所に検出され、北側には54・55号の2棟の建物が、南側には56～62号の7棟の建物が確認されている。建物として確定できた以外にも、柱穴は検出されているが、古墳の北側と南側に集中する傾向で、大手口前となる位置では、ほとんど検出されていない。

土坑は、60・76・78・145～148・186・225・235・610号土坑の11基が検出されただけであるが、この郭内からは時期不明として扱った土坑が多く、その実数は不明である。

なお、本郭とは異なるが、本郭の西縁から西方約300mの、稲荷山から延びる丘陵の西斜面に、3～5号竪穴遺構が検出されている。この内、4・5号の2棟の竪穴遺構は大形の遺構であり、出土遺物から本城郭とほぼ同時期に存在したものと考えられる。また、郭の西方の低地部からは、火葬墓と考えられる181号土坑が1基検出されている。

橋脚跡 (第695・696図)

本遺構は、先の6号堀の中で触れたように、6号堀が3郭のほぼ中央部で外側にやや弓なりとなるように弧状に出張部分の中央に検出された。平坦となる堀底面に、第695図に示すごとく、4本の柱穴が四角く配置されるものであり、その柱間は一辺が2mを測る。堀底面からの柱穴の深さは、30cm前後を測り、径50cmの円形である。

4本の柱穴内の底面からは、丸太を半裁した木材の平坦面を上面とするように出土しており、橋脚の脚部を受ける礎板と考えられる。第696図に示した木材は、出土した礎板であり、いずれも板状に加工されたものではない。

ちなみに、木材1は北西角に位置する柱穴から出土したものであり、木材3は北東角の柱穴、木材4は南西角の柱穴、木材2・5は南東角の柱穴内から、それぞれ出土したものである。

土橋 (第697図)

先述した1号堀で検出された遺構であり、1A郭と1B郭とを結ぶ土橋である。土橋の北側と南側は、1号堀に面し、その面には石垣状の石積みをも有する。この石積みは、1号堀でも述べたように、堀の上位に存在し、下面までは達しておらず、堀の改修後(最終時期)のものと考えられる。残存する石積みの規模は、北側で長さ4.4m、高さ1mを測り、下面はレンズ状のごとく弧状を呈しており、この形状が堀の最終形状に起因するものか、崩落した残存の状態であるかは不明である。南側では、長さ3m、高さ1.2mを測り、下面は弧状ないし逆台形状を呈するように残存している。石積みは、大・中形の河原石を主とし、乱石積みによるもので、石積み中には板碑が含まれている。

土橋は、この石積みの間を橋面とし、幅3.4m前後を測る。その構造は、地山を掘り残すことによるものであるが、石積み部は裏込め土を有し、土橋下部の壁面に添うように被覆されている。その断面形は、きれいな台形を呈している。

この土橋の存在から、他の郭と比べて1A郭と1B郭とが密接な関係にあったことが推測でき、本城郭の中で両郭が主体的機能をもつものと考えられる。

2. 掘立建物・櫛列・木戸・門跡遺構

城内の各郭および城外からは、60棟余の多くの掘立建物、櫛列、木戸、門跡等の遺構が検出されている。それぞれの郭に位置する建物は、先述した通りであり、ここでは各建物について記する。第699～704図は各建物の位置図であり、第705～710図は各建物の規模を模式図により柱間寸法を記したものである。この柱間寸法は、平面図上での柱穴の心々距離によるものである。

掘立建物遺構

1号掘立建物（第711図）

3郭の調査区内北端にあり、17-39グリッドを中心に位置する。5号堀から西側へ約10mほど離れ、南隣には2号掘立建物がある。畑の耕作溝により、遺構の遺存状態は悪い。検出された建物は、3間(6m)×2間(3.74m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-79°-Wである。建物内部には、東柱的な柱穴が2基検出され、さらに西側へ1間分が延びるように柱穴が存在する。4間(8.30m)×2間(3.74m)の建物である可能性もある。

2号掘立建物（第712図）

3郭の調査区内北側にあり、15-39グリッドを中心に位置する。1号掘立建物の南側に、並行するように隣接し、3号掘立建物の東側、53号掘立建物の北側にある。畑の耕作溝により、遺構の遺存状態は悪い。検出された建物は、3間(6.90m)×2間(4.10m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-74°-Wである。建物内部には、東柱的な柱穴が2基検出されている。

3号掘立建物（第713図）

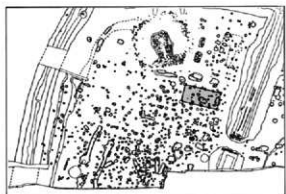
3郭の調査区内北側の郭西端にあり、15-41グリッドを中心に位置する。1・2号掘立建物の西側にある。畑の耕作溝により、遺構の遺存状態は悪い。検出された建物は、4間(8.24m)×2間(4.06m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-18°-Eである。建物内部には、南辺から1間のところに東柱的な柱穴が1基検出されている。この建物は、3郭を取り巻く土居と重複する位置にあり、その新旧関係は、土居の痕跡土下から柱穴が検出されていることから、土居よりも古い建物である。

4号掘立建物（第714図）

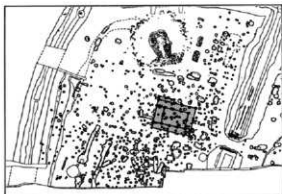
2郭のほぼ中央部にあり、17-28グリッドを中心に位置する。2号堀から約4mほど北側へ離れ、5号掘立建物の東側にある。検出された建物は、柱穴が5基確認され、そのあり方から南北に長い建物と考えられ、想定される建物の北側半分は、未調査区へ延びるものと思われる。桁行は3間程度と想定され、梁行は1間(3.64m)である。

5号掘立建物（第715図）

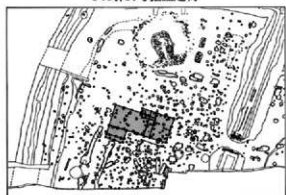
2郭のほぼ中央部にあり、17-29グリッドを中心に位置する。2号堀から約4mほど北側へ離れ、4号掘立建物の西側に並行するようである。検出された建物は、柱穴が3基確認され、そのあり方から南北に長い



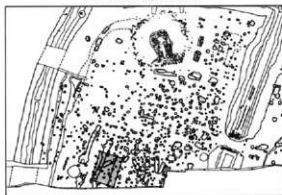
1 A 郭26号掘立建物



1 A 郭27号掘立建物



1 A 郭28号掘立建物



1 A 郭29号掘立建物



1 A 郭30号掘立建物



1 A 郭31号掘立建物



1 A 郭32号掘立建物

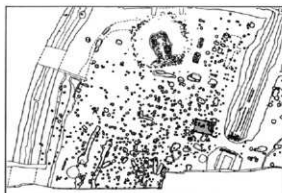


1 A 郭33号掘立建物

第699図 掘立建物遺構配置図(1)



1 A 郭34号掘立建物



1 A 郭35号掘立建物



1 A 郭36号掘立建物



1 A 郭39号掘立建物



1 A 郭40号掘立建物



1 A 郭41号掘立建物

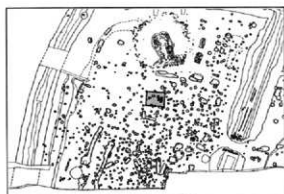


1 A 郭42号掘立建物

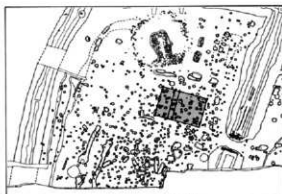


1 A 郭43号掘立建物

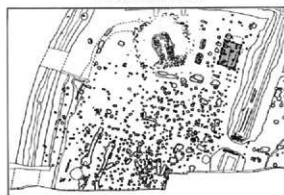
第700図 掘立建物遺構配置図(2)



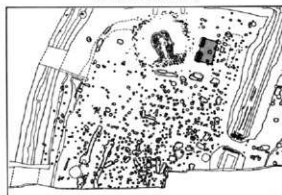
1 A 郭44号掘立建物



1 A 郭46号掘立建物



1 A 郭48号掘立建物



1 A 郭49号掘立建物



1 A 郭50号掘立建物



棚・木戸



1 B 郭7号掘立建物



1 B 郭8号掘立建物

第701図 掘立建物遺構配置図(3)



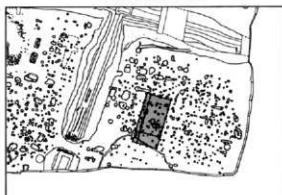
1 B 郭9号掘立建物



1 B 郭10号掘立建物



1 B 郭11号掘立建物



1 B 郭12号掘立建物



1 B 郭13号掘立建物



1 B 郭14号掘立建物



1 B 郭15号掘立建物

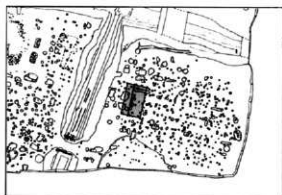


1 B 郭16号掘立建物

第702図 掘立建物遺構配置図(4)



1 B郭17号掘立建物



1 B郭19号掘立建物



1 B郭20号掘立建物



1 B郭25号掘立建物



1 B郭21号掘立建物



1 B郭22号掘立建物

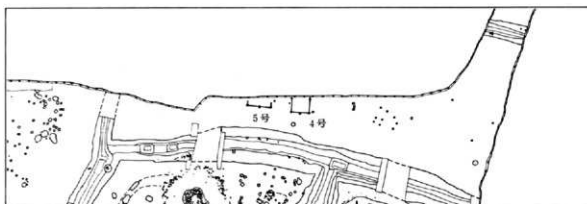


1 B郭23号掘立建物

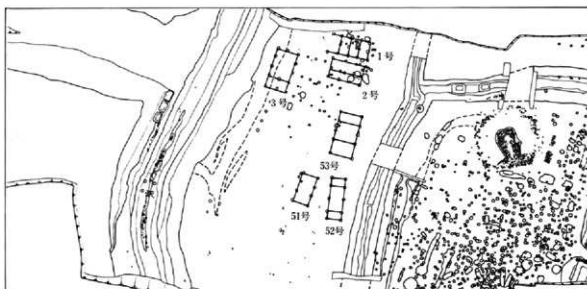


1 B郭24号掘立建物

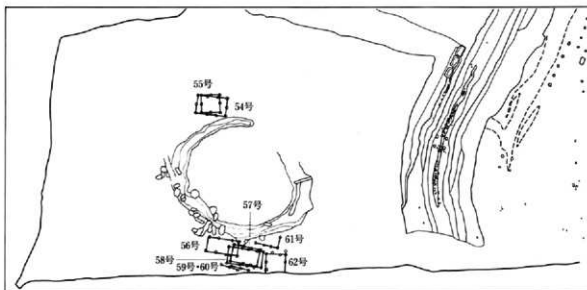
第703図 掘立建物遺構配置図(5)



2 郭4・5号掘立建物



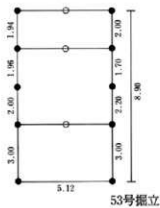
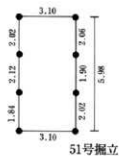
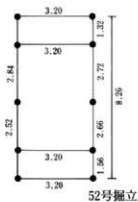
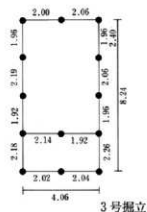
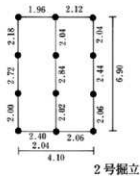
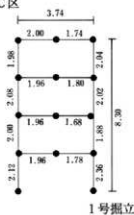
3 郭1・2・3・51・52・53号掘立建物



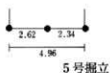
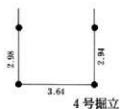
地域外郭54・55・56・57・58・59・60・61・62号掘立建物

第704図 掘立建物遺構配置図(6)

C区



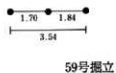
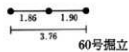
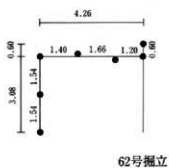
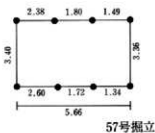
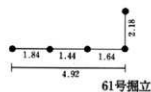
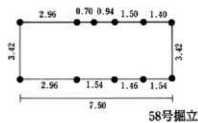
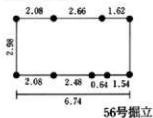
B区



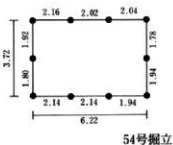
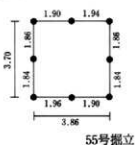
第705図 掘立建物遺構柱間計測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

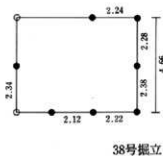
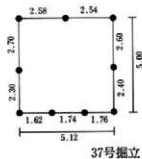
2号古墳南側



2号古墳北側

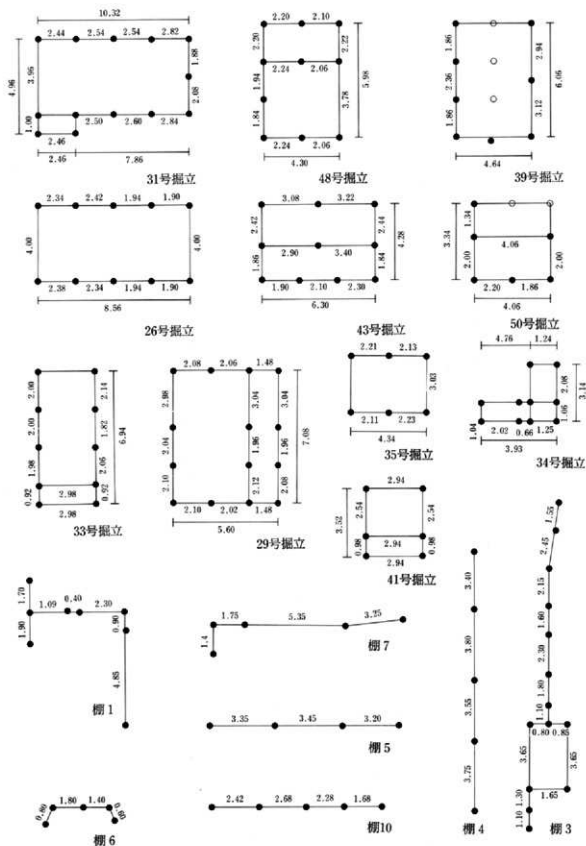


K区

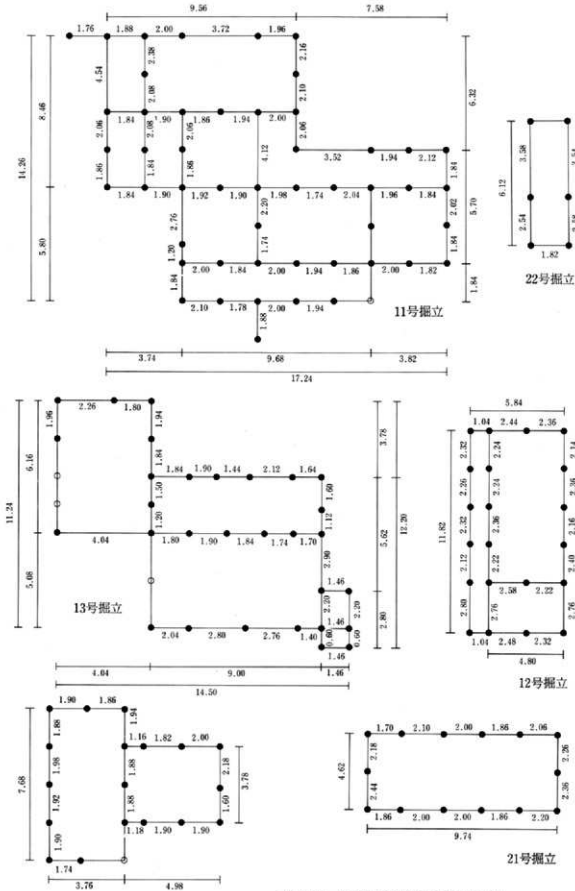


第706図 掘立建物遺構柱間計測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

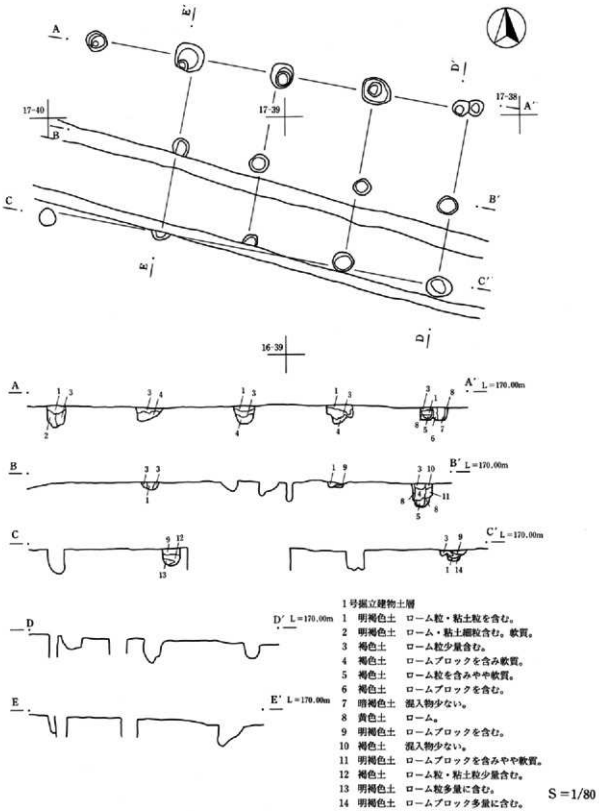


第708図 掘立建物遺構柱間計測図(4)



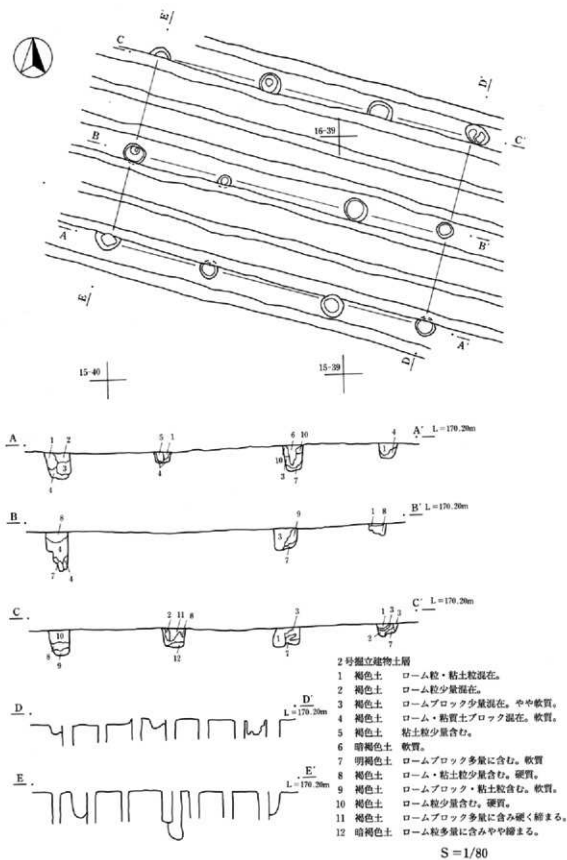
第709図 掘立建物遺構柱間計測図(5)

24号掘立

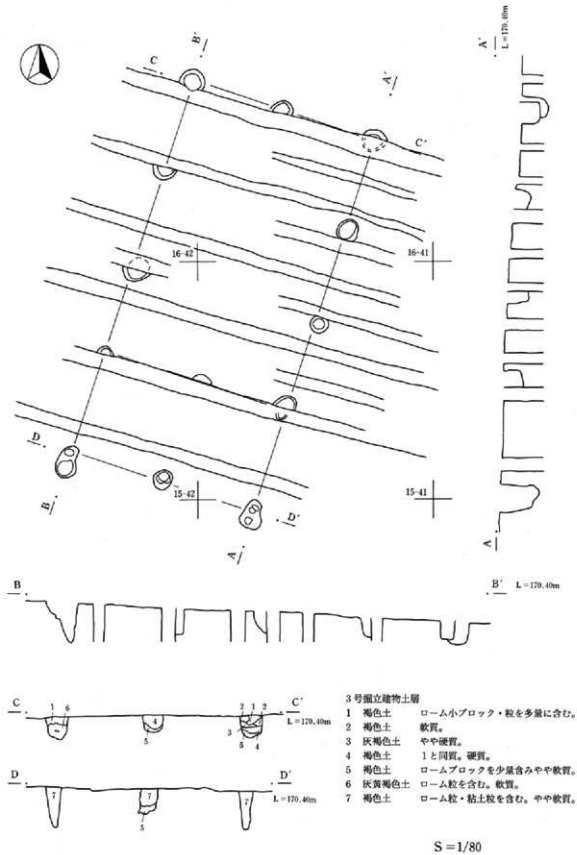


第711図 1号掘立建物遺構平面図

第3章 検出された遺構と遺物

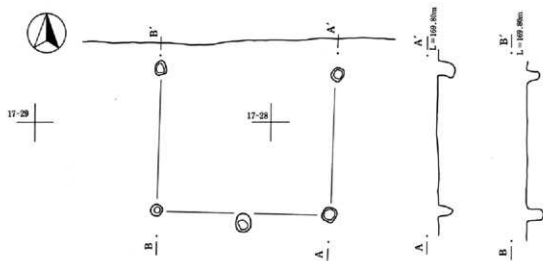


第712図 2号独立建物遺構平面図



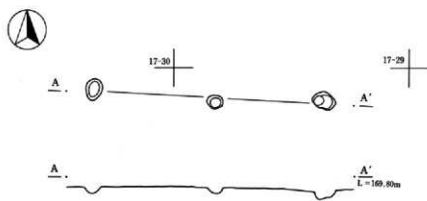
第713図 3号獨立建物遺構平面図

第3章 検出された遺構と遺物



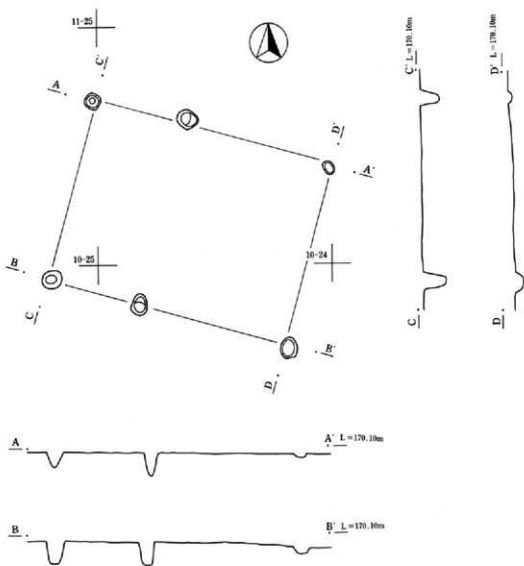
S=1/80

第714図 4号掘立建物遺構平面図



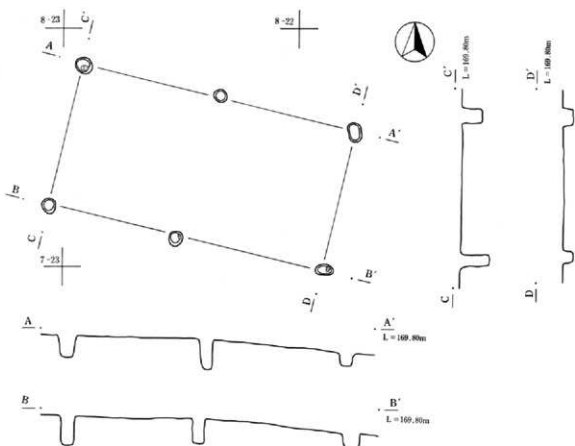
S=1/80

第715図 5号掘立建物遺構平面図



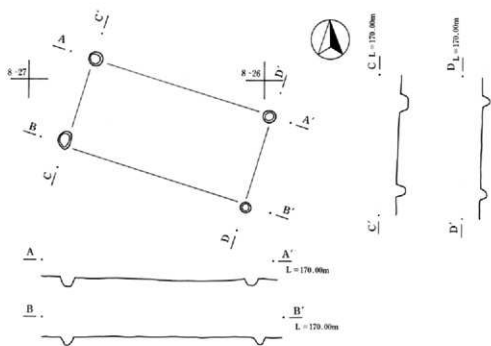
第716図 7号掘立建物遺構平面図

S=1/80



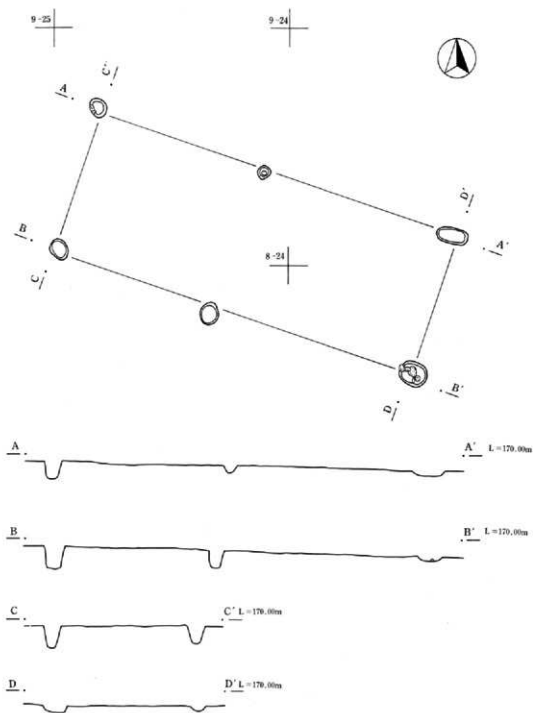
第717図 8号掘立建物遺構平面図

S = 1/80



第718図 10号掘立建物遺構平面図

S = 1/80



S = 1/80

第719図 9号掘立建物遺構平面図

第3章 検出された遺構と遺物

建物の南辺と考えられ、想定される建物の大半は、未調査区へ延びるものと思われる。桁行は3間程度と想定され、梁行は2間(4.96m)である。

7号掘立建物(第716図)

1 B郭の中央やや北西寄りにあり、10-24グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の北西部、および12・13・14・20号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(5.20m)×1間(3.94m)の東西にやや長い建物で、桁行方向はN-74°-Wである。桁行方向の2間の柱間は、2.00mと3.20mを測る。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

8号掘立建物(第717図)

1 B郭の中央の西端にあり、7-22グリッドを中心に位置する。11・21・22号掘立建物と、重複する。検出された建物は、2間(5.98m)×1間(3.00m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-78°-Wである。柱間は、桁行・梁行方向共に、3.00mを測る。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

9号掘立建物(第719図)

1 B郭のほぼ中央にあり、8-24グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の南側、および12・21号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(7.98m)×1間(3.08m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-70°-Wである。桁行方向の2間の柱間は、3.52mと4.46mを測り、他の建物の柱間に比べ、かなり広い柱間となっている。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

10号掘立建物(第718図)

1 B郭の中央南西寄りにあり、7-26グリッドを中心に位置する。1号掘に架かる土橋に最も近く、17号掘立建物と重複する。検出された建物は、1間(3.98m)×1間(1.92m)の東西に細長い小形の建物で、桁行方向はN-74°-Wである。柱穴規模も、他の建物の柱穴に比べやや小さい。重複する17号掘立建物との新旧関係は、不明である。

11号掘立建物(第720・721図)

1 B郭の中央やや北寄りにあり、郭内で最大の掘立建物で、8・9-23グリッドを中心に位置する。重複する掘立建物は多く、7・8・9・12・13・14・21・22・24号掘立建物と重複する。検出された建物は、東西に長軸方向をもち、東西方向9間(17.24m)×南北方向7間(14.26m)の東西に長い建物で、変則的なL字状の形となる。長軸となる桁行方向は、N-73°-Wである。建物の柱間を見ると、桁行方向では1.74mから2.10mを測り、ほぼ1.90m前後の柱間であるのに対し、梁行方向では1.84mと2.05m前後の両者がみられ、特に北側では2.15m前後のばらつきのある柱間となり、南側とやや造りが異なる。南辺では、西寄りに5間分の縁が付くようであり、さらに西側2間の南に1.88m離れて柱穴が検出されている。また、一部の柱穴上ないし柱穴内からは、礎石と思われる石も見られ、本建物が礎石立建物ないしは一部礎石立であったものと推測される。重複する掘立建物との新旧関係は、13・14号掘立建物の方が古く、他とは不明である。状況的には、本郭内で最も新しい建物である可能性が高い。

12号掘立建物（第722図）

1 B郭の中央やや西寄りにあり、9-25グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の西側、および7・9・13・14・17・19・20・23号掘立建物と重複する。検出された建物は、5間（11.82m）×2間（4.80m）の南北に長い建物で、西側には柱間1.04mの縁なしはしが付く。桁行方向は、N-16'-Eである。建物の北側の4間は、2.20mから2.30m前後の柱間であるのに対し、南側の柱間は2.76mを測る。また、南側から1間には、梁行方向に中柱が検出されている。柱穴内の覆土に特徴があり、白色粘土および褐色粘土を多量に含まれることで、他の掘立建物の柱穴との識別が容易であった。重複する掘立建物との新旧関係は、20号掘立建物の方が古く、他とは不明である。

13号掘立建物（第723図）

1 B郭の中央やや北寄りにあり、10-24グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の北西側半分、および7・12・14・19・20・24号掘立建物と重複する。検出された建物は、西側の4間（6.16m）×2間（4.04m）の南北に長い建物と、東側の5間（9.00m）×4間（7.82m）の東西に長い建物が、変則的なL字状に連結する形となる。長軸方向はN-72'-Wである。西側建物の西辺では、2本の柱穴が検出されていないが、土坑との重複によるものと思われ、本来は存在したものと考えられる。また、東側建物の西辺でも同様に、存在したものと考えられる。東側建物の北側と南側では、大きく間取りが異なり、北側では梁行方向が2間2.70mであるのに対し、南側では2間5.10mを測る。さらに、東側建物の東南隅には、東辺に1間（1.46m）×2間（2.80m）の出張が取り付く。このため、建物の長軸となる東西方向では14.50m、南北方向では12.20mを測り、郭内では11号掘立建物に次ぐ規模をもつ。重複する掘立建物との新旧関係は、11号掘立建物の方が新しく、14号掘立建物の方が古いことが確認されている。他は、不明である。

14号掘立建物（第724図）

1 B郭の中央やや北寄りにあり、9・10-22~24グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の北側大半、および7・12・13・15・24・25号掘立建物と重複する。検出された建物は、西側の4間（9.32m）×2間（4.90m）の南北に長い建物と、東側の4間（9.54m）×2間（7.32m）の南北に長い建物が、1間ずれる変則的なL字状の形となる。長軸は東西方向となるが、桁行方向はN-16'-Eである。建物の桁行方向の東から2列目の柱穴列の南側は、西側建物の南辺と同じ線上に、柱穴が存在した可能性が高い。建物全体の間取りからすれば、西・中・東と大きく3分割され、それぞれの梁行方向の間は、2間4.90m、1間3.02m、1間4.12mを測る。郭内での建物規模は、11・13号掘立建物に次いで、3番目の大きさとなる。重複する掘立建物との新旧関係は、11・13号掘立建物の方が共に新しいことが確認されている。他は、不明である。

15号掘立建物（第725図）

1 B郭の北東隅にあり、10-22グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の北東にあり、14・24・25号掘立建物と重複する。検出された建物は、3間（5.90m）×2間（4.60m）の南北に長い建物で、桁行方向はN-14'-Eである。梁行方向の2間のうち、東側の柱間は2.88mを測るのに対し、西側では1.72mと狭い柱間となっている。また、南辺の中間に位置する柱穴は、やや内側に位置する。重複する掘立建物との新旧関係は、14号掘立建物の方が新しく、他とは不明である。